

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

日本語と中国語の可能・難易表現に関する
認知論的・語用論的研究

大江 元貴

2013 年度

目次

第1章	序論	1
1.1	本論文の目的	1
1.2	本論文の考察対象	7
1.3	本論文の構成	13
第2章	先行研究と本論文の立場	15
2.1	可能表現と難易表現についての先行研究の概観	15
2.2	本論文の立場	18
第3章	可能表現と難易表現の対照	27
3.1	可能表現の意味分類	27
3.1.1	能力可能	31
3.1.2	状況可能	32
3.1.2.1	条件的状況可能	33
3.1.2.2	受動的状況可能	34
3.1.2.3	自発的状況可能	35
3.1.3	許可可能	37
3.1.4	認識可能	40
3.1.5	実現可能	42
3.1.6	日本語と中国語の可能形式の意味分布のまとめ	45
3.2	難易表現の意味分類	48
3.2.1	難易	56
3.2.1.1	属性難易	57
3.2.1.2	感覚難易	58
3.2.2	傾向	59

3.2.2.1 進展傾向.....	59
3.2.2.2 頻度傾向.....	60
3.2.3 日本語と中国語の難易形式の意味分布のまとめ.....	62
3.3<可能>と<難易>の対照：事態から実現性を見出す認知過程.....	64
3.3.1 実現性の捉え方：二値的把握とスケール把握.....	66
3.3.2 事態から実現性を見出す認知過程.....	70
3.3.2.1 人称制限.....	76
3.3.2.2 働きかけの直接性の制約.....	76
3.3.2.3 叙述対象の制限.....	77
3.3.2.4 副詞句との共起制限.....	79
3.4<可能>と<難易>の対照：意味拡張のあり方という観点.....	83
3.4.1 可能形式の意味拡張に対する先行研究の説明.....	85
3.4.2 難易形式の意味拡張に対する先行研究の説明.....	87
3.4.3<難易>の意味拡張に関わる問題とその動機づけ.....	88
3.5 可能表現と難易表現の対照のまとめ.....	92
第4章 日本語と中国語の可能表現.....	94
4.1 日本語の「られる」と「ことができる」について.....	94
4.1.1 「られる」と「ことができる」についての先行研究の記述.....	95
4.1.2 「ことができる」の拡張的用法について.....	99
4.1.2.1 「ことができる」の拡張的用法についての先行研究の記述.....	100
4.1.2.2 「ことができる」の拡張的用法を支える「特性」.....	107
4.1.2.3 事態参加者の参加のあり方と話し手の述べ方の関係.....	116
4.1.3 「られる」と「ことができる」のまとめ.....	121

4.2 中国語の“能”、“会”、“可以”について	125
4.2.1 “能”、“会”、“可以”についての先行研究の記述	126
4.2.2 本論文における“能”、“会”、“可以”の記述	136
4.2.3 “能”、“会”、“可以”と能力可能	138
4.2.4 “能”、“会”、“可以”と受動的・条件的状況可能、許可可能	145
4.2.5 “能”、“会”、“可以”と自発的状況可能	151
4.2.6 “能”、“会”、“可以”と認識可能	159
4.2.7 “能”、“会”、“可以”のまとめ	162
4.3 可能表現に見られる日本語と中国語の異同	164
4.3.1 可能表現に見られる日本語と中国語の相違点	164
4.3.2 可能表現に見られる日本語と中国語の共通点	169
第5章 日本語と中国語の難易表現	173
5.1 日本語の「がちだ」と「やすい」について	173
5.1.1 「がちだ」と「やすい」についての先行研究の記述	174
5.1.2 「がちだ」と「やすい」の異同	176
5.1.3 「傾向」を見出す認知過程の違い	180
5.1.4 他形式との関わりと「やすい」「がちだ」のまとめ	184
5.2 日本語の「にくい」と「づらい」について	186
5.2.1 「にくい」と「づらい」についての先行研究の記述	187
5.2.2 「づらい」の拡張的用法について	193
5.2.3 「にくい」と「づらい」のまとめ	197
5.3 中国語の“容易”と“好”について	198
5.3.1 “容易”と“好”についての先行研究の記述	199

5.3.2 “容易”と“好”の異同.....	208
5.3.3 “容易”と“好”についてのまとめ.....	214
5.4 難易表現に見られる日本語と中国語の異同.....	216
第6章 おわりに.....	219
6.1 本論文の考察のまとめ.....	219
6.2 事態から実現性を見出す認知過程という認知論的観点からの示唆.....	224
6.3 語用論的観点からの示唆.....	226
6.4 対照言語学的・類型論的研究への課題と展望.....	229
用例出典.....	231
引用文献.....	231
各章と既発表論文および口頭発表との関係.....	240

表の目次

- 【表 1 本論文で扱う日本語と中国語の可能形式と難易形式】 ...12
- 【表 2 本論文における可能形式の意味の分類と先行研究の分類の関係】 ...30
- 【表 3 日本語と中国語の可能形式の意味分布】 ...46, 83, 95, 126, 138, 165, 221
- 【表 4 本論文の難易形式の意味の分類と先行研究の分類の関係】 ...55
- 【表 5 日本語と中国語の難易形式の意味分布】 ...63, 84, 186, 199, 217, 221
- 【表 6 “能”、“会”、“可以” と能力可能】 ...139
- 【表 7 “能”、“会”、“可以” と条件的・受動的状況可能、許可可能】 ...145
- 【表 8 “能”、“会”、“可以” と自発的状況可能】 ...152
- 【表 9 “能”、“会”、“可以” と認識可能】 ...159
- 【表 10 「がちだ」と「やすい」の意味範囲の違い】 ...177
- 【表 11 “容易” と “好” の文法構造に対する選択】 ...203
- 【表 12 “容易” と “好” の動詞に対する選択】 ...204

本論文のグロスで使用する略記一覧

- C L : 量詞 (classifier)
- C O P : コピュラ (copula)
- N E G : 否定辞 (negative marker)
- P E R F : 完了アスペクト (perfect aspect)
- P R O G : 進行アスペクト (progressive aspect)
- S F P : 文末助詞 (sentence-final particle)

第1章 序論

第1章では本論文の目的を示し、考察対象の範囲について説明する。まず1.1節で本論文が可能表現と難易表現を分析することでどのようなことを明らかにしようとしているのか、その目的について述べる。1.2節では、本論文が分析対象として取り上げる日本語と中国語の可能形式・難易形式について説明し、考察対象の範囲を示す。最後に1.3節で本論文全体の構成と流れについて説明する。

1.1. 本論文の目的

本論文は、可能表現と難易表現に関わる言語現象を観察することで、人間がものごとの「実現性」をどのように概念化しているのかということをも明らかにすることを目的とする。ここで言う「実現性」とは、事態が実現する（現実世界に出現・存在する）見込みに関わる概念のことであり¹、例えば、(1)の可能表現は「(この水について言うと、) この水を飲むという事態が実現する見込みがある」ということを表しており、(2)の難易表現は「(この本について言うと、) この本を理解するという事態が実現する見込みが高い」ということを表している。

(1) この水は飲める。²

(2) この本は理解しやすい。

本論文では特に、動詞に接辞・接語や助動詞が付加する形で生産的に<可能>や<難易>を表す表現に注目する（本論文では、各形式が表す個別の意味と区別し、可能・難易形式が表す意味全体を総括した意味概念としての可能や難易を指す場合、山括弧(<>)で括る)。(1)と(2)の日本語の可能・難易表現は、ともに「飲む」、「理解する」という動詞に「eru」という接辞、「やすい」という接語がそれぞれ付加され、「飲める」、「理解しやすい」という可能・難易表現の述語ができています。(3)、(4)は(1)、(2)に対応する中国語³の可能表現と難易表現であるが、中国語では“喝”（飲む）⁴、“理解”

¹ 「事態」、「実現性」という概念に関する詳細な議論は第2章2.2節で行う。

² 出典の記載のない例文は本論文筆者による作例である。中国語の例文については、中国語母語話者によるネイティブチェックを受けている。

³ 本論文が考察対象とする中国語は中国で共通語として普及している“普通话”(Mandarin Chinese)である。本論文で単に「中国語」という場合は“普通话”を指す。

⁴ 以下、本文中で中国語の言語形式を表す場合には二重引用符(“”)を用いる。

(理解する) という動詞に“能 (néng) / 可以 (kěyì)” や“好 (hǎo)” などの助動詞⁵が動詞に前置されることで“[能/可以]喝” (飲める)、“好理解” (理解しやすい) という可能・難易表現の述語となっている。本論文ではこのように動詞に付加し、生産的に可能・難易表現の述語をつくる形式を可能形式、難易形式と呼ぶ。

(3) 这个水 [能/可以] 喝。

これ CL 水 NENG/KEYI 飲む

「この水は飲める。」

(4) 这本书 很⁶ 好理解。

これ CL 本 とても HAO 理解する

「この本は理解しやすい。」

なお、ものごとの実現性を表す言語表現は、可能・難易形式を用いた表現に限られない。例えば、(5)の名詞文や(6)の形容詞文、あるいは(7)のような動詞文も「飲むこと」、「理解すること」、「飛ぶこと」の実現性を表していると解釈することができるが、本論文ではこのような名詞文、形容詞文、動詞文は考察対象としない。(1)~(4)のように生産的な可能・難易形式が付加されて成立する表現のみを可能表現、難易表現と呼び、これを考察対象とする。

(5) この水は飲用水だ。

(6) この本は簡単だ。

(7) (人間は飛べないが,) 鳥は飛ぶ。

可能表現と難易表現はともにもものごとの実現性を表す点で意味的に近接し、またともに動詞に生産的な接辞・接語あるいは助動詞が付加された述語によって表される点で形態・統語的にも共通点を有する。本論文はこのような共通点を有する可能表現と難易表現に関わる言語現象を観察することで、人間がものごとの実現性をどのように概念化しているのかを明らかにしようとするものである。具体的には以下の3つの問いを立てる。

⁵ 中国語のこれらの形式を副詞と見る立場もあるが、本論文では呂叔湘 (1980, 1999)、朱德熙 (1982)の見方の従い、助動詞としておく。

⁶ 中国語では性質形容詞が肯定平叙文で程度副詞などを伴わず単独で述語に用いられた場合には、対比的な解釈が生じることがよく知られている (Li & Thompson 1981、朱德熙 1982)。本論文で扱う難易形式、“容易/好/难”は、後ろに動詞を伴っており文法的には助動詞に近づいているが、この性質形容詞の特徴を残しており、特に単音節の“好”と“难”は肯定平叙文では程度副詞がないと文として落ち着かない。したがって本論文では中国語の難易表現の例文では全て“很”(とても)を用いた形で提示する。この場合の“很”は基本的に程度を強調する意味は持たない。

- I. ともにものごとの実現性を表す<可能>と<難易>はどのような点で共通し、どのような点で異なるのか。(〈可能〉と〈難易〉の異同)
- II. 言語によってものごとの実現性を概念化するあり方は異なるのか。異なるとしたらどのような違いがあるのか。(言語間の異同)
- III. 複数の類義の可能・難易形式があった場合、それらの類義形式はどのような観点によって意味の棲み分けがなされているのか。(類義形式間の異同)

Iは<可能>と<難易>という近接する概念がどのような点でつながり、どのような点で異なるのかという<可能>と<難易>の意味概念の違いに関わる問いである。可能表現と難易表現はともにものごとの実現性を表す表現であるという点で共通するが、両表現がどのような点でつながり、どのような点で異なるのかということに関して明確な記述をした先行研究は管見の限り存在しない。例えば、「この水は飲める/飲みやすい」、「この食品は食べられる/食べやすい」というように、単純に「飲む」、「食べる」ことの実現性を述べる場合には、可能・難易表現いずれも成り立つが、(8)と(9)の対比に見られるように可能表現の方は、程度副詞と共起しにくいという事実が観察される。逆に、(10)と(11)の対比に見られるように、難易表現の方は様態や手段、期限、場所を表す副詞句と共起しにくい。

(8) この水は (??とても/??非常に/??最も/??やや) 飲める。

(9) この水は (とても/非常に/最も/やや) 飲みやすい。

(10) この食品は (さっと/スプーンで/3分で/東京で) 食べられる。

(11) この食品は (?さっと/?スプーンで/?3分で/?東京で) 食べやすい。

程度副詞との共起可否については、<可能>と<難易>の意味概念の違いではなく、<可能>が動詞文、<難易>が形容詞文によって実現されているという、品詞性の違いによって生じているという可能性も考えられる。しかし、(12)、(13)のようにともに形容詞文にしても、<可能>の方は変わらず程度副詞と共起できないことから、品詞の問題ではなく、<可能>と<難易>という意味概念の違いの問題として考えた方が適当であると思われる。

(12) そのプロジェクトは (??とても/??非常に/??最も/??やや) 可能だ。

(13) そのプロジェクトは (とても/非常に/最も/やや) 容易だ。

同様に形容詞述語であっても<可能>の方は「3分で」、「東京で」のような副詞句と共起できることから ((14)、(15))、期限、場所といった動的な述語を修飾する副詞句

と難易表現が共起しないという事実についても、品詞性の観点からだけでは説明できない。

(14) この手続きは(3分で/東京で)可能だ。

(15) この手続きは(??3分で/??東京で)容易だ。

このような可能表現と難易表現の間に見られる違いは、<可能>と<難易>というそれぞれの意味概念の特徴の違いから生じるものであると考えられるが、<可能>と<難易>が持つ意味的な特徴とはどのような特徴なのであろうか。それを明らかにするのが本論文の第1の課題である。

IIは<可能>と<難易>という実現性を概念化することにおける言語差に関わる問題である。本論文では日本語と中国語を取り上げて比較することでこの問題について考える。可能・難易述語をつくる生産的な可能・難易形式は日本語にも中国語にも存在するが、日本語の可能・難易形式と中国語の可能・難易形式が表しうる意味の範囲は異なる。例えば、中国語の可能形式の1つである“能”は、(16)のように主体の能力を表す意味だけでなく、(17)のような話し手の認識的な判断を表す意味や、(18)のような話し手や聞き手の行為に対する許可を表す意味を持つ。

(16) 他 能 说 英语。

彼 NENG 話す 英語

「彼は英語が話せる。」

(17) 明天 他 能 在 家 吗？

明日 彼 NENG いる 家 SFP (疑問)

「明日彼は家にいるだろうか。」

(18) 现在 我 能 说 两 句 吗？

今 私 NENG 話す いくつか CL SFP (疑問)

「今ちょっと喋ってもいいですか。」

一方、日本語の可能形式は、(19)のような主体の能力を表すことはできるが、話し手の認識的な判断や許可を表すことはできない。(20)、(21)を認識的な判断や許可を表している文として解釈するのは難しいであろう。認識的な判断や許可を表す場合、日本語では、可能形式ではなく、(22)の「だろう」や(23)の「でもいい」などの他形式によって表される。

(19) 彼は英語が話せる。

(20) #明日彼は家にいられるか。

(21) #今（私が）ちょっと喋れますか。

(22) 明日彼は家にいるだろうか。

(23) 今（私が）ちょっと喋ってもいいですか。

中国語の可能形式が主体の能力だけではなく、認識的判断や許可という意味まで表せるのに対して、日本語の可能形式ではそれが表せないという違いはなぜ生じるのだろうか。

日中の意味範囲の差異を示す他の例として、今度は逆に日本語では表せる意味が中国語では表せない場合があることを難易表現で示す。日本語の難易表現では、(24)のように感覚を受容することを表す動詞（「感じる」）を述語にとったり、経験者を付加したりすることができる。しかし、それに対応する(25)の中国語はいずれも成立しない。これは日本語の難易表現は<難易>を感覚として表せるのに対して、中国語の難易表現はその意味が表せないことを意味する。このような意味範囲の違いはなぜ生じるのだろうか。

(24) a. この本は、（私は）理解しにくく感じる。

b. この小説は話の筋が複雑で、私は理解しにくい。

(25) a.??这本书，（我）感到很难理解。

これ CL 本 私 感じる とても NAN 理解する

「この本は、私は理解しにくく感じる。」

b.??这本小说的故事情节复杂，我很难理解。

これ CL 小説 の ストーリー筋 複雑 私 とても NAN 理解する

「この小説は話の筋が複雑で、私は理解しにくい。」

第2の課題はこのような日本語と中国語の言語間の差異を、実現性の概念化のあり方と関連付けて明らかにしようとするものである。

⁷ 日本語の「感じる」にあたる中国語の感覚動詞には“感到”のほか、“感觉”、“觉得”などもあるが、“感觉”、“觉得”は(i)のような感覚動詞としてだけでなく、(ii)のように思考動詞としても広く使われる。

(i) 我[感到/感觉/觉得]不舒服。(私は気持ち悪く感じる。)

(ii) 我[??感到/感觉/觉得]他说的对。(私は彼の言うことが正しいと思った。)

思考動詞としての解釈ならば、(iii)に示されるように“感觉”、“觉得”は難易表現と共起する。

(iii) 这本书，我[感觉/觉得]很难理解。(この本は、私は理解しにくいと思った。)

ここでは<難易>を感覚として表せるか否かを問題としているため、思考動詞としての解釈が可能な“感觉”、“觉得”を排除し、“感到”のみをとりあげている。

Ⅲは可能・難易表現の複数の類義形式においてどのような意味の棲み分けがなされているのか、という個々の形式間の違いに関わる問題である。難易形式を例に挙げると、日本語には実現の困難さを表す類義の形式として「にくい」と「づらい」がある。(26)のように意志的な行為の実現の困難さを表す場合には両形式は交替可能であるが、(27)のように無意志的な事態実現の困難さを表す場合には「づらい」は不自然になる。

(26) この本は理解し[にくい/づらい]。

(27) この建築材は燃え[にくい/??づらい]。

中国語では逆にものごとの容易さを表す形式に“容易 (róngyì)”と“好 (hǎo)”という類義の形式があり、(28)のような意志的な行為の実現の容易さを表す場合には交替可能であるが、(29)のように無意志的な事態実現の容易さを表す場合には“好”は不自然になる。これは日本語と中国語の間で平行的に見られる現象の1つである。

(28) 这本书很 [容易/好] 理解。

これ CL 本 とても RONGYI/HAO 理解する

「この本は理解しやすい。」

(29) 这种建材很 [容易/??好] 燃烧。

これ CL 建築材 とても RONGYI/HAO 燃える

「この建築材は燃えやすい。」

一方で、中国語の“容易”と“好”には日本語の「にくい」と「づらい」には見られない制約があり、(30)、(31)のように、意志的な行為の実現の容易さを表す場合でも、ある環境では一方の形式の使用が制限されるという現象が見られる。

(30) 那条路很 [??容易/好] 走。

あれ CL 道 とても RONGYI/HAO 歩く

「あの道は歩きやすい。」

(31) 英语很 [容易/*好] 学会。

英語 とても RONGYI/HAO 学ぶ・身に付く

「英語は学んで身につけやすい。」

これはある部分では日本語と中国語のそれぞれの類義形式の間に共通した意味の棲み分けがある一方で、ある部分では異なる原理が働いているということを示している。このような、<可能>および<難易>を表す類義形式間における意味の棲み分けを理解するにはどのような観点が必要になるのか、ということをも明らかにするのが本論文の3つ目の課題である。

I～IIIの課題は、＜可能＞と＜難易＞という意味概念の間の異同、日本語と中国語という言語間の異同、類義形式間の異同というそれぞれ質の異なる問題であるが、これらの問題に対して、本論文はできるだけ統一的な観点から説明を与えることを試みる。その中心的な観点になるのが、「事態から実現性を見出す認知過程」という認知論的な観点である。この「事態から実現性を見出す認知過程」については第2章2.2節で詳しく述べるが、このような観点から日本語と中国語の可能・難易表現のI～IIIの課題に関わる現象を分析することで、それぞれの現象を互いに関連しあつたものとして捉え直し、従来の研究では扱えなかった現象を取り込みながら、＜可能＞、＜難易＞および日本語、中国語の特徴を明らかにしていく。

1.2. 本論文の考察対象

この節では本論文が考察対象とする日本語と中国語の可能形式、難易形式の整理をする。本論文では(32)～(37)に現れる可能・難易形式を考察対象とする。

＜可能表現＞

(32) 私は3つの外国語[が(/を) 話せる/を話すことができる]。

(33) このきのこは[食べられる/食べることができる]。

(34) 我 [能/会/可以] 说 3 种 外语。

私 NENG/HUI/KEYI 話す 3 CL 外国語

「私は3つの外国語が話せる。」

(35) 这 个 蘑 菇 [能/可以] 吃。

これ CL きのこ NENG/KEYI 食べる

「このきのこは食べられる。」

＜難易表現＞

(36) このことは説明し[やすい//にくい/づらい]。

(37) 这 件 事 很 [容易/好//难] 解释。

これ CL こと とても RONGYI/HAO//NAN 説明する

「このことは説明しやすい//にくい。」

構文的な特徴として、可能表現の方は、(32)、(34)のように、動作主を残した形も、(33)、(35)のように動作主を落とした形もいずれも基本的な構文として認められるのに対して、難易表現の方は、(36)、(37)のような動作主を落とした形が基本となる。ただし、難易表現の中でも行為の＜難易＞を表すのではなく、(38)のように傾向を表すとされ

る解釈の場合、あるいは日本語では行為の<難易>を表すと解釈される文でも「ガ(ハ)」ではなく、(39)のように「ニ」格で元の動作主を標示する場合には、動作主が現れうる。

(38) a. 太郎は風邪をひきやすい。

b. 太郎 容易 感冒。

太郎 RONGYI 風邪をひく

「太郎は風邪をひきやすい」

(39) 私にはこの話が説明しやすい。

なお、「ニ」格主語は(40)のように可能表現でも現れうる。

(40) 私には3つの外国語が話せる。

このように特に日本語の可能・難易表現はとりうる構文が多様で、可能・難易表現がとる格パターン、主語の認定、統語構造と意味解釈の関係など、可能・難易表現の統語構造の問題については、久野 (1973)、Inoue, Kazuko (1978)、Takezawa (1987)、佐藤 (1989)、中村 (2000)などにおいて中心的なトピックとして議論されている。可能・難易表現の構文的な問題については、本論文の目的に関わる範囲においてそれぞれの議論の中で適宜取り上げることとする。

日本語の可能形式としては、「られる」、「ことができる」、難易形式としては「やすい」、「にくい」、「づらい」を扱う。ここで言う「られる」とは、金子 (1980)が「可能の第一形式」、山口 (2002)が「動詞の可能形を用いる場合」とする可能表現に使用される形式に相当し⁸、母音語幹動詞につく「rareru」(食べられる (tabe-rareru))と、子音語幹動詞につく「eru」(話せる (hanas-eru))をあわせた形式を指す。なお、具体的な考察対象としては取り上げないが、「食べれる」、「起きれる」などのいわゆるラ抜き形は「食べられる」、「起きられる」などの変異形として考え、意味的差異はないと考える。「ことができる」を除いてこれらの形式は、動詞連用形に接辞・接語として付加されることによって生産的に可能・難易述語をつくるという共通点を有する ((41)、(42))。

(41) 「V連用形+ (rar) eru」

(42) 「V連用形+[yasui/nikui/zurai]」

「ことができる」のみ動詞連体形に接続し、その形式自体も複合的であり、他の形式とは形態的特徴が異なるが、日本語の生産的な可能形式として広く使われている点を

⁸ 金子 (1980)、山口 (2002)ではこのほか「ことができる」と「える/うる」を日本語の主要な可能形式として認めている。

重視し、本論文の考察対象に含める。なお、「える/うる」、「かねない」も可能形式として取り上げられることが多い形式であるが、渋谷 (2005)が指摘するように、これらの形式は現代共通語では使用される文体が制限され、その生産性も低いため、本論文の考察対象とはしない。

中国語の可能形式としては“能 (néng)” (デキル)、“会 (hui)” (デキル)、“可以 (kěyǐ)” (デキル)、難易形式としては“容易 (róngyì)” (ヤスイ)、“好 (hǎo)” (ヤスイ)、“难 (nán)” (ニクイ) を取り上げる。これらの形式は、動詞に前置されることによって可能・難易述語をつくる ((43)、(44))。

(43) “[能/会/可以]+V”

(44) “[好/容易//难]+V”

(43)、(44)を見ると中国語の可能・難易形式は全て同じ構造をとっているように見えるが、「V」の後に目的語をとれるか否かという点で“好”だけが異なるふるまいを見せる。(45)に示されるように、難易形式の“好”だけは「動詞+目的語」という構造をとることができない (郑怀德 1998、奥田寛 2000)。

(45) a. 这 把 剪子 很 好 剪。

これ CL はさみ とても HAO 切る

「このはさみは切りやすい。」

b. *这 把 剪子 很 好 剪 布。

これ CL はさみ とても HAO 切る 布

「このはさみは布を切りやすい。」

それに対して、(46)、(47)に示されるようにその他の可能形式“能”、“会”、“可以”および難易形式“容易”、“难”については、「動詞+目的語」という構造をとりうる。

(46) 我 [能/会/可以] 说 英语。

私 NENG/HUI/KEYI 話す 英語

「私は英語が話せる。」

(47) 这 个 结 论 很 [容易/难] 说 服 人。

これ CL 結論 とても RONGYI/NAN 説得する 人

「この結論は人を説得し[やすい/にくい]。」

奥田寛 (2000)は“容易”と対比させる形で、“好”は、受動文や使役文をとれないという事実を指摘しているが、これは“好”が動詞と直接結合する形式であり、動詞句以上のまとまりをとることができないことを示している。中国語 (および日本語) のそれぞれの可能・難易形式の統語的な性格の違いは、各形式の特徴を明らかにする上

で重要な問題であるが、各形式の統語的な位置付けを詳細に論じることは、本論文の目的・関心から外れるところであるので、これ以上この問題には深く立ち入らない。ここでは、“好”が他の形式とは異なり、動詞句以上のまとまりと結合できないという事実を確認するにとどめる。

このほか、中国語には生産的な可能形式として、「可能補語」と呼ばれる形式がある。可能補語として認められる形式は、3つに分類される(刘月华 1980)。1つは、(48)のように「動詞+結果補語/方向補語」という構造に“得/不”が挿入されたと見ることができ、(48a)は、“赚到”(儲ける+達する)という、動詞に結果を表す補語が付加された構造に“不”が挿入された形と見ることができ、(48b)は“看出”(見る+出る)という、動詞に方向を表す補語が付加された構造に“得”が挿入された形と見ることができ、

(48) a. 打工 很 辛苦, 却 赚不到 多少 钱。

アルバイトとても 辛い けれども 儲ける-NEG-達する いくらか 金

「アルバイトをするのはとてもつらいのに、いくらもお金が稼げない。」

b. 看得出, 美国 的 那 一 套 学术规范 他 已经 很 熟悉。

見る-DE-出る アメリカ の あれ 一 CL 学術規範 彼 すでに とても 熟知する

「アメリカのあの学術規範を彼はすでに熟知していることが見て取れる。」

(安本 2009:41)

2つ目は、(49)のように、動詞に“得/不+了”が付加されたと見ることができ、(49)のタイプと類似するが、“干了”、“回答了”という「動詞+補語」構造が存在しないため、「動詞+補語」構造に“得”、“不”が挿入されたと分析できない。この点で、(48)と区別される。

(49) a. 这 件 事 可 不 是 一般 人 干得了 的。

これ CL こと まったく NEG COP 一般 人 する-DE-LIAO のもの

「このことは一般の人がやれるものではない。」

b. “我 不 知道,” 妇女 说, “我 真的 回答不了 你们”。

私 NEG 知っている 女性 言う 私 本当に 答える-NEG-LIAO あなたたち

「私はわからない、」と女性が言った、「私は本当にあなた達に答えることができない。」

(安本 2009:41)

3 つ目は、(50)のように動詞に“得/不”が付加されたと見ることが出来る構造である（「動詞+得/不」）。

(50) 有 一些 事情 是 说得 做不得， 可 有 一些
ある いくつか こと COP 話す-DE する-NEG-DE けれども ある いくつか
事情 是 做得 说不得。
こと COP する-DE 話す-NEG-DE

「一部のことは言ってもいいがやっではいけないのだが、一部のことはやっでもいいが言っではいけないのだ。」

(安本 2009:41)

これらの補語型の可能表現は使用頻度も高く、中国語の可能表現において助動詞型と並んで重要な位置を占めるものである。さらにこの可能補語型の可能形式と対比させる対照研究の中で、あるいは日本語学における可能研究の中で、(51)、(52)のような無標の動詞文でも可能の意味が読み取れる表現（無標識可能表現）が可能表現の一種として扱われることがある（張威 1998、大崎 2005、姚艷玲 2008）。

(51) いくら頑張っても、彼との差は縮まらない。

(52) 腕が痛くて、手があがらない。

(張威 1998:2)

渋谷 (1998)、張麟声 (2001)、姚艷玲 (2008)などが指摘するように、中国語の可能補語を日本語に訳す場合、「られる」や「ことができる」の可能形式を用いて表すことができず、無標識可能表現に対応する場合がある ((53)、(54))。

(53) 身体 坚持不住。

体 もつ-NEG-そのまま

「体がもたない。」(*体がもてない)

(54) 不 吃 药 的话， 你 的 病 治不好。

NEG 飲む 薬 ~だとしたら あなたの 病気 治す-NEG-良い

「薬を飲まなければ、あなたの病気は治らない。」(*治れない?治せない⁹)

中国語の可能補語、および日本語の無標識可能表現は、<可能>を概念化、言語化する際の1つの手段として両言語において重要な位置を占める形式であるが、本論文

⁹ 「治せない」という他動詞の可能形を用いること自体はできるが、その場合、話し手が医者などの「治す」主体であるという読みが強く出る。しかし、可能補語を用いた中国語の文はそのような話し手に関する制限はなく、「あなたの病気」の一般的性質として誰でも述べる事が出来る。このような事実からも元の中国語に最も対応する日本語の述語は、「治らない」であると考えられる。

では、中心的な考察対象とはせず、各論の関連する箇所において適宜取り上げるにとどめる。本論文が中心的な考察対象とする形式をまとめたのが【表 1】である。

【表 1 本論文で扱う日本語と中国語の可能形式と難易形式】

		日本語	中国語
可能形式		「られる」 「ことができる」	“能 (néng)” “会 (huì)” “可以 (kěyǐ)”
難易形式	容易さを表す形式	「やすい」	“容易 (róngyì)” “好 (hǎo)”
	困難さを表す形式	「にくい」 「づらい」	“难 (nán)”

最後に本論文で考察対象とする言語が日本語と中国語であることの意義について説明する。可能・難易表現を統括して比較対照する上で、日本語と中国語を取り上げるということには意味がある。それは、それぞれの言語で可能・難易表現が同じ形態・統語的手段によってつくられているためである。日本語では可能・難易形式ともに動詞に後接する接辞・接語であり、中国語では動詞に前置される助動詞である。可能・難易表現が同じ形態・統語的な手段によって実現されるということは、自明なことではなく、例えば英語の場合だと、最も生産的な可能表現は、(55)のような助動詞 *can* を用いた文であるが、*can* に対応するような助動詞の難易形式は英語には存在せず、(56)のようないわゆる *Tough* 構文という特定の構文によって難易表現が実現される。

(55) I can speak French.

(56) French is [easy/ tough] to learn.

日本語と中国語を取り上げること、また中国語の生産的な可能形式である可能補語を中心的な考察対象から一旦除外するということは、できるだけ形態的・統語的差異を小さくし、<可能>と<難易>の意味論的・認知論的な差異を捉えるという本論文の関心に沿った形で議論を進める上でも適していると考えられる。

1.3. 本論文の構成

この節では本論文の構成について説明する。本論文は以下の 6 つの章によって構成される。

第 1 章 序論

第 2 章 先行研究と本論文の立場

第 3 章 可能表現と難易表現の対照

第 4 章 日本語と中国語の可能表現

第 5 章 日本語と中国語の難易表現

第 6 章 おわりに

第 1 章「序論」では、日本語と中国語の可能表現と難易表現を「事態から実現性を見出す認知過程」という認知論的な観点から分析することで、〈可能〉と〈難易〉という意味概念間の異同、言語間の異同、類義形式間の異同を統一的な観点から記述する、という本論文の目的を示すとともに、考察対象の整理を行った。

第 2 章「先行研究と本論文の立場」では、日本語と中国語の可能表現と難易表現に関する先行研究を概観した上で、本論文の立場について説明する。同じ「実現性」を表す可能・難易表現がどのような点でつながり、どのような点で異なるのかということについては従来の研究では十分に明らかにされていないという点を指摘し、「事態から実現性を見出す認知過程」という認知論的な観点から日中の可能・難易表現を分析する本論文の基本的立場について説明する。

第 3 章「可能表現と難易表現の対照」では、第 4 章および第 5 章での個別形式の分析に入る前に、本論文の枠組みの中で両表現がどのように位置づけられるのかについて述べる。この章では、「事態から実現性を見出す認知過程」という観点と「意味拡張のあり方」という観点から〈可能〉と〈難易〉の対照を行う。1 つ目の観点からは、可能表現と難易表現はともに「主体の働きかけ」と「抵抗力」の力関係を基にした事態との関係で記述することができる一方で、事態から実現性を見出す認知過程においては質的に異なる認知のあり方が関わっていることを指摘する。認知過程の違いという観点を導入することで、従来の研究では指摘されてこなかった可能表現と難易表現に見られるふるまいの違いを統一的に説明できることを示す。2 つ目の観点からは、ともに多義性を有する可能・難易形式であるが、その意味拡張の動機づけが異なるこ

とを指摘し、＜可能＞に比べ研究が進んでいなかった＜難易＞の意味拡張に関わる諸現象が、＜難易＞の意味拡張の動機づけから説明されることを示す。

第4章「日本語と中国語の可能表現」と第5章「日本語と中国語の難易表現」では、日本語と中国語における類義の可能・難易形式を比較することによって、事態から実現性を見出す過程に形式間・言語間で程度差といくつかのバリエーションがあることを明らかにする。第4章と第5章の考察を通して、日本語と中国語の異同および類義形式間の異同を捉えるための概念として、「基盤事態活性型の形式/基盤事態非活性型の形式」と「事態起点型の実現性表現/見込み起点型の実現性表現」という概念を提案する。

第6章「おわりに」では、本論文の成果をまとめた上で今後の課題と展望について述べる。

第2章 先行研究と本論文の立場

第2章では、可能・難易表現についての先行研究を概観した上で、本論文の立場について説明する。2.1節で日本語と中国語の可能表現、難易表現がこれまでどのような観点から分析されてきたかについて紹介し、その問題点を指摘する。つづく2.2節では本論文の分析の観点である「事態から実現性を見出す認知過程」という概念について説明した上で、本論文の位置づけについて述べる。

2.1. 可能表現と難易表現についての先行研究の概観

可能表現については日本語、中国語ともに膨大な研究の蓄積がある。日本語の可能表現について記述的にその意味を整理した研究に、藤井(1971)、小矢野(1979, 1980, 1981)、青木怜子(1980)、金子(1980, 1981)、奥田靖雄(1986)、渋谷(1993, 2006)、山口(2002)などがある。中国語では、多くの語を辞書的に記述する、あるいは中国語の文法体系全体を記述する中で可能形式の意味・用法が整理されているものが多く、代表的なものとして、吕叔湘(1980, 1999)、朱德熙(1982)、刘月华等(1983, 2001)、陆庆和(2006)などが挙げられる。これらの日本語・中国語の研究では可能形式が現れる統語的環境の記述や可能表現が表す意味の分類が細かくなされ、例えば日本語の研究では、可能の原因の違いに注目した分類である「能力可能/状況可能」(渋谷 2006)の区別や、話し手の認識の関わりの有無に注目した「ちからの可能(能力可能)/認識の可能(認識可能)」(金子 1980, 1981)の区別、主語に立つ名詞句と動詞との関係という構文的特徴に注目した「能動的可能/受動的可能」(寺村 1982)の区別などの重要性が指摘されている。上記のような観点からの分類は、日本語の研究とは独立して、中国語の可能表現を分類する際にも採用されており(吕叔湘 1980, 1999、刘月华等 1983, 2001)、可能表現を分類する際に有効な共通の基準が言語をまたいで存在することを示している。

日本語の可能表現研究にはあまり見られない観点から中国語の可能表現を分類するアプローチもある。日本語とは異なり、中国語の可能形式は、英語やその他の言語と同様に1つの形式で能力などの動的な意味(dynamic modality)から事態に関する可能性判断という認識的な意味(epistemic modality)や許可という束縛的な意味

(deontic modality) までを広く表しうるため、対照研究、類型論的な関心からモダリティの枠組みの中で論じられることも多い(熊文 1996、Li, Renzhi 2004、魯晓琨 2004、彭利贞 2007)¹。これらの研究によって、中国語の可能表現がかなりの程度、一般言語学的なモダリティ論の枠組みを用いて整理できることが示されている。

難易表現については、日本語の分析では、統語論的な観点からの分析が 70 年代から盛んになり、Inoue, Kazuko (1978)、嶋村 (1980)、Takezawa (1987)、佐藤 (1989)、三木 (2001)、井上和子 (2005) などによって英語の Tough 構文との比較、およびその統語派生のメカニズムについて分析がなされてきた。さらに、90 年代以降、「やすい」による難易表現の分析を中心に、井上次夫 (1997)、三木 (1998)、渡邊 (2007)、鈴木 (2013) などによって記述的な分析が行われるようになった。これらの研究によって、同じ難易形式が、行為の容易さ・困難さを表す意味(いわゆる「難易」)と、ものごとの傾向を表す意味(いわゆる「傾向」)を表すこと、それらの意味解釈と統語構造に対応関係が見られることなどが明らかにされてきた。中国語においては、日本語ほど研究が進んでおらず、吕叔湘 (1980, 1999)、朱德熙 (1982)、刘月华等 (1983, 2001) などにおいて“容易”、“好”、“难”という個別の形式に対する辞書的な記述がなされているほかは、“好”の意味的・統語的特徴を共時的な観点から記述している郑怀德 (1998) や、“好”が形容詞から助動詞の機能を担いようようになるまでの通時的な変化を文法化という観点から記述した李晋霞 (2005)、张定・丁海燕 (2009)、“容易”と“好”が現れる意味的・統語的な環境の違いを整理した奥田寛 (2000) などがあるのみで、難易表現としての研究というよりも、“好”および“容易”、“难”の語彙研究としての色彩が強い。

これらの可能表現、難易表現に関する研究の蓄積により、個々の語や構文の意味的・統語的特徴が明らかになり、また<可能>や<難易>のそれぞれの意味・用法を分類する上で有効な基準が示されてきた。これらの研究によって可能表現、難易表現それぞれの体系はかなりの程度整理されてきたと言える。しかし、可能表現(可能形式)と難易表現(難易形式)がそれぞれ独立して細かく記述され、体系化がなされてきたことによって逆に見えにくくなっている側面がある。可能表現は日本語ではヴォイス研究(格研究)の一部あるいは可能表現という独立した 1 つのカテゴリーとして、中国語では(文法体系全体を記述する研究、辞書的記述をしている研究を除くと)モダリティ研究の一部として論じられることが多い。一方、難易表現は日本語では英語の

¹ モダリティの意味分類については第 3 章 3.1 節で詳しく述べる。

Tough 構文との関係が注目され、「難易構文 (難易文)」という 1 つの独立した構文研究として取り上げられることが多く、中国語では語彙研究にとどまっている。ヴォイス研究 (格研究)、モダリティ研究、1 つの構文としての研究という枠組みで記述が深化してきた一方で、ものごとの実現性を表す意味概念としての<可能>と<難易>がどのような点で接近し、どのような点で異なるのかということが、従来の研究ではほとんど論じられてこなかったのである。<可能>と<難易>を比べること自体が、従来の研究ではほとんどなされてこなかったため、第 1 章でも指摘した(1)~(4)の例に示されるような、可能表現と難易表現の間に違いが見られるという現象そのものが問題にされてこなかった。これまでの可能表現のための分類・記述、難易表現のための分類・記述では、なぜ<可能>と<難易>の間にこのような違いが生じるのかということの説明することはできない。

- (1) この水は (??とても/??非常に/??最も/??やや) 飲める。
- (2) この水は (とても/非常に/最も/やや) 飲みやすい。
- (3) この食品は (さっと/スプーンで/3分で/東京で) 食べられる。
- (4) この食品は (?さっと/?スプーンで/?3分で/?東京で) 食べやすい。

このような問題は、日本語と中国語の間の違いを捉えようとする際にも存在する。<可能>は、日本語では主にヴォイス研究の中で発達してきたという背景があるため、これも第 1 章で指摘したように、中国語では可能形式が話し手の認識的判断や許可を表すことができるのに対して ((5)、(6))、日本語の可能形式ではそれができない ((7)、(8)) という中国語と日本語の可能形式の間に意味範囲の差があることについて、なぜそのような違いがあるのかが論じられることがほとんどなかった²。

- (5) 明天 他 能 在 家 吗?
明日 彼 NENG いる 家 SFP (疑問)
「明日彼は家にいるだろうか。」
- (6) 现在 我 能 说 两 句 吗?
今 私 NENG 話す いくつか CL SFP (疑問)
「今ちょっと喋ってもいいですか。」
- (7) #明日彼は家にいられるか。
- (8) #今 (私が) ちょっと喋れますか。

² 玉地 (2005)、渋谷 (2005)は日本語の可能形式が中国語、英語と異なり認識的判断の意味を表せないことを指摘しているが、なぜそのような違いが生じるのかについては論じられていない。

ものごとの実現性を表す可能形式が、ある言語（中国語）では主体の能力を表す意味だけでなく、認知的判断や許可を表すという多義性を有するのに対して、ある言語（日本語）ではそのような多義性が見られないという事実は、言語間における実現性の捉え方、概念化のあり方の違いを考える上では問題になる事実である。しかし、日本語の可能形式はモダリティ論とは独立して議論されることが多いので、このような問題提起がなされることがほとんどなかったのだと考えられる。

このように、ヴォイスやモダリティなどの従来の枠組みにとらわれず、〈可能〉と〈難易〉をものごとの実現性を表す意味概念として統括して見ることで、これまで問題とされてこなかった〈可能〉と〈難易〉の間にある違い、および日本語と中国語という言語間にある違いに関わる事実が見えてくる。これらの言語事実は、以下のような観点から迫ることではじめて説明を与えられるものだと考える。ものごとの実現性を概念化するとき、ある種の実現性は〈可能〉として概念化され、ある種の実現性は〈難易〉で概念化される。それは概念化のどのような違いに基づいてなされているのか。あるいは、同じ〈可能〉であっても、〈可能〉の概念化のあり方が言語間（あるいは形式間）で異なる。その場合にそれは概念化のどのような違いに基づいているのか。このようなく可能〉・〈難易〉の概念化のあり方という問題を考える上では、従来の記述的な研究やモダリティ研究で提案されてきた、可能・難易表現が表す意味やモダリティの種類といった表層的な意味に注目するだけでは不十分で、「事態から実現性を見出す認知過程」という認知論的な観点を導入する必要があると考える。

2.2. 本論文の立場

この節では、「事態から実現性を見出す認知過程」という本論文の観点に関わる、「事態」と「実現性」という概念について整理をし、その上で「事態から実現性を見出す認知過程」がどのような認知過程のことを指すかについて説明する。

本論文で言う「事態」とは現実世界に出現・存在する出来事のことを指す。命題の意味的類型として提出されている仁田 (2001)の「動き (主体運動・主体変化)」と「状態」、あるいは述語タイプの分類として提出されている工藤 (2002)の「現象 (運動・状態)」におおむね対応する。仁田 (2001)で「動き」と「状態」について規定している箇所を引用する。

<動き>とは、ある一定の具体的な時間の流れの中に始まり展開し終わる一展開が瞬時で、始まりと終わりが同時的である、というものをも含めて一、というあり方で、具体的な物（人をも含めて）の上に発生・存在する事態である、というふうに、特徴づけることができよう。

（仁田 2001:16 下線強調は本論文筆者による）

状態も、具体的な物の上に発生・存在し、具体的な一時的な時間の中に出現・存在する事態である。ただ、動きとは異なって、状態自体が、発生・展開・終了するという時間的な展開過程を有しているわけではない。<状態>とは、限定を受けた一時的な時間帯の中に出現・存在する、物の、展開していかない—言い換えれば、その時間帯は続く一同質的な一様なありよう・あり様である、と概略特徴づけることができよう。

（仁田 2001:16 下線強調は本論文筆者による）

本論文における「事態」の下位タイプには、(9)のような人間が意志的に行う「行為」や、(10)のような人間や物の「変化」、さらに(11)のような「状態」が含まれる。ここで言う、「行為」、「変化」、「状態」は仁田 (2001)の「主体運動」、「主体変化」、「状態」に対応する。

- (9) a. 太郎が走った。
- b. 太郎が窓を割った。
- (10) a. 太郎が死んだ。
- b. 木が倒れた。
- (11) 太郎がずぶ濡れた。

一方、仁田 (2001)が「属性」³、工藤 (2002)が「本質」と呼ぶ、時空間の限定を受けない人間や物の恒常的な性質や関係 ((12)) は、本論文の「事態」の範囲から外れる。また、(13)のような話し手の判断・評価も「事態」からは外れる。

- (12) a. 太郎は背が高い。
- b. 桜はバラ科に属する。
- (13) この本は読むべきだ。

³ 仁田 (2001)は「状態」と「属性」はともに「静的事態」を表しているという点で共通するとしているが、本論文では「属性」を「事態」の一種とは認めない。

仁田 (2001)は「動き・状態」と「属性」を分かつ本質的な違いは、時間的な限定があるかないかにあるとしており、また工藤 (2002)においても、時間的限定性の有無が「現象」と「本質」の違いに関わっていることを指摘している。本論文の言う「事態」と非「事態」の違いにも時間的な限定が大きく関わっていることは確かであるが、本論文の枠組みにおいてそれ以上に重要なのは、工藤 (2002:49)が、「現象は<知覚>できるが、<本質>は<思考による一般化>がある」と指摘している点である。つまり、「事態」は現実世界に出現・存在し、直接知覚の対象になるものであるが、非「事態」は知覚の対象となるようなものではなく、その意味で現実世界に存在するものではない。このことを示す言語事実として、知覚構文との共起可否を挙げる。事態を表す表現は知覚構文と共起する ((14)~(16))。

- (14) a. 太郎が走るのを見た。
b. 太郎が窓を割るのを見た。
(15) a. 太郎が死ぬのを見た。
b. 木が倒れるのを見た。
(16) 太郎がずぶ濡れなのを見た。

それに対して非事態を表す表現は知覚構文と共起しない ((17)、(18))。

- (17) a.??太郎が背が高いのを見た。
b.??桜がバラ科に属するのを見た。
(18) ??この本が (/を) 読むべきなのを見た。

本論文の考察対象である可能・難易表現も、知覚構文と共起しないため ((19)~(21))、<可能>や<難易>という実現性も現実世界に現れる事態ではないと考えられる。

- (19) ??彼が泳げるのを見た。⁴
(20) ??この水が飲めるのを見た。
(21) ??この水が飲みやすいのを見た。

つづいて、「実現性」という概念について整理をしておく。「実現」という用語は、ある事態が実現したか、まだ実現していないかという関係の中で「未実現」に対立する概念として用いられる場合 (刘勛宁 1988) や、あるいは現実世界にある事態が実在しているか否かという関係の中で「潜在 (非現実)」に対立する概念として用いられる場合がある (井

⁴ ただし、日本語の可能表現は1回的な事態を表す用法も持つため、「彼が泳げるという能力があるのを見た」という解釈ではなく、「彼が泳げているのを見た」、「彼が泳げたのを見た」という文に近い意味を表す文としてなら容認可能である。日本語の可能表現が事態を表す場合の問題については、第3章3.5節で詳しく述べる。

島 1991、渋谷 1993)。前者はアスペクト論においてある事態がどのような局面にあるのかを表すための概念であり、後者はモダリティ論においてある事態がどのような世界に位置づけられるのかを表すための概念である。本論文で取り上げる実現性表現（可能・難易表現）は、現実世界に現れる事態を表しておらず、潜在世界（非現実）における事物や事柄のあり方を述べる表現であるため、モダリティ論の中に位置づけられる⁵。しかし、本論文で言う「実現性」は、ある事態が現実世界に「出現・存在する見込みあり（あるいは見込みが高い）/出現・存在する見込みなし（あるいは見込みが低い）」という関係で捉えられるものであり、どのような世界に位置づけられるかそのものを表す概念ではない。本論文の「実現性」は、事物や事柄が有する性質として捉えられるものである。(22)のような主語の能力を表す場合であれば、「彼が泳ぐ」という事態が実現する見込みがある、そういう性質を能力として「彼が持っている」ということになるし、(23)のような場合も「明日雨が降る」という事態が実現する見込みがある、そういう性質が事柄の性質としてある」ということになる。

(22) 彼は泳げる。

(23) 明天 会下 雨。

明日 HUI 降る 雨

「明日雨が降るだろう。」

以上、ここまで、事態の表現と実現性の表現は質的に異なり、「実現性」は事物や事柄が有する性質として捉えられるということを述べた。それでは、現実世界に出現・存在し知覚の対象となる事態でないのだとすると、事物や事柄の性質としての<可能>・<難易>とは一体どのようにして捉えられるものなのだろうか。本論文では<可能>や<難易>は話し手が事態から見出すものであると考える。その見出しの過程が「事態から実現性を見出す認知過程」である。この観点を説明するために、(24)の可能表現、(25)の難易表現を例に取り上げて考える。

(24) a. 彼は泳げる。

b. この水は飲める。

(25) この水は飲みやすい。

(24)や(25)のような「彼が泳ぐ」ことや「この水を飲む」ことに関する実現性を述べる場合の最も原初的なあり方は、<可能>であれば、「彼が泳いでみたところ、(彼が)泳ぐという事態が実際に実現した」、したがって、「彼は泳げる」という判断をする場

⁵ ただし、Narrog (2009)を除いて、難易表現をモダリティ論の中で取り上げている研究は管見の限り見当たらない。

合や、「この水を飲んでみたところ、(この水を) 飲むという事態が実際に実現した」したがって、「この水は飲める」というような判断をした場合である。＜難易＞の場合には、「この水を飲んでみたら、水を飲むという過程で困難を感じなかった (においが全くない、のどごしがすっきりしている)」したがって、「この水は飲みやすい」という判断にいたるといった場合が考えられる。「彼が泳ぐという事態が実現した」、「この水を飲むという事態が実現した」、「この水を飲む過程で困難を感じなかった」という 1 つの具体的な事態をそのまま述べる場合には、例えば、(26)、(27)のような表現になり、ここでは実現性 (事態が現実世界に出現・存在する見込み) は述べられていない。

(26) a. 彼が泳いだ。

b. この水を飲んだ。

(27) (私は) この水を飲むのに困難を感じなかった。

(26)や(27)で表されるような具体的な事態を基に、「彼がいつそれを行おうとも「彼が泳ぐ」という事態が実現する」、「誰が飲もうとも「この水を飲むのに困難を感じない」という事態が実現する」と話し手が見込んだ場合に、(24)や(25)のような可能・難易表現が用いられる。可能・難易表現は、具体的な事態を基にしながらも、話し手による見込みの判断を含んでいるので、単純に事態を述べる表現よりも高次の認識が関わっている表現であると言える。本論文で可能・難易表現と呼ぶ一群は、基になる事態の存在が言語的に明示されており、かつ見込みの表現であることが形式によって保証されているという点で、第 1 章で実現性表現とみなしうるとしながらも本論文の考察対象からは外した(28)～(30)とは異なる。

(28) この水は飲用水だ。

(29) この本は簡単だ。

(30) (人間は飛べないが、) 鳥は飛ぶ。

(28)や(29)も「事物の性質・属性」という話し手に見出されたものを表している点では、一種の見込みの表現と言えるが、どのような事態が関わっているかは言語的に示されていない。例えば、(29)において最も優先的な解釈は「この本を読む」という事態が「簡単」であるということであるが、関わる事態が言語的に明示されていないので、文脈によっては、「この本を運ぶ」、「この本を買う」などの事態の実現性を述べている文としても解釈できる。(30)は非過去形という形をとっていることではじめて実現性を表す表現として解釈される文であり、本来的には事態を表す表現である。形式そのものによって見込みの表現であることが保証されている可能・難易表現とは異なったレベルでその「見込み」が表されている。可能表現も難易表現も何らかの具体的な事

態を基にしながらかその実現の見込みの判断を述べる表現である。このような、事態から実現性を見出す過程を、本論文では「実現性を見出す認知過程」と呼ぶ。〈可能〉を見出す認知過程の基になる事態を抽象化すると、「行為主体が行為を行い、事態が実現する」という事態になると考えられる。本論文ではこの事態を、「〈可能〉の基盤事態」と呼ぶ。一方、〈難易〉を見出す認知過程の基になる事態を抽象化すると、「行為主体が行為を行う過程で容易さ・困難さを感じる」という事態になる。このような事態を、「〈難易〉の基盤事態」と呼ぶことにする。なお、可能・難易表現に事態から実現性を見出す認知過程が関わっているということは、実際の言語使用の場面で現実世界に具体的な事態が必ず存在する、ということの意味しない。我々は、「彼が泳いだ」、「この水を飲んだ」という事態を観察していなくとも、例えば、「彼はライフセーバーの経験があると以前に言っていた」、「この水が入ったボトルに「飲用」と書いてある」といった情報を基にして、「彼は泳げる」、「この水は飲める」という可能表現を発話することができるし、全く根拠がなくても「全くの勘だが、彼はきっと泳げる」などと発話することさえできる。「事態から実現性を見出す認知過程という観点から可能・難易表現を分析する」という本論文のアプローチが前提としているのは、〈可能〉・〈難易〉という意味概念が原理的に事態から見出されるものである以上、可能・難易形式（による可能・難易表現）にはそのような認知過程が形式の意味として反映されている、という考え方である。したがって、事態そのものは現実世界には存在しなくても、話し手の頭の中でシミュレーション（“simulation” Langacker 2008）されるものでよいし、我々が可能・難易表現を実際に用いる場合の多くはそのような場合であろう。このように人間の経験を基盤とし、言語の形態・構造に人間の認知過程のあり方が反映されているという考え方は、Lakoff (1987)、Langacker (1987, 1991)をはじめとする認知意味論の基本的な言語観に従うものであり、本論文はこの点で認知論的な研究であると位置づけられる。さらに、必要に応じて、話し手がある事態を実際に経験しているか否か、あるいはある事態が話し手にとって身近であるかどうか、などの言語外の知識や事実が文の容認度に影響を与えるという現象も積極的に分析に取り入れていく。このような言語外的情報も説明概念として取り入れていくという点で、本論文は語用論的な研究としての側面も持つ。

最後に、本論文のアプローチと従来の認知論的な研究との関係について述べる。本論文のアプローチは、換言すると、現実世界に出現・存在する個別具体的な「事態」と、そこから抽象化されて得られる「実現性」との関係性を明らかにする、ということである。非「事態」の意味を事態との関係性に注目して分析する研究は、特に認知意味

論的アプローチによる属性・性質を表す語・構文の研究で盛んである。属性・性質を表す表現を、事態、および事態から属性・性質を見出す認知過程との関係で記述するアプローチをとっている代表的な研究として、「かたい」や「重い」などの特定の形容詞の多義ネットワークを記述する研究（仲本 1998, 2000, 2006）、英語の Tough 構文や中間構文などの特定の構文の意味特徴を記述する研究（篠原 1993、坂本 2002, 2004、本多 2005）、形容詞という語群を分類、階層化し整理する研究（篠原 2002、南 2006）があり、これらの研究によって事態（の認知）との関係で属性・性質を表す語・構文を記述することの有効性が示されてきた。このような観点に基づく分析は、上記のように特定の形容詞や特定の構文に関する研究では進んでいるが、＜可能＞や＜難易＞といった意味概念と事態（認知）の関係に関する記述は進んでいない。これは、特定の語や構文を取り上げる場合、それぞれの語・構文の意味の指定が強く、＜可能＞や＜難易＞といった意味概念レベルへの一般化が難しいためであると考えられる。例えば、坂本（2002, 2004）、本多（2005）では、(31)のような中間構文は、人間と環境の相互作用的活動に動機づけられた「行為の可能性」を表す構文であるとされる。行為の可能性という一種の実現性を表す概念を表すこと、(31)の中間構文は(32)のように can を用いたパラフレーズ文と非常に近い意味を表すことから、中間構文は＜可能＞や＜難易＞といった意味概念と事態との関係を考える上で非常に示唆的な構文である。

(31) This book sells easily.

(32) This book can be sold easily.

しかし、中間構文は主語や動詞の選択に強い制約があることがよく知られており、記述可能な事態が極めて制限されている。動詞の制限の一例を見ると、(33)に示されるように、「buy」という、現実世界に存在する事態としては「sell」と同じものを指す動詞に替えた場合には中間構文は成立せず、また「hit」のような活動動詞 (activity verb) は基本的にこの構文に現れることができない。さらに、主語についても制限が強く、(34)に示されるように、人や場所を表す名詞は中間構文の主語に立ちにくいことが指摘されている。

(33) a. *This book buys easily.

b. ?This ball hits easily.

(34) a. ?This boss handles easily.

b. ?This room works (in) easily.

(坂本 2002:169-170)

上記のような、記述可能な事態が制限されてしまうという事情は、単純形容詞述語文を扱った研究にもあてはまる。仲本 (1998)では、「かたい」、「重い」などは、行為に対する抵抗力を表していると述べている。例えば「この卵はかたい」というのは「割ってみるとそれに対する抵抗力がある」ということを表し、「このたまごは重い」は「持ってみるとそれに対する抵抗力がある」ということを表している。このように「かたい」、「重い」などの形容詞が表す概念を記述する際にも事態との関係を視野に入れることが重要であることが指摘されており、このような見方に基づけばこれらの形容詞も行為の実現性を表していると言える。しかし、「かたい」、「重い」などの内容語 (content word) の場合、実現性を表すという以外の意味の指定が強いため、(35)に示されるように喚起される行為の種類は語彙的意味から制限される。

(35) a. このたまごは[割ってみると/*運んでみると]かたかった。

b. このたまごは[*割ってみると/運んでみると]重かった。

中間構文や (単純) 形容詞述語文はともに実現性に関わる表現であるという点で本論文の観点からも注目されるが、実現性がどのように概念化されているのかということ を明らかにする上では、事態のタイプが非常に制限されてしまっている点に難点がある。一方、可能・難易形式は意味の希薄化が進んだ文法的な要素であることから、様々な種類の主語をとることができ((36)、(37))、共起する動詞の制限も小さい((38)、(39))。

(36) a. この水は飲める。 (対象)

b. このペンはよく書ける。 (道具)

c. この公園はバーベキューができる。 (場所)

d. 週末は買い物に行ける。 (時間)

(37) a. この水は飲みやすい。 (対象)

b. このペンは書きやすい。 (道具)

c. この公園はバーベキューがしやすい。 (場所)

d. 週末は買い物に行きやすい。 (時間)

(38) このたまごは (容易に) [割れる/運べる]。

(39) このたまごは[割りやすい/運びやすい]。

このように可能・難易表現は、事態のタイプを基本的に選ばず、広くものごとの実現性を表すという特徴を持つことから、<可能>・<難易>という意味概念と事態の関係を広く記述することができ、それによって人間言語における実現性の概念化のあり方を記述する上で非常に有効な表現である。本論文は、実現性あるいは属性・性質を表す言語表現を事態との関係から捉えようとするアプローチが個別の語・構文のため

の記述にとどまっていた現状から一歩抜け出し、〈可能〉や〈難易〉という意味概念に対する記述に発展させうる研究として位置づけられる。

第3章 可能表現と難易表現の対照

第3章では可能表現と難易表現の言語的ふるまいの違いを観察することで、〈可能〉と〈難易〉がどのような点で共通し、どのような点で異なるのかということ明らかにする。この第3章は第1章で示した課題Ⅱ、〈可能〉と〈難易〉という意味概念はどのように異なるのか、という課題に応えるものである。3.3節と3.4節がその具体的な分析であるが、可能表現と難易表現の具体的な対照に入る前に3.1節で可能表現の意味分類、3.2節で難易表現の意味分類をそれぞれ整理し、日本語と中国語の違いを示す上で有効な可能・難易表現の意味分類を示す。3.1節、3.2節の意味分類、3.3節、3.4節の分析を踏まえ、3.5節で本章の議論をまとめる。

3.1. 可能表現の意味分類

第1章で指摘したように、日本語の可能表現は話し手の認識的判断や許可の意味を表さないが、中国語の可能表現はそれらの意味までを表すので、日中の可能表現の意味分類をする上ではモダリティ研究における〈可能〉の意味分類が参考になる。まず日本語と中国語の可能表現の意味を対照する上で有効な分類を行うためのベースとして、モダリティ研究の中で広く採用されている Palmer (2001)のモダリティ分類および、Bybee et al. (1994)、van der Auwera & Plungian (1998)の知見を参照しながら可能形式が表す意味を見る。Palmer (2001)はモダリティを大きく動的モダリティ (dynamic modality)、束縛的モダリティ (deontic modality)、認識的モダリティ (epistemic modality)、証拠性モダリティ (evidential modality) の4つに分類している。可能形式に関わるのは証拠性モダリティを除いた前の3つである。中国語の“能”を例に挙げてこれらのモダリティについて説明する。(1)~(4)はすべて“能”という同じ可能形式が用いられているが、(1)、(2)は主体の能力や状況的な可能性、(3)は「たばこを吸う」ことに対する許可・禁止、(4)は「このことを彼が知らない」という事柄に対する話し手の否定的な認識的判断をそれぞれ表している。

(1) 我们 今天 能 做 的 事, 有 许多 是 过去 做不到 的。

私達 今日 NENG する の こと ある 多い COP 過去 する-NEG達する のもの

「今日私たちができることの中には、過去にはできなかったものが多くある。」

(2) 因为 缺 教员, 暂时 还 不 能 开课。

～なので 足りない 教员 しばらく まだ NEG NENG 開講する

「教員が足りないので、まだしばらくは開講できない。」

(3) 这儿 能 不 能 抽烟? — 那儿 可以 抽烟, 这儿 不 能。

ここ NENG NEG NENG 喫煙する あそこ KEYI 喫煙する ここ NEG NENG

「ここでたばこを吸ってもいいですか。—あそこはいいですが、ここはダメです。」

(4) 这 件 事 他 能 不 知道 吗?

これ CL こと 彼 NENG NEG 知っている SFP (疑問)

「このことを彼が知らないはずがないだろう。」

(吕叔湘 1999:414-415)

(1)、(2)が「動的モダリティ」にあたるもので、事態参与者(およびその事態内の状況)と意味的結びつきが強いモダリティである。Palmer (2001:8)は動的モダリティは「条件となる要因が事態の参与者の内部にある」としているが、実際には(5)(および(1))のような主体の内的な要因=能力によって事態が実現することを表す場合だけでなく、(6)(および(2))のような外部の状況によって事態が実現することを表す場合までを動的モダリティに含めている。

(5) He can run a mile in five minutes. (Dynamic: he has the ability)

(6) He can escape. (Dynamic: the door's not locked)

(Palmer 2001:10)

これについては Bybee et al. (1994)の分類がより明確で、Palmer (2001)の動的モダリティにあたるものを「動作主中心モダリティ」(agent-oriented modality)と呼び、動作主の内的条件によって事態が実現する(しない)ことを表すものを ability、動作主の内的条件以外の外的条件によって事態が実現する(しない)ことを表すものを root possibility と呼んでいる。この区別は日本語学の中で伝統的に用いられている「能力可能」と「状況可能」の違いにほぼ一致するので、本論文では Bybee et al. (1994)が ability と呼ぶものを「能力可能」、root possibility と呼ぶものを「状況可能」と呼び、ともに動的モダリティの一種と見る。

動的モダリティと対照的な意味が(4)の話し手の命題(事柄)の事実性についての認識的な判断を表すモダリティであり、Palmer (2001)はこれを「認識的モダリティ」と呼んでいる。Palmer (2001)のほか Bybee et al. (1994)や van der Auwera & Plungian (1998)など、Palmer (2001)とは細部で異なったモダリティ分類を提案している研究に

においても、この認知的モダリティについては共通している。本論文では認知的モダリティを表す場合の可能形式の意味を「認識可能」と呼ぶことにする。

扱いに関して研究者の間で揺れがあるのが(3)の許可を表す用法である。Palmer (2001)の分類に基づくと、(3)の許可は、「条件となる要因が事態の参与者の外にある」とする「束縛的モダリティ」の一種になる。Palmer (2001)は束縛的モダリティを動的モダリティ、認知的モダリティと並列する存在と見ており、さらに束縛的モダリティと動的モダリティをあわせて、事態の成立に関わる話し手の心的態度を表すモダリティである「事態モダリティ」(event modality)と呼んでいる。一方、Bybee et al. (1994)は許可の用法を「話し手中心モダリティ」(speaker-oriented modality)としている。Bybee et al. (1994)は、話し手中心モダリティを、動作主に関わる条件の存在について述べる動的モダリティ(動作主中心モダリティ)とは違い、話し手が聞き手に条件を課すモダリティであるとしており、「話し手」に関わるモダリティとしてむしろ認知的モダリティに近いものとして捉えている。van der Auwera & Plungian (1998)は束縛的モダリティである許可の用法を状況可能(van der Auwera & Plungian (1998)の用語で言うと、「参与者外的モダリティ」(participant-external modality))の一種と見ており、ものごとを可能にする「状況」が、話し手および社会的・倫理的規範として解釈された特殊なケースと位置付けている。Palmer (2001)も束縛的モダリティを「条件となる要因が事態参与者の外にある」ものとしておりながら、動的モダリティの一部に先の(6)のような能力以外の外的条件による可能を認めていることから、「条件が参与者内か外か」という点では動的モダリティの一部が束縛的モダリティと重なる部分があることを認めていると考えられる。本論文では、(3)のような束縛的モダリティに位置づけられる可能形式の意味を「許可可能」と呼ぶことにするが、基本的には状況可能の特殊なケースとして見ることができ、Bybee et al. (1994)や van der Auwera & Plungian (1998)が述べるように話し手(あるいは社会的・倫理的規範)が関与するモダリティとして位置づける。

本論文における分類と先行研究における分類の関係をまとめた【表 2】と、先行研究の知見を参考に、それぞれの意味の定義をまとめたものを以下に示す。なお、本論文の定義にある「行為主体」とは「意図的に働きかけを行う事態参与者」のことであり、Bybee et al. (1994)が「動作主」(agent)と呼ぶものにほぼ相当するが、意味役割としての「動作主」と一部でずれが生じるため、それと区別するために本論文では「行為主体」という用語を用いる。「行為主体」、「働きかけ」などの詳細については、3.3節で詳しく述べる。

【表 2 本論文における可能形式の意味の分類と先行研究の分類の関係】

本論文で用いる分類と用語	動的モダリティ		束縛的モダリティ	認識的モダリティ
	能力可能 ((1))	状況可能 ((2))	許可可能 ((3))	認識可能 ((4))
Palmer (2001)	dynamic modality		deontic modality	epistemic modality
Bybee et al. (1994)	agent-oriented modality		speaker-oriented modality	epistemic modality
	ability	root possibility		
van der Auwera & Plungian (1998)	participant- internal modality	participant-external modality		epistemic modality
		non-deontic modality	deontic modality	

【可能形式が表す意味】

能力可能：行為主体の内在的性質(=能力)という要因によって事態が実現する(しない)ことを表す。

状況可能：行為主体以外の外部の事物や状況に関わる要因によって事態が実現する(しない)ことを表す。

許可可能：話し手および話し手の認識を通じた社会的・倫理的規範という行為主体以外の外部の要因によって事態が実現する(しない)ことを表し、それによって聞き手や他者に対する許可を表す。

認識可能：命題(事柄)内の事態が実現する(しない)ことに対する話し手の認識的判断を表す。

モダリティ研究における分類をベースにすると、以上のような4分類になるが、日本語と中国語の可能形式の意味範囲の違いを捉えるには、「状況可能」をより細かく分類し、またモダリティ研究の中では一般的には扱われないが、日本語の可能研究ではしばしば取り上げられる「実現可能」という意味を分類の1つとして立てる必要があると考える。これについては、次節以降でそれぞれの意味と各可能形式との関係を論

じる中で修正を行い、3.1.6 節で本論文における最終的なく可能>の意味分類を提示する。

3.1.1. 能力可能

「能力可能」とは、行為主体の内在的性質（＝能力）という要因によって事態が実現する（しない）ことを表す意味である。(7)の文は「彼は3つの外国語を話す能力がある」、「彼は油絵を描く能力がある」とパラフレーズできる。(7)～(11)の例が示すように、能力可能は日本語と中国語のどの可能形式でも表すことができる。このことから、日中の可能形式が表す意味の中で能力可能が最も基本的な意味であると言えることができる。

(7) a. 彼は3つの外国語が話せる。

b. 彼は油絵が描ける。

(8) a. 彼は3つの外国語を話すことができる。

b. 彼は油絵を描くことができる。

(9) a. 他 能 说 3 种 外语。

彼 NENG 話す 3 CL 外国語

「彼は3つの外国語を話すことができる。」

b. 他 能 画 油画。

彼 NENG 描く 油絵

「彼は油絵が描ける。」

(10) a. 他 会 说 3 种 外语。

彼 HUI 話す 3 CL 外国語

「彼は3つの外国語を話すことができる。」

b. 他 会 画 油画。

彼 HUI 描く 油絵

「彼は油絵が描ける。」

(11) a. 他 可以 说 3 种 外语。¹

¹ ここで示している(11)の文は主語の能力を表していると解釈することができるが、“可以”は基本的に条件的状況可能(3.1.2.1 節)の読みが強く出るため、“能”と“会”に比べ、全般的に能力可能の読みが出にくいようである。各形式の基本的用法の違いやニュアンスの違いについては、第4章4.2節で議論することにし、この3.1節ではそれぞれの形式が当該の意味を表せるか否かという点に絞って議論を進める。

彼 KEYI 話す 3 CL 外国語

「彼は3つの外国語を話すことができる。」

b. 他 可以 画 油画。

彼 KEYI 描く 油絵

「彼は油絵が描ける。」

なお、“可以”については、許可可能の否定、すなわち禁止を表す場合以外は否定形式そのものが使われないということをここで確認しておく（吕叔湘 1980, 1999、刘月华等 1983, 2001）。これは(12)のような能力可能の否定だけではなく、次の3.1.2節で見る(13)のような状況可能（条件的状況可能、受動的状況可能）についても同様である。

(12) a. 他 不 [能/会/??可以] 游泳。

彼 NEG NENG/HUI/KEYI 泳ぐ

「彼は泳げない。」

b. 他 不 [能/会/??可以] 画 油画。

彼 NEG NENG/HUI/KEYI 描く 油絵

「彼は油絵が描けない。」

(13) a. 我 明天 有 事, 不 [能/??可以] 来 了。

私 明日 有る 用事 NEG NENG/KEYI 来る SFP (変化)²

「私は明日用事があって行けない。」

b. 大白菜 可以 生 吃, 小白菜 不 [能/??可以] 生 吃。

白菜 KEYI 生で 食べる チンゲン菜 NEG NENG/KEYI 生で 食べる

「白菜は生で食べられるが、チンゲン菜は生で食べられない。」

(吕叔湘 1999:337)

3.1.2. 状況可能

「状況可能」とは、行為主体以外の外部の事物や状況に関わる要因によって事態が実現する（しない）ことを表す意味である。この「行為主体以外の外部の事物や状況

² 中国語の“了”には、一般的に“了₁”と呼ばれる、完了アスペクトを表すアスペクト助詞と、“了₂”と呼ばれる、発話時において何らかの「変化」が認められることを表す文末助詞 (sentence-final particle) がある。グロスでは、「PERF」と表記される“了₁”と区別し、“了₂”は「SFP (変化)」と表記する。

に関わる要因」の内実を考えた場合、質の異なる 3 つの要因があり、状況可能をさらに下位分類することができる。本論文では、状況可能の下位分類として、「条件的状況可能」、「受動的状況可能」、「自発的状況可能」の 3 つを設定する。

3.1.2.1. 条件的状況可能

状況可能の下位分類の 1 つ目は、「行為主体以外の外部の事物や状況に関わる要因」が「何らかの一時的な条件」に相当する場合であり、特定の時空間における一時的な条件によって事態が実現する（しない）ことを表す。奥田靖雄（1986）の「能力可能/条件可能」の 2 分類、久野（1983）の「内的能力/外的条件に由来する能力」の 2 分類における「条件可能」、「外的条件に由来する能力」にほぼ相当する意味である。また、本論文の用語法とは異なり、日本語の可能表現を議論する際に「状況可能」という用語が用いられた場合には、この条件的状況可能を指している場合が多い（渋谷 1993, 1995, 2006、尾上 1998）。井島（1991）、渋谷（1993, 2006）はこの「条件」について、それが主体内部の身体的・心理的条件なのか、それとも外部条件なのかなどに基づいて細かく分類しているが、日本語・中国語の可能形式の意味分布を見る限り、条件の内蔵性・外在性が形式の違いに反映しないので、本論文では「怪我が治って足の状態がいい（から歩ける）」といった主体の内的な条件であるか、「気温が高い（から泳げる）」のような外的な条件であるかの違いは問わない。各形式がこの条件的状況可能を表せるか否かを見るための例文が以下の(14)～(18)である。

(14) a. 彼は足が良くなって、歩けるようになった。

b. 暑くなってきたので、泳げる。

(15) a. 彼は足が良くなって、歩くことができるようになった。

b. 暑くなってきたので、泳ぐことができる。

(16) a. 他 腿 伤 治好 了， 能 走路 了。

彼 足 傷 治る・良い PERF NENG 歩く SFP (変化)

「彼は足が良くなって、歩けるようになった。」 (相原 1997:34)

b. 天气 热 了， 能 游泳 了。

天気 暑い PERF NENG 泳ぐ SFP (変化)

「暑くなってきたので、泳げる。」

(17) a. *他 腿 伤 治好 了， 会 走路 了。

彼 足 傷 治る・良い PERF HUI 歩く SFP (変化)

「彼は足が良くなって、歩けるようになった。」

b. *天气 热 了, 会 游泳 了。

天气 暑い PERF HUI 泳ぐ SFP (変化)

「暑くなってきたので、泳げる。」

(18) a. 他 腿 伤 治好 了, 可以 走路 了。

彼 足 傷 治る・良い PERF KEYI 歩く SFP (変化)

「彼は足が良くなって、歩けるようになった。」

b. 天气 热 了, 可以 游泳 了。

天气 暑い PERF KEYI 泳ぐ SFP (変化)

「暑くなってきたので、泳げる。」 (刘月华等 2001:181)

(17)の例文、および多くの先行研究で指摘されてきたように、“会”は条件的状況可能を表すことができない(吕叔湘 1980, 1999、黄麗華 1995、讚井 1996、渡边 2000、郑天刚 2002、鲁晓琨 2004、侯瑞芬 2009 など)。その他の可能形式はすべて条件的状況可能を表すことができる。

3.1.2.2. 受動的状況可能

2つ目の状況可能は、「行為主体以外の外部の事物や状況に関わる要因」が「行為主体以外の事物の内在的性質」に相当する場合であり、行為主体以外の事物の内在的な性質によって事態が実現する(しない)ことを表す。行為主体以外の事物とは、例えば「セロリの葉を食べる」、「この筆で絵を描く」における「セロリの葉」や「この筆」など、行為の対象や道具などを指す。吕叔湘(1980, 1999)の“表示有某种用途”(ある種の用途があることを表す)、寺村(1982)の「受動的可能」、張麟声(2001)の「属性可能」、吕雷寧(2006)の「属性的可能表現」がこれに相当する。これは主語の内的属性を表しているという点では能力可能と共通するが、主語が行為主体ではなく、構文的に元の文の主語以外の成分が主語に現れているという点で能力可能とは異なる。先の条件的状況可能が可能になる要因が一時的な条件か否かという意味的な観点によって規定されていたのに対して、この受動的状況可能は、主語に立つ名詞句の性質が何かという構文的な観点によって規定される。この構文的な特徴に注目して寺村(1982)は「受動的可能」と名付けており、本論文の用語法もこれに倣ったものである。(19)~(23)が示すように、この受動的状況可能についても中国語の“会”のみが成立せず、それ以外の形式は全てこの意味を表せる。

- (19) a. セロリは葉も食べられる。
 b. この筆は絵を描けますか。
- (20) a. セロリは葉も食べることができる。
 b. この筆は絵を描くことができますか。
- (21) a. 芹菜 叶子 也 能 吃。
 セロリ 葉 も NENG 食べる
 「セロリは葉も食べられる。」 (呂叔湘 1999:414)
- b. 这 支 毛笔 能 画 画儿 吗？。
 これ CL 筆 NENG 描く 絵 SFP (疑問)
 「この筆は絵を描けますか。」 (呂叔湘 1999:414)
- (22) a. *芹菜 叶子 也 会 吃。
 セロリ 葉 も HUI 食べる
 「セロリは葉も食べられる。」
- b. *这 支 毛笔 会 画 画儿 吗？。
 これ CL 筆 HUI 描く 絵 SFP (疑問)
 「この筆は絵を描けますか。」
- (23) a. 芹菜 叶子 也 可以 吃。
 セロリ 葉 も KEYI 食べる
 「セロリは葉も食べられる。」
- b. 这 支 毛笔 可以 画 画儿 吗？。
 これ CL 筆 KEYI 描く 絵 SFP (疑問)
 「この筆は絵を描けますか。」

3.1.2.3. 自発的状況可能

最後の状況可能は、「行為主体以外の外部の事物や状況に関わる要因」が「自発的な変化の主体の性質」に相当する場合で、自発的な変化の主体の性質によって事態が実現する（しない）ことを表す。本論文ではこれを「自発的状況可能」と呼ぶ。例えば、「竹」や「水」の性質によって「咲く」、「0度で凍る」という事態が実現することを表す場合がこれにあたる。この用法は主語の内在的属性を表している点では能力可能、受動的状況可能と共通し、また、主語に立つ主体が行為主体ではないという点では受動的状況可能と共通するが、現れる動詞が主体の変化を表す無意志動詞であり、行為

主体が全く関わらない事態の実現性を表しているという点で能力可能、受動的状況可能と区別される。(24)、(25)が示すように、日本語の可能形式は基本的にこの意味を表せない。

- (24) a. *竹は花が咲ける。
b. *水は0度になると凍れる。
- (25) a. ??竹は花が咲くことができる。
b. ??水は0度になると凍ることができる。

(26)~(28)の中国語の例を見ると、“会”は問題なく表せるが、“能”、“可以”は通常の解釈ではこの自発的状況可能を表すことは難しいことがわかる。

- (26) a. ?竹子 能 开花。

竹 NENG 开花する

「竹は花が咲く。」

- b. ?水 到 0度 能 结冰。

水 達する 0度 NENG 凍る

「水は0度になると凍る。」

- (27) a. 竹子 会 开花。

竹 HUI 开花する

「竹は花が咲く。」

(Endo 2005:33)

- b. 水 到 0度 会 结冰。

水 達する 0度 HUI 凍る

「水は0度になると凍る。」

- (28) a. ??竹子 可以 开花。

竹 KEYI 开花する

「竹は花が咲く。」

- b. ??水 到 0度 可以 结冰。

水 達する 0度 KEYI 凍る

「水は0度になると凍る。」

ただし、(29)と(30)が示すように、「ことができる」と“能”については一定の条件下では自発的状況可能を表すことができる。どのような場合に「ことができる」や“能”が自発的状況可能を表せるのかということについては第4章で詳しく議論する。

- (29) a. 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が20度を少し下回ってようやく咲くことができる。

- b. …自然が豊かで空気が澄み切っているからこそ、星が美しく輝くことができるという訳です。

(呂雷寧 2008:280, 283)

- (30) a. 水 到 100 度 才 能 开。

水 達する 100 度 やっと NENG 沸く

「水は 100 度でやっと沸騰する。」

- b. 在 一定 温度 条件下, 才 能 下 雪。

~で 一定の 温度 条件下 やっと NENG 降る 雪

「一定の気温条件下になってはじめて雪は降る。」

3.1.3. 許可可能

つづいて、許可可能の用法を見る。許可可能は、(31)のように、話し手および話し手の認識を通した社会的・倫理的規範という行為主体以外の外部の要因によって事態が実現する（しない）ことを表し、それによって聞き手や他者に対する許可を表すものである。

- (31) a. 我 能 进来 吗？

私 NENG 入る-来る SFP (疑問)

「入ってもいいですか。」

- b. 休息室里 能 吸烟 (, 教室里 不 能 吸烟。)

休憩室の中 NENG 喫煙する 教室の中 NEG NENG 喫煙する

「休憩室ではたばこを吸っていい(が、教室では吸ってはいけない)。」

3.1 節で、この許可可能は、状況可能の特殊な場合であると述べたが、このことを(31)の例で説明する。「私が(今このとき、この場という状況で)入れるか否か」ということ自体は「条件的状況可能」を表していると言え、また「休憩室という事物の性質としてたばこが吸えるか否か」ということ自体は「受動的状況可能」を表していると言える。しかし、(31)の例は同時に、個人の権限、あるいは社会的・倫理的なルールと照らし合わせてそのことができるかどうかを述べている文としても解釈でき、そのような場合、許可可能を表しているということになる。(31)および、以下の(32)、(33)が示すように、中国語では条件的状況可能、受動的状況可能を表すことができる“能”と“可以”はこの許可可能を表すことができ、条件的状況可能、受動的状況可能の意

味を表せない“会”は許可可能も表すことができない³。許可可能は「状況可能の特殊な場合」であると先に述べたが、本論文の分類に基づくと「条件的状況可能および受動的状況可能の特殊な場合」と言う方がより適切である。

(32) a. *我 会 进来 吗？

私 HUI 入る-来る SFP (疑問)

「入ってもいいですか。」

b. *休息室里 会 吸烟。

休憩室の中 HUI 喫煙する

「休憩室ではたばこを吸ってもいい。」

(33) a. 我 可以 进来 吗？

私 KEYI 入る-来る SFP (疑問)

「入ってもいいですか。」

b. 休息室里 可以 吸烟。

休憩室の中 KEYI 喫煙する

「休憩室ではたばこを吸ってもいい。」

中国語では、ある形式が条件的状況可能および受動的状況可能が表示するか否かということと、許可可能が表示するか否かということが一致するが、日本語ではずれが生じる。日本語の可能形式が許可可能を表示するか否かについては本論文と先行研究の立場が異なる。玉地 (2005)、渋谷 (2005) は日本語の可能形式は「許可」、「依頼」、「禁止」などの許可可能の意味を表すと見ている。その例として渋谷 (2005) は(34)の例を挙げている。

³ 彭利貞 (2007)、侯瑞芬 (2009)は“会”も束縛的モダリティを表すことができると見ており、以下のような聞き手に対する「承諾」や「保証」を表す例がそれにあたるとしている。(i)は、「彼女によくする」という聞き手が希望する事態を話し手が実現することを「承諾」しており、(ii)は「私たちが試験で一位になる」という事態が実現することを話し手が「保証」している、と分析している。

(i) 你放心吧，我会对她好的。(安心してくれ、僕は彼女を大事にするから。)

(侯瑞芬 2009:289)

(ii) 你等着看吧，我们会考第一名的。(見ていてくれよ、私達は試験で一位になってみせるから。)

(彭利貞 2007:142)

しかし、いずれの例も“会”は認識可能を表しており、文脈から「承諾」や「保証」という解釈が生まれているという分析も可能であり、束縛的モダリティの一種として「承諾」や「保証」といった意味を立てる必要があるのかについては疑問が残る。本論文では“会”のこのような用法は認識可能を扱っている例として見ることにし、“会”は束縛的モダリティを表さないという立場をとる。

- (34) a. どなたでもお入りになれます。 (許可、肯定文)
 b. 悪いけど、私のかわりにあした会議出られない? (依頼、疑問文)
 c. 食べられません。 (禁止、乾燥剤の注意書きなど、否定文)
 (渋谷 2005:42)

確かに(34)の例を見ると、日本語の可能形式が許可可能の意味を表しているように見えるが、一方で(35)のように、(36)の中国語と同じような許可可能の意味を可能形式で表せない場合がある⁴。

- (35) a. # (私は) ちょっと喋れますか? (許可)
 b. #教えられませんか? (依頼)
 c. *動けないで。/*動けるな。 (禁止)
- (36) a. 现在 我 能 说 两 句 吗? (許可)
 今 私 NENG 話す いくつか CL SFP (疑問)
 「今ちょっと喋ってもいいですか。」
- b. 能 不 能 告 诉 我? (依頼)
 NENG NEG NENG 伝える 私
 「教えてもらえませんか。」
- c. 你 决 不 能 动。 (禁止)
 あなた 決して NEG NENG 動く
 「動いてはいけない/動くな。」

(34)と(35)の違いは何であろうか。それは、(34)は条件的状況可能あるいは受動的状況可能としての解釈も自然な文脈であるのに対して、(35)はそのいずれの解釈もしにくいという点にある。(34a)は、部屋や建物の性質としての受動的状況可能、あるいはその時点における条件的状況可能、(34b)は聞き手の都合や状況などの条件的状況可能、(34c)は乾燥剤の性質としての受動的状況可能を表していると自然に解釈できる。一方、(35a)、(35b)では「喋る」、「教える(伝える)」という行為はその遂行を阻害する外的要因が想定しにくいいため、それを条件的状況可能として尋ねると解釈がしにくい。(35c)も命令文であることから状況可能の解釈ができなくなっている。つまり(35)は許可可能の意味としてしか自然に解釈できない例であり、その場合に日本語の可能形式

⁴ (36)の日本語にある「てもらえますか」、「てはいけない」はその複合形式の中に可能形式が現れているが、ここで問題にしているのは、可能形式そのものが許可可能の意味を持っているか否か(つまり、可能形式単独で許可可能の意味が表せるか否か)であり、それができないことを(35)の例文が示している。

が使用できないという事実は、日本語の可能形式が基本的に許可可能の意味を持たないことを示していると考えられる。金子 (1980)も日本語の可能形式が「許可」などの意味を表す、という記述に疑問を呈しており、「文法的意味」と「文脈的意味」を区別する必要があることを主張している。最終的には、この「許可」等の語用論的意味がどれだけ可能形式の意味として慣習化していると認めるか、という問題であると思われるが、少なくとも日本語の可能形式が中国語の“能”や“可以”ほど許可可能の意味が文法的意味として慣習化していないことは確かである。本論文では日本語と中国語の差異を捉えることを重視し、(34)が表しているのはあくまで状況可能（条件的状況可能および受動的状況可能）であり、(34)で読み取れる「許可」、「依頼」、「禁止」の意味は語用論的に導出される意味であるとする⁵。

3.1.4. 認識可能

続いて、「認識可能」の用法を見る。認識可能とは、命題（事柄）内の事態が実現する（しない）ことに対する話し手の認識的判断を表すものである。この認識可能については、日本語の可能形式は認識可能を表さない（十分に発達させていない）ということがよく知られている（玉地 2005、渋谷 2005）。実際、(37)、(38)に示されるように、日本語では「彼は家にいるだろう」、「明日雨が降るだろう」のような話し手の認識的判断を表すような意味で可能表現は成立しない。

(37) a. #彼は家にいられる。

b. *明日雨が降れる。

(38) a. #彼は家にいることができる。

b. *明日雨が降ることができる。

中国語については、“会”は問題なくこの認識可能を表せるが((40))、“能”、“可以”は基本的には認識可能を表せない((39)、(41))。

(39) a. #他 能 在 家。

彼 NENG いる 家

「彼は家にいるだろう。」

⁵ 例文(34)に対する解釈は本論文の見方と異なるものの、渋谷 (2005:42)も「日本語の可能形式は、英語の can などとは異なって禁止を表す場合が多く、それに比べて許可や依頼を表すことはそれほど多くない。」と述べ、許可可能の意味が十分に発達していないことを指摘している。なお、渋谷 (1993)ではこの「許可」や「禁止」の意味を語用論的意味であるとし、他の能力可能などの意味とは明確に区別して議論している。

b.??明天 能 下 雨。

明日 NENG 降る 雨

「明日雨が降るだろう。」

(40) a. 他 会 在 家。

彼 HUI いる 家

「彼は家にいるだろう。」

b. 明天 会 下 雨。

明日 HUI 降る 雨

「明日雨が降るだろう。」

(41) a. #他 可以 在 家。

彼 KEYI いる 家

「彼は家にいるだろう。」

b. *明天 可以 下 雨。

明日 KEYI 降る 雨

「明日雨が降るだろう。」

“可以”が認識可能を表せないということは多くの先行研究が指摘することであるが（吕叔湘 1980, 1999、刘月华等 1983, 2001、相原 1997、Li, Renzhi 2004）⁶、“能”については先行研究によって見解が分かれている。大きくは、“能”は認識可能を表さないという立場（Tsang, Chuilim 1981）と、一定の文環境においては“能”も認識可能を表せると見る立場がある。この「一定の文環境」についても、疑問文（反語文）や否定文についてのみ言及している研究（Guo, Jiansheng 1995、彭利贞 2007、侯瑞芬 2009）と、それ以外の肯定平叙文でも認識可能を表すことを認める立場がある（黄麗華 1995、宮本 1997、Li, Renzhi 2004、鲁晓琨 2004、陆庆和 2006）。詳しくは第4章 4.2 節で議論するが、本論文では“能”が認識可能を表しにくいという事実は認

⁶ 侯瑞芬 (2009)は以下の(i)、(ii)のような、話し手の判断にかかわる内容を述べる文に“可以”が使用されている例を挙げ、“可以”も認識可能を表すという見方を示している。

(i) 所以秦始皇也可以看作是一个大的艺术家。(したがって、秦の始皇帝も大芸術家とみなすことができる。)

(ii) 从另一个观点看,毁坏也可以建设。(別の観点から見ると、破壊も建設である。)
(侯瑞芬 2009:294)

このような例は会話・談話において当該の言い方や見方ができる/できないということを表すもので、Sweetser (1990)が「会話領域」に関わる言語行為的用法として、認識的用法とは区別している例にあたる。本論文でもこの“可以”の用法は認識可能とは分けて議論する必要があると考え、この用法については考察の対象外とする。

めながらも、(42)のような疑問文（反語文）、さらには(43)のような肯定平叙文（節）でも一定の条件の下では“能”が認識可能を表しうると見る立場を支持する。

(42) a. 天 这么 晚 了 他 能 来 吗?

時間 こんなに 遅い PERF 彼 NENG 来る SFP (疑問)

「こんな遅くに彼は来るのだろうか。」

b. 这 件 事 他 能 不 知 道 吗?

これ CL こと 彼 NENG NEG 知っている SFP (疑問)

「このことを彼が知らないわけがないだろう。」

(吕叔湘 1999:415)

(43) a. 真 没 想 到 他 能 在 家 等 我。

実に NEG 思う-至る 私 NENG いる 家 待つ 私

「彼が家にいて私を待っているなんて思いもしなかった。」

b. 过 一 会 儿, 雨 大 概 能 停。

過ぎる 少しの間 雨 たぶん NENG 止む

「しばらくしたらおそらく雨もやむだろう。」 (陆庆和 2006:139)

3.1.5. 実現可能

ここまでは、一般言語学・類型論の観点からモダリティを研究する枠組みで用いられる分類を利用して、＜可能＞の意味分類を試みてきた。最後にそのような枠組みではほとんど扱われないが、日本語の可能表現研究ではしばしば問題になる用法を取り上げたいと思う。それは、現実世界において事態が実現したこと（実現しなかったこと）を表す用法である（奥田靖雄 1986、井島 1991、渋谷 1993、2006、尾上 1998）。この用法を本論文では「実現可能」と呼ぶ。具体的には(44)、(45)のような用法であり、これらは現実世界において「北京に来る」、「飛行機に乗る」という事態が実現したことを表している。

(44) a. 私はずいに憧れの北京に来られた。

b. なんとかその飛行機に乗れた。

(45) a. 私はずいに憧れの北京に来ることができた。

b. なんとかその飛行機に乗ることができた。

これまで見てきた＜可能＞の意味は、いずれもものごとの実現性（現実世界に事態が出現・存在する見込み）を表すものであり、実際の現実世界で起こった事態を表して

いなかった。〈可能〉の他の意味は潜在世界について述べるものであったが、この実現可能は現実世界で起こった事態を表しているという点で他の〈可能〉の意味とは質的に大きく異なる(井島 1991、渋谷 1993, 2006)。モダリティは一般的に「非現実」を表す意味論的カテゴリーとして考えられているため⁷(ナロック 2002、野村 2003)、このような実現可能の用法が研究の射程に入ってくるのは当然であり、日本語の可能表現を扱う研究でも、この実現可能を〈可能〉の範疇から外す見方もある(尾上 1998)。しかし、本論文では事態から実現性を見出す過程に注目した分析を行うものであり、その点で単純な事態と実現性の中間に位置するようなこの実現可能の例は非常に重要であり、また日本語と中国語の差異を捉える上でも重要であると考え、可能形式が表す1つの意味として取り上げて議論する。

日本語の可能形式は問題なく実現可能を表すことができるが、(46)~(48)が示すように、中国語の場合いずれの可能形式でもこの実現可能を表すのは難しい。

(46) a. *我 终于 能 来到 了 向往 的 北京。

私 ついに NENG 来る-至る PERF あこがれるの 北京

「私はついに憧れの北京に来られた。」

b. *我 总算 能 坐上 了 那 班 飞机。

私 なんとか NENG 乗る-上がる PERF それ CL 飛行機

「なんとかその飛行機に乗れた。」

(47) a. *我 终于 会 来到 了 向往 的 北京。

私 ついに HUI 来る-至る PERF あこがれるの 北京

「私はついに憧れの北京に来られた。」

b. *我 总算 会 坐上 了 那 班 飞机。

私 なんとか HUI 乗る-上がる PERF それ CL 飛行機

「なんとかその飛行機に乗れた。」

(48) a. *我 终于 可以 来到 了 向往 的 北京。

私 ついに KEYI 来る-至る PERF あこがれるの 北京

「私はついに憧れの北京に来られた。」

b. *我 总算 可以 坐上 了 那 班 飞机。

⁷ モダリティを話し手の「主観性」との関係で捉える立場、文の「命題」以外の要素をモダリティとし、文の階層との関係で捉える立場など、「現実性」とは異なった観点からモダリティを捉える立場もある。モダリティの定義についての諸論や、モダリティ論の学史については、ナロック (2002)、野村 (2003)、黒滝 (2005)に詳しい。

私 なんとか KEYI 乗る-上がる PERF それ CL 飛行機

「なんとかその飛行機に乗れた。」

ただし、(49)が示すように、“能”だけは否定文、つまり過去の1回的事態の非実現を表す場合には使用することができる(呂叔湘 1980, 1999、朱繼征 1995、渡辺 1999、郑天刚 2002、鲁晓琨 2004)。

(49) a. 她 昨天 有点儿 中暑, 没 能 来 找 你。

彼女 昨日 少し 日射病にかかる NEG NENG 来る 訪ねる あなた

「彼女は昨日ちょっと日射病になって、あなたを訪ねることができなかった。」

b. 路上 塞车, 市长 没 能 按时 赶到 会场。

路上 渋滞する 市長 NEG NENG 時間通りに到着する 会場

「道が渋滞していて、市長は時間通りに会場に到着することができなかった。」

(郑天刚 2002:144)

1 回的事態の非実現を表す際に“能”が使えるということを除くと、中国語は、この実現可能を可能形式で表すことは総じて難しい言語であると言える。それは、助動詞型の可能形式だけでなく、可能補語でも表すことができないという事実からも示される。中国語において過去の否定は“没”という副詞によって表されるが、そもそも可能補語の構造にこの“没”は現れえない((50))。

(50) *昨天 工作 太 多, 做没完。

昨日 仕事 ~すぎる 多い やる-NEG-終わる

「昨日仕事があまりに多すぎて、やり終えられなかった。」

(張威 1998:217)

(51)のように、“不”であれば可能補語の構造に現れるが、過去の1回的事態の非実現を表すことはできない。肯定形も同様であり、過去の1回的事態の実現を表すことはできない((52))。

(51) *昨天 工作 太 多, 做不完。

昨日 仕事 ~すぎる 多い やる-NEG-終わる

「昨日仕事があまりに多すぎて、やり終えられなかった。」

cf. 这么 多 工作, 一天 可 做不完。

こんなに 多い 仕事 一日 まったく する-NEG-終わる

「こんなにたくさんの仕事は、一日では絶対に終わらない。」

(張威 1998:217)

(52) *昨天 工作 很 少, 做得完。

昨日 仕事 とても 少ない する-DE-終わる

「昨日仕事が少なくて、やり終えられた。」

cf. 这么多 工作, 怎么 做得完?

こんなに 多い 仕事 どうやってする-DE-終わる

「こんなにたくさんさんの仕事、どうやってやり終えられるというのか。」

中国語で1回的な事態の実現・非実現を表す場合には、可能形式ではなく、(53)、(54)に現れる“做完”(やる+終わる)のような「動詞+結果補語」の構文が用いられる。

(53) 昨天 工作 太多, 没 做完。

昨日 仕事 ~すぎる 多い NEG やる-終わる

「昨日仕事が多すぎて、やり終わらなかった。」 (張威 1998:217)

(54) 昨天 工作 很少, 全部 做完 了。

昨日 仕事 とても 少ない 全部 する-終わる SFP (変化)

「昨日仕事が少なかったなので、全部やり終わった。」

すなわち、中国語では、事態の有無(事態が現実世界に出現・存在するかしないか)と実現性の有無(事態が現実世界に出現・存在する見込みがあるかないか)が明確に区別されており、その区別がどの形式を用いて表すかの違いに現れていると言える。一方日本語は、事態の有無と実現性の有無が中国語ほど明確に区別されておらず、実現性を表す可能形式で事態の有無を表すこともできるのである。

3.1.6. 日本語と中国語の可能形式の意味分布のまとめ

ここまで見てきた日中の可能形式が表しうる意味をまとめたものが以下の【表 3】である。

【表 3 日本語と中国語の可能形式の意味分布】

	非モダリティ		動的モダリティ		
	実現可能 (3.1.5 節)	能力可能 (3.1.1 節)	状況可能 (3.1.2 節)		
			条件的 状況可能 (3.1.2.1 節)	受動的 状況可能 (3.1.2.2 節)	自発的 状況可能 (3.1.2.3 節)
「られる」	○	○	○	○	×
「ことができる」	○	○	○	○	△
“能”	△	○	○	○	△
“会”	×	○	×	×	○
“可以”	×	○	○	○	×

束縛的モダリティ	認識的 モダリティ
許可可能 (3.1.3 節)	認識可能 (3.1.4 節)
×	×
×	×
○	△
×	○
○	×

表中の「○」はその形式が当該の意味を表せること、「×」はその形式が当該の意味を表せないこと、「△」はその形式では基本的に当該の意味を表せない(表しにくい)が、一定の条件下では表せるようになることを示している。各意味の並び順は「行為主体が行為を行い、事態が実現する」という<可能>の基盤事態により近いものを左から順に並べている。現実世界における事態の実現を表す「実現可能」が最も<可能>の基盤事態に近く、次に動的モダリティのうちの行為主体の行為の実現性を表す「能力可能」が並ぶ。つづいてもう1つの動的モダリティである「状況可能」が並ぶが、特定の時空間下における一時的な行為主体の行為の実現性を表す「条件的状況可能」、行為主体以外の内的な性質を表し行為主体の存在は背景化しているものの、意志動詞が

用いられていることから行為主体の存在が読み取れる「受動的状況可能」とつづき、全く行為主体が存在せず主体の自発的変化の実現性を表す「自発的状況可能」という順に並ぶ。事態参与者、および事態内の状況のあり方と強い意味的結びつきを持つ動模ダリティを離れ、行為束縛的な意味を表す束縛的模ダリティにあたる「許可可能」と、命題（事柄）に対する話し手の判断を表す認識的模ダリティにあたる「認識可能」は事態のあり方を述べる他の意味とは分けて配置している。許可可能が条件的状況可能および受動的状況可能の下に位置するのは、3.1.3 節で指摘したように、許可可能が条件的状況可能あるいは受動的状況可能の特殊なケースであるということを示している。また認識可能を自発的状況可能の下に位置づけているのは、自発的状況可能と認識可能において“能”、“会”、“可以”の意味分布が一致するためである。

【表 3】から、日本語と中国語の可能形式の意味分布に関していくつかの特徴が指摘できる。まず、日中のすべての可能形式が能力可能を表すことができるということである。【表 3】の能力可能の欄が太線になっているのは、この意味が<可能>という意味概念において最も原型的な意味であることを表している。さらに、【表 3】上段の意味分布に注目すると“会”以外の形式については、原型的意味である能力可能からの意味の広がりには一定の傾向があることが指摘できる。能力可能から右側への広がりを見ると、「られる」と“可以”は受動的状況可能までは問題なく表せるが、自発的状況可能から表せなくなり、「ことができる」と“能”も受動的状況可能までは問題なく表せるが、自発的状況可能については制限がかかる。いずれのパターンも「○」→「△」or「×」という順に並び、「△」or「×」→「○」という並びは見られない。このように見ると、中国語の“会”が例外的な分布をしているように見える。実際、“会”がどのような意味拡張の過程をたどったのかについては、通時的にも理論的にもしばしば問題になっている（傅书灵・祝建军 2004、Endo 2005、蒋绍愚 2007、王鹏・马贝加 2011）。この“会”の特殊性については、本論文では「事態から実現性を見出す認知過程」の観点から説明を与えられると考える。この問題についても第 4 章 4.2 節で詳しく議論する。また、【表 3】下段との関係をあわせて見ると、日本語と中国語の間における明確な差異が指摘できる。日本語はいずれの形式においても、能力可能から受動的状況可能までの、行為主体が行為を行う事態を基盤にした意味は表せるが、行為主体が行為を行うという事態から離れた、自発的状況可能の意味が表しにくく、事態のあり方を述べる動模ダリティから離れた、許可可能、認識可能に至っては全く表すことができない。つまり日本語の可能形式は、「行為主体が行為を行い、事態が実現する」という<可能>の基盤事態から離れた意味への広がりが十分に発達していないと

言える。逆に、中国語では、“能”、“会”、“可以”のいずれかの形式を用いれば、能力可能から自発的可能および下段の許可可能、認識可能の意味を全て表すことができるが、能力可能から左方向にある実現可能については“能”がかろうじて否定のときに表すことができるのみで、基本的にこの意味を可能表現で表すことが難しい。中国語は、「行為主体が行為を行い、事態が実現する」という基盤事態から離れた実現性を表すことに関しては問題ないが、逆に現実世界に実際に出現・存在した事態を、可能形式を用いて表すことが難しい言語であると言える。

3.2. 難易表現の意味分類

可能形式と同様に、難易形式も複数の意味を表すことができる多義性を有する形式であり、日本語と中国語、および各形式を比較対照するにあたり、意味の整理が必要である。難易形式の意味の分類については、日本語の難易表現（難易文）研究で蓄積があるのでまずそれらの研究の分類を参照する。日本語の難易表現について詳細な研究を行っている先駆的な研究として、Inoue, Kazuko (1978)が挙げられる。井上和子 (2005)も基本的にはInoue, Kazuko (1978)の枠組みを踏襲している。Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)は日本語の難易表現（難易文）を以下の4種類に分類している ((55)~(58))。

- (55) a. 学生にはこの辞書が使いやすい。 (I型)
 b. 水泳選手にはこの台からが飛び込みやすい。 (I型)
 (56) 私は高音で歌いにくい。 (II型)
 (57) 木綿物は乾きやすい。 (III型)
 (58) 若者は誤植を見落としやすい。 (IV型)

(井上和子 2005:79)

I型・II型とIII型・IV型は、「自己制御性」(self-contorolability)の観点から区別される。I型・II型は難易形式が結合する動詞（「使う」、「飛び込む」、「歌う」）が自己制御可能な動詞であるのに対して、III・IV型の動詞（「乾く」、「見落とす」）は自己制御不可能な動詞である。さらにその上でI型とII型は動作主が「ニ格」をとるか「ガ格」をとるかで区別される。III型とIV型はともに自己制御不可能な動詞と結合するが、III型とIV型の大きな違いは、IV型がいわゆる「傾向」の解釈になり、(59)のように「がちだ」と言い換えられる点にある。

- (59) 若者は誤植を見落としがちだ。

ただし、Ⅲ型とⅣ型は意味的に重なり、動詞が自動詞のときはどちらのタイプにも解釈可能な場合がある。(60)の文は、「冷凍肉は簡単にはとけない」という解釈と「冷凍肉はとけない傾向にある」という解釈が可能であり、前者の解釈だとⅢ型になり、後者の解釈だとⅣ型になる。

- (60) 冷凍肉はとげにくい。
- a. 冷凍肉は簡単にはとけない。
 - b. 冷凍肉はとけない傾向にある。

(Inoue, Kazuko 1978:132)

Inoue, Kazuko(1978)、井上和子 (2005)は基本的には共起する動詞の意志性（自己制御性）という語彙の特徴と格パターンによって難易表現の意味を分類しているが、これに対して渡邊 (2007)は、Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)の分類を参考にしながらも、意味的な観点も含めた分類を提案している。渡邊 (2007)は日本語の難易表現を大きく「可能難易文」と「生起難易文」の2種類に分けている。以下、渡邊 (2007)における「可能難易文」と「生起難易文」についての記述と例文を引用する。

- (61) 可能難易文の特徴
- a. 意味的特徴
 - (i) 当該の行為を意志的に達成しようとする行為者が想定される。
 - (ii) 行為者の立場に立って当該の行為に対して感じる容易さ/困難さを述べる。
 - b. 統語的特徴
 - (i) 対応する動詞文においてガ格名詞句で示される行為者が、可能難易文ではガ格以外にニ格やニトツテ格に交替する場合もあり、また、行為者が示されない場合もある。
 - (ii) 対応する動詞文においてガ格以外で現れる名詞句が、可能難易文ではガ格を取ることがある。

(渡邊 2007:186-187)

- (62) a. ビジネスマンにはノートパソコンが使いやすい。
b. この椅子は座りづらい。
c. このボールペンは書きにくい。
d. その話は俄には信じがたい。

(渡邊 2007:186)

(63) 生起難易文の特徴

a. 意味的特徴

- (i) 当該の事態の実現を意図する行為者が想定されていないか、想定される場合でもその行為者の立場に立たずに述べる。
- (ii) 当該の事態が実現する確率の高さ、低さを表す。
- (iii) 傾向として、当該の事態の実現が都合の悪いものとして述べられる場合が多い。

b. 統語的特徴

生起難易文の取る格構造は基本的に対応する動詞文と同じであり、可能難易文の様な格の交替は起こらない。

(渡邊 2007:187-188)

- (64) a. カラオケを歌うと、ポリープが出来やすい。
b. このテレビは壊れにくい。
c. 太郎は宿題を忘れやすい。
d. 空き巣は若い女性の一人暮らしを狙いやすい。

(渡邊 2007:186)

渡邊 (2007)はさらに、以下の(65)のような「可能難易文」と「生起難易文」の中間的なタイプの文が存在することを指摘している。

- (65) a. 今年の風邪は治りやすい。
b. 最近の割り箸はきれいに割れやすい。
c. 晴れた日は洗濯物が乾きやすい。

(渡邊 2007:189)

(65)の文は意味的には、当該の行為を意志的に達成しようとする行為者が想定され、その行為者の立場に立って、当該の行為に対して感じる容易さ・困難さを述べるという点で可能難易文の特徴を満たす。統語的にも、対応する動詞文においてガ格以外で現れる名詞句がガ格で示されうる（「洗濯物が晴れた日に乾く」→「洗濯物は晴れた日が乾きやすい」、「ボールが人工芝で弾む」→「ボールは人工芝が弾みやすい」）という点で可能難易文の特徴を満たしている⁸。一方で、確率が高いことを表す、特に複数回

⁸ ただし、この格交替の可能性について渡邊自身は、「ただし、可能難易文の場合とは異なり、対応する動詞文におけるガ格名詞句が生起難易文でもそのままガ格名詞句として現れ

の生起の頻度ではなく 1 回の生起に関してそれを述べる点で生起難易文の特徴を満たしている。

以下、Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)と渡邊 (2007)の分類の関係を整理した上で、本論文で採用する分類を提示していく。Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)の分類における I 型と II 型が渡邊 (2007)における「可能難易文」にあたる。Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)の I 型と II 型は主語がニ格をとるかガ格をとるかという格パタンの違いで区別されているが、意味的には渡邊 (2007)が述べるようにともに行為の容易さ・困難さを表しているものとしてまとめられる。本論文ではこの意味を「難易」と呼ぶが、意味的観点に基づいて本論文では「難易」をさらに 2 つに分ける。1 つは、(66)のように事物の属性として行為実現の容易さ・困難さを表すものである。これを「属性難易」と呼ぶ。

- (66) a. この水は飲みやすい。
b. このペンは書きにくい。

もう 1 つは(67)のように行為主体が感じる感覚として行為実現の容易さ・困難さを述べるものである。これを「感覚難易」と呼ぶ。

- (67) a. 私は友達と一緒にだと勉強がしやすい。
b. 恥ずかしくて、(私は)とても言い出しにくかった。

属性難易と感覚難易の違いは、表している意味そのものの違いというより述べ方の違いである。これは、西尾 (1972)、寺村 (1982)、益岡 (1987)が述べる、「属性形容詞」と「感情 (感覚) 形容詞」の関係と基本的には同じである。日本語の形容詞が事物の客観的性質や状態を表すことを基本とする属性形容詞と、人間の主観的な感情・感覚を表すことを基本とする感情 (感覚) 形容詞に大きく二分することができることはよく知られている。ただし、一方でこの 2 つは截然と区別できるものではなく、相互に交渉があることもまたよく知られている事実である。例えば、「この本は難しい」など、典型的には属性形容詞として使われる「難しい」が以下の(68)では感情形容詞的に使われている。(68)は「仕上げ」の属性を述べることに重点があるのではなく、ある時点での「私」の一時的な「困難さ」という感覚を述べることに重点がある。

- (68) 私 (に) は最後の仕上げがとても難しかった。 (益岡 1987:32)

るため、そこに更に別のガ格名詞句を加えるこうした格交替は、二重ガ格構文を引き起こしやすい。そのために、基本的にはこうした格交替は避けられるものと考えられる。」(渡邊 2007:221) と述べており、統語的な面における可能難易文との共通点を積極的には認めていない。

(66)と(67)も、「難易」を属性として述べるか、感覚として述べるかの違いに基づいて分けている。この違いは、文脈の違いにのみ依存するものではなく、文法現象の違いにも反映する。(69)のように「ニ (ハ)」で主体を標示する場合、その主体は感覚を知覚する「経験者」として解釈される読みの他に、事態、認識が成り立つ範囲としての「領域」(日本語記述文法研究会 2009)として解釈される読みが出るため、経験者をとる感覚難易としても、属性のあてはまる領域をとる属性難易としても解釈できる。属性難易としての読みが出るため、人称制限も生じないし((70))⁹、経験が無いことを表す「ことを知らなかった」のテストフレーム(眞野 2010)でも非文とならない((71))。

(69) 私にはこの辞書が使いにくい。

→「私はこの辞書が使いにくいと感じる」

(感覚難易、「私」は経験者)

→「私という主体に対してこの辞書が使いにくいという認識が成り立つ」

(属性難易、「私」は領域)

(70) 太郎にはこの辞書が使いにくい。

(71) 私に (は) この辞書が使いにくいことを私は知らなかった。

一方、(72)のように主体を「ガ/ハ」で標示すると、経験者の読みしか出ないため、感覚難易としてしか解釈されない。したがって、人称制限が生じ((73))、経験が無いことを表す「ことを知らなかった」とも共起しない((74))。このような事実から、本論文では「~やすく/にくく感じる」とパラフレーズでき、「ガ (/ハ)」で経験者を標示しうるか否かを、感覚難易を表しているか否かの基準とする。

(72) 私はこの辞書が使いにくい。

→「私はこの辞書が使いにくいと感じる」

(感覚難易、「私」は経験者)

(73) ??太郎はこの辞書が使いにくい。

(74) ??私が (/は) この辞書が使いにくいことを私は知らなかった。

⁹ 属性難易において2人称、3人称を容認するかについては日本語母語話者の中でもゆれがあるようである。先行研究の間でも、Inoue, Kazuko(1978)、井上和子(2005)は本論文で言う属性難易には人称制限が生じないと見ているが、藤家(1998)、渡邊(2007)は属性難易でも人称制限が生じる場合もありえるとしており、見解が分かれている。

ここまで、Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)の I 型と II 型、および渡邊 (2007)の可能難易文にあたるものを、本論文では「難易」と呼び、これが「属性難易」と「感覚難易」に分けられることを確認した。つづいて先行研究の残りの分類についても見ていく。Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)の分類における III 型と IV 型が渡邊 (2007)における「生起難易文」にあたる¹⁰。Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)は、III 型と IV 型の違いは「がちだ」で置き換えられるか否かにあるとしており、(75)と(76)に示されるように、渡邊 (2007)が生起難易文として挙げている例文の中にも「がちだ」で置き換えられるものと置き換えられないものがある。

(75) カラオケを歌うと、ポリープが出来やすい。 → (×出来がちだ)

(76) a. 太郎は宿題を忘れやすい。 → (○忘れがちだ)

b. 空き巣は若い女性の一人暮らしを狙いやすい。 → (○狙いがちだ)

Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)は「がちだ」で置き換えられるか否かという事実が意味的にどのようなことを意味するのかについては触れていないが、このことを考える上で、渡邊 (2007)および井上次夫 (1997)、加藤 (2001)の観察が参考になる。用語はそれぞれ異なるものの、難易形式が表す意味のうち、行為の容易さ・困難さ以外を表す意味（本論文ではこれを「傾向」と呼ぶ）に 2 つのタイプがあることを指摘している。「傾向」のタイプの 1 つ目は事態が実現するまでの過程における進展の速さ・容易さを表すものである。例えば(77)は、「杉の枝が燃える」、「このチョコレートが溶ける」という事態が実現するまでの進展が速いこと、容易であることを表している。これらは「[すぐに/容易に]～」で言い換えられる((78))。本論文ではこれを「進展傾向」と呼ぶ¹¹。

(77) a. 杉の枝は燃えやすい。

b. このチョコレートは溶けやすい。

(渡邊 2007:210)

(78) a. 杉の枝は[すぐに/容易に]燃える。

b. このチョコレートは[すぐに/容易に]溶ける。

2 つ目の「傾向」は事態が実現する頻度の多さを表すものである。例えば(79)は「この交差点で事故が起こる」、「A 国が各種災害に見舞われる」ということが頻繁に起こる

¹⁰ 渡邊自身は(65)のような可能難易文と生起難易文の中間的な用法が Inoue, Kazuko (1978)、井上和子(2005)の分類の III 型にあたるものとしているが、正確には、これらの用法は III 型の一部ということになる。

¹¹ 井上次夫 (1997)の「状態傾向」、加藤 (2001)の「性質」、渡邊 (2007)の「一回生起する確率の高低」にあたる。

ことを表している。これらは「～ことが多い」で言い換えられる ((80))。本論文ではこれを「頻度傾向」と呼ぶ¹²。

- (79) a. この交差点では事故が起こりやすい。
b. A国は地震、風水害、火山噴火などの各種災害に見舞われやすい。

(渡邊 2007:210)

- (80) a. この交差点では事故が起こることが多い。
b. A国は地震、風水害、火山噴火などの各種災害に見舞われることが多い。

進展傾向と頻度傾向の最も大きな質的な違いは、複数回の事態を前提とするか否かである (渡邊 2007)。頻度傾向が表す頻度の多寡は、複数回の事態の実現を前提とするものである。したがって(81)のように 1 回の事態実現からは頻度傾向の判断はできない。一方、進展傾向は基本的に 1 つの事態に対する進展の容易さ・困難さ (速さ・遅さ) を問題にする表現であるため、(82)に示されるように、1 回の事態の進展から判断することが可能である。

- (81) (交差点で事故が起こるのを 1 回見た後で)

??この交差点は事故が起こりやすい。

- (82) (杉の枝がよく燃えるのを 1 回見た後で)

杉の枝は燃えやすい。

進展傾向と頻度傾向は上述のような質的な違いを有するものの、実際には区別しにくい場合が多い。例えば Inoue, Kazuko (1978)がIV型の例として挙げている(83)の文は(84)、(85)に示されるように進展傾向としても頻度傾向としても解釈可能である。

- (83) a. エリートは挫折感を味わいやすい。
b. 我々は気分に左右されやすい。

(Inoue, Kazuko 1978:130-131)

- (84) a. エリートは[すぐに/容易に]挫折感を味わう。
b. 我々は[すぐに/容易に]気分に左右される。

- (85) a. エリートは挫折感を味わうことが多い。
b. 我々は気分に左右されることが多い。

これに対して、先の(77)、(79)はそれぞれ進展傾向と頻度傾向の一方の解釈しか許さず、他方のフレームに置き換えると元の文の意味から大きく乖離する ((86)、(87))。このことから、進展傾向と頻度傾向はそれぞれ独立した意味であると考えることができる。

¹² 井上次夫 (1997)の「頻度傾向」、加藤 (2001)の「頻度」、渡邊 (2007)の「複数回生起する確率の高低」にあたる。

- (86) a. ?杉の枝は燃えることが多い。
 b. ?このチョコレートは溶けることが多い。
- (87) a. ?この交差点では[すぐに/容易に]事故が起こる。
 b. ?A国は[すぐに/容易に]地震、風水害、火山噴火などの各種災害に見舞われる。

なお、Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)でIV型とされている文は進展傾向とも頻度傾向とも解釈しうる文であるが ((84)、(85)参照)、III型は進展傾向を表す文である。Inoue, Kazuko (1978)において、「冷凍肉はとげにくい」という(88)の文がIII型として解釈される場合のパラフレーズ文である「冷凍肉は簡単にはとけない」というのは、「とける」ことの進展の困難さを表している解釈である。

- (88) 冷凍肉はとげにくい。
 a. 冷凍肉は簡単にはとけない。
 b. 冷凍肉はとけない傾向にある。

(Inoue, Kazuko 1978:132)

以上の議論を踏まえ、本論文における分類と先行研究における分類の関係をまとめた【表4】と、それぞれの意味の定義をまとめたものを以下に示す。

【表4 本論文の難易形式の意味の分類と先行研究の分類の関係】

本論文で用いる分類と用語	難易		傾向	
	感覚難易 ((67))	属性難易 ((66))	進展傾向 ((77))	頻度傾向 ((79))
Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)	難易 (I型、II型)		難易 (III型) (傾向 (IV型))	傾向 (IV型)
井上次夫 (1997)	容易性		傾向	
			状態傾向	頻度傾向
加藤 (2001)	難易		傾向	
			性質	頻度
渡邊 (2007)	可能難易		生起難易	
			一回生起する確率の高低	複数回生起する確率の高低

【難易形式が表す意味】

感覚難易： 行為の過程において生じる容易さ・困難さを行為主体の感覚として述べる。

属性難易： 行為の過程において生じる容易さ・困難さを事物の属性として述べる。

進展傾向： 事態実現までの進展過程が速い・容易（遅い・困難）であることを表す。

頻度傾向： 事態が実現する頻度が多い（少ない）ことを表す。

本論文で言うところの進展傾向の扱いが先行研究によって異なる点に注意が必要である。Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)は、進展傾向を中心的に表すⅢ型を、難易と同じグループにしているが¹³、井上次夫 (1997)、加藤 (2001)、渡邊 (2007)は頻度傾向と同じグループとして見ている。これは進展傾向が、進展過程における容易さ・困難さを表すという点では難易に近く、行為過程の容易さ・困難さに関わらない傾向を表すという点では頻度傾向に近い、という特徴を有するためである。進展傾向をどちらにより近いものとして分類するかは、どちらの側面を重視するかによって変わるものであると考えるが、日本語と中国語の難易形式について言うと、行為過程の容易さ・困難さに関わるか否かという点が形式の意味分布の差異を捉える上で1つの重要な点になるということが次節以降の観察で確認されるため、進展傾向を頻度傾向とあわせて「傾向」としてまとめる見方をとる。この難易形式の意味分類を基に、次の3.2.1節から日中の難易形式の各意味との関係を確認していく。

3.2.1. 難易

「難易」とは、行為の過程において生じる容易さ・困難さを表すものである。(89)、(90)ともに「この水を飲む」、「勉強をする」という行為が容易に進展するということを表している。行為の過程が容易であるということを述べることは、その行為が現実世界に出現・存在する見込みが高いことを含意 (imply) するので、難易も (間接的に) ものごとの実現性を表していると考えることができる。先に述べたように、難易には容易さ・困難さを(89)のように事物の属性として述べる属性難易と、(90)のように行為主体の感覚として述べる感覚難易がある。

(89) この水は飲みやすい。

¹³ 三木 (1998)、鈴木 (2013)も本論文で言う「難易」から「進展傾向」までを含めて「難易」と呼んでおり、Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)と同じ見方をしている。

(90) 私は友達と一緒にだと勉強がしやすい。

3.2.1.1. 属性難易

「属性難易」とは、行為過程において生じる容易さ・困難さを事物の属性として述べるものである。(91)を例にとると、「彼の話を理解する」という行為が容易に進展するという、「この本を理解する」という行為の過程において困難さがないことが、「彼の話」、「この本」の属性として述べられている。

(91) a. 彼の話は理解しやすい。

b. 私[に (は) /にとって (は)]この本が理解しやすい。

(92) a. 彼の話は理解し[にくい/づらい]。

b. 私[に (は) /にとって (は)]この本が理解し[にくい/づらい]。

日本語ではこの属性があてはまる領域(対象)を「に/にとって」で明示することができる(Inoue, Kazuko 1978、井上和子 2005、Takezawa 1987、渡邊 2007)。中国語では“对～来说”がこれにあたる。(91)~(94)の例を見てわかるように、この属性難易は日中の全ての難易形式で表すことができ、属性難易が<難易>の最も原型的な意味であると考えられる。

(93) a. 他 说 的 话 很 [容易/好] 理解。

彼 話す の 話 とても RONGYI/HAO 理解する

「彼の話は理解しやすい。」

b. 对 我 来 说 这 本 书 很 [容易/好] 理解。

~に 私 ~から言うと これ CL 本 とても RONGYI/HAO 理解する

「私にとってはこの本が理解しやすい。」

(94) a. 他 说 的 话 很 难 理解。

彼 話す の 話 とても NAN 理解する

「彼の話は理解しにくい。」

b. 对 我 来 说 这 本 书 很 难 理解。

~に 私 ~から言うと これ CL 本 とても NAN 理解する

「私にとってはこの本が理解しにくい。」

3.2.1.2. 感覚難易

「感覚難易」とは、行為の過程において生じる容易さ・困難さを行為主体の感覚として述べるものである。この場合の「行為主体」は感覚の感じ手であるので同時に「知覚主体（経験者）」でもある。(95)が表す感覚難易は事物の属性を述べることに重点があるのではなく、(96)が表すような意味、すなわち、主体が感じる感覚を述べることに重点がある。

- (95) a. 教室にいる人が少ないので、(私は) 勉強しやすい。
b. 彼はとてもゆっくり話してくれたので、(私は) わかりやすかった。
(96) a. 教室にいる人が少ないので、(私は) 勉強しやすく感じている。
b. 彼はとてもゆっくり話してくれたので、(私は) わかりやすく感じた。

「やすい」以外の難易形式の感覚難易の可否を見た場合、(97)の「にくい/づらい」は「やすい」と同様問題なく成立するが、(98)、(99)が示すように、中国語はいずれの形式も感覚難易を表すことができない。この事実は中国語の難易形式が行為過程に生じる容易さ・困難さを事物の属性としてしか述べることができず、主体の感覚として述べることができないということを示している。

- (97) a. 教室にいる人が多いので、(私は) 勉強し[にくい/づらい]。
b. 彼はとても速くしゃべるので、(私は) わかり[にくかった/づらかった]。

- (98) a. *教室里 人 很 少, 我 很 [容易/好] 学习。

教室の中 人 とても 少ない 私 とても RONGYI/HAO 勉強する

「教室にいる人が少ないので、(私は) 勉強しやすい。」

- b. *他 说 得很慢, 我 很 [容易/好] 懂。

彼 話す とてもゆっくりと 私 とても RONGYI/HAO わかる

「彼はとてもゆっくりと話してくれたので、(私は) わかりやすかった。」

- (99) a. *教室里 人 很 多, 我 很 难 学习。

教室の中 人 とても 多い 私 とても NAN 勉強する

「教室にいる人が多いので、(私は) 勉強しにくい。」

- b. *他 说 得很快, 我 很 难 懂。

彼 話す とても速く 私 とても NAN わかる

「彼はとても速くしゃべるので、私はわかりにくかった。」

3.2.2. 傾向

基本的には行為の過程における容易さ・困難さを表し、間接的に事態（行為）の実現性を表していた「難易」とは異なり、「傾向」は事態の実現に関わる意味を直接的に表す。(100)は「杉の枝が燃える」という事態実現に至るまでの進展が速い・容易であることを表し、(101)は「この交差点で事故が起こる」という事態が実現する頻度が高いということを表している。(100)が進展傾向、(101)が頻度傾向を表す例であるが、それぞれの意味と日中の難易形式の関係を順に見ていく。

(100) 杉の枝は燃えやすい。

(101) この交差点では事故が起こりやすい。

3.2.2.1. 進展傾向

「進展傾向」とは、(102)のように、事態の実現に至るまでの進展が速い・容易（遅い・困難）であることを表すものである。

(102) a. この建築材は燃えやすい。

b. 夏は服が乾きやすい。

(102)は「この建築材が燃える」、「服が乾く」という事態が実現するまでの過程においてその進展が速い・容易である、すなわち「すぐに/容易に燃える」、「すぐに/容易に乾く」ということを表している。(102)は「やすい」が進展傾向を表すことができることを示しているが、他の難易形式が進展傾向を表せるか否かを見るために(103)~(105)の例文を見る。

(103) a. この建築材は燃え[にくい/??づらい]。

b. 冬は服が乾き[にくい/(?)づらい]。

(104) a. 这种 建材 很 [容易/??好] 燃烧。

これ CL 建築材 とても RONGYI/HAO 燃える

「この建築材は燃えやすい。」

b. 夏天 衣服 很 [容易/(?)好] 干。

夏 服 とても RONGYI/HAO 乾く

「夏は服が乾きやすい。」

(105) a.??这种 建材 很 难 燃烧。

これ CL 建築材 とても NAN 燃える

「この建築材は燃えにくい。」

b.(?)冬天 衣服 很 难 干。

冬 服 とても NAN 乾く

「冬は服が乾きにくい。」

他の難易形式について見ると、「にくい」と“容易”については「やすい」と同じように、問題なく表せることがわかる。さらに、日本語の「づらい」と中国語の“好”および“难”が平行的なふるまいを見せることが興味深い。「づらい」、「好」、「难」いずれも(103a)、(104a)、(105a)では文の容認度が著しく低いが、同じ進展傾向を表す(103b)、(104b)、(105b)では比較的容認度が高くなっている。この差がどこから生じているのかについては、第5章で詳しく論じることにし、ここでは「づらい」、「好」、「难」が進展傾向を表しにくいという事実だけを確認しておく。

3.2.2.2. 頻度傾向

傾向の2つ目のタイプである「頻度傾向」は、事態が実現する頻度が多い(少ない)ことを表すものである。(106)は「やすい」が頻度傾向を表している例であり、「この交差点で事故が起こる」という事態、「この宝くじがあたる」という事態が実現する(現実世界に出現・存在する)頻度が高いことを表している。

(106) a. この交差点は事故が起こりやすい。

b. この宝くじは当たりやすい。

「やすい」は頻度傾向を問題なく表すことができるが、他の形式はどうであろうか。ここで注意しなければならないのは、この頻度傾向については、容易さを表す形式に比べ困難さを表す形式ではそもそもこの頻度傾向の意味が表しにくいということである。鈴木(2013)は頻度傾向の解釈が可能なのは、容易さを表す「やすい」のみで、困難さを表す「にくい/づらい」は頻度傾向を表すことはないとしている。渡邊(2007:211)も、(107)の例を挙げ、「「にくい」は全く使えないわけではないが「やすい」にくらべて明らかに容認度が落ちている」と述べ、全く表せないわけではないものの、困難さを表す形式は頻度傾向を表すことが難しいことを認めている。

(107) a. ?この交差点では事故が起こりにくい。

b. ?太郎は遅刻しにくい。

c. ?A国は地震、風水害、火山噴火などの各種災害に見舞われにくい。

(渡邊 2007:211)

(106)に対応する以下の(108)の「にくい」の例を見ても確かに、「やすい」に比べると

やや文として落ち着きが悪い。なぜ困難さを表す形式では頻度傾向を表しにくいのか、という問題については3.4節で取り上げて詳しく議論する。

(108) a. この交差点は事故が起こり [(?)にくい/??づらい]。

b. ここの宝くじは当たり [(?)にくい/(?)づらい]。

以下の(109)、(110)は中国語の難易形式の例である。

(109) a. 这个十字路口很 [容易/??好] 发生 事故。

これ CL 交差点 とても RONGYI/HAO 起こる 事故

「この交差点は事故が起こりやすい。」

b. 这里的彩票很 [容易/(?)好] 中。

ここの宝くじ とても RONGYI/HAO 当たる

「ここの宝くじは当たりやすい。」

(110) a. ??这个十字路口很 难 发生 事故。

これ CL 交差点 とても NAN 起こる 事故

「この交差点は事故が起こりにくい。」

b. (?)这里的彩票很 难 中。

ここの宝くじ とても NAN 当たる

「ここの宝くじは当たりにくい。」

容易さを表す形式に比べ困難さを表す形式が基本的に頻度傾向を表しにくいということ踏まえ、各個別形式の特徴を観察すると、進展傾向のときと同じふるまいが見られることがわかる。「にくい」と“容易”については、基本的には頻度傾向を表すことができる。「にくい」がやや文として落ち着かないのは「にくい」という個別形式にかかる制限ではなく、困難さを表す方の形式で頻度傾向を表していることから生じる制限である。それに対して、「づらい」、「好」、「难」で見られる不自然さはより明確であり、(108a)、(109a)、(110a)ではいずれもかなり不自然な表現となっている。それに比べ、同じ頻度傾向でも(108b)、(109b)、(110b)の方は比較的容認度が高いという現象が共通して見られる点も、先の進展傾向で見られたふるまいと平行的であり、興味深い。

最後に傾向文について1点補足しておく。ここまで、傾向を表す文の例には無意志動詞が現れる例のみを挙げてきた。実際、傾向文の典型は無意志的な事態を表す場合であるし、Inoue, Kazuko (1978)、井上和子 (2005)は傾向を表す文(井上の分類のⅢ型とⅣ型)が共起するのは自己制御不可能な動詞だけであるとしている。しかし、嶋村 (1980)、佐藤 (1989)、加藤 (2001)、渡邊 (2007)が挙げる例が示すように、動詞が

意志的な（自己制御可能な）動詞であっても、難易形式が付加される前の、元の文の格パターンを維持している場合には傾向文としての解釈が可能である。例えば、「学生が結婚式をこぢんまりしたレストランで挙げる」という文に難易形式「やすい」が付加された際、(111)のように「結婚式を→結婚式が」と格交替が起こっている文では難易解釈になるが、(112)のように格パターンが維持される場合には傾向解釈になる（この場合「～することが多い」で言い換え可能な頻度傾向の読みになる）。

(111) 学生は結婚式がこぢんまりしたレストランで挙げやすい。

(112) 学生は結婚式をこぢんまりしたレストランで挙げやすい。

(加藤 2001:296-297)

(113)も同様で、「想像する」、「ほったらかしにする」という動詞は意志動詞であるが、「想像することが多い/ほったらかしにすることが多い」という頻度傾向としての解釈が可能である。中国語でも(114)が示すように、“接受”（受け入れる），“伤”（傷つける）という意志動詞と共に起した場合でも傾向解釈の文が作れる。

(113) a. 子供を誘拐された親は、最悪の事態を想像しやすい。

b. 若い親は子供をほったらかしにしやすい。

(嶋村 1980:112)

(114) a. 青年人 容易 接受 新 事物。

若者 RONGYI 受け入れる 新しい 事物

「若者は新しいものを受け入れやすい。」 (吕叔湘 1999:467)

b. 说话 不 注意, 容易 伤 人。

話 NEG 注意する RONGYI 傷つける 人

「話し方に注意しないと人を傷つけやすい。」 (奥田寛 2000:254)

このような例では意志動詞が用いられているため、「行為」は存在するが、難易のように行為過程における容易さ・困難さを表すものではない。これらの文は、「子供を誘拐された親が最悪の事態を想像する」、「若い親が子供をほったらかしにする」などの事態が頻繁に起こることを表しており、これまでの難易および傾向の意味の定義と矛盾するものではなく、傾向文の一種として自然に組み込めるものである。

3.2.3. 日本語と中国語の難易形式の意味分布のまとめ

ここまで見てきた日中の難易形式が表しうる意味をまとめたのが、【表 5】である。

【表 5 日本語と中国語の難易形式の意味分布】

	難易 (3.2.1 節)		傾向 (3.2.2 節)	
	感覚難易 (3.2.1.2 節)	属性難易 (3.2.1.1 節)	進展傾向 (3.2.2.1 節)	頻度傾向 (3.2.2.2 節)
「やすい」	○	○	○	○
「にくい」	○	○	○	○
「づらい」	○	○	△	△
“容易”	×	○	○	○
“好”	×	○	△	△
“难”	×	○	△	△

表中の「○」はその形式が当該の意味を表せること、「×」はその形式では当該の意味が表せないこと、「△」はその形式では当該の意味が表しにくいだが一定の条件下では表せることを示している。なお、困難さを表す形式は基本的に頻度傾向を表しにくいだが、「にくい」の頻度傾向を表中では「○」にしている。これは、「にくい」による頻度傾向の不自然さが「にくい」という個別形式による制約ではないこと、また「づらい」との差異を明確にすることを重視しているためである。この<難易>における意味の並びも、日中の可能形式の意味分布をまとめた 3.1.6 節の【表 3】と同様に、「行為主体が行為を行う過程で容易さ・困難さを感じる」という<難易>の基盤事態のあり方に近いものから左から順に並ぶように配置している。感覚難易は、現実世界に出現・存在する行為主体（知覚主体）の感覚という状態を述べているという点で、事態を表す表現であり、もはや実現性の表現からは外れている。その意味で感覚難易が最も<難易>の基盤事態に近い。その次に事物の属性を述べながらも行為主体の行為過程における容易さ・困難さを表している属性難易がつづく。その次に傾向の 2 類、進展傾向と頻度傾向がつづく。この 2 つの位置関係については、3.2 節で指摘したように、進展傾向が進展の容易さを述べているという点で難易と意味的に近いことから、頻度傾向よりも左に位置づけている。頻度傾向は「過程での容易さ・困難さ」とは関わらず、さらに 1 つの事態ではなく、複数の事態が実現する多さ・少なさを表しているという点で最も<難易>の基盤事態から遠い意味であると考えられる。なお、進展傾向、頻度傾向も属性難易と同様、基本的には主題に現れる事物の恒常的な属性を表すことになる。

【表 5】の日中の難易形式の意味分布を見ると、以下のことがわかる。まず、属性難易は、日中の全ての難易形式で表せるということである。【表 5】で属性難易の囲みが太線になっているのは、この意味が<難易>という意味概念の原型的意味であることを表している。さらに、その属性難易からの右方向への意味の広がりを見ると、2つのパターンがあり、傾向（進展傾向および頻度傾向）を問題なく表せる形式（「やすい」、「にくい」、「容易」）と、基本的には傾向が表しにくいとが一定の条件下では表すことができる形式（「づらい」、「好」、「难」）がある。この点は日本語と中国語で共通して見られる特徴である。逆に属性難易から左方向への意味、つまり感覚難易の意味への広がりを見ると、日本語と中国語は対照的である。日本語は全ての形式で感覚難易が表せるが、中国語では全ての形式が感覚難易を表すことができない。これを「行為主体が行為を行う過程で容易さ・困難さを感じる」という<難易>の基盤事態との関係で捉え直すと、日本語の難易形式は、属性としての<難易>だけでなく、基盤事態に近い、現実世界に出現・存在する事態としての<難易>を表すことができる。それに対して、中国語では属性表現としての<難易>が基本であり、事態としての<難易>を難易形式では表せないということである。この左方向への意味の広がりに関する日中の差異は、3.1.6節で見た可能形式に見られた特徴と平行的である。可能表現、難易表現に見られる日本語と中国語の異同および各形式間の異同については、第4章と第5章の日中の可能表現と難易表現に関する各論で詳しく論じることとし、次節3.3節では<可能>と<難易>の異同を明らかにするために2つの観点から可能表現と難易表現の対照を行う。

3.3. <可能>と<難易>の対照：事態から実現性を見出す認知過程

前節までに見てきたように、可能・難易形式はそれぞれ多義性を有し、また日本語と中国語、あるいは各個別形式で表しうる意味範囲が異なるため、日中の全ての形式をとりあげながら論じることは難しい。そこでこの3.3節と続く3.4節では、日本語の「られる」と「やすい」を主な考察対象としてとりあげ、2つの観点に注目して<可能>と<難易>の異同を明らかにすることにする。1つは、「事態から実現性を見出す認知過程」という観点であり、もう1つは「意味拡張のあり方」という観点である。具体的には、以下のような問題意識である。

【事態から実現性を見出す認知過程という観点から見た<可能>と<難易>の異同】

<可能>と<難易>はともに事態から見出された実現性を表すという特徴を持つ。第2章2.2節で、<可能>は「行為主体が行為を行い、事態が実現する」という事態が基盤にあり、<難易>は「行為主体が行為を行う過程で容易さ・困難さを感じる」という事態が基盤にあるということを述べた。しかし、このような基盤事態に対してどのような認知過程が関わっているのかということについてはまだ明らかにしていない。事態から実現性を見出す、という認知過程のあり方は<可能>と<難易>で異なるのか、異なるとしたらどのように異なるのだろうか。

3.3節では、<可能>と<難易>の原型的意味とその周辺にある「動的モダリティの可能」(能力可能、状況可能)および「難易」(属性難易、感覚難易)の間に見られる違いを観察し、その言語的ふるまいの違いを、<可能>と<難易>の認知過程の違いの反映として捉えることで、種々の現象を統一的に捉えられることを示す。

【原型的意味から他の意味への意味拡張のあり方という観点から見た<可能>と<難易>の異同】

可能形式も難易形式も1つの形式が複数の意味を表す多義性を有する。この多義的意味はそれぞれの原型的意味(とその周辺の意味)から拡張して得られたものであると考えられる。可能形式で言えば、動的モダリティ(能力可能、状況可能)から認識的モダリティ、あるいは束縛的モダリティへの拡張であり、難易形式で言えば難易(属性難易、感覚難易)から傾向(進展傾向、頻度傾向)への拡張である。可能形式と難易形式の意味拡張にはどのような動機づけが働いているのか、同じ動機づけが働いているのか、それともそれぞれ異なった動機づけが働いているのだろうか。

3.4節では、<可能>に比べ<難易>の意味拡張の動機づけについては十分に明らかになっていないこと、また従来の研究で明らかにされた<可能>の意味拡張の動機づけをそのまま<難易>には適用できないことを指摘し、本論文で<難易>の意味拡張の動機づけに対する説明を提案する。そして、本論文の提案に基づくと、<難易>の意味拡張に関わる諸問題を統一的な観点から説明できることを示す。

この3.3節ではまず、可能表現と難易表現の間に見られる違いとして、「二値的把握とスケール把握」、「人称制限」、「働きかけの直接性の制約」、「叙述対象の制限」、「副詞句との共起制限」という5つの現象を指摘する。そして、これらの違いが、<可能>と<難易>の認知過程の違いという観点から統一的に捉えられることを示す。

3.3.1. 実現性の捉え方：二値的把握とスケール把握

まず<可能>と<難易>では実現性そのものの捉え方が異なっていると見られる現象について指摘する。実現性（事態が現実世界に出現・存在する見込み）の捉え方は、原理的に2つのパターンがありうる。1つは「実現性があるかないか（事態が現実世界に出現・存在する見込みがあるかないか）」という二値的に把握する捉え方である。これを本論文では実現性の「二値的把握」と呼ぶ。もう1つは非実現から実現をスケールで捉え、「実現性が高いか低いか（事態が現実世界に出現・存在する見込みが高いか低いか）」という把握の仕方である。これを本論文では実現性の「スケール把握」と呼ぶ。「実現性がある/ない」という言い方は前者の捉え方を反映し、「実現性が高い/低い」という言い方は後者の捉え方を反映している。そして、<可能>は二値的把握、<難易>はスケール把握を反映していると考えられる。

【<可能>と<難易>の実現性の捉え方】

<可能>： 実現性があるかないか、という二値的把握を反映した概念。

<難易>： 実現性が高いか低いか、というスケール把握を反映した概念。

上記のような実現性の捉え方の違いを反映していると考えられる3つの現象を順に見ていく。

まず1つ目は「程度副詞との共起可否」である。(115)と(116)の対比に示されるように、難易表現は程度副詞と共起できるが、可能表現は共起できない。

(115) この水は (??とても/??非常に/??最も/??やや) 飲める。

(116) この水は (とても/非常に/最も/やや) 飲みやすい。

この事実は、<可能>が二値的把握、<難易>がスケール把握であると考えerことで自然に理解できる。<難易>は実現性をスケールで捉えた概念なので、実現性のスケールの中でどの位置にあるのかを示す程度副詞と共起することは何の問題もない。一方、<可能>は実現性を「あるかないか」の二値的な把握で捉えているため、「??とてもある」や「??ややある」といった表現が成立しないことからわかるように、この二値的把握とスケール上のどの位置にあるかを表す程度副詞の意味がぶつかるため、可能表現は程度副詞と共起できないのだと考えられる。

2つ目は「非実現の想定の可能性」という語用論的な条件に関する現象である。(117)の可能表現は、非文ではないがやや不自然な文である。

(117) a. ?この部屋は住める。

b. ?このネクタイは締められる。

(117)が不自然なのは、「住めない部屋」、「締められないネクタイ」というものが想定しにくい、すなわち「この部屋に住む」という行為が実現しない、「このネクタイを締める」という行為が実現しない」という非実現の想定が困難だからである。したがって、例えば(118)のように、金銭的な条件によっては部屋に住めないということがありうるという状況や、単に「締める」のではなく「簡単に締める」ということに関してはそれが実現しない場合もありうるという状況、など当該の行為が実現しない場合が自然に想定できる例文にすると、可能表現も自然に成立する。

(118) a. 家賃が安いのでこの部屋は学生でも住める。

b. このネクタイは簡単に締められる。

換言すると、本来的に「部屋」は「住む」ものであり、「ネクタイ」は「締める」ものであるため、(117)のように特に条件づけがなされていない場合には、(117)が述べている性質は「当たり前」のことで情報価値がなく、そのために落ち着かない文になっているのだと考えられる。

このような事実は可能表現だけを見ている場合にはわざわざ説明すべき事実ではないように見えるが、同じ実現性を表す(119)の難易表現が、特に「非実現」を想定しなくても自然に成立することを考えると、そもそもなぜ可能表現の方にだけ「非実現」の想定が必要になるのかということが問題になる。

(119) a. この部屋は住みやすい。

b. このネクタイは締めやすい。

これも<可能>が二値的な把握を反映しているのに対して、<難易>はスケール把握を反映しているということから自然に理解できる。<可能>は実現性がある/ないの対立の中で捉えられるので、肯定形で表現される場合は必ず、非実現の想定が必要になるのである。一方<難易>はスケール上で実現性が高い/低いということを述べるものであるため、非実現の想定を必要としない。なお、ここで可能表現と難易表現の容認度の差に影響している「非実現の想定」はあくまで発話を解釈する人間の「想定」の問題であり、語彙的性質あるいは単文レベルで決定されるものではない。あくまで想定の上でのしやすさの問題なので、(117)のような文においても、この発話を受けて聞き手が「住む」という行為が実現しない部屋や、「締める」という行為が実現しないネクタイを想起して解釈する場合（「(あの部屋は住めないけど) この部屋は住める。」、「(あのネクタイは締められないけど) このネクタイは締められる。」）には、自然な文として

捉えられる。語や文の意味だけでは文の容認度が定まらないという意味で、「非実現の想定
の必要性」は語用論的な要因であると言える。

二値的把握とスケール把握の対立が現れる 3 つ目の現象は「類似経験の必要性」である。例えば、まだ市場に出回っていない新製品のカメラを使ってみた感想を求められる、というような場面で、そのカメラの使用に困難さを感じなかった場合、(120)のように可能表現で述べても、(121)のように難易表現で述べても問題はない。

(120) 簡単に使えました。

(121) 使いやすかったです。

しかし、同じように自らの経験を可能・難易表現で述べる場合でも、初めてハンググライダー飛行を体験した感想、あるいは和紙漉き体験をした感想を求められ、同じようにその行為に困難さを感じなかったことを述べようとするときには、(122)のように可能表現を用いて述べることはできても、(123)のように難易表現で述べると不自然になる。

(122) a. 簡単に飛べました。

b. 簡単に漉けました。

(123) a.??飛びやすかったです。

b.??漉きやすかったです。

この対立から「カメラを使う」ということと、「ハンググライダーで飛ぶ」、「和紙を漉く」ということが何らかの点で異質であることが示唆される。これには話し手が「類似経験」を有しているという解釈が自然にできるか否かが関わっていると考えられる。

「ある特定のカメラを使う」ということが初めてであっても、「カメラを使う」という経験自体は我々の日常の中で容易に得られるものであり、話し手がそのような類似の経験をしているという想定は自然である。一方、「ハンググライダーで飛ぶ」、「和紙を漉く」という行為は、その行為自体、あるいはそれに類する経験を我々が日常であるということはきわめて稀であり、話し手がそのような類似経験を重ねているという想定がしにくい。このことと、難易表現が成立するにはスケールを形成する必要があるということが関係する。例えばカメラを使うという行為のこれまでの経験と照らし合わせ、「使う」という行為が実現することを容易にする性質を有する、と判断すれば「使いやすい」となる。逆に「使う」という行為が実現することが困難であるという性質を有する、と判断すれば「使いにくい」となる。このスケールを形成するためには類似経験の蓄積がなければならぬのだと考えられる。したがって、「ハンググライダーで飛ぶ」、「和紙を漉く」といった類似の経験をしにくい行為については、スケールが

形成できず、難易表現が成立しないのである。この類似経験の有無も現実世界の我々の経験と直接的に結びつく語用論的な要因であるため、(124)のように類似経験を有することを明確にし、スケールを形成しうる場合には難易表現も自然に成立するようになる。

(124) a. ハングライダーはパラライダーよりも飛びやすかったです。

b. 1回目よりも2回目の方が漕ぎやすかったです。

一方、＜可能＞の方は「実現性があるかないか」という判断だけでよいので、たとえ1回しか経験のないことであっても「実現した/実現しなかった」という事実があれば、それを基に実現性を述べるのできるのである。

以上、ここまで実現性の捉え方において、＜可能＞は二値的把握、＜難易＞はスケール把握を反映した概念であると考えerことで説明される現象を見た。これに加え以下では、この二値的把握かスケール把握かでは捉えられない事実をさらに4つ指摘する。

1つ目は「人称制限」の問題である。3.2節で指摘したように、(126)の難易表現（の感覚難易）には人称制限が生じる（Inoue, Kazuko 1978、嶋村 1980、渡邊 2007）。一方、(125)の可能表現は人称に関して制限はない。難易表現にだけ人称制限が生じるという事実は、実現性表現を理解する上でどのように考えればよいだろうか。

(125) [私/あなた/彼]はこの機械が使える。

(126) [私/??あなた/??彼]はこの機械（の方）が使いやすい。

2つ目は、「働きかけの直接性の制約」の問題である。(127)も(128)もある条件下での実現性を表しているが、(128)の難易表現だけが不自然になっている。(127)と(128)の違いは行為主体の行為に対する「働きかけの直接性」にある。(127)では、行為主体が直接「シャッター」や「泥汚れ」に働きかけ、「開ける」、「落とす」という行為を行っているが、それに比べて(128)では行為主体の働きかけが間接的になっている。(127)と(128)の対立は、難易表現にだけ、行為主体の働きかけが直接的でなければならない、という「働きかけの直接性の制約」があることを示している。これはなぜだろうか。

(127) a. このシャッターは下の取手を持つと、[開けられる/開けやすい]。

b. うちの洗濯機を使えば、頑固な泥汚れも[落とせる/落としやすい]。

(128) a. このシャッターはリモコンを使うと、[開けられる/??開けやすい]。

b. クリーニング店に出せば、頑固な泥汚れも[落とせる/??落としやすい]。

3つ目は、「叙述対象の制限」の問題である。(129)、(130)が示すように、可能表現も難易表現も「対象」、「道具」、「場所」、「時間」など様々な要素をとりあげ、＜可能

>、<難易>の帰属先として叙述の対象とすることができるが、元の文の「動作主」を叙述対象としうるか否かで違いが生じる。(131)と(132)の対比に示されるように、可能表現は動作主を叙述対象とすることに問題はないが、難易表現は動作主を叙述対象にできない (Inoue, Kazuko 1978、佐藤 1989、渡邊 2007)。なぜ難易表現では、動作主を<難易>の帰属先として叙述対象とすることができないのだろうか。

(129) a. この水は飲める。 (対象)

b. このペンはよく書ける。 (道具)

c. この公園はバーベキューができる。 (場所)

d. 週末は買い物に行ける。 (時間)

(130) a. この水は飲みやすい。 (対象)

b. このペンは書きやすい。 (道具)

c. この公園はバーベキューがしやすい。 (場所)

d. 週末は買い物に行きやすい。 (時間)

(131) 私は泳げる。 (動作主)

(132) ??私は泳ぎやすい。 (動作主)

最後の4つ目は、「副詞句との共起制限」である。程度副詞が可能表現とは共起しないということを確認したが、(133)と(134)の対比に見られるように、逆に可能表現では問題なく共起できる副詞句が難易表現では共起できないという現象が見られる。

(133) この食品は (さっと/スプーンで/3分で/東京で) 食べられる。

(134) この食品は (?さっと/?スプーンで/?3分で/?東京で) 食べやすい。

難易表現が単に「ある事態が容易に実現する」ということを表すのであれば、「この食品をさっと食べることが容易に実現する」、「この食品をスプーンで食べることが容易に実現する」、「この食品を3分で食べることが容易に実現する」、「この食品を東京で食べることが容易に実現する」ということを述べることは何ら意味的に問題ないはずである。しかし、実際には(134)の難易表現は非常に不自然な表現となっている。これはなぜだろうか。

3.3.2. 事態から実現性を見出す認知過程

以上指摘した「人称制限」、「働きかけの直接性の制約」、「叙述対象の制限」、「副詞句との共起制限」については、可能・難易表現が実現性をどのように捉えた表現であるか、という実現性表現としての性質に注目するだけでは説明できない事実である。

このような事実を説明するには、事態から実現性を見出す認知過程という点に注目する必要があると考える。すでに第2章2.2節で、〈可能〉には「行為主体が行為を行い、事態が実現する」という基盤事態、〈難易〉には「行為主体が行為過程において容易さ・困難さを感じる」という基盤事態があることを指摘しているが、ここでは、〈可能〉と〈難易〉という概念の共通点と相違点がより明確になるよう、〈可能〉と〈難易〉の認知過程、および〈可能〉と〈難易〉の意味概念の規定を改めて提示する。

【〈可能〉と〈難易〉の認知過程】

- 〈可能〉： 行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現した（抵抗力に屈した結果事態が実現しなかった）という事態実現の有無の情報を基にした認知過程を反映。
- 〈難易〉： 行為主体の働きかけの過程において得られた事態実現を阻む抵抗力に関わる知覚情報を基にした認知過程を反映。

【〈可能〉と〈難易〉の意味概念の規定】

- 〈可能〉： ある事態が実現するか否かを表す概念。
- 〈難易〉： ある事態の実現に至るまでの過程における抵抗力の大小を表す概念。

まず、【〈可能〉と〈難易〉の認知過程】について、詳しく説明する。ここまで、〈可能〉という実現性の基盤には「行為主体が行為を行い事態が実現する」という事態があると述べていたが、上記の〈可能〉の認知過程の記述では、「行為」を「働きかけ」という用語に替えた点、事態の実現の裏には「抵抗力の克服」という事実があることを指摘している点がこれまでの記述より複雑になっている点である。「私は英語が話せる」という文を例にとると、その認知の基盤には「私が話そうと働きかけると、発音の難しさや人前で話すことの恥ずかしさなどの、その実現を阻む様々な抵抗力を克服し、「私が英語を話す」という事態が実現した」という事態があるということになる。ここで言う「働きかけ」というのは、「事態実現に至るまでの行為主体の主体的な行動」を指し、対象物に力を及ぼす具体的行為だけでなく、「話そうとする」といった意志の発動なども含む広い概念である。意志の発動といったところまでを含むため、その働きかけの主体である「行為主体」が指す範囲も一般的に「動作主」と考えられている範囲より広い。例えば、(135)、(136)に現れる動詞「なる」、「泣く」は非対格動詞であり、主語である「彼」、「君」の意味役割は一般的に「動作主」ではなく、「対象」や「経

験者」とされる。本論文では(135)、(136)の「彼」、「君」は「医者になろうとする」、「泣こうとする」働きかけの主体であるため、「行為主体」とみなす。

(135) 彼は立派な医者になれるだろう。

(136) 君も泣けるときに泣いておいたほうがいい。

また、何が「働きかけ」にあたるかは、何を「事態実現」と見るかによって変わる。例えば、(137)と(138)の例を見てみよう。

(137) 彼の似顔絵を描いてみたが、描けなかった。

(138) 今日は忙しくて全く時間がとれず、彼の似顔絵が描けなかった。

(137)と(138)はいずれも事態が実現しなかったことを表しているが、(137)において実現しなかった事態とは「(完成品としての) 似顔絵を描く」ということであり、「似顔絵を描き終わる」ということが事態の実現にあたる。一方、(138)において実現しなかった事態とは「似顔絵を描くという行為そのもの」であり、「似顔絵を描き始める」ということが事態の実現にあたる。したがって、(137)における働きかけとは、キャンバスに筆で絵具をのせるなどといった、キャンバスに対する具体的な行為であるが、(138)における働きかけとは、「似顔絵を描こうとする」といった意志の発動やそれに至るまでの準備段階の作業（筆を手取るなど）にあたる。「(絵を) 描く」はいわゆる達成動詞（*accomplishment verb*）であるため、上記の説明では「事態実現」を「描き終わり」、「描き始め」というアスペクト的な観点から規定できたが、何が事態の実現にあたるかは、基本的に動詞の語彙的なアスペクトの性質とは独立していると考えられる。例えば、(139)には活動動詞（*activity verb*）が用いられているが、この場合でも何を「事態の実現」と見なすかは話し手や状況次第である。

(139) 私は英語が話せない。

「私は恥ずかしくて今は英語が話せない」という意味であれば、「英語を話すという行為を始める」ということが事態の実現にあたるし、「私は英語であいさつ程度はできるが、円滑にコミュニケーションをとるほどの力はない」という意味であれば、アスペクトの観点から「事態の実現」を規定することはできず、「上手に英語を話す」ということが事態の実現にあたる。

「抵抗力を克服する」の「抵抗力」についても説明が必要である。「抵抗力を克服する」という言い方は、何か特別な障害がある場合を思い浮かべがちである。「人が多くて恥ずかしいので英語が話せない」など、条件的状況可能を表す場合は「恥ずかしさ」が「英語を話す」という事態の実現を阻む抵抗力となっていることがイメージしやすい。しかし、この抵抗力は、「彼はイギリス人なので英語が話せる」のような能力可能

を表す場合にも潜在的に存在する。英語を話せない人にとっては、「文法」、「発音」、「語彙」などの様々な要因によって「英語を話す」ということが阻害されている。能力可能の場合、それらの抵抗力が特定されていないだけで、「彼はイギリス人なので英語が話せる」という文はそのような抵抗力を克服して事態が実現することを表している。逆に言うと、(否定文の) 条件的状況可能は、多様にありうる抵抗力の中の1つを特定して述べた表現であることになる。

つづいて<難易>の認知過程について説明する。「この水は飲みやすい」という文を例に挙げると、「行為主体がこの水を飲もうと働きかけている過程において、事態を阻む抵抗力に関わる知覚(例えば、のどごしがよい、とか温度がちょうどよいといった情報)を得た」という過程がある。<難易>における「働きかけ」も<可能>の場合と同様で、対象に力を及ぼす行為に限らない。(140)において知覚情報を得ているのは、「飲む」という行為の最中であり、「飲む」という行為が働きかけにあたる。一方、(141)が表している困難さとは、「飲む」という行為を行う前に感じる心理的抵抗感であり、ここでの「飲みにくい」というのは「手に取りにくい」、「買いにくい」といったような意味である。この場合の働きかけとは、「飲もうとする」といった意志の発動である。

(140) この水はカルキのにおいが強くて飲みにくい。

(141) この水は非常に高価なので普段の生活では飲みにくい。

また、これまで「行為主体が行為を行う過程で感じる容易さ・困難さを感じる」としていた、「容易さ・困難さ」を「事態実現を阻む抵抗力に関わる知覚情報」とし、より抽象化して表している。これは、容易さとはすなわち事態を阻む抵抗力に関わる知覚が感じられないことを表しており、困難さとは事態を阻む抵抗力に関わる知覚が強く感じられるということを表している、という考え方に基づいている。

上記のように<可能>と<難易>の認知過程を記述することで、<可能>と<難易>がともに行為主体の働きかけと抵抗力との関係の中で見出されるものである、という共通点が明確になる一方で、両者の違いも明らかになる。<可能>と<難易>の認知過程の違いは、「認知の局面」と「情報の質」にある。<可能>は、働きかけの結果の段階(事態実現の段階)で得られる「事態実現の有無の情報」を基にしているのに対して、<難易>は働きかけの過程の段階(事態実現以前の段階)で得られる「知覚情報」を基にしている。すなわち、<可能>は事態が実現した段階において(事態実現の有無を)観察することで見出されるものであるが、<難易>は事態が実現する以前の働きかけの段階において知覚することで見出されるものであると言える。このように、<可能>と<難易>を対比させた形で両者の認知過程の違いを明確に提示した

研究はこれまでなかったが、それぞれの認知過程の規定については先行研究の指摘に負うところが大きい。〈可能〉については、〈可能〉を定義する際に、日本語の研究でも、中国語の研究でも、「行為」と「その結果、行為が実現するか否か」といった観点から規定されることが多い（寺村 1982、尾上 1998、張威 1998、伊藤 2003、渋谷 2006）¹⁴。「行為の結果としての実現」を〈可能〉の意味規定の中心に据えている点は本論文の見方と一致する。一方、〈難易〉については〈可能〉ほど、〈難易〉とは何かということを明確に規定している研究はないが、その中でも日本語の難易文を分析している渡邊（2007:186）が「難易」（渡邊の用語で言うと「可能難易文」）の意味を「行為者の立場に立って当該の行為に対して感じる容易さ/困難さを述べる」ものであるとし、また南（2007:51）が英語の **Tough** 構文を分析する中で〈難易〉という概念の一側面として「ある行為の難しさや容易さは、その行為の最中に行為者が経験するものである」と指摘しており、本論文の〈難易〉の認知過程と近い見方を示している。

上述のような〈可能〉と〈難易〉の認知過程の違いに基づいて、【可能と難易の意味概念の規定】を行うと、〈可能〉は「ある事態が実現するか否かを表す概念」となり、〈難易〉は「ある事態の実現に至るまでの過程における抵抗力の大小を表す概念」となる。〈可能〉と〈難易〉がともに実現性（事態が現実世界に出現・存在する見込み）

¹⁴ 「日本語の可能態の表している中心的な意味は、「何々をしようと思えば、その実現についてさまたげるものはない」ということだといってよいかと思う。」

（寺村 1982:269）

「動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中に存在する。」

（尾上 1998:93）

「可能表現の根底には、必ず有情物の「意図性」が存在する。（…）動作主の意図がその実現に関わる主体的または客体的条件によって現実に実現できれば、「可能」の意味を表すこととなるし、実現できないとすれば「不可能」の意味を表すこととなる。」

（張威 1998:255）

「ある動作・行為が可能であるとは、話者の想像した世界でその動作・行為が実現していること。（但し、話者の想像した世界は、現実世界に基づいて想像したものでなければならず、現実世界からあまりかけ離れたものであってはならない。）」

（伊藤 2003:6）

「可能 (potential)」とは、「人間や動物などの有情物（ときに非情物）が、ある動きを意志的に行おうとするとき、それを実行することができる（肯定文の場合）/できない（否定文の場合）」といった意味を表す。」

（渋谷 2006:59-60）

を表す表現であるという共通点を有することは、これまで何度も確認してきたが、このように記述することで<可能>と<難易>の違いがより明確になった。<可能>は、「事態が実現するか否か」という直接的に事態の実現と関わる概念であるのに対して、<難易>は実現に至るまでの過程の抵抗力を述べることで間接的に事態の実現のあり方に関わる概念である（抵抗力が大きければ事態実現の見込みが低く、抵抗力が小さければ事態実現の見込みが高いということを含意する）。この違いは例えば、以下の対比に現れる。(142)の可能表現では前件で「判別できない」と言うことで、「この文字を判別する」という事態が実現しないことを述べているのに、後件で「判別した」という行為が実現したことを述べているため矛盾した文になる。一方、(143)の難易表現では「判別しにくい」と「判別した」は矛盾しない。これは、「判別しにくい」はあくまで「判別する」という働きかけ過程における抵抗力の大きさを表しているだけで、事態そのものの実現性については直接的には言及していないからである。

(142) ??この2つの文字は判別できないが、なんとか判別した。

(143) この2つの文字は判別しにくいが、なんとか判別した。

上述のような「事態から実現性を見出す認知過程」における<可能>と<難易>の違いを導入することで、「人称制限」、「働きかけの直接性の制約」、「叙述対象の制限」、「副詞句との共起制限」という4つの現象が自然に説明できることを次節以降で見ていくが、次節に移る前に「実現性の捉え方」と「事態から実現性を見出す認知過程」との関係について説明を加えておく。ここで述べた<可能>と<難易>の認知過程の違いは、「二値的把握かスケール把握か」という実現性の捉え方の違いが生じる原因になっていると考えられる。<可能>の認知の基になる「事態実現の有無」は原理的に「あるか、ないか（実現したか、実現しなかったか）」でしか捉えられない情報であるため、<可能>の実現性の捉え方も二値的な把握になる。一方、<難易>の認知の基になる「事態実現を阻む抵抗力に関わる知覚情報」は多様なバリエーションがありえ、抵抗力の大きさにも程度差があるため、実現性の捉え方もスケール把握になるのだと考えられる。したがって、「二値的把握かスケール把握か」という対立で捉えられた現象は、最終的には事態から実現性を見出す認知過程という観点に還元されるものであると考える。

3.3.2.1. 人称制限

まずは、(144)、(145)の「人称制限」の問題について見る。

(144) [私/あなた/彼]はこの機械が使える。

(145) [私/??あなた/??彼]はこの機械（の方）が使いやすい。

この難易表現に見られる人称制限は(146)のような感情・感覚形容詞を述語とする文に典型的に見られる特徴である（西尾 1972、寺村 1982）。3.2 節でも述べたように、難易表現（の感覚難易）は、感情・感覚形容詞と近い性質を持つ。

(146) [私/??あなた/??彼]は[痛い/寒い]。

cf. [私/あなた/彼]は[大きい/優しい]。

人称制限のほか、(147)のように感情・感覚形容詞は接尾辞「がる」と共起することが1つの特徴であるが、(148)が示すように難易表現も「がる」と共起することができるという事実からも、難易表現と感情・感覚形容詞の近さが確認される。

(147) 彼は[痛がっている/寒がっている]。

cf. 彼は[??大きがっている/??優しがっている]

(148) a. 太郎は泳ぎにくがっている。 (Inoue, Kazuko 1978:126)

b. うちのおじいさんは水を飲みにくがっている。 (嶋村 1980:105)

これらの現象は、難易表現が感情・感覚形容詞と同様に知覚に関わる表現であるということの意味している。この事実は、<難易>の認知が知覚情報に基づくという先ほどの<難易>の認知過程の記述と合致するものである。

3.3.2.2. 働きかけの直接性の制約

つづいて、(149)、(150)の対立に見られる「働きかけの直接性の制約」の問題について考える。

(149) a. このシャッターは下の取手を持つと、[開けられる/開けやすい]。

b. うちの洗濯機を使えば、頑固な泥汚れも[落とせる/落としやすい]。

(150) a. このシャッターはリモコンを使うと、[開けられる/??開けやすい]。

b. クリーニング店に出せば、頑固な泥汚れも[落とせる/??落としやすい]。

これは、<難易>が働きかけ過程において得られる知覚情報を基にした認知であるということが関わっている。<難易>は働きかけ過程における知覚情報を基にした認知なので、<難易>の基盤事態における行為主体は同時に知覚主体でなければならないという制約がかかる。したがって、行為主体の働きかけが間接的になり、知覚情報を

得にくいような場合には、行為主体ではあっても知覚主体とは認識しにくいいため、難易表現が成立しにくくなる。(149a)では行為主体が「シャッター」に対して直接手をかけ、「開ける」という働きかけをすることになるし、(149b)でも実際にものを洗う主体は「洗濯機」であるが、汚れが落ちるまでの過程において、洋服を洗濯機に入れ、洗濯機をまわす、洗われた洋服を取り出し干す、などの知覚情報を得るような働きかけ過程が想定できる。このようにいずれも抵抗力を知覚する働きかけ過程が想定できる。それに対して、(150a)は行為主体が行う行為はリモコンを押すというだけで、(149a)に比べシャッターに対して直接的な働きかけはしていない。同様に(150b)もクリーニング店に洋服を出してしまえば、次に受け取った時には汚れは落ちており、「泥汚れを落とす」過程における行為主体の働きかけの存在は希薄である。このように知覚情報を得るような行為主体の働きかけ過程がない場合には、難易表現は不自然となる。一方、可能表現にはこのような制約は生じない。なぜならば、＜可能＞の認知が関わるのは「事態実現の有無」という実現段階であるため、その過程のあり様は問題にならないからである。

3.3.2.3. 叙述対象の制限

次に、難易表現は動作主を叙述の対象とすることができないという「叙述対象の制限」の問題について考える。Inoue, Kazuko (1978)、佐藤 (1989)は、(151)が不自然なのに対して(152)のような文は成立することなどから、「自動詞から難易語を派生する場合、主語の他に少なくとも1つ（外部項になる）NPがなければならない」という統語的規則によって(151)の不自然さを説明している。

(151) ??私は泳ぎやすい。

(152) 私はこのプールが泳ぎやすい。

(佐藤 1989:77-78)

しかし、(153)に示されるように付加される要素は項になってなくてもよく、Inoue, Kazuko (1978)、佐藤 (1989)の述べるような統語的な規則からは難易表現が成立する環境をうまく捉えきれない。

(153) a. 私はちょうど今ぐらいの水温だと泳ぎやすい。

b. 私は君がコーチをしてくれれば泳ぎやすい。

(渡邊 2007:200)

(153)の例を挙げる渡邊 (2007)は、難易表現 (傾向解釈の文は除く) について、「叙述対象は動作主 (渡邊の用語では「行為主体」) であってはならない」という特徴があることを指摘し、(153)は「ちょうど今ぐらいの水温だと」、「君がコーチをしてくれば」という条件節が叙述の対象になっているため、自然になるのだと説明している。叙述の対象を項に限定しないことで、動作主が顕在する難易表現の成立環境を捉えることができている。本論文も難易表現が成立する文環境の記述としては、渡邊 (2007)の見方の方を支持するが、そもそもなぜ難易表現は動作主を叙述対象にできないのかということが問題として残っている。Inoue, Kazuko (1978)、佐藤 (1989)が主張するような統語的な規則では十分に説明できない以上、意味的な説明が必要になるが、これについて渡邊 (2007)は何も説明を与えていない。意味的に考えたときにまず考えられるのが、(152)のように場所を限定したり、(153)のように条件句を付加したりすることは比較基準を示すことになるので、スケール把握に必要な比較基準の有無という、先の「実現性の捉え方」の問題として考えることができそうである。しかし、比較基準を明示した(154)のような例は不自然であり、スケールを形成すればよいというわけでもないことがわかる。

(154) a.??私は彼より泳ぎやすい。

b.??私は 10年前より泳ぎやすい。

ここで生じている制約は「難易表現では、知覚情報を生じさせる抵抗力の源が特定されていなければならない」という意味的な制約から生じていると考える。〈難易〉は、「行為主体の働きかけの過程において得られた事態実現を阻む抵抗力に関わる知覚情報を基にした認知過程を反映」していると記述したが、難易表現が主題をとる場合、その主題は基本的にその知覚情報を生じさせる抵抗力の源であると解釈される。元の文の動作主は行為を行う行為主体であると同時に、知覚を経験する知覚主体であるので、その知覚主体自身を、知覚情報を生じさせる抵抗力の源として解釈することができないのである。したがって、動作主以外の事物、条件によって抵抗力の源を特定させる必要がある¹⁵。(151)ではその知覚情報を生じさせる抵抗力の源が明示されておら

¹⁵ このように述べると、「私は寒い/痛い」などの感情・感覚形容詞文が経験者を主題にとった文が自然に成立する (とされている) ことが問題になる。ただし、筆者の内省ではそもそも「私は寒い/痛い。」という文も、「寒いなあ」、「痛い！」などの「私」を明示しない場合や「北海道は寒い/この注射は痛い」など事物の性質を述べる場合に比べると、やや不自然に感じる。「私は寒い/痛い」のような文が成立する場合を考えると、「私は (コートを着ていないので) 寒い」や「(君は痛くないかもしれないけど) 私は痛い」のように、何らかの条件下での状態を表している場合であると考えられ、難易表現が自然になる環境と本質的には同じであると考えられる。難易表現でも (泳ぎながら) 「うーん、なんだか

ず、(154)の「彼」、「10年前」というのも、「泳ぐ」ことに関する抵抗力に関わる知覚情報を生じさせる存在ではないため不自然な文となっているのである。一方、(152)、(153)では「このプール」、「(ちょうど今ぐらいの)水温」、「君がコーチをしてくれる(ということ)」は「泳ぐ」という行為を行う上での抵抗力に関わる要因とみなすことができ、それが知覚情報を生じさせる源になりうるので難易表現が成立している。「なぜ難易表現は動作主を叙述対象にできないのか」という問題に再度端的に答えると、難易表現における叙述対象とは、働きかけ過程において得られる知覚情報を生じさせる抵抗力の源でなければならず、したがって知覚主体である動作主は難易表現の叙述対象になれない、ということになる。

3.3.2.4. 副詞句との共起制限

最後に(155)、(156)に見られる「副詞句との共起制限」について考察を行う。

(155) この食品は (さっと/スプーンで/3分で/東京で) 食べられる。

(156) この食品は (?さっと/?スプーンで/?3分で/?東京で) 食べやすい。

これは一見、難易表現が形容詞文であるため、一般的に形容詞と共起しない副詞句は難易表現でも共起しない、という品詞の問題のようにも考えられる。しかし、難易表現と副詞句との共起可否の関係はそれほど単純ではない。(156)では不自然であった、行為のありさま(様態、手段、期限)や行為が行われる場所にかかわる副詞句も、(157)のような例では比較的容認度が高い。

(157) a. この名刺ケースは (素早く) 取り出しやすい。 (様態)

b. このペットボトルは (片手で) 飲みやすい。 (手段)

c. このジーンズは (短時間で) 乾かしやすい。 (期限)

d. このタブレット端末は (外で) 使いやすい。 (場所)

(158)に示されるように、結果副詞も比較的容認されやすい。

(158) a. この洋服は (きれいに) たたみやすい。 (結果)

b. このカボチャは (薄く) 切りやすい。 (結果)

泳ぎにくいなあ」など、「私」を明示しない形や、「君は泳ぎにくいみたいだけど、私は泳ぎやすいよ」のように対比項をつくると自然に成立するので、ここで論じている「知覚情報を生じさせる抵抗力の源が特定されていなければならない」という制約は感情・感覚を表す表現一般に拡張される問題である可能性がある。ただしこの問題は、本論文の射程を超えるためこれ以上深く立ち入らない。

それに対して、(156)の類例となるような難易表現と共起しにくい副詞句を探すと、(159)では、「様態」、「手段」、「期限」、「場所」を表す副詞句と共起した場合、やや不自然さが感じられる。さらに(160)に現れる「期間」や「回数」など、行為の量（時間量としての期間、動作量としての回数）に関わる副詞句は難易表現と共起すると非常に不自然になる。

- (159) a. この洋服は (?素早く) たたみやすい。 (様態)
 b. このカボチャは (?片手で) 切りやすい。 (手段)
 c. この時計は (?5分で) 分解しやすい。 (期限)
 d. その食品は (?ベッドの上で) 食べやすい。 (場所)
- (160) a. この万年筆は (??20年) 使いやすい。 (期間)
 b. この割り箸は (??2回) 使いやすい。 (回数)

因みに、(161)～(163)が示すように可能表現はいずれの副詞句とも自然に共起し、副詞句間に容認度の差は見られない。

- (161) a. この洋服は (素早く) たためる。 (様態)
 b. このカボチャは (片手で) 切れる。 (手段)
 c. この時計は (5分で) 分解できる。 (期限)
 d. その食品は (ベッドの上で) 食べられる。 (場所)
- (162) a. この万年筆は (20年) 使える。 (期間)
 b. この割り箸は (2回) 使える。 (回数)
- (163) a. この洋服は (きれいに) たためる。 (結果)
 b. このカボチャは (薄く) 切れる。 (結果)

難易表現と副詞句との共起関係について、ここで説明すべき対立は以下の2つである。1つは、同じ「様態」、「手段」、「期限」、「場所」を表す副詞句でも、容認度に差があるという対立である（(156)、(159) vs. (157)の対立）。もう1つは、「様態」、「手段」、「期限」、「場所」、「結果」を表す副詞句とは比較的共起しやすい（場合がある）のに対して、「期間」、「回数」を表す副詞句とは共起しにくいという対立である（(157)、(158) vs. (160)の対立）。

上記の2つの対立に共通して関わっている要因は、「副詞句+動詞」をひとまとまりの行為とみなせるか否かということである。難易表現は「副詞句+動詞」をひとまとまりの行為とみなせる場合にのみ、これらの副詞句と共起できる。これは、〈可能〉が事態実現段階での認知であるのに対して、〈難易〉が働きかけ段階での認知であるということが関係している。〈可能〉の場合、例えば「ある食品を食べたら、結果的

にさっと食べるという行為が実現した」、「洋服をたたんだら、結果的に素早くたたむという行為が実現した」という結果を基に<可能>が見出される。一方、<難易>の認知過程を考えると、例えば「ある食品をさっと食べようとする過程で、抵抗力を感じなかった」、「洋服を素早くたたもうとする過程で、抵抗力を感じなかった」という認知過程が必要になるが、「食品をさっと食べる」、「洋服を素早くたたむ」という行為をひとまとまりの行為と認識しにくいために、(156)、(159)が不自然になるのである。つまり、事態実現段階から事態実現を捉える場合、その事態実現は単なる「結果」であるため、その行為が行為主体にとってどういうものであるのかということは問題にならないが、働きかけ段階から事態実現を捉える場合、その事態実現は「結果」ではなく行為の「目的」であり、難易表現の場合、行為主体にとっての目的として解釈されなければならないということである。(157)の「名刺入れを素早く取り出す」、「ペットボトルを片手で飲む」、「ジーンズを短時間で乾かす」、「タブレット端末を外で使う」という行為は、「素早く」、「片手で」、「短時間で」、「外で」ということが行為の目的として捉えられやすく、「副詞句+動詞」でひとまとまりの行為とみなされやすいため、難易表現と自然に共起しているのだと考えられる ((156)、(159) vs. (157)の対立の説明)。

このように考えると、結果副詞が共起しやすく、「期間」や「回数」を表す副詞とは共起しにくいことも自然に理解できる。(158)の「結果副詞+動詞」という組み合わせは、基本的にその結果を目的にして行為主体が行為を行うという解釈をしなければならない¹⁶。すなわち「洋服をきれいにたたもうとする」、「カボチャを薄く切ろうとする」ということが自然と想定されるため、難易表現が自然に成立するのである。それに対して、「期間」や「回数」とは、行為と一体となるような情報ではなく、その行為が終了した時点で付随的に生じるものである。したがって、「副詞句+動詞」をひとまとまりの行為として捉えることが非常に難しいため、難易表現と共起しにくいのである ((157)、(158) vs. (160)の対立の説明)。

ただし、何が意図的なひとまとまりの行為、すなわち目的としての行為とみなせるか、ということは多分に我々の現実世界の経験やその場の状況という言語外的要因に左右されるものである。例えば、洋服をたたむ速さを競う大会で洋服を選ぶ場面、片手を怪我しているがどうしても料理でカボチャを使わないといけないのでなるべく切

¹⁶ 草山・一戸 (2005)は、日本語の行為動詞派生の結果構文は、行為と結果との間に「目的関係」があると一般的に認識されなければならない、という一般化をし、日本語の行為動詞派生の結果構文の背景には「目的関係」が必ずあることを指摘している。

りやすいカボチャを選んでいるという場面、職人たちが時計を分解し 5 分ぴったりに近いタイムで分解した人が優勝するというような大会で参加者が分解する時計を選ぶ場面、何らかの事情でベッドから降りられない人のために食べやすい食品を薦める場面などを想定すると、(164)のように難易表現の容認度が上がる。これは、「素早くたたむ」、「片手で切る」、「5 分で分解する」、「ベッドの上で食べる」という行為が文脈によって 1 つのまとまった行為とみなしやすくなったためである。

- (164) a. この洋服ならきつと素早くたたみやすいよ。 (様態)
b. こっちの小さめのカボチャなら片手で切りやすい。 (手段)
c. このタイプの時計が一番 5 分で分解しやすい。 (期限)
d. 箸を使わないこの食品ならベッドの上で食べやすい。 (場所)

(164)に比べると容認度が上がりにくいものの、「期間」や「回数」を表す副詞句についても、(165)のような例文では比較的容認度が高くなる。この場合、「4 年間」、「10 回」というのが、「大学に通って卒業する」、「授業に出席して単位をもらう」ということの条件として解釈でき、その具体的期間や回数を達成することを目的に行うという状況が想定しやすいために、容認度が高くなっているのだと考えられる。

- (165) a. (神戸と大阪のどちらからが大学に通いやすいかという質問に対して)
(?)神戸よりも大阪からの方が 4 年間通いやすい。 (期間)
b. (単位を取得するためには最低 10 回出席しないとイケない状況で、授業を選ぶという場面で)
(?)この授業は午後からの開始なので 10 回出席しやすい。 (回数)

以上、この 3.3 節では、「二値的把握とスケール把握」、「人称制限」、「働きかけの直接性の制約」、「叙述対象の制限」、「副詞句との共起制限」という可能表現と難易表現の違いを示す 5 つの現象の存在を指摘し、これらの現象が「事態から実現性を見出す認知過程」における<可能>と<難易>の認知過程の違いという観点を導入することで統一的に説明できることを示した。<可能>と<難易>の認知過程の異同を再度まとめる。<可能>と<難易>の基盤には、行為主体の働きかけと事態実現を阻む抵抗力という関係で捉えられる事態があり、その事態から見出される実現性を表す概念であるという点では共通する。一方で、<可能>と<難易>の認知過程は、「情報の質」と「認知の局面」において相違点がある。<可能>は事態実現の有無という情報を基にしており、それは事態実現段階で認知されるのに対して、<難易>は(事態実現を阻む抵抗力に関わる)知覚情報を基にしており、それは事態実現に至るまでの働きか

けの過程段階で認知されるものである。

3.4. <可能>と<難易>の対照：意味拡張のあり方という観点

3.3 節では「事態から実現性を見出す認知過程」という観点から、<可能>と<難易>の違いを論じたが、この 3.4 節は、<可能>と<難易>に関わるもう 1 つの過程、すなわち、原型的意味から他の意味への拡張という意味変化・意味拡張の過程から<可能>と<難易>の違いを明らかにすることを目指す。以下に、本論文で用いる<可能>と<難易>の分類を示した【表 3】と【表 5】を再掲する。

【表 3 日本語と中国語の可能形式の意味分布】

	非モダリティ		動的モダリティ		
	実現可能	能力可能	状況可能		
			条件的 状況可能	受動的 状況可能	自発的 状況可能
「られる」	○	○	○	○	×
「ことができる」	○	○	○	○	△
“能”	△	○	○	○	△
“会”	×	○	×	×	○
“可以”	×	○	○	○	×

束縛的モダリティ	認識的 モダリティ
許可可能	認識可能
×	×
×	×
○	△
×	○
○	×

【表5 日本語と中国語の難易形式の意味分布】

	難易		傾向	
	感覚難易	属性難易	進展傾向	頻度傾向
「やすい」	○	○	○	○
「にくい」	○	○	○	○
「づらい」	○	○	△	△
“容易”	×	○	○	○
“好”	×	○	△	△
“难”	×	○	△	△

可能表現は動的モダリティ（能力可能・状況可能）から束縛的モダリティ（許可可能）、あるいは動的モダリティ（能力可能・状況可能）から認識的モダリティ（認識可能）という意味変化の一方向性があることが類型論的研究によって明らかになっている（Bybee et al. 1994、Heine & Kuteva 2002）。一方、難易表現の方は明確に意味変化の過程について一般化した研究は管見の限り見当たらないが、近藤（2005, 2013）が「にくい（にくし）」の語史を分析し、まず難易を表す用法が見られた後、傾向を表す用法が見られるようになったことを指摘しているほか、井上次夫（1997）、渡邊（2007）が現代語の共時的な分析の観点から、傾向の意味は難易から拡張して得られたものであるという見方を提示している。可能・難易形式ともに原型的な意味である能力可能と属性難易では行為の実現に関わる意味を表していたものが、意味拡張を経た上で他の意味を獲得し、結果として多義性を有するようになったという点では共通する。＜可能＞と＜難易＞の意味拡張における大きな違いは、＜可能＞は束縛的な意味、あるいは認識的な意味という話し手が関わる意味までを表すのに対して、＜難易＞はそのような意味を表さないという点である。Narrog（2009:71）が日本語の難易形式「やすい」、「にくい」、「づらい」も周辺的なモダリティ形式として見なしようという見方を示しながらも、分析対象として取り上げられておらず、また一般的にモダリティ論の中で難易表現が議論の射程に入らないのは、難易形式が束縛的・認識的な意味を表さないからであろう。原理的に考えると可能形式が「～することができる」という意味から「～する実現性があると話し手が認識する」という意味に拡張したのと同じように、難易形式も「～することが容易だ」という意味から「～する実現性が高いと話し

手が認識する」という意味に拡張することもありえそうである。しかし、(166)に示されるように、実際には難易表現がそのような意味を表すことはない。

(166) #彼は家にいやすい。(「彼が家にいる実現性が高い」という意味で)

「(可能形式は表せるのに)なぜ難易形式は認識的な意味を表さないのか」という問いは、これまでのモダリティ研究の中では問題として取り上げられることさえなかった問いであるが、<可能>と<難易>を統括して扱おうとする本論文においては重要な問いである。この問いの答えになりうる解答としては、「<可能>と<難易>で意味拡張のあり方が異なるから」という答え方が考えられる。本節はこの問いから出発し、<可能>と<難易>の意味拡張の動機づけの違いについて明らかにすることを目的とする。まずは、3.4.1節で先行研究において<可能>と<難易>の意味拡張がどのように説明されているかを見る。<可能>については、Sweetser (1990)のメタファーによる意味拡張の説明があるが、<難易>については先行研究では十分に説明されていないことを確認する。3.4.2節では、ここで確認した「①難易形式は認識的な意味を表さない」という事実に加え、<難易>の意味拡張に関わる事実をもう1つ新たに指摘し、これらの事実を自然に理解するための意味拡張の動機づけの説明を提案する。

3.4.1. 可能形式の意味拡張に対する先行研究の説明

可能形式の意味拡張については、Sweetser (1990)がモダリティ形式一般に見られる特徴として、その意味拡張の動機づけを説明している。Sweetser (1990)は<可能>を含むモダリティ形式の根源的モダリティ (root modality) (本論文で言う動的モダリティと束縛的モダリティをあわせたモダリティ、すなわち非認識的モダリティ) の用法と認識的モダリティの用法は全く無関係なのではなく、認識的モダリティが根源的モダリティのメタファー写像によって得られるものであると説明している。これについて Sweetser (1990)が挙げている can の例で説明する。英語の可能形式 can も(167)のような根源的モダリティと(168)のような認識的モダリティを表しうる。

(167) I can lift fifty pounds.

[潜在的な能力が私に 50 ポンド持ち上げることを可能にする。]

(168) You can't have lifted fifty pounds.

[前提の集合が私に、あなたが 50 ポンド持ち上げた結論づけることを不可能にする。]

(澤田治美訳 2000:86-87)

Sweetser (1990)によると、(167)の *can* は社会物理領域における主語の潜在能力という力を表しており、文全体としてはその力によって「50ポンドを持ち上げる」という行為が可能になることを表している。一方、(168)の *can* は話し手の認識領域における前提の集合という力を表しており、文全体としては、その力によって話し手の結論付けが不可能になることを表している。根源的モダリティと認識的モダリティの意味は全く異なるように見えるが、「ある力が何らかのものを(不)可能にする」という類似の構造が見出される。〈可能〉をはじめとするモダリティ形式の意味拡張はこのような類似構造を持つ社会物理領域と認識領域の間でのメタファー写像によって実現すると説明される。このように考えることで、根源的モダリティと認識的モダリティを統一的に扱うことができるだけでなく、このような分析は、根源的モダリティにおいて表す強制力の強さと認識的モダリティにおける認識的な推論の強さの平行性が捉えられる点や(例えば、*may*「～でもいい」〈*must*「～しなければならない」という強制力の力関係が、*may*「～かもしれない」〈*must*「～にちがいない」という推論の強さの力関係と並行している)、根源的モダリティから認識的モダリティへという変化・拡張の一方向性がうまく捉えられる点¹⁷に利点がある。日本語の可能形式は認識的モダリティを表さないが、中国語の可能形式でも英語と同様に1つの可能形式が根源的モダリティと認識的モダリティを表しうる((169))。この中国語の可能形式で起きている現象も先の英語の議論と同じであると考えられ、本論文も可能形式の意味拡張は社会物理領域から認識領域へのメタファー写像に動機づけられている、という見方を採用する。

(169) a. 他 会 说 英语。 (根源的モダリティ)

彼 HUI 話す 英語

「彼は英語を話せる。」

b. 他 会 在 家。 (認識的モダリティ)

彼 HUI いる 家

「彼は家にいるだろう。」

¹⁷ メタファーは我々人間にとってより基本的な概念を起点領域とし、それによって抽象的な理解しにくい概念(目標領域)を理解しようとする人間の認知の営みであるとされる(Lakoff & Johnson 1980)。したがって、障害物や力が本来的に存在する社会物理領域から本来そのようなものが存在しない認識領域へ拡張するのは自然であるが、その逆は不自然である。

3.4.2. 難易形式の意味拡張に対する先行研究の説明

可能形式の意味拡張がメタファー写像に動機づけられていると考えることで、可能形式の多義的意味が統一的に捉えられることを確認したが、それでは難易形式の意味拡張も同じようにメタファー写像と考えることができるだろうか。少なくとも可能形式の議論をそのまま適用することは難しいであろう。まず、難易形式で表される難易と傾向はともに社会物理領域におけるものであり、社会物理領域から認識領域という関係は見いだせない。また、例えば(170)の(属性)難易(行為の過程における抵抗力が小さいということ)と(頻度)傾向(事態が実現する頻度が多いということ)の間に概念構造の類似性を見出すことも難しいからである。

(170) a. この本は読みやすい。 (難易)

b. この交差点は事故が起こりやすい。 (傾向)

このようなことから難易形式の意味拡張は、可能形式とは異なる認知的動機づけによって支えられているという可能性を考えるべきであると思われるが、難易表現の先行研究においてそのような認知的な動機づけまで踏み込んで説明がなされているものは管見の限り存在しない。難易形式の拡張の方向性について言及している研究はいくつか存在し、井上次夫(1997)、渡邊(2007)は、難易から傾向へ意味拡張していると見ている。井上次夫(1997)は難易(井上の用語では「容易性」)から傾向が拡張する契機として、難易が表す事態の容易性と、事態生起の頻度の高さ(=頻度傾向)および事態が進展する速度の速さ(=進展傾向)の概念的な近さを指摘している。

「～やすい」の一次的意味(プロトタイプ)は容易性であり、二次的意味(プロトタイプの拡張)が傾向である。

(井上次夫 1997:106)

コトの容易性は、その容易性においてコトの生起する頻度の高さ、コトの進行する速度の速さと結びつく。(…)つまり、容易性は傾向へとたやすく転化する。この意味で、容易性は傾向の意味を派生すると言うことができる。

(井上次夫 1997:108)

渡邊(2007:224)は「難易から確率(本論文で言う「傾向」)に意味が拡張されたと見られる」という見解を示し、傾向、特に進展傾向と難易の間に意味的な接点があるこ

とを指摘している。ただし、いずれの研究も難易と傾向の概念的な近さには言及しているが、具体的にどのような動機づけが働いているのかについては触れていない。

3.4.3. <難易>の意味拡張に関わる問題とその動機づけ

以上のように、可能形式の意味拡張に対して、難易形式の意味拡張の認知的動機づけについてはこれまで十分に検討されてこなかった。この 3.4.3 節では、難易形式の意味拡張を動機づけるものを明らかにしたい。まず、難易形式の意味拡張に関わる問題として、先に指摘した「①難易形式は認知的意味を表さない」という事実に加え、さらにもう 1 つ事実の指摘をしておく。それは、3.2.2.2 節でも述べたが、(171)が示すような、意味拡張における容易さを表す形式と困難さを表す形式の非対称性が存在するという事実である。

(171) a. この交差点は事故が起こりやすい。(≒事故が起こることが多い)

b.(?)この交差点は事故が起こりにくい。(≒?事故が起こることが少ない)

先行研究では「やすい」に比べ、「にくい(づらい)」は頻度傾向を表さない(表しにくい)とされている(渡邊 2007、鈴木 2013)。鈴木(2013)は傾向読みができるのは、「やすい」のみであるとし、渡邊(2007:211)は「にくい」は全く使えないわけではないが「やすい」にくらべて明らかに許容度が落ちている」と述べ、鈴木(2013)ほど強い主張ではないが、困難さを表す形式の方が頻度傾向を表しにくいという事実を認めている。程度差であったとしても、同じ難易形式の中で、困難さを表す形式の方が容易さを表す形式よりも頻度傾向を表しにくいのは事実である。このような非対称性はなぜ生じるのであろうか。

本論文では、「①難易形式は認知的意味を表さない」、「②容易さを表す形式と困難さを表す形式の間で頻度傾向の意味の定着に差がある」という 2 つの事実を自然に捉えられる認知的動機づけについて考えたい。その動機づけとして、本論文ではメトニミーによる拡張という考え方を提案したい。主張は以下の 2 点である。

【難易形式の意味拡張の認知的動機づけ】

- a. 難易形式は「難易」→「進展傾向」→「頻度傾向」の順に拡張している。
- b. 難易形式の意味拡張は同一の事態のフレームを基にしたメトニミーに動機づけられている。

まず、メトニミーと意味拡張の関係について説明する。Taylor (2003)はカテゴリーの意味拡張のプロセスにおいて、メタファーとメトニミーを重要な要素の2つとして挙げ、さらに「メトニミーにとって不可欠なのは、ある概念的な枠組みの中で同時に生じる二つの事象の間に関係を確立できるかどうかに着目する。(…) こうした広い意味でメトニミーを解釈すると、メトニミーは、意味拡張に関してもっとも基本的なプロセスの一つであって、おそらくは、メタファーよりも基本的であることがわかるだろう。」(Taylor 2003/辻幸夫ほか訳 2008:197)と述べている。一般的にメタファーが領域間の類似性に基づく比喩であるとされるのに対して、メトニミーは隣接性に基づく比喩であるとされる。例えば、「一升瓶を飲む」で「一升瓶の中の酒を飲む」ということを表せるのは容器と中身が隣接することに基づく。また、「ソニーを買った」で「ソニーの製品を買った」ということを表せるのは、製作者と製品が隣接することに基づく。このように、メトニミーにおける隣接性については事物と事物の隣接性が注目されることが多いが、Kövecses & Radden (1998)や Taylor (2003)などは、事態のフレームにおける隣接性までを含めている。このことを説明する上で、Taylor (2003)がメトニミー的拡張の中でも「含意の視点投射」(perspectivization of implicature)と呼ぶ現象を紹介する。英語のleaveは、leave the room (部屋を出ていく)などの文で表される、「空間的に囲まれたところの内側から移動する」という意味と、leave something in a room (部屋に何かを置いていく)などの文で表される、「持っていない、あとに置いていく」という意味を持つ多義的な動詞である。Taylor (2003)は後者の意味は、空間的に囲まれた場所を出るという事態のフレームにおいて場所そのものではなく、そこに置かれているものに視点を移すと、そこに置かれているものとの間に距離ができるという含意がある、ということから生じた意味であると分析する。このように同一の事態のフレームの中で視点を移すことで、含意される意味が独立した意味として確立すると、その形式は多義的別義を持っているとみなされる。

難易形式の意味拡張もこのような同一事態フレームにおけるメトニミー的拡張が起こっていると考えることができる。このことを、(172)～(174)の難易、進展傾向、頻度傾向を表す文を用いて説明する。

(172) この卵は割りやすい。 (難易)

(173) この卵は (ひびが入っているので) 割れやすい。 (進展傾向)

(174) この卵は (一般的に運搬中に) 割れやすい。 (頻度傾向)

まず、(172)の「この卵は割りやすい」という(属性)難易を表す文は、「卵が割れる」という事態の実現に至るまでの行為主体の働きかけ過程における抵抗力(が小さいこ

と)を表している。「卵を割る」という行為は、「卵が割れる」という変化と隣接しているため、「卵を割ることが容易であれば、卵が割れるという変化も容易に起こる」という含意が生じる。ここで、行為の過程から変化の進展過程へのメトニミーが起こり、(173)の「この卵は(ひびが入っているので)割れやすい(=すぐに割れる)」という進展傾向への意味拡張が起こる。さらに「この卵が割れるという変化が容易に起こる」ということは、「この卵が割れるという事態が頻繁に起こる」という含意が生じる。ここでは、変化の進展過程から変化の存在、つまり事態実現の存在そのものへのメトニミーが起こっていると考えられる。ただし事態実現そのものには程度性はないので(事態実現は、事態が実現するかしないかで捉えられる二値的な概念である)、スケールを形成するために1回の事態に対する判断から複数の事態に対する判断という、事態の複数化という変化もここでは同時に起こっている。これによって(174)の「この卵は(一般的に運搬中に)割れやすい。(=割れることが多い)」という、事態実現の頻度の多さを表す頻度傾向の意味に拡張することになる¹⁸。このように難易の意味拡張は同一の事態フレーム、例えば「卵を割るという行為を行うと卵が割れるという変化が起きる」という我々の経験を基盤とした事態のフレームをもとに、「行為(働きかけ)の進展過程から変化の進展過程へ」(難易から進展傾向へ)、さらに「変化の進展過程から変化の存在(事態実現)へ」(進展傾向から頻度傾向)というメトニミー的な拡張が起こっていると考えることができる。井上次夫(1997)、渡邊(2007)でも難易から傾向への意味が生まれたという見方を示していたが、進展傾向と頻度傾向の間の順序については明確にされていなかった。本論文の上記の見方が正しいとすれば、進展過程における抵抗力を表しているという点で難易と進展傾向がつながり、また変化(事態実現)に関わる意味を表すという点で進展傾向と頻度傾向がつながっているため、難易→進展傾向→頻度傾向という拡張の順を想定することが自然であると思われる¹⁹。

難易形式の意味拡張はメトニミーに動機づけられているという見方は、難易形式の意味拡張に対して単に理論的な背景を与えるだけでなく、先に挙げた難易の意味拡張に関わる2つの事実を理解する上でも有効である。まず、「①難易形式は認識的意味を

¹⁸ 副詞「よく」も、もともとは「良い」という「良い/悪い」という評価性のスケールにおけるプラスの方向を表す形容詞から来していると考えられるが、「このペンはよく書ける/このろうそくはよく燃える」など「書く/燃える」という進展過程における程度の高さを表す場合と、「よく事故が起こる。/よく雨が降る。」など、事態が生起する頻度の多さを表す場合があり、「やすい」と同じような拡張が起こっていると考えられる。

¹⁹ただし、この拡張の順序については理論的な考察のみで、実際の言語変化がどうであったかの検証はできていない。

表さない」という事実についてであるが、これはまさに<可能>と<難易>の意味拡張のプロセスの違いに起因するものであると考えることができる。可能形式の意味拡張は異領域へのメタファー写像によって起こっているので、認識領域での話し手の認識に関わる認識的意味を表すことになる。一方、難易形式の意味拡張が難易から進展傾向、頻度傾向という事態の関係性に基づく拡張にとどまり認識的な意味を表すような拡張が起こっていないという事実は、同一の事態フレームに基づくメトニミーによって起こっていることを示している。

次に「②容易さを表す形式と困難さを表す形式の間で頻度傾向の意味の定着に差がある」という事実が、メトニミーという観点からどのように理解されるかについて説明する。(175)が示すように、困難さを表す形式でも「進展傾向」は問題なく表せるので、ここで問題になっていることは、進展傾向から頻度傾向に拡張する際の容易さと困難さの非対称性である。

- (175) a. この建築材は燃えにくい。 (= [容易には/なかなか]燃えない)
b. 冬は服が乾きにくい。 (= [容易には/なかなか]乾かない)

これは、「進展過程と事態の実現は概念的に隣接するが、進展過程と事態の非実現は隣接しない」という隣接関係の違いに起因する。容易さを表す「やすい」における進展傾向から頻度傾向への拡張は、「変化の進展（事態実現までの進展）過程における抵抗力が小さい＝容易に事態が実現する」→「実現することが多い」という拡張であり、「事態が実現する」ということを介して拡張している。同じように、困難さを表す「にくい」の意味拡張を想定すると、「変化の進展（事態実現までの進展）過程における抵抗力が大きい＝容易には事態が実現しない」→「実現しないことが多い（実現することがあまりない）」という拡張になると考えられ、「事態が実現しない」ということを介して拡張することになる。しかし、困難さを表す形式に対してこのような拡張過程を想定することには問題がある。なぜなら進展過程と「事態の実現」は概念的に隣接するが、進展過程と「事態の非実現」は隣接しないはずだからである。例えば、「割れる」という事態が実現するまでの進展ということはあるが、「割れない」という事態の非実現までの進展過程ということはあるえない。「にくい」が進展傾向を表す時に意味することは「事態が実現するまでの抵抗力が大きい」ということであり、あくまで「事態実現」と隣接しているのである。「実現しないことが多い（実現することがあまりない）」ということの意味の中心になる「非実現」と進展過程は概念的に隣接しないために、メトニミーが起こりにくく、困難さを表す形式では頻度傾向に意味拡張しにくいのだと考えられる。

以上、この 3.4 節では、まず、可能形式の意味拡張にはメタファーという認知的動機づけが働いていることが広く知られているのに対して、難易形式の意味拡張の動機づけについてはこれまで十分に検討されてこなかったことを指摘した。そして難易形式の意味拡張はメトニミー的拡張であると考えることによって、「①難易形式は認知的意味を表さない」、「②容易さを表す形式と困難さを表す形式の間で頻度傾向の意味の定着に差がある」という難易形式の意味拡張に関連する事実を統一的に理解することができるようになることを示した。〈可能〉と〈難易〉はともに原型的意味からその他の意味に拡張した結果、多義性を持つようになったという点は共通するが、両者は異なる認知的動機づけ（メタファーとメトニミー）が働いているという違いが存在するのである。

3.5. 可能表現と難易表現の対照のまとめ

「事態から実現性を見出す認知過程」という観点と「原型的意味からの意味拡張のあり方」という観点から可能表現と難易表現を考察したことによって明らかになったことを以下にまとめる。

【〈可能〉と〈難易〉の意味概念の規定】

〈可能〉： ある事態が実現するか否かを表す概念。

〈難易〉： ある事態の実現に至るまでの過程における抵抗力の大小を表す概念。

【〈可能〉と〈難易〉の認知過程】

〈可能〉： 行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現した（抵抗力に屈した結果事態が実現しなかった）という事態実現の有無の情報を基にした認知過程を反映。

〈難易〉： 行為主体の働きかけの過程において得られた事態実現を阻む抵抗力に関わる知覚情報を基にした認知過程を反映。

【〈可能〉と〈難易〉の意味拡張のあり方】

〈可能〉： 能力可能・状況可能から認識可能への意味拡張は社会・物理領域から認識領域へのメタファー写像に動機づけられている。

< 難易 > : 難易から進展傾向、頻度傾向への意味拡張は同一事態フレームを基にしたメトニミーによって動機づけられている。

第1章および第2章で、可能表現と難易表現の基本的な共通点についてはすでに確認していた。それは、動詞に接辞・接語、あるいは助動詞を付加することによって生産的に述語が作られるという形態・統語的な特徴と、ともにものごとの実現性（現実世界に事態が出現・存在する見込み）に関わる意味を表しているという意味的な特徴であった。この第3章ではそこからさらに踏み込んで、事態から実現性を見出す認知過程、および意味拡張のあり方という観点から可能表現と難易表現を対照した。その結果、事態から実現性を見出す認知過程という観点からは、<可能>と<難易>はともに行為主体の働きかけと事態実現を阻む抵抗力との関係から捉えられる事態を基盤とするという共通点を指摘した。さらに、<可能>は事態実現段階において把握される事態実現の有無という情報を基にした認知が関わっており、<難易>は事態実現に至るまでの過程段階において把握される知覚情報を基にした認知が関わっているという相違点も明らかにした。このような相違点を踏まえることで、「二値的把握とスケール把握」、「人称制限」、「働きかけの直接性の制約」、「叙述対象の制限」、「副詞句との共起制限」という5つの現象が統一的な観点から説明できる。意味拡張のあり方という観点から見ると、可能形式も難易形式も多様な意味を表し、「行為主体が行為を行う」という事態に関わる意味を原型的意味とし、そこから離れた他の意味への広がりを持つという点は共通する。しかし、その意味拡張に関わる動機づけが異なっており、<可能>はメタファー写像が関与しているのに対して、<難易>は同一事態フレームを基にしたメトニミーが関与しているということを指摘した。<難易>が<可能>と異なる動機づけに支えられていることを明らかにしたことで、「①（可能形式は認識的意味を表すのに、）難易形式は認識的意味を表さない」、「②容易さを表す形式と困難さを表す形式の間で頻度傾向の意味の定着に差がある」という、難易形式の意味拡張に関わる2つの事実を統一的に捉えられる視点を得たことになる。

この章では<可能>と<難易>の異同を明らかにすることを目的としていたため、3.1節および3.2節の考察の中で示した各形式間の差異、および日本語と中国語の差異については保留していた事実も多い。これについてはこの第3章で明らかになったことを基に、第4章で可能表現、第5章で難易表現に関わる日中の可能・難易形式についてそれぞれ考察を行っていくことで、順に明らかにしていく。

第4章 日本語と中国語の可能表現

第4章では日本語と中国語の可能形式を取り上げ、日本語と中国語の異同、および類義形式間の異同を明らかにすることを目的とする。本章は大きく3つの節に分かれる。4.1節では、日本語の可能形式「られる」と「ことができる」を取り上げ、特に「ことができる」の拡張的用法が成立する条件を検討することで、日本語の可能表現の成立に関わる要因を明らかにする。4.2節では中国語の可能形式“能”、“会”、“可以”をとりあげ、3つの形式の異同を認知的な観点から記述する。4.1節と4.2節が第1章で示した類義形式間の異同を明らかにするという課題Ⅲに対応する節である。さらに4.3節で可能表現に見られる日本語と中国語の異同について考察を行い、第1章で示した課題Ⅱ、言語間の異同についてその違いを明らかにすることを旨とする。

4.1. 日本語の「られる」と「ことができる」について

日本語の「られる」と「ことができる」は、渋谷(1993)や安本(2009)が指摘するように、両者に意味的な違いはほとんど見られない。それは【表3】における中国語の“能”、“会”、“可以”の意味分布がそれぞれで大きく異なるのに対して、「られる」と「ことができる」の分布にほとんど差がないことからわかる。両形式の違いが明確に現れるのは、「ことができる」が「自発的状況可能」において拡張的に使用されている場合であり、このとき「られる」は全く使用できない。この4.1節では「られる」と「ことができる」の違いについて言及した先行研究を概観した後で、「ことができる」の拡張がどのような要因によって許されているのかを明らかにすることを主な目的とする。

【表3 日本語と中国語の可能形式の意味分布】

	非モダリティ	動的モダリティ			
	実現可能	能力可能	状況可能		
			条件的 状況可能	受動的 状況可能	自発的 状況可能
「られる」	○	○	○	○	×
「ことができる」	○	○	○	○	△
“能”	△	○	○	○	△
“会”	×	○	×	×	○
“可以”	×	○	○	○	×

束縛的モダリティ	認識的 モダリティ
許可可能	認識可能
×	×
×	×
○	△
×	○
○	×

4.1.1. 「られる」と「ことができる」についての先行研究の記述

まず日本語の「られる」と「ことができる」の違いについて言及している先行研究を紹介し、論点を整理する。

【意志性】

「ことができる」は意志性の低い動詞とも共起可能であるが、「られる」は意志性の低い動詞とは共起できない(渋谷 1993, 1995)。例えば、(1)、(2)の「受かる」、「助かる」のような意志性の低い動詞が用いられた場合、「ことができる」を用いた可能表現は成立するが、「られる」を用いた可能表現は成立しない。

- (1) a. 君のおかげで試験に受かることができた。
 b. *君のおかげで試験に受かれた。
- (2) a. 川に流されたが、運よく丸太につかまって助かることができた。
 b. ??川に流されたが、運よく丸太につかまって助かれた。

(渋谷 1993:10)

【評価的可能】

日本語の可能表現についての議論の中で、「価値の被動」(松下 1930)、「評価的屬性段階」(渋谷 1993)、「属性表現化した可能動詞」(渋谷 1995)と呼ばれる用法が指摘されている。例えば、「この酒は飲める」のようなものであり、このような表現では、「この酒は飲むという行為を実現させるだけの性質がある」という単に実現性の有無を言っているという解釈よりも、「この酒は飲む価値がある」、「うまい」といった酒に対する評価を表しているという解釈が優先的に出てくる。このように、単にものごとの実現性を言うのではなく、事物の価値の高さなどの評価を下していると解釈される可能表現を本論文では「評価的可能」と呼ぶことにする。この評価的可能については、(3)、(4)が示すように、「られる」を用いた可能表現ではその解釈ができるが、「ことができる」を用いた場合には、この評価的可能の解釈ができないということが指摘されている(渋谷 1993, 1995)。

- (3) (「話がわかる」の意で)
- a. あの課長は話せるよ。
 b. *あの課長は話すことができるよ。
- (4) (「使いやすい」の意で)
- a. うん、この万年筆は使えるよ。
 b. *うん、この万年筆は使うことができるよ。

(渋谷 1995:118)

【文体・表現効果】

神田(1961)は、「られる」は会話文で多用され、口語的であるのに対して、「ことができる」は地の文に多い文章的な形式であるという文体差を指摘している。また、市川(1991)も、実際に用例収集をすると、同じ新聞でもエッセイや人生相談、投書欄では「られる」が多くなり、社説には「ことができる」がはるかに多く現れる、という両形式が現れる文体の差を指摘している。さらに、小説では、読み手をストーリーの

中に引き込む、話し手と読み手が一体となるような文体を狙う場合には「られる」が用いられ、事態を客観的にとらえる場合には「ことができる」が用いられるとしている。以下の例は全て市川（1991）が収集した推理小説『点と線』で現れる実例であり、推理小説の手法で読者に臨場感を持たせるようなときに(5)や(6)のような「られる」を用いた例が現れると指摘している。

(5) 三原は手帳を出した。一度聞いただけでは、よくのみこめなかった。

(6) そうだ。確かに舞台は日本の両端に広がったといえそうだった。

(市川 1991:4)

一方、(7)や(8)のように「佐山」という人物の事情を察する、列車の重なった状態を描く、という客観的に事態を描写するときは「ことができる」が使われると指摘している。

(7) ことに、佐山の場合は、うっかり遺書を書くこともできなかつたであろう。

(8) この二つが重なりあって、13番ホームに立って15番ホームを見通して眺めることはできなかつた。

(市川 1991:4)

上記のような事実に加え、(9)、(10)のような広告、(11)～(13)のような新聞の見出し（いずれも市川の調査による実例）には「られる」が用いられており、「ことができる」に置き換えると非常にまわりくどい表現になってしまうという表現効果の違いを指摘している。その上で、市川（1991）は、「られる」は話し手の心情を直接訴えるというムード的性格を持ち、一方「ことができる」は叙述的なコトの性格を持つとまとめている。

(9) 薄着のおしゃれが存分に楽しめる

(10) 準備はわずか3分。カンタンに、あこがれのソバージュがつくれます。

(11) カードが使えない。

(12) 自分の時間を持てる人

(13) サヨナラ、が言えない旅

(市川 1991:4-5)

【可能の原因】

久野（1983）は(14)と(15)のような対比を挙げ、「られる」は主語の内的能力（本論文で言う能力可能）を表し、「ことができる」は外的条件に由来する能力（本論文で言う条件的状況可能）を表すと主張している。久野は、(14)は内的能力の低下を表す文脈

であるので「られる」しか用いることができず、(15)は外的条件に由来する能力制限を表す文脈であるため「ことができる」しか用いることができないと主張している。

(14) a. アメリカに長くいて、日本語を話す機会が少ないので、日本語が話せなくなった。

b.??アメリカに長くいて、日本語を話す機会が少ないので、日本語を話すことができなくなった。

(15) a.??ロッカーの中には、動物の死骸を入れられない。

b. ロッカーの中には、動物の死骸を入れることができない。

(久野 1983:150-151)

上記に挙げた【意志性】【評価的可能】【文体・表現効果】【可能の原因】の4つの観点のうち、最も明確に差が出るのは【意志性】の問題である。久野(1983)の指摘する【可能の原因】に関する「られる」と「ことができる」の違いは例文の判定そのものに疑問が残る²⁰。本論文筆者の内省では、(14)の「ことができる」も(15)の「られる」も全く不自然ではない。ただし、久野の主張を、(14)の状況を表す場合には「ことができる」よりも「られる」が、(15)の状況を表す場合には「られる」よりも「ことができる」が優先的に選択されるというように捉えなおせば、首肯できる。「られる」は内的能力を表し、「ことができる」は外的条件に由来する能力を表す、という絶対的な区別ではなく、解釈の傾向の問題として捉え直した方が適切であろう。神田(1961)、市川(1991)の指摘する【文体・表現効果】における差異も基本的に傾向の問題である。市川(1991)が挙げる例文における「られる」と「ことができる」を交替させると文のニュアンス・表現効果は変わるが、いずれも不自然な文とまでは言えない。【評価的可能】が表せるかどうかという問題については、確かに「ことができる」では評価的可能は表せないという明確な違いは存在するが、この評価的可能の用法がかなり局所的な現象である点に注意が必要である。「られる」は評価的可能を表すことができるが、では「られる」を用いた場合には常に評価的可能が表せるかというところではなく、結合する動詞による制限が大きい。例えば、(16)は評価的可能としての解釈ができるが、(16)で用いられている「話す」、「食う」を類義の「しゃべる」、「食べる」に置き換えた(17)は、評価的可能としての解釈は基本的にできない。このように評価的可能

²⁰ 久野(1983)の挙げる例文判断の適格性についての問題は、市川(1991)、渋谷(1995)でも指摘されている。

の用法自体が生産的に表されるわけではないので、これを基にして「られる」と「ことができる」の違いとして一般化した議論は成立しにくいと思われる。

(16) a. あいつは話せる。 (=話がわかる)

b. この魚は食える。 (=おいしい)

(17) a. あいつはしゃべれる。 (≠話がわかる)

b. この魚は食べられる。 (≠おいしい)

それに対して【意志性】に関わる「られる」と「ことができる」の差は明確であり、これについては、他の現象に比べるとすでに先行研究で詳しい議論がなされている。したがって、本論文では【意志性】にかかわる「られる」と「ことができる」の違いを詳しく考察することで「られる」と「ことができる」の性質の違いを明らかにすることを試みる²¹。

4.1.2. 「ことができる」の拡張的用法について

前節で見た【意志性】に関わる問題は、日本語の可能形式の意味分布の特徴、すなわち日本語の可能形式は自発的状況可能を表しにくい、ということを示したものである（【表 3】参照）。さらに、「られる」と「ことができる」の間にも差があり、(18)のような文脈では「ことができる」は自発的状況可能を表すことができるが、これに対応する「られる」を用いた(19)の文は非文である。つまり、「ことができる」の方だけ、一定の条件下では意味範囲が拡張していると見ることができる。

(18) a. 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が 20 度を少し下回ってようやく咲くことができる。

b. …自然が豊かで空気が澄み切っているからこそ、星が美しく輝くことができるという訳です。

(呂雷寧 2008:280, 283)

(19) a. *温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が 20 度を少し下回ってようやく咲ける。

b. *…自然が豊かで空気が澄み切っているからこそ、星が美しく輝けるとい

²¹ 渋谷 (1995)では上記に挙げた違いのほかに「ことができる」自体が主述形式を成しているため、「られる」と違って命題部分に否定形式や受け身形式をとることができること、また「できる」の方が拍数が多いため、埋め込み文の中では使われにくいということが指摘されているが、いずれも表層的な問題で「られる」と「ことができる」の意味的な違いには関わらないと思われるため、本論文では詳しく取り上げない。

う訳です。

「ことができる」の拡張的用法がどのような場合に成立するのか、その成立条件を明らかにすることによって、日本語の可能形式が問題なく表せる意味範囲（「実現可能」、「能力可能」、「条件的状況可能」、「受動的状況可能」）および日本語の可能形式が全く表せない意味範囲（「認識可能」、「許可可能」）を見ることでは見えない、日本語の可能形式の特徴をあぶりだすことができると考える。この4.1.2節では「ことができる」の拡張的用法がどのような条件下で成立するのかを明らかにすることで、日本語の可能形式の特徴、および<可能>という意味概念の特徴を明らかにすることを目的とする。

4.1.2.1. 「ことができる」の拡張的用法についての先行研究の記述

「られる」よりも「ことができる」の方が意志性に関して制限が弱いということを確認に指摘した研究として、森山（1988）、渋谷（1993, 1995）がある。森山（1988）は、従来の意志性の概念を含みこむが、意志性よりも広い概念として「主体性」という概念を提案している。森山（1988:201）は、主体性を「動詞がその表す動きを発生・成立するための、主語名詞（あるいは動作主名詞）の、動きに対する自律的な関与の度合い」と定義している。この概念によって従来の意志性の議論で問題になってきたような「太郎は走った」と「太郎は良い友にめぐりあった」の間にある意志性（主体性）の差に加え、「雨が降る」などの完全に無意志的な事態を表すものまでを段階的・連続的に捉える見方を提示している。渋谷（1993, 1995）は主体性ではなく「動作主性」（渋谷 1993）、「他動性」（渋谷 1995）という用語を用いているが、基本的に森山（1988）の考え方を継承している。本論文では、動詞の語彙的な性質について言及する場合には「意志性」という用語を用い、文としての性質に言及するときには森山（1988）に倣って「主体性」という用語を用いることにする。

森山（1988）、渋谷（1993, 1995）では、「ことができる」は典型的には、(20)のように、意図的に動作を行う人間が主語に立ち、主語の能力を表すが、さらに、(21)から(23)にいくにしたがって主語の主体性が段階的に下がっても一定の主体性を有すれば「ことができる」による可能表現は成立するということが指摘されている。

- (20) 太郎は 100 メートル 10 秒で走ることができる。 (人間動作主段階)
- (21) 虎は 100 メートル 6 秒で走ることができる。 (有情物動作主段階)
- (22) 人は一生に一度、いい友にめぐりあうことができる。 (経験者段階)

- (23) a. この車は 400 メートル 12 秒で走ることができる。
 b. この花は 2 回花を咲かせることができる。 (自発的発生段階)
 (渋谷 1993:8)

ただし、森山 (1988)、渋谷 (1993, 1995)においても(24)、(25)のような無意志動詞を用いた自発的発生段階では「ことができる」を用いた可能表現は成立しないとしている。

- (24) *雨は降ることができる。 (渋谷 1993:8)
 (25) *この花は咲くことができる。 (森山 1988:215)

森山 (1988)、渋谷 (1993, 1995)は「られる」よりも「ことができる」の方が主体性に関する制約が弱いという事実は指摘しているが、いかなる場合に「ことができる」の拡張が許されるかについての詳しい検討はしていない。また、森山 (1988)、渋谷 (1993, 1995)の記述に反して、無意志動詞を用いた自発的発生段階においても「ことができる」が使用できる場合が実際には存在する ((26)、(27))。

- (26) 雪は、上空の気温の低さや水分の存在など様々な気象条件がそろってはじめて降ることができる。
 (27) 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が 20 度を少し下回ってようやく咲くことができる。

(呂雷寧 2011:207)

森山 (1988)、渋谷 (1993, 1995)の挙げる(23)の例と(26)、(27)の例は無情物が主語に立っているという点は共通するが、前者に用いられている動詞(「走る」、「咲かせる」)は典型的に動作主を主語にとる意志動詞であるのに対して、後者に用いられている動詞(「降る」、「咲く」)は典型的には無情物を主語にとる無意志動詞である点で大きく異なる。(23)と(26)、(27)の違いは「られる」による可能表現の成立可否によっても確かめられる。(23)の文は「ことができる」だけでなく「られる」を用いた可能表現も成立する ((28))。(23)の文は主語の能力を表す典型的な可能表現である(20)や(21)のタイプに近い文であり、本論文では「能力可能」の一種と見る²²。

- (28) a. この車は 400 メートル 12 秒で走れる。

²² 奥田靖雄 (1986:188)も以下の(i)、(ii)のような例を挙げ、可能表現に無情物主語が立つことを指摘しているが、これも(28)と同種の例である。

- (i) 計算機自身も、まるで水をえた魚のように、自己の計算速度にふさわしいはやさで、どしどしデータとりいれることができるだろう。
 (ii) 質量のじゅうぶんおおきな物質は、位置とはやさのいずれも同時に確定した値をもつ物理的な状態にちかづくことができる

b. この花は2回花を咲かせられる。

一方、(26)や(27)は「られる」では置き換えられず、典型的な能力可能からの類推によって成立しているわけではないことがわかる ((29)、(30))。本論文ではこのような、自発的発生段階の中でも「無情物主語＋無意志動詞」で表される事態に可能形式が付加されて<可能>を表す場合のみを自発的状況可能の例とみなす。

(29) *雪は、上空の気温の低さや水分の存在など様々な気象条件がそろってはじめて降れる。

(30) *温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が20度を少し下回ってようやく咲ける。 (呂雷寧 2011:207)

(26)、(27)のような自発的状況可能を表す「ことができる」が実際の言語使用においてどのくらい見られるかを調査するため、『日本語基本動詞用法辞典』の見出し語(722語)の中の和語の無意志自動詞155語を対象とし、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の検索ツール「中納言」で検索した。その結果、「ことができる」が自発的状況可能を表しているとみなすことのできる用例は30語、46例見つかった²³。(26)、(27)のような「ことができる」の用法は通常は成立しないはずの文環境に現れる拡張的な用法であり、コーパス調査においても多くの例は採取できなかったが、推敲された文章においても一定数現れることは確かである。(24)、(25)と(26)、(27)の間の差異を考察することは、「ことができる」の成立条件を記述する上で重要であるが、森山(1988)の言う「主体性」の差で説明することは困難であると思われる。「ことができる」の拡張的な用法がどのような場合に成立するかということを明らかにするためには、「主体性」の概念をより細かくするか、あるいは主体性の概念とは別の概念で説明する必要がある。

²³ 検索方法、語例の内訳、出典の内訳は以下の通り。以下の結果を見る限り、動詞による傾向は見られず、またデータの母数を考えるとジャンルによる突出した偏りも見られない。

【検索方法】

短単位検索「キー」語彙素読み＝「検索対象語」(活用形＝連体形)、「後方共起1(キーから1語以内) 語彙素＝「事」、「後方共起2(キーから3語以内) 語彙素＝「出来る」

【採取された語の内訳】

「伝わる(5)」「現れる(3)」「動く(3)」「育つ(3)」「流れる(3)」「続く(2)」「飛ぶ(2)」「残る(2)」「光る(2)」「渡る(2)」「浮く(1)」「生まれる(1)」「及ぶ(1)」「終わる(1)」「かかる(1)」「変わる(1)」「転がる(1)」「下がる(1)」「咲く(1)」「浴う(1)」「近づく(1)」「溶ける(1)」「なくなる(1)」「並ぶ(1)」「増える(1)」「降る(1)」「勝る(1)」「増す(1)」「漏れる(1)」

【出典の内訳】

図書館・書籍(19)、出版・書籍(15)、特定目的・ブログ(8)、特定目的・ベストセラー(1)、特定目的・知恵袋(1)、特定目的・国会会議録(1)、特定目的・広報誌(1)

主体性の概念をより細かくすることに関して示唆的な研究として青木ひろみ(1997)がある。青木ひろみ(1997)は、森山(1988)、渋谷(1993, 1995)における「経験者段階」にあたる文における可能表現の成立条件について細かく分析している。森山(1988)、渋谷(1993, 1995)ではこの段階においては「ことができる」における可能表現が自然に成立するとしているが((22))、実際にはそれほど自由に成立するわけではなく、「似る」、「育つ」、「助かる」のような無意志動詞が用いられた場合には「られる」だけでなく、「ことができる」を用いた可能表現も通常非文になる((31)~(33))。

(31) *太郎は父親に似ることができない。

(32) *私の子どもは大きく育つことができた。

(33) ??太郎は手術で助かることができた。

(青木ひろみ 1997:104)

ただし、(34)のように主語で表される主体の「意志性」の表出が文脈から読み取れる場合や、主語の「意志性」が表出されない場合でも、(35)のように「太郎を育てた/助けた人」のような他者の意志のコントロールが関与する場合には「ことができる」による可能表現が成立すると、青木ひろみ(1997)は主張する。

(34) 太郎は父親のようになりたいと思い、まず外見から真似てみたが、表面的な努力だけでは、忍耐強い性格までは決して似ることができないということを学んだ。

(青木ひろみ 1997:104)

(35) a. 太郎は生まれた時は未熟児だったが、両親のおかげで健康に育つことができた。

b. 太郎は川で溺れてしばらくは意識不明だったが、応急手当がよかったため助かることができた。

(青木ひろみ 1997:106)

青木ひろみ(1997)の分析は、デフォルトでは主体性が低い事態であっても、文脈の操作などによって「意志性」を読み込みやすくすることで、「ことができる」による可能表現が成立することを主張するものである。青木ひろみ(1997)の言う「意志性」は主語、あるいは主語以外の人間が積極的に事態を実現させようとする「意図」を指すものであり、語に内在する性質としての「意志性」とは異なるので、これを区別して以下、「意図性」と呼ぶことにする。

一方で、意志性を持ちえない無情物が主語に立つ場合について青木ひろみ(1997)は、(36)が成立しないことから、(37)のような、「擬人化され捉えられる時」を除いて「ことができる」による可能表現は成立しないという見方を示している。

- (36) a. *信号機は今朝から壊れていて、赤で止まったまま青には変わることができない。
 b. *景気は不安定ではっきりしたことは誰にも分からないが、円だけは当分上がることができるかもしれない。
- (37) *毎年大勢の観光客が来るので、ピサの斜塔もそう簡単には倒れることができないだろう。

(青木ひろみ 1997:100)

可能表現の成立に関わる要因として、「意図性」という要因が関わっていることを指摘している点は重要であるが、「ことができる」が自発的状況可能を表す例を認めていない点では、森山 (1988)、渋谷 (1993, 1995)と同じである。

これに対して呂雷寧 (2008, 2011)は経験者段階については、青木ひろみ (1997)と同様、意図性がある場合には「ことができる」による可能表現が成立するという趣旨の議論をした上で、さらに(38)のような無情物が主語に立つ自発的状況可能も成立する場面があることを指摘している。

- (38) a. 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が 20 度を少し下回ってようやく咲くことができる。
 b. …自然が豊かで空気が澄み切っているからこそ、星が美しく輝くことができるという訳です。

(呂雷寧 2008:280, 283)

呂雷寧 (2008, 2011)は、「ことができる」が自発的状況可能を表すことができるのは、「事態に対する評価がプラス、あるいはニュートラル」であり、かつ「当該の文が事物の本来の性質を表している」場合であるとしている。(38)の「桜が咲く」、「星が輝く」という事態はプラス評価をしていると解釈しやすく、いずれも「桜」、「星」の本来の性質を表している。また、(39)のように当該の事態が望ましいかどうかを判断しがたく評価を伴わない場合でも、事物(「コレステロール」)の本来の性質を述べている場合には、自発的状況可能が成立するとしている。

- (39) 本来コレステロールは油の一種であり、それだけでは水を主成分とする血液中に溶けることができないので、血液中ではリポ・タンパクという特殊なタンパク質と結合して存在します。(呂雷寧 2011:208)

一方、(40)のように、望ましい事態であっても事物の本来の性質を表しているとは見なせない例、あるいは(41)のように事物(「包丁」)の本来の性質を表しているも、

社会通念的に事物の望ましい性質ではないと判断されるような例では不自然になるとしている。

(40) *前日は雨で試合が中止だったが、この日は無事晴れることができた。

(41) *包丁はずっと使わなければ錆びることができる。

(呂雷寧 2011:209)

呂雷寧 (2008, 2011)の分析は青木ひろみ (1997)よりも広範な対象を視野に入れ、日本語の無意志的な可能表現を考察しており、「意図性」だけではなく、「事態の望ましさ」、「本来的性質」という観点を導入したことで、自発的状況可能の成立条件を説明しようとしたものである。なお、呂雷寧 (2008, 2011)が「本来的性質」という用語で説明しようとした概念をより厳密に規定したものとして、森山 (1988)の指摘が注目される。森山 (1988:215)は「?この看板は立つことができる」と「この看板は斜面でも立つことができる」の対比を挙げ、「可能表現は、一種の性質の叙述なので、何かの特性を帯びることが必要である」と述べ、「特性記述」の要素の必要性を指摘している。呂雷寧 (2008, 2011)の観点に従うと、「?この看板は立つことができる」という文も「この看板」の本来的性質を表していることになる。両者の違いをより正確に捉えようとすると、単に当該の事物の本来的性質を表しているか否かということではなく、その事物に顕著に見られる「特性」を記述しているか否かという点が重要であることがわかる。したがってこれ以降では、「本来的性質」に替わって「特性記述」という用語を用いることにする。

ここまでの先行研究の議論をまとめる。「ことができる」による可能表現が成立する条件には「主体性」、「意図性」という事態参加者の参加のあり方に関わる要因と、「事態の望ましさ」、「特性記述」という話し手の述べ方に関わる要因が関わっている。経験者段階の文では、事態参加者の参加のあり方に関わる要因が関わる。典型的な意志動詞を用いた文ではデフォルトの「主体性」が高いため自然に成立するが、無意志動詞が用いられた文では基本的には「ことができる」は使用できない。ただし、(42)、(43)のように、主語に立つ主体の「意図性」あるいは、主語に立つ主体に関わる参加者の「意図性」が文脈から読み込める場合には、「ことができる」の容認度が上がる。

(42) 太郎は父親のようになりたいと思い、まず外見から真似てみたが、表面的な努力だけでは、忍耐強い性格までは決して似ることができないということを学んだ。
(青木ひろみ 1997:104)

(43) a. 太郎は生まれた時は未熟児だったが、両親のおかげで健康に育つことが

できた。

- b. 太郎は川で溺れてしばらくは意識不明だったが、応急手当がよかったため助かることができた。

(青木ひろみ 1997:106)

一方、自発的発生段階の文では、話し手の述べ方に関わる要因が関わる。この場合、通常「ことができる」による可能表現は成立しないが、望ましい事態あるいはニュートラルな事態（つまり、望ましくない事態ではない）であり、主語で表される事物の特性記述をしている場合に限って、「ことができる」の意味範囲が拡張し、自発的状況可能を表すことができる。

「ことができる」が成立する条件についての先行研究の記述は以上のように整理されるが、ここで本論文の問題提起を行いたい。1 つ目として現象の記述レベルの問題提起をしたい。森山 (1988)は自発的状況可能が成立する条件として「特性記述」という概念を提示しているが、特性記述という概念でも説明できない例が存在する。以下の(44)と(45)はいずれも「このろうそく」に見られる特性を記述していると解釈できるが、(44)と(45)では文の容認度に明確な差が存在する。つまり、「ことができる」の拡張に寄与する「特性記述」と、寄与しない「特性記述」があるということである。森山 (1988)の「特性記述」は、呂雷寧 (2008, 2011)の「本来的性質」という概念をより精緻化したものであると考えることができるが、「ことができる」の成立環境を捉えるにはさらにその「特性」とはどのような特性であるのか、その内実をより特定する必要がある。

(44) ??このろうそくは燃えやすく作ってあり、非常に簡単に燃えることができる。

(45) このろうそくは一旦火をつけると8時間は燃えることができる。

問題提起の2つ目は事態の参加者のあり方に関わる要因と話し手の述べ方に関わる要因の関係である。呂雷寧 (2008, 2011)および森山 (1988)の議論は、「主体性」がきわめて低い場合でも、「事態の望ましさ」および「特性記述」という条件を満たせば、「ことができる」が使用できることを述べたものであり、これは「ことができる」の成立には「主体性」よりも「事態の望ましさ」、「特性記述」の要因の方が重要であることを示している。それは、逆の事例、すなわち主体性が比較的高い場合でも、「事態の望ましさ」などの要因を満たさないと「ことができる」の可能表現が成立しないという事実からも支持される。例えば、(46)は、有情物が主語に立ち、比較的主体性が

高いと考えられる場合であるが、「望ましくない」事態を表していると考えられるため可能表現は成立しない。

(46) a.??太郎は自分の罪を白状することができる。

b.??私はすぐに楽しい思い出を忘れることができる。

(46)の不自然さが動詞自体の意味によるものではなく、望ましきによるものであることは、同じ動詞を用いて事態の望ましさを反転させた(47)が自然に成立することからわかる。

(47) a. 太郎はプライドを捨て、自分の罪を素直に白状することができたので、
量刑が軽くなった。

b. 私はすぐに嫌な思い出を忘れることができるので、悩まないで済む。

事態参与者の参与のあり方に関わる要因と話し手の述べ方に関わる要因の関係はどのようなになっているのだろうか。「ことができる」の拡張的用法が成立する環境を統一的に把握するには、それぞれの先行研究で提示されている概念同士の関係を明らかにし、統合していく必要がある。

以下では、「「ことができる」の拡張用法を支える「特性」とは?」、「事態参与者の参与のあり方に関わる要因と話し手の述べ方に関わる要因との関係は?」という2つの問題提起に応える形で、本論文の分析を示していく。

4.1.2.2. 「ことができる」の拡張的用法を支える「特性」

先に結論を述べると、先行研究の指摘の多くの部分は、事態参与者の参与のあり方に還元されると考える。第3章3.3節において可能には以下の認知過程が関わっていることを指摘した。

【<可能>の認知過程】

行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現した（抵抗力に屈した結果事態が実現しなかった）という事態実現の有無の情報を基にした認知過程を反映。

「ことができる」の拡張用法がどのような場合に成立するか、という問題は上記の認知過程の基盤事態にどれだけ近づけるかの問題として捉え直される。具体的には、「「行

為主体」という高い主体性を有する主体」と「事態実現を阻む抵抗力を克服するという力関係」の2つが重要になるということを示していく。

まず、1つ目の主体性の問題について見る。青木ひろみ(1997)が指摘する(48)が不自然なのは、「似る」などの無意志動詞は基本的に「行為主体が主体的に働きかける」という側面が欠落しているからである。それが(49)のように、「意図性」を文脈から読み込むことで、この部分を補い、<可能>の基盤事態に近づけることで「ことができる」が成立するようになっている。つまり、意図性は主体性を上げる要因であると考えることができる。

(48) *太郎は父親に似ることができない。

(49) 太郎は父親のようになりたいと思い、まず外見から真似てみたが、表面的な努力だけでは、忍耐強い性格までは決して似ることができないということを学んだ。

(青木ひろみ 1997:104)

問題になるのは「無情物主語＋無意志動詞」で表される事態であり、森山(1988)でもこのレベルは「自発的発生段階」としてまとめられ、このレベルの中の主体性の差異については、「この花は2回花を咲かせることができる。」に現れる「咲かせる」のように意志的な他動詞が用いられる場合に、その主体性が上がること以外については特に言及されていない。本論文では無意志動詞が用いられる場合でも、自発的発生段階をさらに大きく2つの段階に分けられると考える。例えば、「雪が降る」という事態において「雪」以外に事態を実現させる参加者は通常想定しえないが、「ドアがあく」という事態においては、ドアの性質などの「ドア」の力以外に、ドアをあける別の参加者がいなければ「ドアがあく」という事態は通常実現しない。本論文ではこのようなとき、後者の方が他の参加者の力が事態実現に大きく関与しているため、「ドアがあく」の「ドア」の主体性は「雪が降る」の「雪」よりも相対的に低い、と考える。自発的発生段階の主語の主体性については、(50)>(51)という差が示せる。

(50) 雪が降る。/太陽が燃える。

(51) ドアがあく。/ろうそくが燃える。

(50)と(51)の主体性の違いは言語的なふるまいの違いとして現れる。(50)は自発的発生段階において主語の主体性が高いタイプの事態である。このタイプの文は通常は外部動作主を想定できないため、動作主の動作遂行の容易さを表す「難なく/楽に」といっ

た副詞²⁴と共起しない ((52))。

(52) 雪が (??難なく/??楽に) 降った。/太陽が (??難なく/??楽に) 燃えた。
一方、(51)は基本的には外部動作主が存在する事態であり、外部動作主を想定し得るため、「難なく/楽に」と共起する ((53))。

(53) ドアが (難なく/楽に) あいた。/ろうそくが (難なく/楽に) 燃えた。

以上を踏まえ、自発的状況可能の「ことができる」が成立している例を観察すると、(50)のような、外部動作主が想定できず、主語の主体性が高いタイプの事態が多い。(50)に対応する(54)、(55)だけでなく、コーパスデータに見られる自発的状況可能の「ことができる」も(56)、(57)のような外部動作主が想定しえない事態を述べる用例が多い。

(54) 雪は、上空の気温の低さや水分の存在など様々な気象条件がそろってはじめて降ることができる。

(55) 太陽はなぜ、真空の宇宙で燃えることができるのですか？ (yahoo 知恵袋 http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1012914590)

(56) 固体状の衛星にあった、水素、ヘリウムは、ガスであれば吹き飛ばされる。固体状の衛星にあった、原子番号、6、7、8、炭素、窒素、酸素は重めであったので吹き飛ばされずに残ることが出来た。

(BCCWJ、Yahoo!ブログ、OY09_00780)

(57) このような構造の軸索では電流は絞輪部から絞輪部へととびとびに流れる。このため脊椎動物の軸索を活動電位は極めて速く伝わることができる。
(BCCWJ、『生命の科学』、LBh4_00029)

一方、主語の主体性が低い(51)のタイプの事態と「ことができる」との結合可否を見ると、自発的状況可能の「ことができる」は基本的に成立しない ((58))。

(58) a.??このドアは一流職人によって作られており、滑らかにあくことができる。
b.??このろうそくは燃えやすく作っており、非常に簡単に燃えることができる。
る。

ただし主語の主体性は、述語動詞や主語名詞の語彙的性質だけでなく、文脈によって変わりうるものであると考える。述語動詞の語彙的性質から見た場合には外部動作主

²⁴ 「難なく」は without effort に対応する語として影山 (1996)で語彙概念上、動作主がいるか否かのテストとして提出されているものである。ただし、「難なく」は「容易に～しやすい (likely)」、「すぐに (quickly)」の意味としても解釈可能であり、その解釈では判定に違いが生じる場合があるとして、三木 (2004)が without effort の意味を表す副詞として「難なく」とは別に「楽に」という副詞を加えている。

が想定できる場合でも(59)、(60)のように外部動作主が背景化されている場合には自発的状況可能の「ことができる」の容認度が上がる。

(59) a. ?このドアは普通のドアより開閉角度が広く、最大 270 度まであくことができる。

b. ?このろうそくは一旦火をつけると 15 分燃えることができる。

(60) (…) 粒子モデルで説明することの必要性を子どもに実感させることを目的とした。子どもの主な発言を記述してみよう。そこに子どもの思考の変容過程を見ることができる。「デンプンは砂糖と違って水へ入れるとモヤモヤした流れ（シュリーレン現象）が見えない」、「きっと、砂糖のモヤモヤは砂糖が液体になったモヤモヤなんだ。砂糖は液体に変化することで水に溶けることができるんだ。」

(BCCWJ、『子どもの感性がつくる理科授業』、PB33_00037)

「ドアがあく」、「ろうそくが燃える」という変化そのものの可否は、外部動作主の影響下にあるが、(59)のように「ドアがあいた結果、ドアが 270 度まで移動する」、「ろうそくが点火した後、15 分燃え続ける」という変化後の結果や持続は、外部動作主が存在しなくても実現しうる事態であり、外部動作主とは独立した事態として認められる。ゆえに事態認知の上で外部動作主の存在が背景化し、相対的に主語の主体性が上がり、「ことができる」の容認度も上昇するのだと考えられる。(60)は(59)のように結果や持続時間を具体的に表す言語表現は現れていないが、外部動作主が背景化されているという点では(59)と同じである。(60)では、談話全体が主語（「砂糖」）の性質を述べることを主眼とする文脈になっていることが重要である。このような文脈では主語で表される事物の性質・力が描写の中心となっているため、相対的に外部動作主の力の存在は度外視されやすくなる²⁵。本論文で挙げる自発的状況可能の「ことができる」の実例の多くは(60)に代表されるような事物の性質を描写することを主眼とする理科の教科書のような文脈に現れているが、このような文脈の偏りについても「ことができる」が文章語的であるというスタイルの問題(神田 1961、市川 1991、渋谷 1995)だけではなく、この拡張用法が主語の高い主体性を求めることから生じるものであると考えられる。

²⁵ 「私が一生懸命かき混ぜたところ砂糖は液体に変化し水に溶けることができた」のように、外部動作主を顕在させ、主語の性質ではなく、1 回的事態を表していると解釈しやすい文にすると筆者の語感では容認度はかなり下がる。

ちなみに、自発的発生段階の事態の中でも主語の主体性が低い事態の〈可能〉を表したい場合には、日本語では(61)のように、動詞の無標の形が現れるのが最も自然である。日本語では、(61)のような無標の動詞の形が現れた場合でも〈可能〉の意味を読み込むことができることから、このような表現は「無標識可能表現」と呼ばれる(第1章1.2節参照)。

(61) a. このドアは一流職人によって作られており、滑らかにあく。

b. このろうそくは燃えやすく作っており、非常に簡単に燃える。

無標識可能表現の成立に関わる動詞の制約として、「語彙的使役交替をする非対格動詞であること」、「動作主が存在が含意されること」という2つの条件が大崎(2005)で指摘されているが、この条件を満たす文環境とはすなわち、主語の主体性が低く、「ことができる」が現れ得ない環境である。「られる」はもちろん、「ことができる」の拡張的用法も成立せず、日本語において可能形式を全く用いることができない事態(主語の主体性が低い自発的発生段階の事態)は無標の動詞文で表すほかない。しかし、当然のことながら我々人間はそのような事態についても〈可能〉を見出すことがある。本論文の議論から無標識可能表現を捉え直すと、無標識可能表現とは、日本語において可能形式が全く現れ得ない環境において、〈可能〉の意味を見出した場合に認められる表現であると言える。

以上、自発的状況可能の「ことができる」が成立している環境では、何らかの点で主語の高い主体性が認められることを見た。これは、経験者段階の文において意図性を認め、主体性を上げることで「ことができる」が成立していた現象と同じ原理が働いていると考えられる。すなわち、経験者段階における主語も自発的発生段階における主語も、意図的に行為を行う行為主体からは遠い存在である。しかし、経験者段階、自発的発生段階の文のなかで可能な限り主体性を上げ、行為主体のあり方に近づけることで、拡張的に「ことができる」による可能表現が成立しているのだと考えられる。

ただし、主語の高い主体性だけでは自発的状況可能の「ことができる」の成立条件としては十分でない。(62)と(63)の対比から主語の高い主体性が認められることで自発的状況可能の「ことができる」の容認度が上がることは確かであるが、(63)も実際にはそれほど文としての容認度は高くなく、(64)の方がより自然である。(63)と(64)の違いは主体性ではなく、〈可能〉の基盤事態を支えるもう1つの要因、「抵抗力の克服」にあり、自発的状況可能の「ことができる」が自然に成立するためには主体性だけではなく抵抗力の克服という要因を満たす必要がある。

(62) *このろうそくは燃えやすく作られており、非常に簡単に燃えることがで

きる。

(63) ?このろうそくは一旦火をつけると 15分燃えることができる。

(64) このろうそくは一旦火をつけると 8時間は燃えることができる。

このことは、呂雷寧 (2008, 2011)が自発的状況可能が成立している例として挙げている例が全て、何らかの抵抗力を克服した結果、事態が実現すること、あるいは何らかの抵抗力があるために事態が実現しないことを表す文脈になっていることから窺える。(65)は「20度を下回ってようやく」、「自然が豊かで空気が澄みきっているからこそ」という限定的な条件下で事態が実現することを表しており、事態実現を阻む抵抗力が存在することを示している。(66)の例は「油の一種であるコレステロールは水を主成分とする血液中には溶けない」という抵抗力のために「溶ける」という事態が実現しないことを示しており、さらに「リポ・タンパクという特殊なタンパク質と結合」することによって、はじめて「溶ける」という事態が実現することが暗に示されている。

(65) a. 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が 20度を少し下回ってようやく咲くことができる。

b. …自然が豊かで空気が澄み切っているからこそ、星が美しく輝くことができるという訳です。

(呂雷寧 2008:280, 283)

(66) 本来コレステロールは油の一種であり、それだけでは水を主成分とする血液中に溶けることはできないので、血液中にはリポ・タンパクという特殊なタンパク質と結合して存在します。(呂雷寧 2011:208)

コーパス調査によって得られた実例におても同様の傾向が見られる。(67)、(68)では「光さえあれば」、「空気を充填してはじめて」という表現がいずれも限定的な条件下で事態が実現することを表しており、事態実現を困難にする要因、すなわち事態実現を阻む抵抗力が存在することを示している。

(67) 藍色細菌は、従属栄養の細菌と違って、光さえあれば増えることができ、かつ細胞表層の微細繊維を使って滑走運動により移動できるようになり、地球上のありとあらゆるところで繁茂するようになった。

(BCCWJ、『ミトコンドリアはどこからきたか』、LBo4_00037)

(68) 沈むために作られている潜水艦は、メイン・バラスト・タンクに空気を充填してはじめて浮くことができる。

(BCCWJ、『雷撃深度一九・五』、PB19_00409)

これらの例文だけを見ると何らかの条件の存在があれば、自発的状況可能の「ことができる」が成立するという見方も成り立つように見えるが、本論文ではそのような見方はとらない。事態実現を阻む抵抗力の存在が読み取れる(69)を(70)のように自然な事態実現を表す文に変えると「ことができる」が成立しなくなる。(70)でも「気温の低下」、「血管があること」という条件が存在するにもかかわらず、文の容認度はきわめて低いことから、単に条件があればよいのではなく、事態実現を阻む抵抗力を克服して事態が実現するという関係性が重要であることがわかる。

(69) a. 雪は、上空の気温の低さや水分の存在など様々な気象条件がそろってはじめて降ることができる。

b. 心臓の強力なポンプがあるからこそ、血液は全身をくまなく流れることができる。

(70) a.??雪は、11月から12月頃に徐々に気温が低くなってくると、降ることができる。

b.??血管があるので、どの動物でも血液は全身を流れることができる。

以上の例では「～してようやく」、「～さえ…ば」、「～してはじめて」、「～からこそ」など、事態実現を阻む抵抗力が存在することを明示的に表す表現が現れていたが、事態実現を阻む抵抗力が常にこれらの表現によって示されなければならないというわけではない。例えば、(71)ではそのような表現は用いられていないが、「通常、酸素の存在しない真空の宇宙では物質は燃えない」という前提知識の下で、「太陽が（真空の宇宙で）燃える」のは何故かという質問がなされており、言語的には示されていないが「真空の宇宙」という環境が「太陽が燃える」という事態実現を阻む抵抗力になっていることがわかる。

(71) 太陽はなぜ、真空の宇宙で燃えることができるのですか？

(72)、(73)でも「情報や行為が双方向で流れる」、「ピークの状態が続く」という事態が容易には成立しないことが文脈から読み取れる。

(72) 人脈での手入れとは何かと考えてみましょう。それは、人脈という血管の中を、いつでも、自由自在に必要な情報や行為が、双方向で流れることができるような状態を保っておくことです。—それは大変なことみたいですね。ひと仕事になりますよ。

(BCCWJ、『「人脈」創る・育てる・活かす』、PB33_00573)

(73) 私はいま日本の技術が低いということを言っているんじゃないんです。高いということについては私も誇りを持っております。しかし、こうい

うピークの状態がいついつまでも続くことができるば幸いです。しかし、産業的にはどんどんキャッチアップをされてくる、こういう問題もあるわけです。 (BCCWJ、国会会議録、OM18_00001)

自発的発生段階における事態は、「自発的に」ものごとが実現することを表すのが基本であるため、そこに<可能>の基盤事態にあるような抵抗力の存在を読み込むことは通常ない。しかし、そこに文脈の支えなどによって事態実現を阻む抵抗力の存在が読み込まれると、<可能>の基盤事態のあり方に近づき、自発的状況可能の「ことができる」が容認されるのである。このように考えると、4.1.2.1 節で示した以下の2つの例で容認度に差が生じていた事実も説明可能となる。つまり(74)と(75)はともに「このろうそく」の特性を記述しているが、(74)には事態実現を阻む抵抗力の存在が感じられないのに対して、(75)は「ろうそくが8時間燃える」という実現が困難な事態を表しており、後者の方がより事態実現を阻む抵抗力の存在が明確に読み取れるため「ことができる」が成立しやすくなっているのだと考えることができる。

(74) ??このろうそくは燃えやすく作ってあり、非常に簡単に燃えることができる。

(75) このろうそくは一旦火をつけると8時間は燃えることができる。

この節では、森山(1988)が述べる可能表現に関わる「特性記述」の「特性」とは何か、ということの問題に主に自発的状況可能を表す「ことができる」の成立環境を細かく分析した。その結果、自発的状況可能の「ことができる」は、主語の高い主体性と事態実現を阻む抵抗力の存在が認められる環境において成立することが明らかになった。つまり、「主体性の高い主体が事態実現を阻む抵抗力を克服して事態が実現する」という事態を表すような「特性」が、「ことができる」の拡張に必要であるということである。これはすなわち、<可能>の基盤事態である「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現した(抵抗力に屈した結果事態が実現しなかった)」という事態のあり方に近い事態を表すということを意味する。ここで述べたことは、「特性記述」は、話し手の述べ方の問題というよりも、最終的には事態参加者の参加のあり方の問題に還元されるという主張につながる。このように、自発的状況可能の「ことができる」の成立条件を、特性記述という話し手の述べ方という観点ではなく、事態参加者の参加のあり方という観点から記述することは、他の現象との平行性を捉える上でも有効である。その現象を2つ指摘する。

1つ目の現象は、先にも述べたように、青木ひろみ (1997)が指摘する意図性に関わる現象である。(76)のような経験者段階の文でも、(77)のように意図性を読み込むことで、「ことができる」の容認度が上がるという事実があった。これも、主体的に働きかけを行わない経験者を、主体的な働きかけを行っている行為主体に格上げするということであり、〈可能〉の基盤事態における参与者である行為主体に近づける操作であると考えることができる。

(76) *太郎は父親に似ることができない。

(77) 太郎は父親のようになりたいと思い、まず外見から真似てみたが、表面的な努力だけでは、忍耐強い性格までは決して似ることができないということを学んだ。

(青木ひろみ 1997:104)

2つ目の現象は、否定文を補文にとる「ことができる」に関わる現象である。渋谷 (1993, 1995)は(78)や(79)などの例を挙げ、「ことができる」は否定文も補文にとれることを指摘している。

(78) 被告人に異議のないときは、前項の猶予を置かないことができる。

(79) ぼくは3日ぐらい酒を飲まないことができる。

(渋谷 1993:8-9)

「られる」は否定形式の前接を全く許さないのに対して、「ことができる」では(78)、(79)のような例が成立するという両形式の差に対する渋谷 (1993, 1995)の指摘自体は正しい。ただし、注意しなければならないのは「ことができる」もそれほど自由に否定文を補文にとれるわけではなく、(80)のように不自然になる場合もある。

(80) a.??筆記試験で基準点に満たない場合には合格を認めないことができる。

b.??この国家資格試験の点数は原則非公開なので公開しないことができる。

(80)の「ことができる」の補文に現れる否定文は、自発的発生段階の文とは異なり、動詞は意志動詞であるため、主語の主体性は比較的高いと考えられる。しかし「認めない」、「公開しない」という「事態(行為)の非実現」を表す文であるため、「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服して事態が実現する」という事態における「働きかけ」がデフォルトでは存在せず、「働きかけ」がない以上、それに対する「抵抗力」も同様に存在しない。したがって、〈可能〉の基盤事態から大きく離れるために、(80)では「ことができる」が不自然になっているのである。しかし(81)のような文脈にすると「ことができる」による可能表現が自然に成立する。

(81) a. 筆記試験で基準点に達していても、面接で不適格と認定された場合には

合格を認めないことができる。

- b. この国家資格試験の点数は原則公開だが、主催機関が申請を行えば公開しないことができる。

この場合「面接で不適格と認定された場合」、「主催機関が申請を行えば」という限定的な条件下で「認めない」、「公開しない」ということが成り立つことが示されており、逆を言えば、そのような条件下でない場合「筆記試験で基準点に達していれば原則合格を認める」、「国家資格試験の点数は原則公開する」という逆の事態が実現することが前提となっていることを意味する。このような前提が、「合格を認めない」、「点数を公開しない」を「合格を認める」、「点数を公開する」に対応する「事態実現」として認識させ、またその前提が事態実現を阻む抵抗力と認識されやすくなっていることで、〈可能〉の基盤事態のあり方に近づき、「ことができる」が成立しているのである。渋谷（1993）が挙げる(78)、(79)の例も「猶予を置くことが原則であるが、被告人の異議のない場合に限って猶予を置かないということが可能である」、「普段は酒を飲むが、やろうと思えば3日ぐらい酒を飲まないということが可能である」という文脈で読むことができる文であり、「猶予を置かない」、「酒を飲まない」が限定的な条件下で、(原則猶予を置くという前提や酒を飲みたいという気持ちなどの)抵抗力を克服しながら実現する事態(行為)として捉えられるために「ことができる」が自然になっている。このように、否定文を補文にとる「ことができる」の成立環境についても、〈可能〉の基盤事態のあり方が関わっていることがわかる。

以上のような事実との平行性を考えると、「特性記述」という話し手の述べ方に関わる要因に見えるものも、事態参加者の参加のあり方に関わる要因に還元して考える方がよい。「特性記述」が「主体性」と「抵抗力の克服」という事態参加者の参加のあり方に還元され、さらに青木ひろみ（1997）の指摘する「意図性」の要因も「主体性」の問題に還元されるので、「事態の望ましさ」という要因を除くと、「ことができる」の拡張用法が成立する環境は、「〈可能〉の基盤事態に近い事態のあり方が表されている場合」とまとめることができる。

4.1.2.3. 事態参加者の参加のあり方と話し手の述べ方の関係

前節では、「ことができる」が自発的状況可能を表す際の条件として指摘されていた「特性記述」、「主体性」、「意図性」が、「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現した（抵抗力に屈した結果事態が実現しなかった）」とい

う<可能>の基盤事態への近づけ、という条件に還元されるということを指摘した。この 4.1.2.3 節では、上記の事態参与者の参与のあり方に関わる要因と、「事態の望ましき」の要因の関係を明らかにしたい。先行研究で指摘されていた例文を、誰にとっての望ましい事態かという観点で分類すると、「行為主体にとっての望ましい事態」=(82)、「話し手にとっての望ましい事態」=(83)、「望ましきが判断できない事態」=(84)、「(誰にとっても)望ましくない事態」=(85)という 4 つのパターンが考えられ、最後のパターンでは「ことができる」が成立しない。

【行為主体にとっての望ましい事態】

- (82) 太郎は父親のようになりたいと思い、まず外見から真似てみたが、表面的な努力だけでは、忍耐強い性格までは決して似ることができないということを学んだ。 (青木ひろみ 1997:104)

【話し手にとっての望ましい事態】

- (83) a. 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が 20 度を少し下回ってようやく咲くことができる。
b. …自然が豊かで空気が澄み切っているからこそ、星が美しく輝くことができるという訳です。

(呂雷寧 2008:280, 283)

【望ましきが判断できない事態】

- (84) 本来コレステロールは油の一種であり、それだけでは水を主成分とする血液中に溶けることはできないので、血液中ではリポ・タンパクという特殊なタンパク質と結合して存在します。 (呂雷寧 2011:208)

【望ましくない事態】

- (85) *包丁はずっと使わなければ錆びることができる。 (呂雷寧 2011:209)

ここで注意したいのは、先行研究によって指摘されている「話し手（および社会一般）にとっての望ましき」として示されている例文は「行為主体（変化主体）にとっての望ましき」も満たしている例になっているということである。「事態の望ましき」という観点から見た「ことができる」の成立環境は、正確には「(話し手によって判断される) 行為主体（変化主体）にとっての望ましき」と「話し手にとっての望ましき」がともにマイナスではないという場合であるということをも本論文では主張したい。このことは以下の 2 つの事実から示される。1 つは、「行為主体」にとっての望ましきと

「話し手」の望ましさがぶつかる場合の問題である。まず、(86)と(87)の例文でこの問題を考える。

(86) ??彼らは私に勝つことができた (ので悔しい)。

(行為主体：望ましい、話し手：望ましくない)

(87) ??彼らは私に負けることができた (のでうれしい)。

(行為主体：望ましくない、話し手：望ましい)

(86)が表す事態は、「勝つ」主体である「彼ら」と話し手である「私」にとっての望ましさがずれ、行為主体にとっては望ましい事態であるが、話し手にとっては望ましくない事態を表す。この場合、可能表現は成立しない。(87)はその逆であり、「負ける」主体である「彼ら」にとっては望ましくない事態で、話し手にとっては望ましい事態を表す文であるが、この場合も可能表現は成立しない。(88)のように、行為主体、話し手のいずれにとっても望ましい事態のときに初めて「ことができる」は成立する。

(88) 彼らはやっと私に勝つことができたので私もうれしい。

(行為主体：望ましい、話し手：望ましい)

つまり、どちらか一方にとっての望ましさが満たされていけばよいわけではなく、行為主体、話し手のいずれかにとって望ましくない事態であれば可能表現は成立しないということである。同様に、(89)を、「「息子」が自殺を凶っているが、話し手は息子に死んでほしくなかった」というような文脈で解釈すると成立せず、(90)を「話し手が彼を殺したくて彼に毒薬を渡した結果、彼はそのことを知らずに飲んで死んでしまった」というような文脈で解釈しても文は成立しない。もし成立する場合を考えると、(91)のように話し手にとっても行為主体にとっても望ましい事態を表す場合である。

(89) ??この薬を飲んで息子は死ぬことができた (ので悲しい)。

(行為主体：望ましい、話し手：望ましくない)

(90) ??この薬を飲んで彼は死ぬことができた (のでうれしい)。

(行為主体：望ましくない、話し手：望ましい)

(91) この薬を飲んで彼はやっと死ぬことができた (ので、私もうれしい)。

(行為主体：望ましい、話し手：望ましい)

以上の議論を踏まえ、先行研究で話し手（および社会一般）にとって望ましいために成立している例 ((83))、話し手にとって望ましくないために成立しない例として挙げられている例 ((85)) を見ると、それは同時に変化主体にとってもそれぞれ望ましい、望ましくない例を表していると考えることができる。つまり、(83)では「桜」、「星」

にとって望ましい（少なくとも望ましくないわけではない）と話し手が判断しているため「ことができる」が成立しており、逆に(85)は「包丁」にとって望ましくないと話し手が判断しているため「ことができる」が成立していない、と考えられる。このような見方は以下の例文(92)と(93)の間に容認度の差が出るという 2 つ目の事実からも支持される。

- (92) a. この悪性の細胞は非常に早いスピードで増えることができる。
b. なぜ人体に有害な紫外線は 1 億 5 千万 km も離れた太陽から地球に到達することができるのですか。
- (93) a.??ダムの水は猛暑や極端な少雨などの悪条件が重なってはじめて干上がることができる。
b.??桜はなぜあんなに短期間で枯れることができるのですか。

(92)と(93)はいずれも自発的状況可能を表す例であるが、主語は高い主体性を有し、事態実現を阻む抵抗力も文脈から読み込めるため、事態参加者の参加のあり方に関わる要件は満たしている。その上で、望ましきという観点から見ると、全て社会一般的には「望ましくない」事態を表していると考えられるが、(92)では「ことができる」の容認度が高く、(93)は「ことができる」の容認度が極めて低いという明確な差が存在する。両者の違いを説明するには、変化主体にとっての望ましきという概念を導入する必要がある。「この悪性の細胞」、「紫外線」にとって「非常に早いスピードで増える」、「地球に到達する」ということは望ましくないことはない（主体にとっての不利益をもたらしきない）と判断することができるのに対して、「ダムの水」、「桜」にとって「干上がる」、「枯れる」という事態は主体にとって望ましくない（不利益になる）という判断が話し手（あるいはこの文の解釈者）によってなされているのだと考えられる。この場合の「この悪性の細胞」、「紫外線」や「ダムの水」、「桜」にとっての「望ましき」とは何か、どのように判断できるのか、ということが当然問題になるが、先の行為主体にとっての「望ましき」というのも、実際の行為主体がどう思っているかは本来的には不明で、あくまで話し手の判断であるという点に注意が必要である。それでも、「彼らが勝つ」ということは「彼ら」にとって望ましく、「彼らに負ける」というのは「彼ら」にとって望ましくない、という話し手の判断があるということに違和感がないのは、我々人間が「彼ら」と視点・経験を重ねることができるからである。この考え方を無情物に対しても敷衍したのが、ここで言う変化主体にとっての望ましき、という考え方である。特に「水が干上がる」、「桜が枯れる」という事態は自身の消滅や衰退を意味するため、そこに我々人間の経験を重ね、主体の視点に立って事態の望

ましさを判断しているのだと考えることができる。因みに本論文では、(92)は「話し手」にとっての望ましさについてはニュートラルであると考え。「悪性の細胞が増える」、「紫外線が地球に到達する」ということは、社会一般にとっては望ましくないことであると考えられるが、話し手個人にとっての望ましさについては言及していない文である。このことは、話し手である「私」個人の問題として述べた(94)の場合には「ことができる」が不自然になることから示される。

(94) ??私の体の中にあるこの悪性の細胞は非常に早いスピードで増えることができる。

以上の議論をまとめる。呂雷寧 (2008, 2011)で指摘されていた「事態が望ましくない事態ではないこと」という条件は、「誰にとっての望ましさか」という観点からより正確に記述すると、「(話し手が判断する) 主体にとっての望ましさと話し手にとっての望ましさに関して、マイナスではないこと」ということになる。このように記述することで、(86)、(87)と(89)、(90)が不自然になるという事実、自発的状況可能において(92)と(93)の容認度に差が見られるという事実が適切に捉えられることに加え、(95)のように主語の主体性が高い事態において行為主体にとっての望ましさを満たさない例が不自然になることも同時に説明することができる。

(95) a.??太郎は自分の罪を白状することができる。

b.??私はすぐに楽しい思い出を忘れることができる。

「望ましさ」という要因は、基本的には話し手の述べ方に関わる問題であるが、そこには主体（行為主体・変化主体）にとって当該の事態が望ましいか否か、という事態参与者との関係も考慮する必要があり、事態参与者の参与のあり方とは完全には切り離せない問題であることがわかる。主体にとって当該の事態が望ましくない事態ではない（マイナスではない）ということつまり、主体がその事態に対して主体的に働きかけるという事態のあり方と矛盾しない事態を意味する。主体にとって望ましくない事態であれば、その事態の実現に向けて主体が働きかけるということはあり得ないが、主体にとって望ましい事態、あるいは望ましいとまでは言えなくとも望ましさに関してはニュートラルな事態であれば、当該の主体が事態の実現に向けて働きかけるという解釈が可能になる。主体が無情物（変化主体）である場合、その主体が事態実現に向けて「働きかけている」という見方をするのは難しいが、上述のような行為主体における事態の望ましさと働きかけの関係が、変化主体にも拡張的に適用されていると考えると、望ましさの制約も「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を

克服した結果、事態が実現した（抵抗力に屈した結果事態が実現しなかった）」という<可能>の基盤事態に起因するものであると考えることができる。

4.1.3. 「られる」と「ことができる」のまとめ

まず、4.1.2 節の議論をまとめる。自発的状況可能の「ことができる」の成立環境には、「主体性」と「事態実現を阻む抵抗力」という事態参加者の参加のあり方に関わる要因と「主体にとっての望ましさと話し手にとっての望ましさ」という話し手の述べ方に関わる要因が関わっていることがわかった。そして、いずれもの要因も、「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現した（抵抗力に屈した結果事態が実現しなかった）」という<可能>の基盤事態のあり方に起因するものであるということを主張した。さらに、これらの要因は、自発的状況可能の基になる自発的発生段階の文だけでなく、経験者段階の文や否定文を補文にとる「ことができる」においても同様に関わっており、これはつまり、何らかの点で<可能>の基盤事態からは逸脱する事態を、<可能>の基盤事態にできるだけ近づけ、基盤事態のあり方が活性化する（<可能>の基盤事態との類似性を見出すことで、基盤事態が喚起される）ことで、「ことができる」の拡張が許されるということになる。この意味で、日本語の「ことができる」という形式は、<可能>の基盤事態のあり方が非常に強くその使用に影響する形式であると言える。このような特徴を持つ形式を本論文では「基盤事態活性型の形式」と呼ぶことにし、「ことができる」は基盤事態活性型の形式であると位置づける。

基盤事態活性型の形式： 当該形式の使用に基盤事態のあり方が強く関わり、基盤事態のあり方が活性化された場合に当該形式の使用が容認されやすくなるもの。

翻って、日本語のもう 1 つの可能形式「られる」の状況について確認しておく。「られる」は、「ことができる」よりも成立条件が厳しく、経験者段階の文で意図性を読み込み主体性が上がっているとみなせる事態 ((96))、あるいは自発的発生段階の文で、主体性が比較的高く、事態実現を阻む抵抗力が読み込める事態 ((97)) であっても「られる」は成立しない。

(96) ??太郎は父親のようになりたいと思い、まず外見から真似てみたが、表面的

な努力だけでは、忍耐強い性格までは決して似れないということを学んだ。

(97) a. *温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が 20 度を少し下回ってようやく咲ける。

b. *…自然が豊かで空気が澄み切っているからこそ、星が美しく輝けるという訳です。

一方で、主体が無情物であっても意志動詞が用いられていれば、(98)のように成立する。

(98) a. この車は 400 メートル 12 秒で走れる。

b. この花は 2 回花を咲かせられる。

このことから、「られる」は動詞の語彙レベルの性質である「意志性」が必須の可能形式であることがわかる。寺村 (1982:262-263)は「可能態をとることのできる動詞は意志的な動作を表すもの (+意志) でなければならない」としているが、この記述は、「ことができる」を含まず、「られる」に対する記述としては正しいと言える。なお、井上和子 (1976)、井島 (1991)も日本語の可能表現には意志性が必要であることを指摘しているが、両者とも動詞の意志性に加え、主語が有情物であることを条件としている。しかし、実際には(98)のような例が成立するので、「られる」成立の必要条件はあくまで動詞の意志性であり、主語の有生性は不要であると考えられる。主語の有生性が「られる」の必要条件でないことを示す例文を以下に追加して示す。(99)では主語はいずれも「ニューロン」、「水 (の分子)」という無情物であるが、動詞が「伝える」、「変える」という意志動詞であるため、「られる」の文が成立している。

(99) a. なぜニューロンは興奮し、それを素速く伝えることができるのか。

(BCCWJ、『脳天観光』、LBk4_00057)

b. 氷を加熱していくと、水の分子の振動は徐々に激しくなり、温度が上昇します。さらに加熱を続けていくと、分子の規則正しい配列がくずれ、自由に形を変えられる状態になります。

(BCCWJ、『やりなおしの中学理科』、PB44_00098)

「られる」と「ことができる」の成立条件を以下にまとめる。

【「られる」と「ことができる」の成立条件】

「られる」：動詞の語彙的特徴である「意志性」が可能表現成立の必要条件である。

「ことができる」：「意志性」を満たさない場合でも、＜可能＞の基盤事態に近づくことで可能表現が成立する。具体的には、「主体性」、「事態実現を阻む抵抗力」、「主体にとっての望ましさと話し手にとっての望ましさ」という要因を満たすことで「ことができる」の拡張が許される。

以上の成立条件の違いと、「ことができる」が「基盤事態活性型の形式」であると規定したこととの関係を考えて、「られる」はどのように位置づけられるだろうか。本論文では、「られる」は「ことができる」と同様に基盤事態活性型の形式であり、両形式の成立条件の違いは、その基盤事態との近さをどれだけ強く求めるか、という程度差として捉える考え方をとる。

【「られる」と「ことができる」の特徴】

「られる」：基盤事態活性型の形式であり、基盤事態のあり方がその使用に非常に強く関わる。＜可能＞の基盤事態にあるような行為（あるいは行為と類似した見方ができる事態）の存在が要求される。

「ことができる」：基盤事態活性型の形式であり、基盤事態のあり方がその使用に強く関わるが、「られる」よりはその制限が弱い。＜可能＞の基盤事態にあるような行為が存在しなくても、「主体が事態実現を阻む抵抗力を克服して事態が実現する」という抽象的なレベルでの近似性が認められる事態が存在すればよい。

「ことができる」は、自発的発生段階の事態、すなわち「行為主体」も「働きかけ」も存在しない事態であっても、主語の高い主体性が認められ、また事態実現を阻む抵抗力を克服する、という関係が認められるような場合には、そこに＜可能＞の基盤事態との近似性が読み込まれ、「ことができる」の使用が可能になる。一方、「られる」の方は、そのような抽象的なレベルでの近似性によって拡張的に使用されるということではなく、＜可能＞の基盤事態と一致するような典型的な行為、あるいは、(98)や(99)のように主語が無情物であるために行為とは呼びにくいものの、その事態のあり方が行為に類似したものと見なせるような事態が要求される。「られる」の方がより＜可能

>の基盤事態との近さを強く要求する形式とすることができる。このように、両形式の違いを成立条件の違いだけでとどめず、基盤事態活性型の形式として括り、その違いを、求められる基盤事態との近さの程度差として捉えることは以下の2点において有益である。

1つは、「られる」と「ことができる」がともに行為実現の意図性に関する制約を持つという事実を捉えられる点である。意志動詞が用いられた場合には、「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現した（抵抗力に屈した結果事態が実現しなかった）」という<可能>の基盤事態の性質がデフォルトで満たされているが、その一部をキャンセルすることで、意志動詞を用いた文でも可能表現が成立しなくなる。例えば、(100)の場合、「いやいや」という副詞によって、当該事態が行為主体にとって望ましくないという解釈になるため、(101)のような通常の動詞文では問題なく成立しても、可能表現は成立しなくなる。

(100) ??太郎はいやいや[泳げた/ご飯を食べられた]。

(101) 太郎はいやいや[泳いだ/ご飯を食べた]。

また、(102)のような行為主体が事態の実現を意図していないことを表す文も、(103)に示されるように可能表現に転換することはできない。

(102) a. 太郎は部屋で独り言を言う。

b. この調子だと店に入るにはあと30分くらい待つ。

(103) a. ??太郎は部屋で独り言を[言える/言うことができる]。

b. ??この調子だと店に入るには30分くらい[待てる/待つことができる]。

「ことができる」についてはこの特徴が存在することを前節で指摘したが (cf. (95))、「ことができる」だけでなく「られる」についてもその成立環境を記述する上では、「動詞が意志動詞である」といった語彙的な性質を記述するだけでなく、「行為主体が働きかけ、事態が実現する」という行為主体の事態に対する主体的なあり方にまで言及する必要がある。つまり、「られる」の成立条件として指摘した「意志性」はあくまで、その成立の必要条件であり、意志動詞と共起した場合に必ず「られる」による可能表現が成立するわけではない。「られる」にも、基盤事態のあり方が関わっているのである。「られる」と「ことができる」にともに、このような行為主体の事態に対する主体的なあり方が関与するという事実は、両形式がともに基盤事態活性型の形式であり、<可能>の基盤事態のあり方に近い事態を要求するという点から自然に理解することができる。

2 つ目は、4.1.1 節で紹介した先行研究で指摘されている、「られる」と「ことができる」の傾向的な差異との対応関係も捉えられる、という点である。神田 (1961)、市川 (1991)によって、「られる」は口語的な文体に現れ、話し手の心情を直接訴えるムード的な性格を持つのにに対して、「ことができる」は堅い文体に現れ、事態を客観的に述べるコト的な性格を持つという指摘がされていた (【文体差・表現効果】の差)。これは「られる」が、「行為主体が働きかけ、事態が実現する」という事態のあり方を強く求める形式であるため、逆にこの形式を使用することで、個別具体的な事態が喚起されやすくなり、直接的な表現に感じられるということであろう。「ことができる」は相対的にその性格が「られる」よりも弱いために、「られる」との対比によってより堅い、客観的な表現に感じられるのだと考えられる。「られる」は内的能力 (能力可能) の解釈になり、「ことができる」は外的条件に由来する能力 (条件的状況可能) の解釈になるという久野 (1983)の指摘 (【可能の原因】の解釈の差) も、「られる」の方が基盤事態のあり方を強く求める形式であることと関係していると考えられる。「られる」の使用によって、基盤事態の行為主体のあり方に注目しやすくなり、「られる」は行為主体の内的要因として (不) 可能であるという解釈がされやすくなり、それとの対比で「ことができる」は外的な要因によって (不) 可能であるという解釈がされやすいということである。4.1.1 節でも述べたように、【文体差・表現効果】の差も【可能の原因】の解釈の差もいずれも傾向的な差であり、一方の解釈に制限されるというような絶対的な差ではない。このように、【文体差・表現効果】や【可能の原因】においてはっきりとした棲み分けが見られないという事実も、「られる」と「ことができる」の違いが、基盤事態に近い事態をどれだけ強く求めるかの程度差でしかないということを反映していると考え、自然に理解できる事実である。

4.2. 中国語の“能”、“会”、“可以”について

日本語の「られる」と「ことができる」の関係は、「られる」と「ことができる」の間に意味の差はほとんどなく、「ことができる」が「られる」の表す意味範囲を包含しているという関係になっていた。一方、中国語の可能形式“能”、“会”、“可以”は形式によって意味分布が異なり (【表 3】参照)、さらに基本的にはすべての形式で表すことのできる能力可能の場合でも、一定の条件下ではその使用が制限されるなど、3 つの形式の棲み分けの様相は複雑である。この 4.2 節では、先行研究の知見を基に、本論文が注目する「事態から実現性を見出す認知過程」という観点からこれらの形式を

捉え直すことで、3つの形式の意味の棲み分けがどのようになされているのかを記述することを目的とする。

【表3 日本語と中国語の可能形式の意味分布】

	非モダリティ		動的モダリティ		
	実現可能	能力可能	状況可能		
			条件的 状況可能	受動的 状況可能	自発的 状況可能
「られる」	○	○	○	○	×
「ことができる」	○	○	○	○	△
“能”	△	○	○	○	△
“会”	×	○	×	×	○
“可以”	×	○	○	○	×

束縛的モダリティ	認識的 モダリティ
許可可能	認識可能
×	×
×	×
○	△
×	○
○	×

4.2.1. “能”、“会”、“可以”についての先行研究の記述

まず、“能”、“会”、“可以”について分析している先行研究を概観する。中国語の“能”、“会”、“可以”の異同については非常に多くの研究で様々な現象が指摘されており、記述的には多くのことが明らかになっている(藤堂 1979、大河内 1980、吕叔湘 1980、1999、Tsang, Chuilim 1981、朱德熙 1982、刘月华等 1983, 2001、荒川 1986、相原ほか 1987、傅雨贤・周小兵 1991、相原 1991, 1997、许和平 1993、黄麗華 1995、

讚井 1996、宮本 1997、渡辺 1999、2000、郑天刚 2002、Li, Renzhi 2004、鲁晓琨 2004、陆庆和 2006、彭利贞 2007、侯瑞芬 2009)。しかし、能力可能から認識可能までを統一的に捉えられる形で“能”、“会”、“可以”の違いを説明している研究はそれほど多くない。例えば、教学上は“能”は「能力があってできる」、「会」は「技能を習得してできる」、「可以」は「許可や条件によってできる」という対立で説明されることが多い(荒川 1986、相原ほか 1987、讚井 1996、相原 1997)。“能”と“会”は能力可能、“可以”は条件的状況可能および許可可能の意味を中心に表すことから、このような記述がなされていると考えられ、3つの形式の意味分布の傾向を把握するには非常に有用である。しかし、「能力」、「習得技能」、「許可・条件」を基軸にした説明では、それぞれの意味が重なる部分での意味の違い、あるいは認識可能を表せるか否かの説明に対して十分に説明することが難しくなる。例えば、条件的状況可能・許可可能については、“可以”が用いられることがしばしば強調されるが、条件的状況可能・許可可能は“能”も表すことができる(【表 3】参照)。逆に、能力可能については“能”と“会”が注目され、その違いを「能力」か「習得技能」かという対立で捉えているが、能力可能は“可以”も表すことができ、許可や条件による可能が強調される“可以”が能力可能を表せることの実が説明しにくい。「能力があってできる」ということが基本である“能”がなぜ許可可能まで表せるのか、また“能”と“可以”がともに許可可能を表す場合、両者にどのような差があるのかということは、「能力があってできる」、「許可や条件によってできる」という基本的な意味の対立だけでは説明できない。また、認識可能は、基本的に“会”が表す意味範囲であるが、この認識可能の意味と「技能を習得してできる」という記述をつなげるのは困難である。動的モダリティと認識的モダリティの議論を分けたとしても、なぜ認識的モダリティを自由に表せるのは“会”だけで、他の“能”や“可以”は認識可能を表せない(表しにくい)のか、ということが問題になる。能力可能から許可可能、認識可能までを含む形で、“能”、“会”、“可以”の違いを説明するには、これらの形式が表す中核的意味を捉え、そこから説明を与える必要があると思われる。ここでは“能”、“会”、“可以”の中核的意味を定め、それぞれの分布の差を統一的な観点から説明を試みている研究で時に注目される鲁晓琨(2004)、黄麗華(1995)、侯瑞芬(2009)を取り上げる。

鲁晓琨(2004)は動的モダリティと認識的モダリティ・束縛的モダリティを区別し、それに合わせ各形式の記述も分けている。以下の、“会 1”は動的モダリティ、“会 2”は認識的モダリティを表すものにあたり、“可以 1”は動的モダリティ、“可以 2”は束縛的モダリティを表すものにほぼ相当する。“能”についても動的モダリティを表す用

法と認識的モダリティを表す用法を区別しているが、“能”については用法ごとに意味を記述せず、「NP が VP を実現する条件を備えている」ということを客観的な事実として述べる場合には動的モダリティとなり、それを話し手の主観的な推測として述べる場合には認識的モダリティになるという記述の仕方をとっている²⁶。

【魯晓琨 (2004)における“能”、“会”、“可以”の記述】

“能” : NP が VP を実現する条件を備えている。(我们说“能”的语义是表示“NP 具有实现 VP 的条件”。)

(鲁晓琨 2004:39)

“会 1” : 動作主の技能(技量)を表す。(“会 1”表示施事的本领。)

(鲁晓琨 2004:136)

“会 2” : ある状況が出現、あるいは存在する必然性を主観的に推測することを表す。(“会 2”表示主观推测某种情况出现或存在的必然性。)

(鲁晓琨 2004:136)

“可以 1” : VP の実現が NP の条件の許容範囲に入ることを表す。(“可以 1”表示 VP 的实现能够进入 NP 条件容许范围。)

(鲁晓琨 2004:72)

“可以 2” : ある状況(NP+VP)が情理上の許容範囲あるいは話し手の許容範囲に入ることを表す。(“可以 2”表示某种情况(NP+VP)能够进入情理上的容许范围或说话人的容许范围。)

(鲁晓琨 2004:72)

魯晓琨 (2004)の記述の特徴の1つは、動的モダリティを表すときの意味とは別に、認識的モダリティ・束縛的モダリティを表すときの中核的意味を定めている点にある。これによって、「習得技能」という意味からは説明が困難だった認識的モダリティを表す“会”の意味が捉えられるようになっている。また、動的モダリティを表すときの意味について、“会 1”の「技量を表す」という記述は従来の「習得技能を表す」という記述とさほど変わらないが、“能”を「NP が VP を実現する条件を備えている」、「可以」を「VP の実現が NP の条件の許容範囲に入る」という「条件」のあり方の関係で記述している点は注目される。これによって、“能”と“可以”がともに能力可能ある

²⁶ 魯晓琨 (2004)は、認識的モダリティと束縛的モダリティのみを「モダリティ表現」(“情态表现”)とし、動的モダリティは「非モダリティ表現」(“非情态表现”)と見ている。

いは条件的状況可能を表す際の違いが説明される。例えば、(104)ではいずれも単文では“能”、“可以”とも使用できるが、「(描けるのは描けるが) あまりうまくない」、「(出勤できることはできるが) 午後には病院に行かなければならない」など、十分な能力や条件がそろっていないときには“能”は使えず、“可以”を使うことになる。これは、“能”が「条件が十分にそろっている」という積極的な意味を表すのに対して、“可以”は「VPの動作を行うのに妨げがない」という消極的な意味を表すことから生じると魯晓琨(2004)は説明している。

(104) a. 你 能 画 广告 吗?

あなた NENG 描く 広告 SFP (疑問)

「あなたは広告を描けますか。」

— 我 [能/可以] 画。

私 NENG/KEYI 描く

「描けます。」

— *我 能 画, 但 画不好。

私 NENG 描く しかし 描く・NEG・良い

「描けますけど、あまりうまくありません。」

— 我 可以 画, 但 画不好。

私 KEYI 描く しかし 描く・NEG・良い

「描けますけど、あまりうまくありません。」

b. 你 下星期 能 来 上班 吗?

あなた 来週 NENG 来る 出勤する SFP (疑問)

「あなたは来週出勤できますか。」

— *我 能 去, 但是我 每天 下午 还 得 去 医院。

私 NENG 行く しかし 私 毎日 午後 まだ 必要がある 行く 病院

「行けませんが、午後は毎日病院に行かなければなりません。」

— 我 可以 去, 但是我 每天 下午 还 得 去 医院。

私 KEYI 行く しかし 私 毎日 午後 まだ 必要がある 行く 病院

「行けませんが、午後は毎日病院に行かなければなりません。」

(鲁晓琨 2004:89)

鲁晓琨(2004)の研究は、動的モダリティから認識的モダリティ、束縛的モダリティの意味までを形式ごとに記述し、また“能”と“可以”の関係を条件のあり方の違いとして記述することで、両形式の差異を的確に捉えられている。

つづいて黄麗華 (1995)の研究を見る。黄麗華 (1995)は動的モダリティと認知的モダリティを区別せず、“能”、“会”、“可以”の意味は全て以下のような中核的意味を規定することで説明されることを論じている。

【黄麗華 (1995)における“能”、“会”、“可以”の記述】

“能”：状況が一定のレベルにまで達する。「達成」

“会”：ことがらのごく自然に成立する。「自発」

“可以”：ことがらが許容範囲内におさまる。「許容」

黄麗華 (1995)の“能”と“可以”に対する記述は魯晓琨 (2004)のそれと非常に近い。“能”の「一定のレベルに達する」という実現に対する積極的なニュアンスは魯晓琨 (2004)の記述と通じる。したがって、魯晓琨 (2004)で挙げられていた(104)についても魯晓琨 (2004)と同じような説明が可能であろう。(105)のような、動作の「到達度」を問題とするような表現では“能”が自然になり、また(106)のように“很”(とても)のような程度が高いことを表す副詞(以下、「高程度副詞」と共起する場合に「動作や量の頻度が高いレベルにまで達する」ということを表すようになるという説明も“能”の積極性を示すものである。

(105) a. 小李 能 刻 钢板, 一小时 能 刻 一千多 字。

李くん NENG 切る ガリ版 一時間 NENG 切る 1000 余り 字

「李くんはガリ版を切れる。一時間に 1000 字あまり切れる。」

b. 新干线 一个小时 能 行 210 公里。

新幹線 一時間 NENG 進む 210 キロ

「新幹線は 1 時間で 210 キロ走れる。」

(黄麗華 1995:80)

(106) 张三 很 能 买 东西, 见 什么 买 什么。

張三 とても NENG 買う もの 見る 何 買う 何

「張三は非常によく買物をし、見たものは何でも買ってしまう。」

(黄麗華 1995:80)

また“能”が認識可能を表す(107)と(108)の例も「状況が話し手の望むレベルにまで達する」という意味での「達成」を表していると考えられると黄麗華 (1995)は述べている。

(107) 天 这么 晚 了, 张三 也许 不 能 来 了。

時間 こんなに 遅い PERF 张三 かもしれない NEG NENG 来る SFP (変化)

「こんなに遅くなって、張三はもう来られないかもしれない。」

(108) 这 孩子 将来 一定 能 像 他 的 父亲 那样 出色。

これ 子ども 将来 きっと NENG 似る 彼 の 父親 そのよう 立派だ

「この子は将来きっと父親のように立派な人になるだろう。」

逆に(109)、(110)のような、望ましくない事態が“能”で表せないのは「達成」とは捉えられないからであると説明しており、魯晓琨 (2004)では明確ではなかった、“能”が認識的モダリティを表す場合の条件についても「達成」という概念で説明しうることを示している。

(109) *不 注意 身体 能 感冒 的。

NEG 注意する 体 NENG 風邪をひく SFP (肯定)²⁷

「体に気をつけないと風邪を引くぞ。」

(110) *这 孩子 的 父亲 很 坏, 这 孩子 将来 一定 能 像

これ 子ども の 父親 とても 悪い これ 子ども 将来 きっと NENG 似る

他 的 父亲。

彼 の 父親

「この子の父親は非常に悪い人だ。この子もきっと将来その悪い父親になるだろう。」

(黄麗華 1995:80-81)

“可以”に対する記述も魯晓琨 (2004)の記述とほぼ同じであると言える。黄麗華 (1995:83)は「「可以」は主に「許可」を表すと言われる。確かに、「ことがらが許容範囲におさまる」ということを表す関係上、「可以」は「許可」という文脈で用いられることが多いが、「許可」という意味自体は、許可を与える主体や規則・約束事の存在が想定される場合に生ずる意味にすぎない。」とし、あくまで「ことがらが許容範囲におさまる」という動的モダリティの意味が“可以”の基本的意味と見ている。これは許可可能を条件的状況可能、受動的状況可能の特殊なケースと見る本論文の立場と一致する。“可以”については意味分布で重なるところの多い“能”との違いを中心に論じているが、その趣旨は魯晓琨 (2004)とほぼ同じであり、“可以”の「許容」という意

²⁷ 中国語の“的”には、日本語の「の」に近い働きをするもののほかに、話し手が当該の事柄に対して「肯定」や「確定」をしていることを表す文末助詞 (sentence-final particle) がある。

味から生じる消極性を説明している。例えば、(111)において“可以”は自然で“能”が不自然なのは、“能”は「達成」という上限を表すことになるので、「4人」と「2人」という2つの上限があることを述べることになるためである。一方“可以”は「許容」であるため、「4人」、「2人」とともに許容範囲内であることを述べることに矛盾は生じないため成立している。

(111) a. *这间屋子能住四个人，也能住两个人。

これ CL 部屋 NENG 住む 四 CL 人 も NENG 住む 二 CL 人

「この部屋は4人住めるが、2人でも住める。」

b. 这间屋子可以住四个人，也可以住两个人。

これ CL 部屋 KEYI 住む 四 CL 人 も KEYI 住む 二 CL 人

「この部屋は4人住めるが、2人でも住める。」

(黄麗華 1995:82)

以下の(112)は逆に“可以”の方が不自然になっている例であるが、これは日本語でも「小説を書くくらいは(*たいへん)大丈夫だ。」が不自然となるように、「許容」と程度が高いということを表す“很”の意味が矛盾するためである。

(112) 张三很 [能/??可以] 写小说。

張三 とても NENG/KEYI 書く 小説

「小説を書くと張三はたいへん筆が立つ。」

(黄麗華 1995:83)

“会”に対する「ことがらごく自然に成立する」という記述は魯晓琨 (2004)と異なる点であり、その他の従来の研究にも見られなかった観点からの記述である。黄麗華 (1995:84) は「「ことがらが自然に成り立つ」ということは、動作主体の意思や外的条件に依存するというよりは、主語で表わされるヒトやモノの性質に依存する形でことがらが成立するということである。」と述べており、“会”が(113)のような条件的状況可能を表せないのは動作主体の性質ではなく、外的な条件によって事態が実現できないことを表すからであるとしている。同様に、“能”では自然に表せる(114)のような「到達度」を問題にするような動作は「自然におこなえる」ことではないので“会”は使用できない。

(113) 我最近很忙，不 [能/*会] 打毛衣。

私 最近 とても 忙しい NEG NENG/HUI セーターを編む

「私は最近忙しいので、セーターが編めない。」

(114) 张三一小时 [能/??会] 打一千多字。

張三 一時間 NENG/HUI 打つ 千字余り 字

「張三は一時間に 1000 字余り打てる。」

逆に、主体の性質によって自然に行える行為を表す(115)や(116)のような文では、専ら“会”が用いられることになり、(117)や(118)のように高程度副詞と共起し、質的にすぐれていることを表す表現も、つまるところ当該のことがらが主体の性質に依存する形で自然に成立することを表しているという説明が与えられている。

(115) 张三 是 四川人, [??能/会] 说 四川话。

張三 COP 四川人 NENG/HUI 話す 四川語

「張三は四川人だから四川語が話せる。」

(116) 老鼠 生来 [??能/会] 打洞。

ねずみ 生来 NENG/HUI 穴を掘る

「ねずみは生まれながらにして穴を掘ることができる。」

(117) 张三 特别 会 买 东西。

張三 特に HUI 買う もの

「張三は買い物上手だ。」

(118) 张三 特别 会 走路。

張三 特に HUI 歩く

「張三は上手に歩く技術を身につけている。」

さらに、“会”が認識的モダリティを自由に表せることについても言及している。望ましくない事態を表す(119)、(120)のような例において、“会”が認識的モダリティを表すことができるという事実について、黄麗華 (1995)は「ことがらがごく自然に成立する」ということから説明できるとする。すなわち、“会”が認識的モダリティを表すときは、ある条件のもとでことがらが自然なりゆきとして成立するということを表しているとし、したがって、“能”のように「達成」という意味合いを含まないので望ましさに関する制約もないと述べている。

(119) 不 注意 身体 会 感冒 的。

NEG 注意する 体 HUI 風邪をひく SFP (肯定)

「体に気をつけないと風邪を引くぞ。」

(120) 这 孩子 的 父亲 很 坏, 这 孩子 将来 一定 会 像

これ 子ども の 父親 とても 悪い これ 子ども 将来 きっと HUI 似る

他 的 父亲。

彼 の 父親

「この子の父親は非常に悪い人だ。この子もきっと将来その悪い父親になるだろう。」

(黄麗華 1995:80-81)

黄麗華 (1995)は“能”、“会”、“可以”の中核的意味を抽象的なレベルで記述することで、能力可能から許可可能・認識可能における各形式の差異を統一的に説明することを試みている研究であり、実際かなりの程度それに成功している。以下で見る侯瑞芬 (2009)も、“能”、“会”、“可以”の中核的意味を抽象的なレベルで記述する試みをしている研究であるが、「力動性」(force dynamics)という、スキーマ的概念からこの3つの形式を捉えようとしている点が注目される。最後に侯瑞芬 (2009)の研究を見る。

侯瑞芬 (2009)は、「力」と「障害物」という観点から“能”、“会”、“可以”の意味を記述している。これは Talmy (1988)で提唱されている「力動性」(force dynamics)の理論を援用したものである。力動性とは、力学現象を基にしたスキーマ的概念の1つで、力の行使、行使された力への抵抗、抵抗の克服、力の行使に対する障害、障害の除去などがこれによって表される。第3章3.4節で紹介した Sweetser (1990)の根源的モダリティ (非認知的モダリティ) と認知的モダリティを力の構造の類似性で捉える分析もこの力動性の概念を基にしている。また、本論文では<可能>と<難易>の認知基盤事態を、行為主体の働きかけと事態実現を阻む抵抗力の関係で捉えているが、このような考え方も事物の力関係を想定している点で力動性の理論に近いものであり、侯瑞芬 (2009)の分析は本論文の枠組みと近い枠組みを採用しているという点で注目される。侯瑞芬 (2009)はこの力動性の観点から“能”、“会”、“可以”の関係が以下のようになっていると考えている。

【侯瑞芬 (2009)における“能”、“会”、“可以”の記述】

“能” : 力と障害の両方の意味を兼ね備えており、主体が障害を克服する能力を表す。

(“能” 兼有力量与障碍两种语义, 表示主体克服障碍的能力。)

(侯瑞芬 2009:274)

“会” : 主体が行う行為の内在的な力を強調している。(“会” 强调主体实施行为的内在力量。)

(侯瑞芬 2009:274)

“可以” : 外部の障害の消失を強調している。(“可以” 强调外部障碍的消失。)

侯瑞芬 (2009)は「主体の力」と「障害」の存在の関係から“能”、“会”、“可以”の関係を捉えようとするものであり、“会”は主体の力側、“可以”は障害(の消失)の側を強調しているという点で対立する。そして、“能”がその2つの両方の側面を持っているとする。“能”の「主体が障害物を克服する能力を表す」というのは、魯晓琨 (2004)の「NPがVPを実現する条件を備えている」、黄麗華 (1995)の「達成」という記述と通じるものであり、“能”には積極性、努力性という意味があると述べている。これは、魯晓琨 (2004)、黄麗華 (1995)と同様、“能”が基本的に主体の達成に焦点があることを指摘しているものであると言える。また、“可以”についての「外部の障害の消失を強調している」という記述も、魯晓琨 (2004)の「許容範囲に入る」、黄麗華 (1995)の「許容」という指摘と同趣旨であると考えられ、行為主体側ではなく、行為主体以外の事物やその他の状況側にその事態の実現をさえぎるものがないということを述べているものである。

以上、“能”、“会”、“可以”それぞれの中核的意味を規定した上で3つの形式の異同を捉えようとしている研究として、魯琨晓 (2004)、黄麗華 (1995)、侯瑞芬 (2009)を見たが、“能”、“会”、“可以”の意味を抽象的なレベルで記述しようとする、細部では異なってもいずれも類似した記述になることがわかる。すなわち、“能”は「達成」や「障害の克服」など主体の働きかけの側面に注目し、“可以”は「許容」や「障害の不在」など主体の働きかけに対する力の側に注目し、“会”は「自然な生起」や「主体の内在的力」など、主体の属性²⁸や事柄の必然性などに注目しているのである。本論文では、これらの先行研究の記述は、〈可能〉の基盤事態との関係からより一般的に記述できることを主張したい。〈可能〉の基盤事態との関係という観点からより一般化した形で記述することで、日本語と中国語の関係、〈可能〉と〈難易〉の関係がより明確に捉えられるようになる。

²⁸ 勝川 (2011)も“会”の描写機能を「動作・状態の担い手が兼ね備える生得的・習得的能力を持ってその属性を描く」ことであるとしている。

4.2.2. 本論文における“能”、“会”、“可以”の記述

本論文では、魯晓琨 (2004)、黄麗華 (1995)、侯瑞芬 (2009)の記述をベースとしながらも、“会”については、“能”と“可以”とは異なったレベルで記述する必要があるという見方を提示したい。まず、“能”と“可以”については、〈可能〉の基盤事態である「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現した（抵抗力に屈した結果事態が実現しなかった）」という事態のどの部分に注目して概念化しているかの差で捉えられると考える。

【“能”と“可以”の〈可能〉の認知過程】

“能”：「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服することで事態が実現する」という主体の働きかけのあり方に注目して〈可能〉を捉えた形式。

“可以”：「行為主体の働きかけに対して事態実現を阻む抵抗力がない（小さい）ために事態が実現する」という抵抗力のあり方に注目して〈可能〉を捉えた形式。

“能”と“可以”における捉え方の違いを“他[能/可以]画油画。”（彼は油絵が描ける）という文で説明する。“能”を用いた場合は「彼が油絵を描こうと働きかけ、「油絵を描く」という事態の実現を阻む抵抗力を克服することで、「油絵を描く」という事態が実現する」という意味になり、“可以”を用いた場合には、「油絵を描く」という事態の実現を阻む抵抗力（絵を描く時間がないこと、技術的な難しさなど）が存在しないため、「油絵を描く」という事態が実現する」という意味になる。“能”と“可以”は同じ事態に対して主体の働きかけに注目するのか、それとも働きかけに対する抵抗力に注目するのかという点で相補的な関係にあると言える。相原 (1997:53)は“能”と“可以”を図柄と背景に喩え、「図柄本体からその能力を主張するのが“能”であり、これとは対比的にその地・背景から、消極的にその実現を妨げる状況はないとするのが“可以”である。この意味で“能”と“可以”は、一つの事態を本体と状況という相補分布的観点から見たものであると言える場合が多い。“能”は主体指向、“可以”は状況指向である。」と述べており、本論文の見方と一致する。

一方“会”は事態内の力関係では捉えられない形式であると考えられる。

【“会”の〈可能〉の認知過程】

“会”：〈可能〉の基盤事態の力関係を捨象して、「主体・環境がある属性を持っているため事態が実現する」という主体・環境の属性主体のあり方に注目して〈可能〉を捉えた形式。

上記の“会”の捉え方を“他会画油画。”（彼は油絵が描ける）という文で説明すると、「彼は、「油絵を描く」という事態を実現するための属性（油絵を描く技術があるなど）を持っているため、「油絵を描く」という事態が実現する」という意味になる。“能”と“可以”が〈可能〉を認知する基盤になる事態における主体の働きかけとそれに対する抵抗力との力関係に注目した形式であったのに対して、“会”は〈可能〉の帰属先である主体・環境の属性主体としてのあり方に注目している点が最も異なる点である。侯瑞芬（2009）は3つの形式を全て事態における力関係で捉えようとしていたが、“会”は他の2形式とは異なるレベルで規定すべき形式であると本論文は考える。【表3】に示されるように、表し得る意味範囲において“能”と“可以”が比較的近い分布を示し、“会”が他の2形式とは大きく異なる分布を示すのも、“能”、“可以”と“会”が注目するレベルの違いを反映しているのだと考えられる。

【表 3 日本語と中国語の可能形式の意味分布】

	非モダリティ		動的モダリティ		
	実現可能	能力可能	状況可能		
			条件的 状況可能	受動的 状況可能	自発的 状況可能
「られる」	○	○	○	○	×
「ことができる」	○	○	○	○	△
“能”	△	○	○	○	△
“会”	×	○	×	×	○
“可以”	×	○	○	○	×

束縛的モダリティ	認識的 モダリティ
許可可能	認識可能
×	×
×	×
○	△
×	○
○	×

以下、本論文の枠組みの下で各形式の異同がどのように捉えられるか、それぞれの意味ごとに見ていく。

4.2.3. “能”、“会”、“可以”と能力可能

【表 6】 および例文(121)、(122)が示すように、能力可能は“能”、“会”、“可以”のいずれの形式でも表すことができ、この意味を表すときに3つの形式が最も接近する。ただし、同じ能力を表す場合でも一定の条件下では制限が生じることが多くの先行研究で指摘されている。ここでは、「行為のあり方を限定する語句との共起」と「高程度

副詞との共起」の問題を取り上げながら、3つの形式の違いが本論文の枠組みでどのように捉えられるかを説明する。

【表6 “能”、“会”、“可以”と能力可能】

	能力可能
“能”	○
“会”	○
“可以”	○

(121) 他 〔能/会/可以〕 游泳。

彼 NENG/HUI/KEYI 泳ぐ

「彼は泳げる。」

(122) 他 〔能/会/可以〕 说 3 种 外语。

彼 NENG/HUI/KEYI 話す 3 CL 外国語

「彼は3つの外国語を話すことができる。」

能力可能における“能”、“会”、“可以”のふるまいの違いの1つ目として、補語や状語（連用修飾語）、介詞句（前置詞句）との共起可否に関する違いを見る。侯瑞芬（2009）は、(123)のように“背+出”（暗誦する+出る）という「動詞+方向補語」の構造をとっている例で“会”が不自然になるのは、“会”が持つ「恒常性」という意味特徴に違反するためであると説明している。

(123) a. *他 一口气 会 背出 我们的 历史 大系。

彼 一氣に HUI 暗誦する-出る 私達 の 歴史 大系

「彼は我々の歴史大系を一気に暗唱することができる。」

b. 他 一口气 〔能/可以〕 背出 我们的 历史 大系。

彼 一氣に NENG/KEYI 暗誦する-出る 私達 の 歴史 大系

「彼は我々の歴史体系を一気に暗唱することができる。」

（侯瑞芬 2009:279）

しかし、(123)を恒常性の観点から説明することは適切ではない。“会”が恒常性という特徴を有することは他の先行研究でも指摘されており、侯瑞芬（2009）が後に挙げる(124)の条件的状況可能の例は確かにこの恒常性の制約に違反するために“会”が使用不可能になっている例である。しかし(123)は、「一気に歴史体系を暗唱するという恒常

的能力を有する」という解釈ができ、恒常性という制約には違反していないはずである。

(124) a. *他 嗓子 哑 了, 不 会 唱 歌 了。

彼 喉 かれる PERF NEG HUI 歌う 歌 SFP (変化)

「彼は喉がかれて、歌えなくなった。」

b. 他 嗓子 哑 了, 不 能 唱 歌 了。

彼 喉 かれる PERF NEG NENG 歌う 歌 SFP (変化)

「彼は喉がかれて、歌えなくなった。」

(侯瑞芬 2009:279)

“会”が「動詞+補語」の構造をとれないという指摘自体は正しく、例えば(125)は、“洗干净”(洗う+きれい)という「動詞+結果補語」構造をとっているために不自然になっている。しかし、この場合も「彼はワイシャツをきれいに洗うという恒常的能力を有する」と解釈できるはずであり、恒常性に違反しているわけではない。

(125) a. *他 会 把 衬衫 洗干净。

彼 HUI ~を ワイシャツ 洗う-きれい

「彼はワイシャツをきれいに洗える。」

b. 他 能 把 衬衫 洗干净。

彼 NENG ~を ワイシャツ 洗う-きれい

「彼はワイシャツをきれいに洗える。」

“会”が共起できない成分を挙げると、方向補語 ((126a))、結果補語 ((126b)) のほかに、“得干净”(きれいに)のような様態補語 ((126c))、“500m”のような数量補語 ((126d))、“流利地”(流暢に)のような様態を表す状語(連用修飾語) ((126e))、“在海里”(海で)のような介詞句(前置詞句) ((126f))などが挙げられる。いずれの文も“能”と“可以”では自然に成立する(黄麗華 1995、相原 1997、渡边 2000、鲁晓琨 2004、侯瑞芬 2009)。

(126) a. 他 一口气 [能/??会/可以] 背出 我们的 历史 大系。

彼 一氣に NENG/HUI/KEYI 暗誦する-出る 私達 の 歴史 大系

「彼は我々の歴史大系を一気に暗唱することができる。」

b. 他 [能/??会/可以] 把 衬衫 洗干净。

彼 NENG/HUI/KEYI ~を ワイシャツ 洗う-きれい

「彼はワイシャツをきれいに洗える。」

c. 这 件 衣服, 我 [能/??会/可以] 洗 得干净。

これ CL 服 私 NENG/HUI/KEYI 洗う きれいに

「この服を、私はきれいに洗える。」

d. 他 [能/??会/可以] 游 500m。

彼 NENG/HUI/KEYI 泳ぐ 500m

「彼は 500m 泳げる。」

e. 他 [能/??会/可以] 流利地 说 英语。

彼 NENG/HUI/KEYI 流暢に 話す 英語

「彼は流暢に英語が話せる。」

f. 他 [能/??会/可以] 在 海里 游泳。

彼 NENG/HUI/KEYI ~で 海の中 泳ぐ

「彼は海で泳げる。」

黄麗華 (1995)はこれらの文は、通常「自然に成立する」とは考えられない動作であり“会”の「ことがらがごく自然に成立する」という意味にあわないため不自然となるとしているが、何が「自然に成立する動作」であるかについては説明がない。(121)では“会”を用いることができていることので、黄麗華 (1995)の見方に基づく「泳ぐこと」は自然に成立する動作であることになるが、「泳ぐ」と「泳ぐ 500m 泳ぐ」の間に動作の成立の自然さにどのような差があるのかを説明するのは困難であると思われる。「恒常性」、「動作成立の自然さ」という観点では(126)の“会”の不自然さが十分に説明できない。

(126)の事実が示すのは、補語や状語(連用修飾語)、介詞句(前置詞句)によって行為の具体的な現れ方が限定された場合には“会”が使えないということである。このことは、(126)と以下の(127)~(129)の例を対比させるとよくわかる。

(127) a. 她 会 写 200 个 汉字。

彼女 HUI 書く 200 CL 漢字

「彼は漢字 200 文字を書ける。」

b. 我 会 唱 5 首 日语 歌。

私 HUI 歌う 5 CL 日本語 歌

「私は日本語の歌を 5 曲歌うことができる。」

c. 宝宝 会 做 3 个 动作 了。

赤ちゃん HUI する 3 CL 動作 SFP (変化)

「赤ちゃんは 3 種類の動作を覚えた。」

(張素娟 2012:103-104)

(128) 他 会 说 流利的 英语。

彼 HUI 話す 流暢な 英語

「彼は流暢な英語が話せる。」

(129) 他 在 游泳池里 会 游泳。

彼 ~で 海の中 HUI 泳ぐ

「彼はプールでは泳げる。」

(127)~(129)も“200 个”(200 個)、“5 首”(5 曲)、“3 个”(3 個)という数量詞や、“流利”(流暢)という形容詞、“在游泳池里”(プールで)という介詞句といった、行為の様態や場所に関わる語句と共起しているため、(126)と同種の文に見えるが、(127)~(129)では“会”が自然に成立する。ここで重要になるのが、(127)~(129)では数量詞や形容詞、介詞句がいずれも行為を表す動詞と直接修飾関係を結んでいないということである。(126)では、「泳ぐ」に対して「500m」という結果の量を述べることで、「泳ぐ」という行為の具体的な現れ方を限定していた。「話す」に対して、「流暢に話す」、「泳ぐ」に対して「海で泳ぐ」という関係も同様である。それに対して、(127)が表す数量詞は目的語と修飾関係を結んでおり、限定されているのは行為ではなく、行為の対象である。(128)で“流利”(流暢)が限定しているのも同様に行為の対象である“英語”(英語)である。(129)では、“在游泳池里”という介詞句が“会”の外に置かれているため、この介詞句は“游泳”(泳ぐ)という行為を限定しているのではなく、“会游泳”(泳げる)ということ全体を限定していると解釈される。すなわち「プールで泳ぐということが可能だ」という解釈ではなく、「泳ぐことが可能だということが、(海という場所ではあてはまらないが)プールという場所ではあてはまる」という解釈である。(126)とは異なり、(127)~(129)はいずれも、行為の具体的な現れ方を限定していないために“会”が成立しているのである。

以上の議論から“会”不自然になるのは、行為の具体的な現れ方が限定されることであることがわかったが、なぜこのような制約が“会”にだけ存在するのだろうか。これは、“能”と“可以”が事態のあり方に注目した形式であるのに対して、“会”は基盤事態を捨象している形式であるというレベルの違いから説明される。すなわち、事態における行為のあり方が限定される場合、事態内の力のやりとりがより注目されやすくなるため、基盤事態を捨象した“会”が不自然になるのだと考えられる。

“能”、“会”、“可以”が能力可能を表す場合に異なったふるまいを示す2つ目の現象として、「高程度副詞との共起」を見る。“能”が高程度副詞と共起した場合には、

「行為の量」の多さを強調する意味になり、“会”は「行為の質」の高さを強調する意味になるということが先行研究で度々指摘される（黄麗華 1995、相原 1997、鲁晓琨 2004）。(130)の“能”を用いた文では「買い物をする行為の量（頻度）の多さ」や「食べる量の多さ」を表している。一方、(131)の“会”を用いた文では「買い物の技術の質の高さ」、「食べ方の質の高さ」を表している。

(130) a. 张三 特别 能 买 东西。

张三 特に NENG 買うもの

「彼はたくさん買い物をする。」

b. 他 很 能 吃。

彼 とても NENG 食べる

「彼はよく食べる。」

(131) a. 张三 特别 会 买 东西。

张三 特に HUI 買うもの

「張三は買い物上手だ。」

b. 他 很 会 吃。

彼 とても HUI 食べる

「彼はグルメだ。」

(132)における解釈の違いも「行為の量」と「行為の質」との対立として捉えられる。

- | | | | |
|-------|------------------|---|-----------------|
| (132) | “很能说”（よく喋る） | — | “很会说”（弁が立つ） |
| | “很能干”（よく働く） | — | “很会干”（要領がいい） |
| | “很能走路”（長い距離が歩ける） | — | “很会走路”（歩く技術がある） |
| | “很能喝酒”（酒豪だ） | — | “很会喝酒”（利き酒ができる） |

なお、(133)が示すように、“可以”は高程度副詞と共起できない。

(133) a. *张三 特别 可以 买 东西。

张三 特に KEYI 買うもの

「彼はたくさん買い物をする。」

b. *他 很 可以 吃。

彼 とても KEYI 食べる

「彼はよく食べる。」

ここで説明すべきことは、なぜ“可以”だけが高程度副詞と共起できないのかということと、なぜ高程度副詞と共起した場合に“能”と“会”に解釈の違いが生じるのかということである。1つ目の“可以”と高程度副詞との共起の問題については、黄

麗華 (1995)の説明に従う。黄麗華 (1995)は「許容」という意味と高程度副詞との意味の不整合から説明していたが、本論文の枠組みで捉え直して説明すると以下のようなになる。“可以”は「事態実現を阻む抵抗力がない (小さい)」ということに注目しており、抵抗力の不在の方に注目しているということはすなわち、それは「やれば「できない」ということはない」ということを表している。このような“可以”の<可能>の消極的な捉え方と、能力の高さを強調する高程度副詞の積極的な捉え方が意味的に不整合を起こすため、“可以”は高程度副詞と共起しないのである。

2 つ目の、高程度副詞と共起した場合の“能”と“会”の解釈の違いの問題については、“能”と“会”が<可能>を捉えるレベルの違いから説明できる。能力可能に高程度副詞が共起した場合の意味とは「主体がある行為ができることの程度が高い」ということであるが、その程度の高さを行為主体の働きかけのあり方に求めた解釈が(130)である。“能”が程度副詞と共起した場合に強調される「行為の量」とは、可変的で、状況によってその働きかけのあり方に左右されるものであり、例えば、「昨日はたくさん買い物をして、今日はあまり買物をしない」、「朝食はたくさん食べて、昼食はあまり食べない」という行為量の変化は働きかけのあり方次第で容易に起こる。一方、程度の高さを能力主体の属性に求めた解釈が(131)である。「行為の質」は働きかけのあり方というよりも、能力主体の属性に依存する。例えば、「張三は昨日は買い物上手で、今日は買い物上手でない」、「彼は朝食ではグルメで、昼食ではそうでない」という質の変化は通常考えられない。このように、行為の量か質かという対立は、行為主体の働きかけのあり方か能力主体の属性のあり方かという対立と平行しており、程度副詞と共起した場合の解釈の違いも、“能”と“会”が異なるレベルで<可能>を捉えていることを反映した現象であると考えられる。

【能力可能における“能”、“会”、“可以”のまとめ】

- a. “会”は行為のあり方を限定する語句と共起できない。これは、“会”が<可能>の基盤事態を捨象していることと、行為のあり方を限定する語句が事態内の行為のあり方を焦点とすることが意味的に矛盾するためである。
- b. “可以”は高程度副詞と共起できない。これは、「事態実現を阻む環境からの抵抗力がない (小さい)」ということに注目する“可以”の消極的な<可能>の捉え方と、能力の高さを強調する高程度副詞の積極的な捉え方とが意味的に不整合を起こすためである。

- c. 高程度副詞と共起した場合、“能”は行為の量が多いこと、“会”は行為の質が高いことを表す。これは、“能”が働きかけという行為のあり方に注目しているのに対して、“会”は主体の属性に注目しているからである。

4.2.4. “能”、“会”、“可以”と受動的・条件的状況可能、許可可能

つづいて、“能”と“可以”が問題なく表せて、“会”が表せない意味範囲、すなわち「条件的状況可能」、「受動的状況可能」、「許可可能」について見る。以下に、各形式の意味分布をまとめた【表7】とそれぞれの意味を表す例文(134)～(136)を示す。

【表7 “能”、“会”、“可以”と条件的・受動的状況可能、許可可能】

	状況可能	
	条件的 状況可能	受動的 状況可能
“能”	○	○
“会”	×	×
“可以”	○	○

許可可能
○
×
○

【条件的状況可能】

(134) a. 今天 没 有 事, 我 [能/*会/可以] 参加 那个 会议。

今日 NEG 有る こと 私 NENG/HUI/KEYI 参加する それ CL 会議

「今日は用事がないので、その会議に参加できる。」

b. 他 腿 伤 治好 了, [能/*会/可以] 走路 了。

彼 足 傷 治る・良い PERF NENG/HUI/KEYI 歩く SFP (変化)

「彼は足が良くなって、歩けるようになった。」

c. 天气 热 了, [能/*会/可以] 游泳 了。

天氣 暑い PERF NENG/HUI/KEYI 泳ぐ SFP (変化)

「暑くなってきたので、泳げる。」

【受動的状況可能】

(135) a. 这架钢琴 [能/*会/可以] 弹。

これ CL ピアノ NENG/HUI/KEYI 弾く

「このピアノは弾くことができる。」

b. 芹菜 叶子 也 [能/*会/可以] 吃。

セロリ 葉 も NENG/HUI/KEYI 食べる

「セロリは葉も食べられる。」

(吕叔湘 1999:414)

c. 这支笔毛 [能/*会/可以] 画 画儿 吗?

これ CL 筆 NENG/HUI/KEYI 描く 絵 SFP (疑問)

「この筆は絵が描けますか。」

(吕叔湘 1999:414)

【許可可能】

(136) a. 现在 我 [能/*会/可以] 说 两 句 吗?

今 私 NENG/HUI/KEYI 話す いくつか CL SFP (疑問)

「今ちょっと喋ってもいいですか。」

b. 我 [能/*会/可以] 进来 吗?

私 NENG/HUI/KEYI 入る-来る SFP (疑問)

「入ってもいいですか。」

c. 休息室里 [能/*会/可以] 吸烟。

休憩室の中 NENG/HUI/KEYI 喫煙する

「休憩室ではたばこを吸ってもいいです。」

この3つの意味には共通点がある。それは、「2つ(以上)の力の存在が前提となり、その力関係の結果、事態が実現する/実現しないことを表す可能」であるという点である。例えば、(134a)の条件的状況可能を表す文において、「私が会議に参加する」という行為を可能にしている力を考えると、当然「会議に参加する私」という行為主体は必須であるが、それとは別に、「明日用事がないこと」という条件の力が関わっていることは明らかである。この2つの力によって「私が会議に参加する」という行為が実現するということが示されている。受動的状況可能についても、例えば(135a)で「ピアノを弾く」という行為を可能にしているのは、「ピアノを弾く」行為主体の力と、「このピアノは壊れていない」、「このピアノは子供でも扱える小さいサイズである」といったピアノ側の条件の力である。受動的状況可能の文はこの「ピアノ」の力を問題にしているからこそ、「このピアノ」(“这架钢琴”)が主語に現れている。もちろん常に「ピ

「ピアノが弾ける」ということを「ピアノ」の力によって弾けると認識するわけではなく、むしろピアノを弾く行為主体の力を問題にすることの方が多いと考えられる。その場合には、行為主体（能力主体）を主語にした(137)のような文が用いられることになるが、このようにピアノの力が問題にされないときには、いずれの形式でも表すことができる。

(137) 他 [能/会/可以] 弾 钢琴。

彼 NENG/HUI/KEYI 弾く ピアノ

「彼はピアノが弾ける。」

許可可能も同様であり、例えば(136a)は、「喋る」行為主体である「私」と「その行為を許可する聞き手やきまり」という条件の力によって、「喋る」という事態が実現するかしないか（許されるか否か）を尋ねている文である。

ここで重要なのは、「2つ（以上）の力の存在が前提」となっているという点である。能力可能を表す“他[能/可以]画油画。”（彼は油絵が描ける）で“能”と“可以”が用いられたときの意味を説明する際、“能”は「彼が油絵を描こうと働きかけ、「油絵を描く」という事態の実現を阻む抵抗力を克服することで、「油絵を描く」という事態が実現する」という意味になり、“可以”を用いた場合には、「油絵を描く」という事態の実現を阻む抵抗力（絵を描く時間がないこと、技術的な難しさなど）が存在しないため、「油絵を描く」という事態が実現する」という意味になると述べた。このように“能”や“可以”を用いた場合には能力可能を表す場合でも、抵抗力が「油絵を描く」行為主体とは別に想定されていることになるが、能力可能ではこのような抵抗力の存在が特定されておらず、またその存在を想定しなくても捉えることができる。抵抗力を想定せずとも「彼の属性によって「油絵を描く」という事態が実現する」という捉え方は可能であり、そしてそれができるからこそ“会”も用いることができていたのである。しかし、条件的状況可能、受動的状況可能、許可可能は、行為主体の力とそれとは別の条件や事物、社会的ルールなどの力との関係によって事態が実現する（しない）ことを表す意味であり、力関係のあり方を度外視することはできない。「2つ（以上）の力の存在が前提となり、その力関係の結果、事態が実現する/実現しないことを表す可能」において“会”が用いられないという事実はまさに、“会”が「主体・環境が属性を持っているため事態が実現する」という事態のあり方（力関係）を捨象した形式である、という本論文の“会”の見方から自然に捉えられる事実である。

上記の議論をふまえると、“能”、“可以”がともに条件的状況可能や受動的状況可能、許可可能を表す場合でも、2つの力関係のうち、行為主体の働きかけに注目した場合

には“能”、抵抗力に注目した場合には“可以”の方が用いられやすくなることを予測する。その予測が正しいことを裏付ける現象を以下で2つ紹介する。

1つ目の現象として、条件的状況可能でも専ら“能”が用いられ“可以”が用いられない場合を見る。それは心情・情理的な理由で行為が実現する/実現しないということを表す場合である。日本語では例えば(138)のような例がそれにあたり、「一人でいたくない」、「君ひとりを置いていきたくない」といった否定の意志を表す意味と近くなる²⁹。

(138) a. さびしくて一人でいられない。

b. こんな危険なところに君ひとりを置いていけない。

この例は「主体の心情などの条件」によって当該の行為が実現すること/実現しないことを表すので、「条件的状況可能」の一種と見ることができる。このような行為主体の心情や情理的な条件によって行為が実現すること/実現しないことを表す例は、呂叔湘(1980, 1999)、刘月华等(1983, 2001)が「情理上許される」と分類している例に重なる部分があり、例えば刘月华等(1983, 2001)が“能”において「情理上許される」の例として挙げている(139)、(140)の例がそれにあたる。この例も主体の心情・情理的な理由から「帰したくない」、「座って待っていたくない」という意味に近い意味を表している。

(139) 天 这么 晚了, 我 不 能 让 你 走!

時間 こんなに 遅い PERF 私 NEG NENG ~させる あなた 行く

「こんな遅くなってしまったので、お帰しすることはできない。」

(140) 病人 病情 危急, 不 能 坐 等。

病人 病状 危急 NEG NENG 座る 待つ

「患者は容態が危険なので、ただ座って待っていることはできない。」

(刘月华等 2001:181)

(139)、(140)の“能”については、“会”はもちろん、“可以”とも置き換えられない((141)、(142))³⁰。“会”はそもそも条件的状況可能を表せない形式であるのでここで成立しな

²⁹ 行為主体の心情的な理由が条件になっていることに注目している点、「～したくない」にパラフレーズできるような意味を表していることを指摘している点は、渋谷(1993, 2006)が「心情可能」と呼ぶ可能表現に一致する。ただし、渋谷(1993, 2006)は「動作主体の内部に永続的に存在する心情(性格)的な条件(性格や気持ち、勇気など)によって(可能/)不可能であることを主観的に述べるもの」(渋谷 2006:65 下線強調は本論文筆者による。)とし、条件の永続性と関連付けて「心情可能」を定義しているが、本論文の議論では条件の永続性は問題としない。

³⁰ 刘月华等(1983, 2001)では“可以”において「許可」或いは情理上許されることを表

いのは当然であるが、条件的状況可能が表示するはずの“可以”が心情・情理的な条件の場合にだけ表せなくなるのはなぜだろうか。

(141) *天 这么 晚了, 我不 [会/可以] 让 你 走!

時間 こんなに 遅い PERF 私 NEG HUI/KEYI ~させる あなた 行く

「こんな遅くなってしまったので、お帰しすることはできない。」

(142) *病人 病情 危急, 不 [会/可以] 坐 等。

病人 病状 危急 NEG HUI/KEYI 座る 待つ

「患者は容態が危険なので、ただ座って待っていることはできない。」

これは、この場合の条件が行為主体の働きかけと切り離せないからであると考えられる。“可以”が表示することができる(143)のような条件的状況可能は、「私が参加しようとする」、「用事」というそれを妨げる抵抗力がないので、参加できる」、「彼が歩こうとすれば」、「足の怪我」というそれを妨げる抵抗力が今はないので、歩ける」、「泳ごうと思えば」、「気温（が低いこと）」というそれを妨げる抵抗力がないので、泳げる」ということを表している。「参加しようとする」、「歩こうとする」、「泳ごうとする」という行為主体の働きかけと「用事」、「足の怪我」、「気温」という抵抗力を分離した上で、「用事」、「足の怪我」、「気温」という抵抗力（がないこと）に注目した述べ方であると言える。

(143) a. 今天 没有 事, 我 可以 参加 那个 会议。

今日 NEG 有る こと 私 KEYI 参加する それ CL 会議

「今日は用事がないので、その会議に参加できる。」

b. 他 腿 伤 治好 了, 可以 走路 了。

彼 足 傷 治る-良い PERF KEYI 歩く SFP (変化)

「彼は足が良くなって、歩けるようになった。」

c. 天气 热 了, 可以 游泳 了。

天気 暑い PERF KEYI 泳ぐ SFP (変化)

す」という分類を立てており、「情理上許される」という記述がここで言う心情・情理的な条件による可能の用法を指しているとする、本論文の記述の反例になる。しかし、刘月华等 (1983, 2001)の当該の項で挙げられている例は以下の3例であり、いずれも心情・情理的な条件によって行為が(不)可能になることを表す例ではない。

- (i) 狼听见马跑的声音渐渐地远了, 就在口袋里喊: “先生, 可以放我出去了。” (狼は馬の走る音がだんだんと遠くなっていったのを聞くと袋の中で叫んだ。「先生、もう私を出して下さっても結構ですよ。」)
- (ii) 大家说: “可以把石头扔到海里去!” (皆は「石を海に投げ捨てればいいさ!」と言った。)
- (iii) 休息室里可以吸烟。(休憩室では煙草を吸ってもよい。)

「暑くなってきたので、泳げる。」

一方、(139)、(140)のような心情・情理的な条件的状況可能は、「帰そうとする」、「座って待とうとする」という意志の発動という働きかけ自体が成立しないことを表している。「こんなに遅くなってしまったという状況」、「患者の容体が危険であるという状況」という外的な条件も想定できるが、(139)、(140)が事態実現を阻む条件として最も焦点にあてているのは行為主体の心情である。もしパラフレーズするならば、「私（行為主体）があなたを帰そうとしても、私は帰したくないので、帰すという事態が実現しない」、「私（行為主体）が座って待っていようとしても、私は座って待ってたくないの、座って待っているという事態が実現しない」ということになり、2つの力のいずれも行為主体に属する力ということになる。したがって、条件的状況可能であっても、心情・情理的な条件的状況可能を表す場合には、行為主体の働きかけに注目した“能”が用いられるのだと考えられる。

“能”と“可以”が異なったふるまいを見せる現象の2つ目は、許可可能において“可以”が用いられ、“能”を用いると不自然になる例である。渡辺(1999)は(144)のように、話し手が直接聞き手に宣告、指示をするような場合、“能”は不自然になることを指摘している。

(144) a. 到 北京 [?能/可以] 来 找 我。

着く 北京 NENG/KEYI 来る 訪ねる 私

「北京に来たら私を訪ねるといい。」

b. 卢一民, 现在 你 [?能/可以] 答 辩 !

卢一民(人名) 今 あなた NENG/KEYI 弁明する

「卢一民、今弁明してもよいのですよ。」

(渡辺 1999:224)

渡辺(1999)はなぜこのような場合“能”が不自然になるのかまでは説明していないが、本論文の見方に基づくと、この文の主眼が「話し手による力」という行為主体の働きかけの力ではない方の力の存在に焦点が当たっているからである、という説明が成り立つ。“能”が自然に使用されていた許可可能の例を振り返ってみると、(145)では「私が喋るということにおいて実現を妨げる力はあるかないか」という“可以”の抵抗力の方に注目した見方もできると同時に「私が喋ろうと思えば喋れるか」という行為主体の働きかけの方に注目した見方もできることがわかる。

(145) 现在 我 [能/可以] 说 两 句 吗?

今 私 NENG/KEYI 話す いくつか CL SFP (疑問)

「今ちょっと喋ってもいいですか。」

一方、話し手が聞き手に直接許可を言い渡す場合、渡辺 (1999)が「宣告、指示という言語行為」(“宣告指令言語行為”)と表現しているように、その場で「話し手の力」が聞き手に対して行使されているという側面が前面に出る。そこでは、行為主体がその行為をやろうとしているか否かという、行為主体の働きかけの力は問題にならないのである。このように、行為主体の働きかけの方に注目した捉え方がしにくいということが、“能”の使用を制限しているのである。

【条件的状況可能、受動的状況可能および許可可能における“能”、“会”、“可以”のまとめ】

- a. 条件的状況可能、受動的状況可能、許可可能はいずれも「2つ(以上)の力の存在が前提となり、その力関係の結果、事態が実現する/実現しないことを表す可能」であるため、力関係を捨象した“会”はこの意味領域を表すことができない。
- b. 心情・情理的条件に基づく条件的状況可能は専ら“能”が用いられ、“可以”を用いることはできない。これは、この用法が行為主体とは切り離された抵抗力を想定することができず、行為主体の力に注目しなければならない意味だからである。
- c. 話し手が直接聞き手に宣告、指示する場合の許可可能を表す場合は、専ら“可以”が用いられ、“能”は使いにくい。これは、この用法が「話し手の力」という抵抗力によって事態が実現することを表すことを主眼としている用法であり、行為主体の働きかけの方に注目した捉え方が難しくなるためである。

4.2.5. “能”、“会”、“可以”と自発的状況可能

この節では、前節とは逆に、基本的に“会”が用いられ、“能”や“可以”は使用しにくい意味領域である「自発的状況可能」と、自発的状況可能ではないものの、自発的状況可能と平行的に捉えられる“会”の用法について見る。まず、3形式の意味分布をまとめた【表8】と例文(146)、(147)を示す。

【表8 “能”、“会”、“可以”と自発的状況可能】

	状況可能
	自発的

	状況可能
“能”	△
“会”	○
“可以”	×

(146) a. 竹子 [?能/会/??可以] 开花。

竹 NENG/HUI/KEYI 开花する

「竹は花が咲く。」

b. 水 到 0度 [?能/会/??可以] 结冰。

水 達する 0度 NENG/HUI/KEYI 凍る

「水は0度になると凍る。」

(147) a. 人 都 [*能/会/??可以] 死 的。

人 すべて NENG/HUI/KEYI 死ぬ SFP (肯定)

「人はみな死ぬものだ。」

b. 水 到 100度 就 [?能/会/??可以] 开。

水 達する 100度 ~すると NENG/HUI/KEYI 沸く

「水は100度で沸騰する。」

自発的状況可能については、前節で指摘した条件的状況可能、受動的状況可能、許可可能とは逆の特徴が指摘できる。条件的状況可能、受動的状況可能、許可可能、2つ（以上）の力関係を前提としていたのに対して、この自発的状況可能は、主体の変化が自発的に成立するとみなされるものであり、そこに働きかける主体や事態実現を阻む抵抗力の存在を想定しにくい。竹は自然に花が咲き、水は0度になれば自然に凍り、また100度になれば沸騰するし、人はいつか必ず死ぬものである。これらの文では、働きかける主体やそれを阻むような抵抗力というものは注目されておらず、ものごとの自然な進展としてある事態が現実世界に出現することを表している。自発的状況可能とは、「働きかける主体の力および事態実現を阻む抵抗力が想定しにくい可能」であり、このような場合、行為主体の働きかけに注目する形式である“能”や事態実現を阻む抵抗力に注目する“可以”は使えない。一方、“会”は主体・環境の属性に注目した形式であるため、「竹」や「水」あるいは「人」の属性として、「花が咲く」、「0度で凍る/100度で沸騰する」、「死ぬ」という事態が現実世界に出現するということを表すのは自然である。無意志的な事態を表すこれらの用法の主語に現れる「竹」、「水」、「人」などの無情物を「能力主体」と呼ぶのは不自然であるが、<可能>の帰属先となる当該の事態の中核的な存在であり、その事態の実現に関わる属性を有し

ているという点では典型的な「能力主体」と共通する。自発的状況可能における主体はこのような共通点から能力主体から拡張した例と見ることができ、能力主体と自発的状況可能の主語に現れる事物は、「属性主体」とまとめることができる。能力可能の“会”も「竹は花が咲く」、「水は0度で凍る」などの自発的状況可能における“会”も「主体の属性によって事態が実現する」ということを表している点では共通していることになる。

一方、以下の(148)は(146)、(147)とは少し異なるように見える。

(148) 北海道 到 了 10 月份 就 [??能/会/??可以] 下 雪。

北海道 達する PERF 10月 ~すると NENG/HUI/KEYI 降る 雪

「北海道は、10月になると雪が降る。」

(148)も「北海道は10月になると自然に雪が降る」という自発的な事態を表しており、この場合の“会”も自発的状況可能を表していると考えられる。しかし、上述の(146)、(147)とは異なり、(148)は<可能>の帰属先となる特定の属性主体を定めにくい。「北海道では、10月になると雪が降る」という事態を引き起こす中核的な存在は何であろうか。「北海道」の地域的な属性がそうさせていると見ることでもできるだろうし、北海道における「雪」の属性がこのような事態に大きく関わっていると見ることでもできるだろう。あるいは、「10月になること」ということが「雪が降る」という事態実現にとって重要な働きをしていると見ることでもできるかもしれない。(149)の例も同様であり、「ここ」、「夏」のいずれもこの事態の実現において中核的な存在と見なすことができる。

(149) 这里 夏天 常 会 淹 水。

ここ 夏 いつも HUI つかる 水

「ここは夏はいつも水浸しになる。」 (柯理思 2007:104)

文法的には、(148)では“北海道”（北海道）、(149)では“这里”（ここ）あるいは“夏天”（夏）という場所、時間が主語になっている文である (cf. 朱德熙 1982)。これまでの属性主体は全て、属性の主体であると同時に事態の中で行為を行ったり変化をしたりする力を有する主体であったのに対して、「北海道」、「ここ」、「夏」というのは事態が起こる場所や時間であり、行為主体や変化主体ではない。(148)や(149)の例では事態の中の事物のどれか1つを属性主体として見ているというよりも、むしろ、「ある環境において、事態が実現する」という捉え方を反映していると考えの方が自然であろう。つまり、「北海道という場所の属性と10月になるという時間の属性があわさった環境において、雪が降るという事態が実現する」、「ここという場

所でかつ夏であるという場所と時間の属性があわさった環境において、水浸しになるという事態が実現する」ということである。ここに至ると、もはや主体と呼ぶべき1つの事物を定めることができなくなるが、環境の「属性」との関係で事態実現を捉える、という点で能力可能の“会”の特徴が保持されている。

上記のような自発的状況可能と平行的に捉えられる“会”の用法が2つある。1つは主語の本来的能力、自然に習得する能力を表す、とされる“会”である。それが(150)~(152)の例である。

(150) 张三 是 四川人, [??能/会] 说 四川话。

張三 COP 四川人 NENG/HUI 話す 四川語

「張三は四川人だから四川語が話せる。」 (黄麗華 1995:84)

(151) 老鼠 生来 [??能/会] 打洞。

ねずみ 生来 NENG/HUI 穴を掘る

「ねずみは生まれながらにして穴を掘ることができる。」(黄麗華 1995:84)

(152) a. 鸟 会 飞。

鳥 HUI 飛ぶ

「鳥は飛ぶ。」

b. 猫 会 捉 老鼠。

猫 HUI 捕まえる ねずみ

「猫はねずみを捕まえる。」

(相原 1997:16-17)

(150)の「四川語を話す」というのは四川人の「張三」にとっての本来的能力であり自然に習得されるものである。同様に、(151)の「穴を掘る」という行為は「ねずみ」という動物にとっての本来的能力であり、ねずみとして生まれたからには自然に身につけている能力である。(152)の「鳥が飛ぶ」、「猫がネズミを捕まえる」という事態も同様である。このような場合、専ら“会”が用いられることが多くの先行研究で指摘されている(黄麗華 1995、相原 1997、鲁晓琨 2004、勝川 2011)。(150)~(152)の例ではいずれも意志動詞が用いられているため従来の研究では、能力可能を表す例として分析されることが多いが、主語で表される事物に一般的にあてはまる属性を述べているという点では、“竹子会开花”(竹は花が咲く)、“水到0度会结冰”(水は0度で凍る)のような自発的状況可能に近いと言える。実際、Endo (2005)はこの共通点に注目し、動詞が意志動詞か無意志動詞かにかかわらず、主語で表される事物一般

に必ずあてはまる原理を述べるような文に現れる“会”を generic ‘hui’ と呼び、能力可能と認識可能の中間的な用法として位置づけている。

自発的状況可能の“会”と平行的に捉えられるもう1つの“会”の用法として、(153)のような「習慣」を表すとされる“会”がある。

(153) a. 他 每天 都 会 半夜 起床 去 散步。

彼 毎日 全て HUI 夜中 起床する 行く 散歩する

「彼は毎日夜中に起きて散歩をする。」

b. 他 年轻 的 时候, 每天 早上 都 会 起床 做 早操。

彼 若い の とき 毎日 朝 全て HUI 起きる する 朝の体操

「彼は若いころ、毎朝起きて朝の体操をしていた。」

(柯理思 2007:104)

(153)の例はいずれも<可能>というカテゴリからは捉えにくく、「彼」の現在あるいは過去において繰り返し行われる習慣的な行為を表している。この習慣を表す例は、主語で表される事物一般にあてはまる原理を述べているわけではないので、Endo (2005)が generic ‘hui’ と呼ぶ用法とも区別される。ただ、一方で、Endo (2005)が言うような一般原理というほどの安定的で永続的な属性ではないが、この習慣の用法も「夜中に起きて散歩する」、「朝起きて朝の体操をする」という事態の実現に関わる主語の一種の属性を表していると言える。柯理思 (2007)は Endo (2005)が generic ‘hui’ と呼ぶ用法と(153)はいずれも、反復的に現れる行為・変化などの事態を、時間や人・モノの特性と見なした、“慣常” (habitual) を表す用法としてまとめている。

自発的状況可能、(150)~(152)の「本来的能力」を表す例、(153)の「習慣」を表す例に共通するのはいずれも、「行為主体が働きかけて事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現する」というような力関係では捉えられていない事態を表すということである。「竹」についての属性を述べると「花が咲く」という特徴が取り出せるし、「四川人の張三」という人物の属性を述べると「四川語を話す」という特徴が取り出せるし、「若いころの彼」という人物の属性を述べると「毎朝起きて朝の体操をしていた」という特徴が取り出せる。無情物が主語に現れる場合にはそもそも「働きかけと抵抗力」という関係は見出しにくい、主語が有情物の場合であっても、力関係で捉えられる個々の事態については注目しておらず、個々の事態を抽象化したレベルで属性の帰属先である主体・環境に注目しているのである。このように考えると、“会”の文で表される主語は、行為主体や変化主体とみなせる主体が主語に現れている場合でも、力のやりとりをする行為主体・変化主体というよりも、その事態が実現する属性

を有する主体、あるいは事態が実現する環境として捉えられていると考えることができる。“会”の「事態における力関係を捨象する」という特徴は、主体の側面に注目して言い換えると、「力のやりとりをする行為主体・変化主体とみなさず、属性主体あるいは事態が実現する環境として（のみ）みなす」ということになる。

以上の見方を裏返すと、当該文に現れる主体を行為主体とみなし、行為主体の働きかけが読み込みやすい文脈になると“能”の容認度が上がることが予測されるが、その予測は正しいことが以下の観察からわかる。(154)のような主体が程度の高い事態を実現させる文脈や、(155)のような限定的な条件下での事態実現を表す文脈、(156)のような対比の文脈では“能”の容認度が上がる。

(154) 最近, 西班牙 科研人员 通过 试验 发现, 老鼠 能 根据
最近 スペイン 科学研究员 ~を通して実験 発見する ねずみ NENG ~に基づいて
人类语言 节奏 的 不同, 分辨出 荷兰语 和 日语。
人間言語 リズム の 違い 区別する-出るオランダ語と 日本語

「最近スペインの科学研究员が実験で、ねずみが人間言語のリズムの違いに基づいてオランダ語と日本語を区別できるということを発見した。」

(Web 上の新聞記事 <http://news.sina.com.cn/w/2005-01-11/09544787138s.shtml>)

(155) a. 水 到 100 度 才 能 开。

水 達する 100 度 やっと NENG 沸く

「水は 100 度でやっと沸騰する。」

b. 在 一定 温度 条件下, 才 能 下 雪。

~で 一定の 温度 条件下 やっと NENG 降る 雪

「一定の気温条件下ではじめて雪は降る。」

(156) a. 人 能 走路, 鱼 不 能。

人 NENG 歩く 魚 NEG NENG

「人は歩けるが、魚は歩けない。」

b. 醋 到 120 度 开, 而 水 到 100 度 就 能 开。

酢 達する 120 度 沸く しかし 水 達する 100 度 ~すると NENG 沸く

「酢は 120 度で沸騰するが、水は 100 度で沸騰する。」

(154)は通常のねずみに対する我々の認識とは異なる逸脱した事態を表しており、(155)は、「100 度にならないと水が沸騰しない」、「一定の温度の条件を満たさないと雪が降らない」ことを含意する。(156)もその行為を実行できない主体やその事態が起こらない対象と対比し、「歩く」、「100 度で沸騰する」という事態がどのような主体、環境

においても等しく起こるわけではないことを表している。このように、いずれも一般原理があてはまる属性主体として捉えるのではなく、「抵抗力を克服した結果、事態が実現する」という力関係が読み込みやすい文脈になっている。「抵抗力を克服した結果、事態が実現する」という力関係が読めるかどうかというのは相対的な問題である。ここでは、当該事態の逸脱性、条件、事物の対比など「実現しない」状況を想定しやすくすることで当該の事態がどのような環境、主体においても実現するものではないという捉え方ができる事態になっているという点が重要である。そうすることで、単なる属性主体ではなく、力のやりとりをする主体として読み込みやすくなるため、“能”の容認度が上がるのだと考えられる。(154)~(156)の例は、もはやある事物一般にあてはまる原理を述べるのが主眼ではなくなっており、その事態が実現しないケースと対比しながら個体の特徴を述べているという点で能力可能にかなり近づいている。

また“能”は「抵抗力の克服」という力関係の読み込みとは別の要因によって、自発的状况可能が成立することがある。それが、「望ましき」の要因である。呂雷寧 (2006) は日本語と中国語の可能表現を比較する中で、中国語では(157)のような一般的に望ましいと捉えられる事態でも、(158)のように望ましくないと捉えられる事態でも可能表現が成立することから、中国語の可能表現には望ましきに関する制限はないと結論づけている。

(157) a. 这里 的 樱花树 到 了 4月 就 能 开花。

ここ の 桜の木 達する PERF 4月 ~すると NENG 開花する

「この桜は4月になると開花する。」

b. 这 一带 的 稻子 一 个 周 后 就 能 结粒。

これ 一帯 の 稲 一 CL 週 後 ~すると NENG 実る

「このあたりの米は一週間すれば実る。」

(158) a. 樱花 不 到 一 个 星期 就 会 谢。

桜 NEG 達する 一 CL 週間 ~すると HUI 散る

「桜は一週間も経たないうちに散る。」

b. 铁 放置 在 湿度 大 的 地方 会 生锈。

鉄 置く ~に 湿度 大きい の 場所 HUI 錆びる

「鉄は湿気の多い所に置かれると錆びる。」

(呂雷寧 2006:64-65)

確かに、日本語の可能表現全体と中国語の可能表現全体で比べた場合には呂雷寧 (2006)のように結論づけることができる。ただし、注意しなければならないのは、(157)

では“能”が用いられ、(158)では“会”が用いられているという点である。(159)は、一般的な性質として竹や水の性質を述べており、望ましさに関してニュートラルな事態であるが、このとき“能”を用いるとやや不自然な表現となる。(160)は、呂雷寧(2006)で“会”が用いられていた望ましくない事態を表す例を“能”で置き換えた文であるが、この場合の容認度はかなり低い。

(159) a. ?竹子 能 开花。

竹 NENG 開花する

「竹は花が咲く。」

b. ?水 到 0度 能 结冰。

水 達する 0度 NENG 凍る

「水は0度になると凍る。」

(160) a. ??櫻花 不 到 一 个 星期 就 能 谢。

桜 NEG 達する 一 CL 週間 ~すると NENG 散る

「桜は一週間も経たないうちに散る。」

b. ??铁 放置 在 湿度 大 的 地方 能 生锈。

鉄 置く ~に 湿度 大きい の 場所 NENG 錆びる

「鉄は湿気の多い所に置かれると錆びる。」

(159)、(160)のような事実を踏まえると、(157)で“能”が用いられているのは「望ましき」という条件が満たされているからであると考えられるべきであり、中国語にも望ましきに関する制約が存在する場合もあると結論づけられる。

【自発的状況可能における“能”、“会”、“可以”のまとめ】

- a. 自発的状況可能は行為主体の働きかけとそれに対する抵抗力という力関係で捉えられない可能を表しており、そのために事態の力関係に注目した“能”、“可以”は使いにくく、事態の力関係を捨象した“会”が最も自由に用いられる。
- b. 働きかけと抵抗力という力関係で捉えられない可能表現の類例として、「本来的能力」を表す“会”と「習慣」を表す“会”がある。主体の特徴に注目すると、これらの用法と自発的状況可能はいずれも、主体が力のやりとりをする行為主体・変化主体というよりも、属性を有する主体あるいは事態が実現する環境として捉えられているという共通点を持つ。
- c. 自発的状況可能（と本来的可能）を表す場合でも“能”が用いることができるようになる要因が2つある。1つは「抵抗力を克服した結果、事態が実現する」という

事態の力関係が“能”が基盤とする事態の意味に近づく場合であり、もう1つは事態が望ましいものであると見なされる場合である。

4.2.6. “能”、“会”、“可以”と認識可能

最後に認識可能の用法と“能”、“会”、“可以”の意味特徴との関係について見ていく。まずは、各形式の意味分布をまとめた【表9】と例文(161)を示す。

【表9 “能”、“会”、“可以”と認識可能】

	認識可能
“能”	△
“会”	○
“可以”	×

(161) a. 他 [#能/会/#可以] 在 家。

彼 NENG/HUI/KEYI いる 家

「彼は家にいるだろう。」

b. 明天 [??能/会/*可以] 下 雨。

明日 NENG/HUI/KEYI 降る 雨

「明日雨が降るだろう。」

この認識可能については、通常は認識可能を表しにくい“能”がどのような環境で認識可能を表すことができるのかが従来の研究でも注目されており、その環境として(162)、(163)のような疑問文(反語文)が挙げられることが多い(呂叔湘 1980, 1999, Guo, Jiansheng 1995, 彭利贞 2007)。

(162) 天 这么 晚 了 他 能 来 吗?

時間 こんなに 遅い PERF 彼 NENG 来る SFP (疑問)

「こんな遅くに彼は来るのだろうか。」

(163) 这 件 事 他 能 不 知道 吗?

これ CL こと 彼 NENG NEG 知っている SFP (疑問)

「このことを彼が知らないわけがないだろう。」

(呂叔湘 1999:415)

“能”が認識可能を表すときの文環境として疑問文(反語文)が多いことについては、侯瑞芬(2009)の見解を支持する。侯瑞芬(2009)は、認識可能の“能”も、能力可能などと同じように、認識上、障害(本論文の用語だと「抵抗力」)があることを表していると述べる。(162)では、「こんな遅くに彼が来る」という事柄が確かであると判断することを妨げるような抵抗力(例えば、普段は彼はこんな遅くには来ないといった既有知識)があり、その結果「こんな遅くに彼が来る」という判断が実現しないことを表している。同様に、(163)も反語文であるため、「このことを彼が知らない」という事柄が確かであると判断することを阻む抵抗力があり、その判断が実現しないことを表していると解釈される。侯瑞芬(2009)では反語文についての説明しかなされていないが、このように考えると(164)のように、話し手にとって「予想外」であったことを表す文脈では“能”が認識可能を表せるという事実(黄麗華 1995、讚井 1996)も同じように説明ができる。すなわち、「彼が家にいて私を待っている」という事柄が確からしいと判断することに関して、そのときは抵抗力があったため、その判断ができなかった(が、実際はそうなった)、ということを表している。

(164) 我 真 没 想 到 他 能 在 家 等 我。

私 実に NEG 思い至る 彼 NENG いる 家 待つ 私

「彼が家にいて私を待っているだなんて思いもしなかった。」

“能”が成立する環境として一般的に上記のような反語文が指摘されるが、実はもう1つ“能”が認識可能を表せるときがある。それが、黄麗華(1995)、宮本(1997)、渡辺(2000)、鲁晓琨(2004)、陆庆和(2006)が指摘する「望ましい」事態を表す場合である。宮本(1997)では(165)、(166)など、通常は“能”が容認されない文でも話し手にとって望ましい事態であると解釈される場合、すなわち「新しい服が欲しくてわざと破ろうとしている」とか「農作物の生長のために雨が降ってほしい」などの場合には“能”も使用可能としている。

(165) 这样 用力 洗, 衣服 就 [(*)能/会] 洗破 了。

このよう 力を入れて洗う 服 ~すると NENG/HUI 洗う・破れる SFP (変化)

「そんなに力を入れて洗うと、服が破れてしまう。」

(166) 明天 [(*)能/会] 下 雨 吗?

明日 NENG/HUI 降る 雨 SFP (疑問)

「明日は雨が降るだろうか。」

(宮本 1997:50 一部改変)

(167)のような望ましい事態であることがより明らかな文脈では“能”の容認度は、かなり高くなる。

(167) a. 过 一会儿, 雨 大概 能 停。

過ぎる 少の間 雨 たぶん NENG 止む

「もう少ししたら雨もやむだろう。」

b. 我 觉得 他的 病 能 好。

私 思う 彼の 病気 NENG 良い

「彼の病気はたぶん良くなるだろう。」

c. 他 希望 将来 能 当 一 名 医生。

彼 望む 将来 NENG なる 一 CL 医者

「彼は将来医者になりたいと思っている。」

(陆庆和 2006:139)

すなわち、認識可能においても2つの質の異なる要因によって“能”の意味範囲が拡張するさまが観察されることになる。1つは反語文や予想外のことを表す文環境に置かれることで、「判断することにおいて抵抗力があるために、その判断が実現しない」という認識上の力関係を読み込めるようになる場合であり、もう1つは話し手にとって望ましい事態を表す場合である。これは前節で見た“能”が拡張的に自発的状況可能(および本来的能力)を表せるようになった環境と平行的であり、表す意味領域は異なっても“能”という同一形式について同じ要因が関わっているということがわかる。

最後に指摘しておきたいのは、“会”が認識可能を自由に表せるという事実についてである。先行研究では“能”が一定の条件下でのみ認識可能を表せるようになることに多くの関心が寄せられているが、“会”がなぜ認識可能を自由に表せるのか、ということもまた説明されなければならない問題であると思われる。中国語の他の2形式が自由に認識可能を表せないこと、また日本語の可能形式は認識可能を全く表せないことを考えると、可能形式が認識的モダリティの意味を持つのは必然ではない。したがって、“会”が認識可能を自由に表せるということも何か“会”の意味特徴と関連して説明できるのであれば、それが望ましい。本論文では“会”が認識的可能を自由に表せるという事実も“会”の<可能>の認知過程と関わっていると考える。認識可能とは、ある事態の確からしさの判断が実現する/実現しないということを表した用法である。この、「判断が実現する/実現しない」ということを何との関係で捉えるか、というときに、“能”は「抵抗力の克服」ということを読み込む必要があったため、反語や予想

外の文脈といった何らかの認識上の抵抗力が必要であった。一方“会”は非認識的モダリティにおいては、基盤事態の力関係を捨象して<可能>を捉える形式であった。この“会”の特徴が認識的モダリティを表す場合にも引き継がれていると考えられる。すなわち、“会”は認識的な判断に至る過程における抵抗力の有無とは無関係に認識的判断ができるということである。例えば、「彼は金曜日は家にいるということを経験的に知っている。今日は金曜日であるという環境において、「彼が家にいる」という事態が確かであるという判断が実現する」、「天気予報で明日は雨だと言っていた。そういう環境にあっては「明日雨が降る」という事態が確かであるという判断が実現する」という判断過程が想定できる。このような過程において“能”のような力の読み込みは必要ない。このように、非認識的モダリティにおいて事態の力関係を捨象しているという“会”の特徴が、認識可能を自由に表せることにつながっていると考えられる。

【認識可能における“能”、“会”、“可以”のまとめ】

- a. “能”は基本的には認識可能を表さないが、2つの環境においては認識可能を表す。
1つは、疑問文（反語文）、や話し手にとって「予想外」であった文脈など、事態実現に対する判断を阻む抵抗力が存在する文脈である。もう1つは話し手にとって望ましい事態を表す文脈である。前者は力関係に関わる要因であり、後者は話し手にとっての望ましさに関わる要因である。この2つの要因によって“能”の拡張が許されるという現象は自発的状況可能（と本来的能力）で見られた現象と平行的である。
- b. “会”が認識可能を自由に表せるのは、“会”の非認識的モダリティにおける「基盤事態の力関係を捨象して<可能>を捉える」という捉え方が、認識的モダリティにも引き継がれているためであり、これによって事態や判断過程のあり方とは無関係に認識的判断が可能な環境がありさえすれば認識可能を表すことができる。

4.2.7. “能”、“会”、“可以”のまとめ

以上、この4.2節では、“能”、“会”、“可以”を<可能>の認知過程の違いに注目して記述することで、それぞれの形式の基本的な意味分布だけでなく、本来は表せる意味が一定の条件下で表せなくなる現象、逆に本来は表せない意味が一定の条件下で表せるようになる現象までを含め、統一的な観点から説明することができることを示した。本論文の“能”、“会”、“可以”の記述を以下に再掲する。

【“能”、“会”、“可以”の可能の認知過程】

- “能”：「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服することで事態が実現する」という主体の働きかけのあり方に注目して<可能>を捉えた形式。
- “可以”：「行為主体の働きかけに対して事態実現を阻む抵抗力がない（小さい）ために事態が実現する」という抵抗力のあり方に注目して<可能>を捉えた形式。
- “会”：<可能>の基盤事態の力関係を捨象して、「主体・環境がある属性を持っているため事態が実現する」という主体・環境の属性主体のあり方に注目して<可能>を捉えた形式。

本論文の説明の特徴は、第3章で議論した<可能>の基盤事態という1つの枠組みから、“能”と“可以”を主体の働きかけに注目するか、あるいは働きかけに対する抵抗力に注目するかという相補的な関係として位置づけ、さらに“会”を“能”と“可以”とはレベルの異なる、主体・環境の属性主体のあり方に注目して捉えた形式として位置づけた点である。これによって、“能”と“可以”の意味分布が近いことが自然に理解でき、また“会”が事態のあり方（力関係のあり方）を度外視できない場合に成立しないこと（行為のあり方を限定する語句との共起制限があること、条件的状況可能、受動的状況可能および許可可能が表示できないこと）や、力関係のあり方に関わらず自由に意味を表せること（自発的状況可能、認識可能が自由に表せること）も同時に説明可能となる。4.1節で、基盤事態のあり方が形式の使用に大きく影響する「ことができる」を「基盤事態活性型の形式」と呼んだが、中国語の可能形式の場合、“能”、“可以”が「基盤事態活性型の形式」であると言える。特に“能”は、<可能>の基盤事態のあり方に近づけることで拡張的に自発的状況可能、認識可能が表示するという点で、<可能>の基盤事態のあり方がより顕著にその使用に影響する形式である。一方、基盤事態のあり方を捨象し、逆に基盤事態のあり方に注目せざるを得ない場合には使用が制限される“会”を、本論文では「基盤事態非活性型の形式」と呼ぶことにする。

基盤事態非活性型の形式：当該形式の使用に基盤事態のあり方があまり関与せず、逆に基盤事態のあり方が活性化された場合に当該形式の使用が容認されにくくなるもの。

日本語の「られる」と「ことができる」の違いは、＜可能＞の基盤事態との近さをどれだけ強く求めるかという程度差で記述されたのに対して、中国語の“能”、“会”、“可以”はそれぞれの認知過程がさらにより細かく指定されており、“会”のように事態のあり方に注目せざるを得ない場合に不自然になる形式があるのは、日本語と大きく異なる点である。このような違いが、「られる」と「ことができる」の意味範囲の差は包含関係で捉えられたのに対して、“能”、“会”、“可以”は、その意味の棲み分けの関係が複雑になっているという日中の違いに反映しているのだと考えられる。

4.3. 可能表現に見られる日本語と中国語の異同

4.1 節と 4.2 節の議論から、日本語と中国語の可能形式ではともに「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現する（抵抗力に屈した結果事態が実現しない）」という＜可能＞の基盤事態が関わっていることを示した。特に「ことができる」と“能”が本来表せない意味を表す環境において、「主体が抵抗力を克服する」という事態のあり方に関わる要因と「望ましさ」という話し手の述べ方に関わる要因が関与しているという共通点があることがわかった。この事実を本論文では「基盤事態活性型の形式」という可能形式を分類する 1 つの類型を立てることで、その共通性を捉えた。この 4.3 節では、4.3.1 節で日本語と中国語の違いを捉える視点を提案し、4.3.2 節で中国語の“会”と似たふるまいを見せる可能表現が日本語にもあることを指摘する。

4.3.1. 可能表現に見られる日本語と中国語の相違点

【表 3】に見られるように日本語と中国語の可能形式の意味分布には決定的に異なる部分がある。日本語の可能形式は許可可能、認識的可能という話し手が関わるモダリティを表す全く表すことができず、逆に中国語の可能形式は実現可能という、＜可能＞の基盤事態と重なる事態的な意味を表すことが難しいという違いが見られる。

【表 3 日本語と中国語の可能形式の意味分布】

	非モダリティ	動的モダリティ
--	--------	---------

	実現可能	能力可能	状況可能		
			条件的 状況可能	受動的 状況可能	自発的 状況可能
「られる」	○	○	○	○	×
「ことができる」	○	○	○	○	△
“能”	△	○	○	○	△
“会”	×	○	×	×	○
“可以”	×	○	○	○	×

束縛的モダリティ	認識的 モダリティ
許可可能	認識可能
×	×
×	×
○	△
×	○
○	×

ここでは「基盤事態活性型/基盤事態非活性型」とは質の異なる類型を提案することで、日本語と中国語の違いを捉える視点を提示したい。それは、「事態起点型の実現性表現」と「見込み起点型の実現性表現」という類型である。以下に2つのタイプの定義を示す。

【「事態起点型の実現性表現」と「見込み起点型の実現性表現」】

「事態起点型の実現性表現」： 事態のあり方を述べることを基本とし、二次的意味として実現性を表す表現。

「見込み起点型の実現性表現」： 話し手の見込みである実現性のあり方を述べることを基本とする表現。

実現性表現とは、基盤事態から見出された結果、現実世界に事態が出現・存在する見込みを表した表現である。ここには現実世界に存在する事態というレベルと現実世界には存在しない見込み（実現性）というレベルの2段階がある。これまで、日本語と中国語の可能形式（と難易形式）はその2つ目の見込みのレベルである「実現性」を表す形式であるということを前提に議論を進めてきたが、ここでは、「実現性を表す」ということに2つのタイプがあることを提案することになる。1つは「見込み起点型の実現性表現」であり、これは本来的に2つ目のレベルである実現性を表す表現である。それに対して「事態起点型の実現性表現」は、本来的には1つ目のレベルである事態のあり方を表しており、それが非過去形をとることで二次的に実現性を表す表現である。前者が中国語の可能形式で、後者が日本語の可能形式に相当する。このような観点を導入すると、日本語と中国語の可能形式の意味分布の差が自然に理解できる。日本語の可能形式は事態のあり方を述べることを基本とする事態起点型の実現性表現であるため、現実世界に起こった事態を表す実現可能を表すことができるし、モダリティの中でも事態参与者との関係で捉えられる意味を表す動的モダリティまでは表すことができる。しかし、事態のあり方そのものからは離れ、話し手や社会的・倫理的規範による許可や禁止などを表す束縛的モダリティや命題（事柄）に対する判断を表す認識的モダリティは、他者に対する許可、禁止や話し手の判断という事態のあり方以上の意味が付加されるため、事態を起点とする日本語の可能形式では表すことができないのである。第3章3.1.3節で議論したように、日本語では(168)のような条件的状況可能、受動的状況可能として解釈できる文では間接的に許可、依頼、禁止などを表すことができるのに対して、(169)のような許可可能としてしか解釈できない場合には許可、依頼、禁止などの意味を表せない。

- (168) a. どなたでもお入りになれます。 (許可、肯定文)
 b. 悪いけど、私のかわりにあした会議出られない？ (依頼、疑問文)
 c. 食べられません。 (禁止、乾燥剤の注意書きなど、否定文)
 (渋谷 2005:42)

- (169) a. # (私は) ちょっと喋れますか？ (許可)
 b. #教えられませんか？ (依頼)
 c. *動けないで。 (禁止)

この日本語における事実は、(168)のように事態のあり方を述べることで間接的に許可などの意味を表すことはできるが、(169)のように事態のあり方として述べられない場合には許可などの意味も表せないということを意味する。さらに日本語の可能形式は

(170)が示すように進行相を表す「ている」とも共起することができるが、この事実も日本語の可能形式が本来的には事態を表すということを示している。

(170) a. 今君はちゃんと泳げているよ。

b. 彼はこの曲を初めて歌ったそうだが、ちゃんと歌うことができている。

ここまでの議論を踏まえると、本論文の記述を一部見直す必要がある。第1章 1.1節および第2章 2.2節において、(171)のような、無標の動詞が述語に現れ非過去形となったときに実現性を表す表現を、本論文の考察対象から外すことを述べた。

(171) 鳥は飛ぶ。

そして、(171)と(172)のような可能表現の質的な違いについて、第2章 2.2節では、無標の動詞述語文は非過去形という形をとっていることではじめて実現性を表す表現たり得ているのに対して、(172)は可能形式によって見込みの表現であることが保証されていると述べた。

(172) 鳥は飛べる。

しかし、日本語の可能表現は、形式自体に実現性を表す力はなく、テンスなどに支えられてはじめて実現性表現であることが保証されるのであり、その点では(171)の無標の動詞文と同じである。日本語の可能表現は、事態の表現から完全に離れておらず、事態と実現性が未分化の表現であると言える。

一方、中国語の可能形式は実現性のあり方を述べることを基本とする見込み起点型の実現性表現であるため、日本語のような制限はなく、動的モダリティだけではなく、束縛的モダリティ、認識的モダリティも表すことができる。ただ、逆に、事態から見出された実現性の段階を起点にするので、その基盤となる事態そのものを表すことが難しく、したがって中国語では実現可能を表すことができない。ただし、(173)のように、否定文、つまり過去の1回的な事態の非実現を表す場合には“能”を用いて実現可能を表すことができる(呂叔湘 1980, 1999, 朱繼征 1995, 渡辺 2000, 郑天刚 2002, 鲁晓琨 2004)。

(173) a. 她 昨天 有点儿 中暑, 没 能 来 找 你。

彼女 昨日 少し 日射病にかかる NEG NENG 来る 訪ねる あなた

「彼女は昨日ちょっと日射病になって、あなたを訪ねることができなかった。」

b. 路上 塞车, 市长 没 能 按时 赶到 会场。

路上 渋滞する 市長 NEG NENG 時間通りに 到着する 会場

「道が渋滞していて、市長は時間通りに会場に到着することができなかった。」

(郑天刚 2002:144)

これは、否定という環境で「非実現」になることによって、現実世界に存在する「事態」ではなくなるため、事態を表すことのできない見込み起点型の実現性表現である“能”も辛うじて表すことができるようになるのだと考えられる。なお、“能”以外の形式は否定文でも実現可能を表すことができない。“会”は、条件的状況可能を表せないように、一時的な事態の実現・非実現をそもそも表せず、また“可以”は否定文が使われにくい(第3章 3.1.1 節参照)という理由によるものであると考えられる。

事態起点型の実現性表現か見込み起点型の実現性表現かという日本語と中国語の違いは、望ましさの認定の差にも反映される。事態起点型の実現性表現は事態のあり方を述べるのを基本とするため、その事態が誰にとって望ましいかということについては、話し手だけでなく事態参与者である主体(行為主体・変化主体)にとっての望ましさも関与する。実際、日本語の可能形式の使用には、話し手だけではなく、主体にとっての望ましさも関わっていた(4.1.2.3 節)。一方、見込み起点型の実現性表現は、「話し手」による見込みを表すことから出発しているため、その叙述の視点は話し手以外にありえない。すなわち、行為主体にとっての望ましさが可能形式の使用に関与しない。したがって、日本語では許されないような(174)や(175)のような可能表現が中国語では成立する。

(174) 让他吃了这片药,他就能死。

～させる 彼 飲む PERF これ CL 薬 彼 ～すると NENG 死ぬ

「この薬を彼に飲ませれば、彼は死ぬ(??死ねる/??死ぬことができる)。」

(鲁晓琨 2004:54)

cf. この薬を飲めば私は[死ねる/死ぬことができる]。

(175) 如果犯规了,他们队就能输给我们队。

もし 反則する PERF 彼らのチーム ～すると NENG 負ける ～に 私たちのチーム

「反則をすれば、彼らのチームは我々のチームに負ける(??負けられる/??負けることができる)。」

cf. (わざと)反則をすれば、我々のチームは[負けられる/負けることができる]。

いずれの例も話し手にとっては望ましい事態と解釈される事態であるが、“他”(彼)、“他们队”(彼らのチーム)という主体にとっては望ましくない事態と解釈される。つ

まり、見込み起点型の実現性表現である中国語の可能表現では話し手の視点のみが関わるので、話し手にとって望ましい事態でありさえすれば、可能表現が成立するのである。

この「事態起点型の実現性表現」と「見込み起点型の実現性表現」という違いは日中の可能形式の意味分布の差を説明するためだけの概念ではなく、難易形式にも適用可能な概念である。詳しくは第5章で述べるが、ここでの2つの類型は、<可能>にとどまらず、日本語と中国語の実現性の表し方の基本的な違いを捉える上で有効な概念になり得る可能性がある。

4.3.2. 可能表現に見られる日本語と中国語の共通点

中国語の可能表現の議論で、“会”は事態の力関係のあり方を捨象し、主体の属性に注目した可能を表すということを主張したが、日本語にも“会”に似た特徴を示す可能表現が存在する。それは、(176)のように主体を「ニ (/ニハ)」で標示する日本語の可能表現(与格主語構文の一種。本論文では以下、「ニ」標示可能表現と呼ぶ)である。

(176) 彼には英語が話せる。

第3章3.1節、および本章4.2節で“会”は(177)のような条件的状況可能や、(178)のような受動的状況可能、(179)のような行為のあり方を限定するような語句と共起しないということを指摘した

(177) a. *今天/在这里，他 会 说 英语。

今日 ここで 彼 HUI 話す 英語

「彼は[今日は/ここでは]英語を話せる。」

b. *没有时间，我 不 会 读 那 本 书。

NEG 有る 時間 私 NEG HUI 読む それ CL 本

「時間がないので、私はその本が読めない。」

(178) a. *这 支 笔毛 会 画 画儿 吗？。

これ CL 筆 HUI 描く 絵 SFP (疑問)

「この筆は絵が描けますか。」

(吕叔湘 1999:414)

b. *这 支 笔 会 写 细 的 字。

これ CL ペン HUI 書く 細い の 字

「このペンは細い字が書ける。」

(179) a. *他 会 流利地 说 英语。

彼 HUI 流暢に 話す 英語

「彼は流暢に英語を話せる。」

b. *他 会 快速地 画 油画

彼 HUI 素早く 描く 油絵

「彼は素早く油絵が描ける。」

興味深いことに、日本語の「ニ」標示可能表現にも“会”と同様の制約が存在する ((180)~(182))³¹。

(180) a.??[今日/ここでは]、彼には英語が話せる。

b.??時間がないので、私にはその本が読めない。

cf. a. [今日は/ここでは]、彼は英語が話せる。

b. 時間がないので、私はその本が読めない。

(181) a.??この筆には絵が描けますか。

b.??このペンには細い字が書ける。

cf. a. この筆は絵が描けますか。

b. このペンは細い字が書ける。

(182) a.??彼には流暢に英語が話せる。

b.??彼には素早く油絵が描ける。

cf. a. 彼は流暢に英語が話せる。

b. 彼は素早く油絵が描ける。

このような「ニ」標示可能表現の意味的な特徴については、清水 (2002)が詳細な議論を行っている。清水 (2002)も(183)のように、「ニ」標示可能表現が状況可能 (条件的状況可能) を表すことができないという事実などを指摘した上で、「彼に財産がある」、「先生にはお元気でお過ごしのことと存じます」のような、主体を場所に見立てる表現との類似性を指摘している³²。

³¹ (181)の受動的状況可能が不自然になるという事実については、主語の有生性の問題として検討する必要があるかもしれない。なぜならば、(i)のように、元の文の動作主がそのまま主語になっている例 (つまり、受動的状況可能のように元の文の動作主以外の要素が主語に立っているわけではない例) でも、主語が無情物の場合には不自然になるからである。興味深いことに、日本語に対応する(ii)の“会”を用いた文でも同様の現象が見られる。

(i) a.??このクレーン車には 80t の貨物が持ち上げられる。

b.??この車には山道が走れる。

(ii) a. *这辆吊车会吊起来 80t 的货物。

b. *这辆会跑山路。

³² 「ニ」標示可能表現の主語を「場 (所)」として捉える考え方は、「ニ-ガ」の格パタン

- (183) a. 彼には納豆が食べられない。 (能力可能)
- b. *今日は納豆が切れているから、彼には納豆が食べられない。
(×状況可能)
- c. 彼は納豆が食べられない。 能力可能も状況可能も表せる)
(清水 2002:133)

「～に (は) ～が可能形」の構文は、場所として把握された「彼」という場において、事柄の生起が可能か不可能かを語る構文なのである。ここでの「彼」は動作主としてでなく、いわば生起の場所を表す状況語としての働きをしているのである。

(清水 2002:132 下線強調は本論文筆者による)

引用箇所からもわかるように、清水 (2002)は「動作主」と対比される存在として「場(所)」という概念を提示している。「場(所)」という概念をどこまで拡張してあてはめるかということに関しては議論の余地があると思われるが、「ニ」標示可能表現の主語を典型的な行為主体(動作主)とは見ないという考え方は、本論文で示した“会”に対する見方と非常に近い。4.2節で、“会”は基盤事態の力関係を捨象しているために、“会”で示される主体は、行為や変化を引き起こす主体としての側面ではなく、属性を有する主体としての側面が際立った主体になっていることを指摘した。日本語の「ニ」標示可能表現もまさにそのような特徴を有する表現であると考えられる。事態の存在を捨象した表現であるため、この「ニ」標示可能表現は実現可能を表せないことが予測される。実際その予測は正しく、清水 (2002)が指摘するように、(184)のような過去の能力を表す場合には問題ないが、(185)のような1回的事態の実現を表す実現可能を表す場合には、「ニ」標示可能表現は用いられない。

(184) 若い頃私には、150キログラムのバーベルが持ち上げられた。それが自慢だった。

(185) *昨日の大会で、私には150キログラムのバーベルが持ち上げられた。それで優勝した。

(清水 2002:133)

をとる文全体を取り扱った研究である熊代 (2002)にも見られる。

日本語の可能形式「られる」と「ことができる」はいずれも基盤事態活性型の形式であり、中国語のように許可可能、認識可能を表すことはできない。また、先に見たように、事態起点型の実現性表現か見込み起点型の実現性表現かという対立においても日本語と中国語は対照的ある。そのような中でも、この「二」標示可能表現は基盤事態の力関係を捨象し、行為主体の側面ではなく属性主体の側面に注目した表現であるという点で“会”と重なる部分があり、日本語と中国語に共通した<可能>の表し方の1つのタイプとして見ることができる。

第5章 日本語と中国語の難易表現

第5章では日本語と中国語の難易形式についての各論である。まず5.1節で<難易>と隣接する「傾向」を表す専用形式である「がちだ」を取り上げ、難易形式「やすい」と比較することで、<難易>の意味特徴をより明確にすることを目的とする。5.2節では、日本語の類義の難易形式「にくい」と「づらい」の対照をし、つづく5.3節で中国語の類義の難易形式“容易”と“好”を対照する。この5.2節と5.3節が第1章で示した課題Ⅲ、類義形式間の異同を明らかにする、という課題に応える節になる。さらに、それらの議論を踏まえ5.4節で日中の難易形式の異同を明らかにすることで、課題Ⅰ、日本語と中国語の言語間の違いを明らかにする、という課題に応じていく。

5.1. 日本語の「がちだ」と「やすい」について

この節では、日本語の難易形式である「やすい」とそれと一部で意味が重なるとされる「がちだ」を比較対照することで、本来的に<難易>を表す形式とそうでない形式の差異を明らかにすることを目的とする。これによって、<難易>の特徴をより明確にすることができると思う。ここで難易形式と対照させる「がちだ」という形式は一般的に「傾向」を表す形式とされ、Inoue, Kazuko (1978)によって夙に指摘されているように、多くの場合「やすい」と交替可能である ((1))。

- (1) a. 我々は気分に左右され[がちだ/やすい]。
- b. エリートは強い挫折感を味わい[がちだ/やすい]。

(Inoue, Kazuko 1978:130-131)

両形式の違いとしてこれまで注目されてきたのは、「がちだ」のマイナスの評価性である (森田 1989、島岡 1998、八尾 2006)。例えば、(2)の「素直な子どもが育つ」のような基本的にプラスの事態として解釈される事態に「がちだ」を用いると不自然になる。また(3)のように「子どもがおとなしい性格に育つ」という事態はプラスにもマイナスにも捉えられ、実際「やすい」を用いた場合には両方の解釈が成り立つが、「がちだ」を用いた場合にはそれをマイナスに捉える解釈のみが許される。

- (2) 教育環境が良ければ、素直な子どもが育ち[??がちだ/やすい]。
- (3) 親が控えめな性格だと、子どもはおとなしい性格に育ち[がちだ/やすい]。

「がちだ」にだけマイナス評価の意味が義務的に生じるということ¹は、両形式の違いを記述する上で重要な事実の1つであるが、この点以外の両者の相違についてはこれまであまり注目されてこなかった。本論文では、(4)のように評価性の制約に抵触しないにもかかわらず「がちだ」と交替できない「やすい」があること、また(5)のように「やすい」に交替できない「がちだ」があることを指摘し、両形式の違いについて考察を行っていく。

- (4) a. 杉の枝は燃え[??がちだ/やすい]。
- b. 山の奥地ではクマに襲われ[?がちだ/やすい]。
- (5) 都心のアパートは郊外よりも部屋が狭くなり[がちだ/??やすい]。

5.1.1. 「がちだ」と「やすい」についての先行研究の記述

「がちだ」と「やすい」の違いについて言及している研究として、森田 (1989)、井上次夫 (1998)、八尾 (2006)、島岡 (1998)を順に見ていく。

森田 (1989:325)は、「がちだ」について、マイナスの状態である、マイナスの方向へと進む傾きがある場合に用い、「単にそうなりやすい傾向にあるだけなら「～やすい」「～ぼい」を使うべきである。」と述べている。「がちだ」と「やすい」の意味的な違いについてはこのマイナスの評価性の有無以外の指摘は見られない。井上次夫 (1998)、八尾 (2006)は「がちだ」、「やすい」、「ぎみだ」の3つの異同を論じる中で「がちだ」と「やすい」の違いについて言及している。両研究ともに「がちだ」と「ぎみだ」の違いについては詳細に論じているが、「がちだ」と「やすい」の意味的な違いについては、「やすい」が難易も表せることと、「がちだ」にマイナスの評価性があることを指摘するにとどまっている。

以上の研究に対して、両形式の意味的な違いについてより詳細に論じた研究に島岡 (1998)がある。島岡は両者の違いには文の内容の一般性、特定性が関わると述べ、(6)のように「安物のカサ」という一般的な個体について述べる場合には「がちだ」の方だけがやや不自然になるとしている。

- (6) a. ?安物のカサはこわれがちだ。

¹ 井上次夫 (1998)、渡邊 (2007)では「やすい」にもマイナス評価性があることを指摘しているが、(2)の容認度・解釈の差からも明らかのように、「がちだ」が義務的にマイナスの評価性を伴うのに対して、「やすい」にマイナスの評価性が生じるかどうかは傾向の問題である。

b. 安物のカサはこわれやすい。

また、(7)のように「私のカサ」という特定のものについて述べる場合には両形式ともに自然であるが、「aの「がちだ」は「もう三度くらいこわれた」というような含みが感じられ、特定のできごとが現実には繰り返しているという「状態」を表わしているが、他方 b は「こわさないように気を付けて扱わなくては」という含みが感じられ、個体の一般的・総称的な性質を述べているといえる。」(島岡 1998:21) というニュアンスの差があることを指摘している。

(7) a. 私のカサは安物だったのでこわれがちだ。

b. 私のカサは安物だったのでこわれやすい。

(島岡 1998:21)

その上で両形式の意味的な違いを、以下のように記述している。

「がちだ」は基本的にはできごとが現実には繰り返して起こる状態を描写し、そこにマイナスの感情・評価がある。これに対して、傾向解釈の難易文(注:「やすい」を用いた文を指す)はどちらかと (原文ママ) 個体の内的な性質を叙述する文である。

(島岡 1998:24-25 下線強調、括弧内注は本論文筆者による)

(7)について島岡 (1998)が指摘するようなニュアンスの差が存在することには筆者も同意するが、(6)の「がちだ」の不自然さを主語および文の内容の一般性に求めるのは適切ではない²。なぜなら冒頭に示した(1)、(3)の「エリートは挫折感を味わいがちだ」、「親が控えめな性格だと、子どもはおとなしい性格に育ちがちだ」という文のように、一般的な個体について一般的な内容を述べる場合でも、「がちだ」が自然に用いられる例は数多くあるからである。さらに、島岡 (1998)は「できごとが現実には繰り返して起こる状態を描写」するのか「個体の内的な性質を叙述」するのかを対立点として両者の意味を記述しているが、「できごとが現実には繰り返して起こる状態を描写」するのは「傾向」を表しうる限り「がちだ」だけでなく、「やすい」にもあてはまるはずである。逆に「個体の内的な性質を叙述する」という記述は「がちだ」にもあてはまる。例えば「エリートは挫折感を味わいがちだ」という文が「??エリートは今日挫折感を味わいがちだ」というように時間限定を受けないことから、この文が「エ

² そもそも筆者の内省では(6a)も不自然ではない。これについては、次節で詳しく論じる。

リート」という個体の内在的な性質を表しているということは否定しえないと思われる。現象の特定が不十分であり、またそれに基づく一般化も互いに排反ではないため、島岡（1998）の記述では両形式の違いを説明することは難しいと思われる。

以上、「がちだ」と「やすい」を扱った先行研究を見てきたが、両形式がともに傾向を表す場合の意味的な違いについて明確に指摘されているのは、マイナスの評価の有無だけであり、その他の違いについては現象の記述段階でも十分になされていないと言える。

5.1.2. 「がちだ」と「やすい」の異同

この節では、「がちだ」と「やすい」の違いについて、3つの事実を指摘する。

1つ目の事実は両形式が表す意味範囲の違いである。先に「がちだ」と「やすい」はともに傾向を表し交替可能であると述べたが、実際には両形式が表す意味範囲は重ならない部分の方が多い。両者の基本的な意味範囲を整理する上で、第3章3.2節で導入した難易形式の意味分類が有用である。「やすい」などの難易形式が表す意味は「感覚難易」、「属性難易」、「進展傾向」、「頻度傾向」の4つに分けられることを確認したが、「がちだ」が置き換えられるのは「頻度傾向」のみである。それぞれの意味を「やすい」と「がちだ」が表せるかどうかを示した例文(8)～(15)を以下に示す。

【感覚難易】

- (8) a. 私は友達と一緒にだと勉強がしやすい。
b. 私はこの本の方が読みやすかった。
(9) a. *私は友達と一緒にだと勉強がしがちだ。
b. *私はこの本の方が読みがちだった。

【属性難易】

- (10) a. 初学者にはこの辞書が使いやすい。
b. このビールは飲みやすい。
(11) a. *初学者にはこの辞書が使いがちだ。
b. *このビールは飲みがちだ。

【進展傾向】

- (12) a. 杉の枝は燃えやすい。
b. このチョコレートは溶けやすい。
(13) a. ??杉の枝は燃えがちだ。

b.??このチョコレートは溶けがちだ。

【頻度傾向】

- (14) a. この交差点では事故が起こりやすい。
 b. A国は地震、風水害、火山噴火などの各種災害に見舞われやすい。
 (15) a. この交差点では事故が起こりがちだ。
 b. A国は地震、風水害、火山噴火などの各種災害に見舞われがちだ。

「がちだ」と「やすい」の意味範囲の違いをまとめたのが以下の【表10】である。両者は類義形式としてしばしば取り上げられるが、両者が交替可能なのは頻度傾向を表す場合だけである。「がちだ」が難易（感覚難易、属性難易）を表せないのはともかく、傾向を表すとされる「がちだ」がなぜ「進展傾向」を表せないのかという疑問が生じる。まず、両形式の違いに関して「①「やすい」は進展傾向を表せるが、「がちだ」は進展傾向を表せない」という事実が指摘できる。

【表10 「がちだ」と「やすい」の意味範囲の違い】

	「がちだ」	「やすい」
感覚難易	× ((9))	○ ((8))
属性難易	× ((11))	○ ((10))
進展傾向	× ((13))	○ ((12))
頻度傾向	○ ((15))	○ ((14))

つづいて、逆に、「がちだ」で表せるが「やすい」では表せない傾向表現を見る。それが(16)の文である。

- (16) a. 都心のアパートは郊外よりも部屋が狭くなり[がちだ/??やすい]
 b. 天然物は養殖物と比べるとどうしても値段が上がり[がちだ/??やすい]

(16)の文では「(狭く)なる」、「上がる」という変化動詞が用いられているが、実際に「部屋が狭くなる」、「値段が上がる」という時間経過に伴う変化が生じているとは考えられず、したがって「都心のアパートは部屋が狭くなることが多い」、「天然物は値段が上がる人が多い」という事態実現の頻度の多さを表す文とは解釈できない。そうではなく、(16)は「都心のアパートは部屋が狭いことが多い」、「天然物は値段が高いことが多い」という、ある事物がその状態であることの多さを表している文であると解釈される。このように、一見事態実現の頻度の多さを表しているようで、実際には当該の状態にあることの多さを表す傾向表現を、ここでは「擬似頻度傾向」と呼ぶ

ことにする。このような表現は特殊なものではなく、小説等の実例中にも多く見られる。(17)は原文で「がちだ」が用いられている例であるが、これも「やすい」に置き換えることはできない。

- (17) a. はためく幌を雨が千の指ではじく。吠えるように話さなければならないので、つい黙り[がちに/??やすく]なる。

(BCCWJ、『方舟さくら丸』、OB2X_00207)

- b. 実家に帰るのは、正月以来だ。就職して一人暮らしを始めてからは、忙しさを理由に実家から足が遠のき[がちだった/??やすかった]。

(BCCWJ、『甘い罪の果実』、PB39_00460)

(17)は(16)とは異なり「黙る」、「遠のく」という変化は現実には起こっているが、いずれの文も「黙っていない状態から黙っている状態への変化が複数回起こる」、「近くにいる状態から離れた状態へ」という変化が複数回起こる」という事態実現の頻度の多さを言っているのではなく、「黙る」、「遠のく」という変化の結果の状態である「黙っている」、「遠のいている」という状態にあることが多いということを表している。(17)も実際には事態実現の頻度を表していないという点で(16)と同様に擬似頻度傾向を表す文である。

このように、「②「がちだ」は擬似頻度傾向を表せるが、「やすい」は擬似頻度傾向を表せない」という事実は、島岡 (1998)の「できごとが現実に繰り返して起こる状態を描写」という「がちだ」の記述の反例に見える。なぜなら、上述のように擬似頻度傾向を表す文においては、繰り返して起こるような客観的なできごと（事態）は存在しないからである。ただし、ここで言うできごと（事態）を、客観的に存在する事態に限らず、「あの男は噂にたがわずだ**いぶ変わっている**」、「この部屋は**丸くなっている**」の「変わる」、「(丸く)なる」が表す「共時的相異」（寺村 1984）、「主観的変化」（Matsumoto 1996）などの認識的な変化も含めれば、島岡 (1998)の記述とも矛盾しない。(16)、(17)の「(狭く)なる」、「上がる」、「黙る」、「遠のく」も、話し手によって捉えられた認識的な変化を表していると考えられることができるからである。しかし、そうすると今度は、なぜ「やすい」が認識的な変化の傾向を表すことができないのか、ということが問題になる。このような問題は、先行研究の記述では十分に説明できない事実である。

「がちだ」と「やすい」の相違点として最後に指摘するのは、同じ頻度傾向を表す場合であっても文脈によって「がちだ」のみが不自然になるという現象である。(18)、

(19)はともに「～ことが多い」にパラフレーズ可能であり、頻度傾向と解釈しうる文であるが、(18)に比べ(19)の「がちだ」の容認度は低い。

(18) a. 昼食の後は睡魔に襲われ[がちだ/やすい]。

b. 夏場は食欲が落ち[がちだ/やすい]。

(19) a. 山の奥地ではクマに襲われ[?がちだ/やすい]。

b. 隕石は南極や北極などの地球の極点に落ち[?がちだ/やすい]。

(18)と(19)の違いは「事態の身近さ」にある。(18)の「昼食の後に睡魔に襲われる」、「夏場に食欲が落ちる」という事態は実際に体験したり、見聞きしたりすることの多い事態である。それに対して、(19)の「山の奥地でクマに襲われる」、「隕石が地球の極点に落ちる」という事態は、その事態を実際に体験することはもちろん、見聞きするようなこともあまりない事態である。このように(18)と(19)の対比から「③「がちだ」は身近でない事態の傾向を表しにくい」という事実が指摘できる

島岡 (1998)が文の内容の一般性/特定性の問題として指摘していた現象も、この事態の身近さに還元されるべき問題だと考えられる。つまり、一般的個体を主語にするよりも特定の個体を主語にした方が、身近な事態であるという解釈がよりしやすいということである。例えば(20)に比べ、(21)の「がちだ」の容認度は低く、確かにこの例を見ると「日本」という特定の国を表す主語か「プレートの境界にある国」という一般的個体を指す主語かという対立に見える。しかし(22)のように、主語は一般的な個体を指す場合でも「日本」のような話し手にとって身近な個別具体的な事物を念頭においた発話であると考えれば、「がちだ」を用いた文もそれほど不自然ではない。筆者の語感では、個別具体的な事物が話し手の念頭にあると考えれば、島岡 (1998)が不自然としている「安物のカサはこわれがちだ」という文も自然に感じられる。

(20) 日本は地震災害に見舞われ[がちだ/やすい]。

(21) プレートの境界にある国は地震災害に見舞われ[?がちだ/やすい]。

(22) (日本のように) プレートの境界にある国は地震災害に見舞われ[がちだ/やすい]。

逆に(23)のように特定の国が主語に立つ場合でも「がちだ」が不自然となることがある。

(23) 統計データを見ると、イランは地震災害に見舞われ[??がちだ/やすい]ということがわかる。

(23)では「イラン」という多くの日本語母語話者にとって一般的にあまりなじみがないと解釈されやすい国が主語に立っており、さらに「統計データを見ると」という表

現により日常的に「地震災害に見舞われる」ことを見聞きしていないという想定がしやすくなる。すなわちこの事態が身近でないと思えられやすくなるため、「がちだ」が不自然になっているのだと考えられる。以上のことから、主語・文の内容が一般的か特定のかということはその事態が身近であるかどうかという解釈に関与はするものの、「がちだ」の使用にとって第一義的に重要なのは当該事態の身近さという語用論的な条件であると考えられる。このような「③「がちだ」は身近でない事態の傾向を表しにくい」という現象もこれまでの先行研究の分析では説明できない。

5.1.3. 「傾向」を見出す認知過程の違い

以上、ここまで「①「やすい」は進展傾向を表せるが、「がちだ」は進展傾向を表せない」、「②「がちだ」は擬似頻度傾向を表せるが、「やすい」は擬似頻度傾向を表せない」、「③「がちだ」は身近でない事態の傾向を表しにくい」という3つの現象を観察した。本論文は「がちだ」と「やすい」が「どのような傾向を表すのか」という観点ではなく、「どのような認知過程を経て傾向を表しているのか」という認知論的な観点を導入することでこれらの違いを統一的に説明できることを主張したい。本論文では「がちだ」と「やすい」の表す傾向の意味を以下のように記述する。

【「がちだ」と「やすい」の「傾向」の認知過程】

「がちだ」： 事態の存在の数え上げによって導き出される傾向を表す。

「やすい」： 事態の進展に関わる情報からの推論によって導き出される傾向を表す。

両者の認知過程の違いを、「エリートは挫折感を味わい[がちだ/やすい]」という文で説明する。「エリートは挫折感を味わいがちだ」という文は、「エリートが挫折感を味わう」という事態を話し手があるときに何らかの形で認知する、さらに別の機会で「エリートが挫折感を味わう」という事態を認知する、そしてまた別の機会に…、というように事態の存在認知を積み重ね、その多さを基に「エリートは挫折感を味わうことが多い」という傾向の判断を話し手が下しているということを表す。一方、「エリートは挫折感を味わいやすい」という文は、例えば「エリートは失敗経験が少ないからちょっとした失敗で挫折感を味わう」とか、「エリートはプライドが高いからちょっと叱られただけで挫折感を味わう」などといった「挫折感を味わう」という事態の進展（の容易さ）に関わる既知情報を基に「エリートは挫折感を味わうことが多い」とい

う傾向の判断を話し手が下しているということを表す。「がちだ」と「やすい」の違いを、認知対象となる事態のあり方という点で対比させると、「がちだ」の認知対象となる事態は存在していさえすればよいが、「やすい」の認知対象となる事態は、単に存在するだけでなくそれが動的な進展過程を有していなければならないということである。

この「事態の存在の数え上げ」や「事態の進展に関わる情報からの推論」に類似する考え方は、実は先に挙げた先行研究において既に示されている。「事態の存在の数え上げ」については、八尾 (2006)の「がちだ」と「やすい」が表す「事例の多さ」について述べた以下の記述がある。

ところで、事例とは、単独の事態をいうのではなく、類似した事態としてひとまとまりにされたものの中のひとつひとつである。(…)したがって、事例について述べる場合には、話し手が、自身の経験や他者からの情報など複数の事柄を考察して分析し、そこに類似性を見出し一般化するという過程が含まれている。

(八尾 2006:136)

八尾 (2006)の指摘は話し手が傾向を判断する過程について述べたものであり、ひとつひとつの事柄を考察・分析し、一般化するという過程はまさに本論文で言う「事態の存在の数え上げ」にあたる。ただし、八尾 (2006)のこの記述は「ぎみだ」と対立させた、「がちだ」、「やすい」の両方が表す傾向の特徴を述べたものであり、「がちだ」にのみ「事態の存在の数え上げ」という認知過程を認める本論文の立場とはこの点で異なる。

「事態の進展に関わる情報からの推論」に通じる指摘は、井上次夫 (1997)、渡邊 (2007)の「やすい」の意味拡張に関する議論の中でなされており、また、本論文の第3章 3.4 節の議論と関わる。井上次夫 (1997)は難易 (井上の用語では「容易性」) から傾向が派生したと見ており、その契機としてコトの容易性 (=難易) と、コトの生起する頻度の高さ (=頻度傾向) およびコトの進行する速度の速さ (=進展傾向) の概念的な近さを指摘している。

「～やすい」の一次的意味 (プロトタイプ) は容易性であり、二次的意味 (プロトタイプの拡張) が傾向である。

(井上次夫 1997:106)

コトの容易性は、その容易性においてコトの生起する頻度の高さ、コトの進行する速度の速さと結びつく。(…)つまり、容易性は傾向へとたやすく転化する。この意味で、容易性は傾向の意味を派生すると言うことができる。

(井上次夫 1997:108)

渡邊 (2007)も「難易から確率(注:本論文で言う傾向)に意味が拡張されたと見られる」(渡邊 2007:224 括弧内注は本論文筆者による)という見解を示し、傾向、特に進展傾向と難易の間に意味的な接点があることを指摘している。以上のように、「やすい」の表す傾向の意味が事態進展の容易さという進展過程に関わる情報と密接に関連していることは井上次夫 (1997)、渡邊 (2007)がすでに指摘している。本論文でも第3章3.4節で、難易の意味拡張は「難易」→「進展傾向」→「頻度傾向」という順で起こっているという見方を示した。ただし、井上次夫 (1997)、渡邊 (2007)および本論文第3章3.4節での議論は、あくまで「やすい」が表す意味の拡張の関係を述べているものであり、傾向判断に至る認知過程について述べたものではない。本論文では「やすい」の表す傾向は、すべてその認知過程において「事態の進展に関わる情報からの推論」が関わっていると考え、進展傾向はもちろん、頻度傾向を表す場合でも「やすい」が表す傾向である限りその認知過程においては事態進展のあり様が関わっていると考える。

ここで示した認知論的な観点を導入することで、先に指摘した「がちだ」と「やすい」の違いに関する3つの現象が統一的に説明できることを以下で順に見ていく。

まず、「①「やすい」は進展傾向を表せるが、「がちだ」は進展傾向を表せない」という事実であるが、これは頻度傾向と進展傾向が複数回の事態を前提とするか否かという違いが関係している(第3章3.2節参照)。頻度傾向は複数回の事態の実現を前提とする。したがって(24)のように1度の事態実現からは頻度傾向の判断はできない。一方、進展傾向は(25)に示されるように1回の事態の進展から判断することができ、事態の複数性は基本的に関与しない。

(24) (交差点で事故が起こるのを1回見た後で)

??この交差点は事故が起こりやすい。

(25) (杉の枝がよく燃えるのを1回見た後で)

杉の枝は燃えやすい。

「がちだ」は、「事態の存在の数え上げ」を基にしてその数の多さから傾向を導き出す形式であるため、複数の事態の存在が不可欠であり、ゆえに1回の事態から事物の傾

向的性質を見出す進展傾向は表せないのである。さらにこの説明は難易へも適用できることを付言しておく。(26)が示すように難易も複数回の事態の実現を前提としない。つまり「がちだ」が難易を表せないという事実に対しても、進展傾向の場合と同様の説明が成り立ち、「がちだ」は「傾向」を表す形式である。よって「難易」は表せない」という記述からさらに踏み込んだ説明が可能になるという点でも、この認知過程の違いによる説明は有用であると考える。

(26) (杉の枝を1回燃やし、よく燃えるのを見た後で)

杉の枝は燃やしやすい。

「②「がちだ」は擬似頻度傾向を表せるが、「やすい」は擬似頻度傾向を表せない」という事実も「がちだ」と「やすい」の傾向判断に至る認知過程の違いから自然に説明される。擬似頻度傾向は、実質的には「状態の傾向」を表す文であることを前節で述べたが、この「状態」は時間経過に伴う進展過程を有さない事態である(仁田 2001、工藤 2002)。つまり「やすい」が擬似頻度傾向を表せないのは、「やすい」の傾向判断の基になる事態の進展が存在しないためである。一方、「がちだ」が擬似頻度傾向を表せるのは、「がちだ」は数え上げる対象事態が存在してさえいればよく、事態の進展の有無は関与しないためである。例えば「都心のアパートは郊外よりも部屋が狭くなりがちだ」という文は「(郊外のアパートに比べ、) 都心のアパートは狭い」という状態にあることを何らかの形で話し手が複数回認知し、数え上げた結果、「都心のアパートは郊外よりも狭いことが多い」という判断を下したということを表す。この認知過程において事態の進展過程は必要としない。

3 つ目に指摘した「③「がちだ」は身近でない事態の傾向を表しにくい」という事実には、当該事態を複数回認知し、数え上げる人間の存在の想定のしやすさが関わっている。事態の存在を数え上げるためには、当然話し手が複数回その事態と何らかの形で接していなければならないという条件が生じる。そのため、(27)のように話し手が日常的に体験、あるいは見聞きしうる「身近な事態」であればあるほど事態の存在を数え上げる存在としてみなしやすくなり、「がちだ」の容認度も高くなる。それに対して、(28)のように当該の事態が身近なものでない場合には、話し手がそれを複数回認知し、数え上げているという想定がしにくくなり、「がちだ」の容認度が低くなる。

(27) a. 昼食の後は睡魔に襲われ[がちだ/やすい]。

b. 夏場は食欲が落ち[がちだ/やすい]。

(28) a. 山の奥地ではクマに襲われ[?がちだ/やすい]。

b. 隕石は南極や北極などの地球の極点に落ち[?がちだ/やすい]。

「想定のしやすさ」の問題であるため、(28)でも「猟師」や「隕石衝突の専門家」など、当該事態を複数回認知し、数え上げうる人間を話し手として想定した場合には、「がちだ」の容認度は多少上がる。このように「事態の存在の数え上げ」の可否はどのような話し手を想定するかによって変動しうるものであり、それに応じて「がちだ」の容認度も変わりうると考えられる。ただし、(29)のように「がちだ」の容認度が極めて低く、また適当な話し手の想定による容認度の上昇も見込めない例も存在する。これは(29)がまだ存在しない事物について述べている文であり、このような場合には当然、その事物に関わる事態も存在しえないため、それを数え上げうる人間を想定することが基本的にできないからである。

(29) (まだ完成していない交差点の設計図を見ながら)

この交差点は信号の位置が悪いから事故が起こり[??がちだ/やすい]と考えられる。

一方、「やすい」が表す「事態の進展に関わる情報からの推論」による傾向判断は、推論の基になる事態進展に関わる情報(例えば(29)であれば「設計図にある信号の位置」)がありさえすれば推論的に傾向を判断しうるため、「やすい」による傾向表現は事態の身近さとは無関係に自然に成立する。

5.1.4. 他形式との関わりと「やすい」「がちだ」のまとめ

「がちだ」を「事態の存在の数え上げ」という認知過程と関連づけて記述することの妥当性を示す傍証として、「がちだ」のマイナス評価性との関係を指摘する。この「がちだ」のマイナスの評価性は一体どこから生じるのだろうか。このことを考える上で、とりたて詞の「ばかり」に関する研究の指摘が示唆的である。とりたて詞「ばかり」を用いた表現にも当該事態に対する話し手の評価が表れやすいことが先行研究で指摘されている(沼田 1992、澤田恵美子 2007)。例えば(30)の「勉強する」、「フランス料理を食べる」という事態は中立かむしろプラスに捉えられやすいにもかかわらず、「ばかり」を用いることでその事態を話し手がマイナスに捉えているという解釈がほぼ義務的に生じる。

- (30) a. 夏休みなのに、太郎は勉強ばかりしている。
b. このところ、フランス料理ばかり食べている。

(澤田恵美子 2007:132)

この「ばかり」に関して沼田 (1992)では「「ばかり」で取り上げられる複数の事物に対し、その中のそれぞれのものについて注目する個別的視点」、定延 (2001)では「事物を探索領域とする「探索」³の集合に対するスキニング探索」、澤田恵美子 (2007)では「現象の複数回の観察」が関わるとしている。「複数」の対象が事物そのものなのか「観察」や「探索」といった心内行動なのかという違いはあるものの、いずれも話し手の認知過程における事物(事態)の数え上げが関与することを指摘している。このように評価性を帯びるといふ点と「数え上げ」といふ認知過程が関わるという点において「がちだ」との共通性が見いだせる。本論文ではこの「数え上げ」といふ認知過程と評価性の関わりについてこれ以上詳細に論じることはできないが、「がちだ」の意味に「事態の存在の数え上げ」といふ認知過程を組み入れることは、「がちだ」といふ一形式の記述に対して有効であるだけでなく、評価性という点において他の言語形式との関連性を捉える上でも重要であると考えられる。

以上、この5.1節では、「事態の存在の数え上げ」か「事態の進展に関わる情報からの推論」か、という傾向判断にいたる認知過程の違いとして「がちだ」と「やすい」の違いを記述することを提案した。このような観点を導入することで、両形式の基本的な意味範囲の違いから、擬似頻度傾向という基本的な傾向表現からは外れる表現が可能か否かということや、「事態の身近さ」といふ語用論的条件が関与する理由までを統一的に説明できることを示した。さらに本論文の分析は「数え上げ」といふ認知過程と「評価性」の関係性という問題において他形式への広がりをも有する可能性があることを示した。

本論文において最も重要なのは、本来的に傾向を表す形式である「がちだ」と難易から拡張した傾向を表す「やすい」を比較したことによって、難易形式「やすい」の特徴がより浮き彫りになったことである。第3章3.4節では難易形式が有する多義の意味がどのように拡張していったかということを考える中で、「難易」→「進展傾向」→「頻度傾向」といふ順で拡張し、進展傾向と頻度傾向は、事態実現までの進展と事態実現(変化)の存在という隣接関係で結ばれていることを指摘した。さらにこの5.1節の議論によって、頻度傾向の表層的な意味においては進展過程という概念は関わらないが、「やすい」が頻度傾向を表す場合には、その裏に事態の進展過程がないといけないことが明らかになった。この事実は、少なくとも日本語の「やすい」といふ難易

³ 「既知領域の拡大行動」と定義される人間の認知行動を指す。

形式については、進展過程という概念がその意味の中核にあり、難易と頻度傾向を結ぶ橋渡しとして進展傾向という意味の存在が重要であったという第3章3.4節の議論を間接的に支持するものであると考える。

5.2. 日本語の「にくい」と「づらい」について

この5.2節とつづく5.3節では、日本語と中国語の<難易>の類義形式、「にくい」と「づらい」および“容易”と“好”をそれぞれ取り上げる。

まずこの節では日本語の「にくい」と「づらい」の異同について考察を行う。日本語の「にくい」と「づらい」の関係については、若干のニュアンスの差はあるものの、基本的に「にくい」が「づらい」の意味範囲を全てカバーしていると見ることができる（【表5】参照）。先行研究で問題としてとりあげられるのは、「にくい」と「づらい」がともに用いられる場合に生じるそのニュアンスの差の問題と、「づらい」が現代語においてどの意味まで拡張しておりその拡張がどのような条件下で許されるのかという問題の2つである。本論文もこの2つの問題を扱うが、特に後者の「づらい」の拡張的用法については、従来の研究で指摘されていた範囲よりも広い範囲で「づらい」が成立することを明らかにし、その成立条件が事態から<難易>を見出す認知過程と深く関わっていることを示す。

【表5 日本語と中国語の難易形式の意味分布】

	難易		傾向	
	感覚難易	属性難易	進展傾向	頻度傾向
「やすい」	○	○	○	○
「にくい」	○	○	○	○
「づらい」	○	○	△	△
“容易”	×	○	○	○
“好”	×	○	△	△
“难”	×	○	△	△

5.2.1. 「にくい」と「づらい」についての先行研究の記述

現代日本語の「にくい」と「づらい」の違いを扱っている研究には、森田 (1977)、飛田・浅田 (1991)、近藤 (2004)、三木 (2004)がある。以下、それぞれ順に見ていく。

森田 (1977)、飛田・浅田 (1991)は、「にくい」と「づらい」に対してそれぞれ辞書的な記述をしており、その中で両形式がともに成立する場合のニュアンスの差について指摘している。いずれの研究も、困難さの原因の所在をどこに求めるかについて差があることを指摘している。森田 (1977)は、まず「にくい」が無意志動詞とも結合するのに対して、「づらい」は意志動詞とのみ結合するという事実を指摘している。これは本論文の、「づらい」は傾向を表しにくいという観察と一致する (【表 5】)。さらに、意志動詞と結合し、ともに難易を表す場合でも、「にくい」を用いた場合には困難さを生み出す原因が行為主体以外の事物にある場合が多いのに対して、「づらい」を用いた場合は困難さが行為主体の肉体的・精神的理由に求められることが多いというニュアンスの差を指摘している。

「にくい」の上に付く動詞は「傾斜の取り方が悪いので、汚水が流れにくい」「値のはる品なので捌きにくい」「はずれにくいネジ」、「水に溶けにくい洗剤」「燃えにくい湿った木」「割れにくい板」「見えにくい方向」のような事象そのものの性質を表す無意志性の動詞のほか、「歩きにくい靴」「飲みにくい薬」「覚えにくい言葉」など、意志動詞もある。無意志動詞や自然現象の動詞が上にくるということは、「～にくい」が客観的な困難を表していると言える。(…) 客観的ということは、対象側に困難を生み出す原因・理由がある場合が多いということである。受け手の側に理由があるのではなく、対象側の原因で“…しにくくなる”という状況は、多くはマイナス評価の状況である。

(森田 1977:366 下線強調は本論文筆者による)

「～づらい」は「辛い」で、肉体的理由に原因することが多い。「足に豆ができて歩きづらい」「口にできものがあって食べづらい」など。精神的理由から行為の遂行にブレーキのかかる場合にも用いられる。「対戦相手が先輩なので、どうしても攻めづらくてしょうがない」など。主として肉体的、精神的理由から困難さを覚えるということは、本人の意識としては行おうとしながら思うにまかせないというもどかしさがあり、と同時に、意志にかかわりのない不可抗力的状况に基づく困難表現でもあり、マイナス評価となる。

(森田 1977:367 下線強調は本論文筆者による)

飛田・浅田 (1991)も森田 (1977)とほぼ同様の指摘をしている。

行為に困難を感じる意味では「～づらい」は「～にくい」によく似ているが、「～にくい」がやや客観的な困難さを暗示し、困難の原因は対象にあることが多いのに対して、「～づらい」は困難を感じている主体の存在を暗示する点が異なる。全く同じ文脈で「～づらい」と「～にくい」が用いられると、次のようなニュアンスの違いを生ずる。

この靴をはくと歩きづらい。(歩行が困難だ)

この靴をはくと歩きにくい。(靴が窮屈だ)

この小説は読みづらい。(文章が自分には難解だ)

この小説は読みにくい。(字が小さい)

(飛田・浅田 1991:369 下線強調は本論文筆者による)

森田 (1977)と飛田・浅田 (1991)の指摘自体には筆者も同意するが、現代語において「にくい」と「づらい」がともに難易を表す場合の差はニュアンスの差にとどまり、困難さの原因の所在もあくまで解釈の傾向の問題である。森田 (1977)が「づらい」の項で挙げている例を「足に豆ができて歩きにくい」、「口にできものがあつて食べにくい」としたり、「対戦相手が先輩なので、どうしても攻めにくくてしようがない」として「にくい」と交替させてもそれぞれが肉体的理由・精神的理由によって困難さが生じているということに変わりはない。また飛田・浅田 (1991)が挙げる例でも例えば、困難さの原因を入れ替えて、行為主体以外の事物に原因がある場合に「づらい」、困難さを感じている行為主体の存在を感じさせる場合に「にくい」を用いている(31)のような例をつくっても、いずれも問題なく成立する。

(31) a. この小説は字が小さいので読みづらい。

b. この小説は自分には難解なので読みにくい。

「にくい」と「づらい」がともに成立する難易の用法ではニュアンスの差しか観察されないことから、両形式の違いを明らかにするには、より意味のカバー範囲がせまい「づらい」がどこまで拡張し、また拡張的な意味がどのような場合に成立するかについて細かく見る必要があると思われる。そのような観点で「づらい」を観察した研究

に、近藤 (2004)と三木 (2004)がある。つづいて、近藤 (2004)と三木 (2004)の議論を概観し、その問題点を指摘する。

近藤 (2004)は「にくい (にくし)」の語史を研究する中で、その比較対象として現代語の「づらい」の状況を考察しているものである。その中で近藤は現代語の「づらい」を不可能・困難をもたらす要因に着目して5つに分類し、その容認度を整理している(以下、(32)~(44)の例文は全て近藤(2004)からの引用である)。なお、【IV技術・能力、外的条件による困難】における第一段階と第二段階・第三段階は、共起する動詞が意志動詞か無意志動詞かで分けられており、第二段階と第三段階は、第二段階が苦痛を感じる人間の存在を想起しうるのに対して、第三段階ではそのような存在が想起できないという点で分けられている。

【I 精神的抵抗感】

(32) いいづらい話だが、君にはもう金を貸せないよ。

(33) 身内を非難するようなことは書きづらい。

【II 肉体的苦痛・五感への負担】

(34) 足に豆ができて歩きづらい。

(35) この席は遠くて聞きづらいから、前の席にうつろう。

【III 道具の使い勝手の悪さ】

(36) このまんねんひつは古くなったので、とても書きづらい。

(37) ノートパソコンのキーボードは、小さいし、キーの配列も窮屈で使いづらい。

【IV 技術・能力、外的条件による困難】

(第一段階)

(38) R と L が多くて、とても言いづらい名前なのよ。

(39) この不況下、アート作品は売りづらい。

(第二段階)

(40) アート作品は、不況も影響してか、売れづらくなっている。

(41) この薪はしめっていて燃えづらい。

(第三段階)

(42) このような気圧配置の時は雨が降りづらい。

【V 「～ヅライ」がプラス評価である場合】

(43) 赤ん坊は男より女の方が比較的病気にかかりづらい。

(44) この種のガラスは割れづらい特徴を持っている。

上のように 5 つに分類した上で、現代語の「にくい」に関しては I ~ V 全ての段階においてその用法が完全に定着しているのに対して、近藤自身の内省では「づらい」は I ~ III に比べ IV 以降の容認度が落ちるとしている。さらに IV、V の容認度に関して以下のように述べている。

A IV (の第一段階)・第二段階・第三段階と、精神的・肉体的苦痛との関わりが稀薄になっていくほど、またマイナス評価から中立的になっていくほど、「~ズライ」の許容度は下がる。

B V のように、上接動詞が好ましくない意味を表すものでそれが困難であることがプラス評価である場合、「~ズライ」の許容度は著しく下がる。

(近藤 2004:105)

この近藤 (2004) の分析に関しては大筋では同意できるが、(45) のように近藤 (2004) では共に【V 「~ズライ」がプラス評価である場合】に分類されるようなものでも容認度に大きな差が出る例があり、このような例については説明がなされていない。

(45) a. ??平坦な道なので転倒しづらい。

b. 凍結した道でも慎重に歩けば転倒しづらい。

「にくい」と「づらい」の違いについて詳細に論じているもう 1 つの研究に三木 (2004) がある。三木 (2004) は結合する動詞の性質に注目した分析を行っており、「にくい」が他動詞、非能格動詞、非対格動詞の全てと結合できるのに対して「づらい」は他動詞、非能格動詞とは問題なく結合できるものの、非対格動詞に関しては結合できるものとできないものがあるとしている。非対格動詞が「づらい」と結合できない例として挙げられているのが(46)で、結合できる例として挙げられているのが(47)である。

(46) *この紙は燃えづらい。 *この豆は煮えづらい。 *この布は乾きづらい。
*この潜水艦は沈みづらい。 *この肉は切れづらい。

(47) 尿が出づらい。病気が治りづらい。静電気が起こりづらい。汚れが落ちづらい。電波が届きづらい。ほこりが入りづらい。足が滑りづらい。差が生じづらい。イメージが沸きづらい。下半身の脂肪が取れづらい。有利な性

質が進化しづらい。有機物が分解しづらい。その塗料が色落ちしづらい。

(三木 2004:128)

(46)と(47)の違いは「内在的コントロール」の有無であり、「づらい」と共起できる自動詞の主語名詞句は「内在的コントロール」を持っている必要があると三木 (2004) は述べる。

「～づらい」と共起できる自動詞は、動作主が存在しないが、主語名詞句が、ある意味、自ら作用・活動することができる潜在能力、つまり内在的コントロールを持っている。ここでは内在的コントロールを影山 (1986)_{ママ}のように自ら状態変化することができる性質に限定せず、自ら新たに現れたり、作用したりすることができる性質という広い意味で用いる。

(三木 2004:137 「影山 (1986)」は原文における誤記。正しくは「影山 (1996)」)

つまり、(46)の「この紙が燃える」、「この豆が煮える」といった事態の背景には必ず動作主ないしは何らかの原因が存在し、「紙」や「豆」が外部からの働きかけなしに「燃え」たり「煮え」たりすることはない。一方、(47)の「尿が出る」、「病気が治る」といった事態は外部からの働きかけなしに発生し得るものである。この「内在的コントロール」の有無が「づらい」との結合の可否に関わっているということである。

「づらい」が他動詞・非能格動詞とはほぼ無条件で結合できるのに対して非対格動詞との結合が難しいという指摘は、無意志動詞とは結合しにくく、「づらい」が「傾向」を表しにくいということの意味しており、これは本論文の観察と一致する。しかし内在的コントロールという観点から非対格動詞で結合できるものとできないものがあることを説明している点には疑問がある。三木 (2004)では非対格動詞の主語名詞句が内在的コントロールを持っているか否かを測るテストとして、「勝手に/自然に」との共起可否を挙げている。「勝手に/自然に」と共起できる非対格動詞の主語名詞句は内在的コントロールを持っており、できないものは内在的コントロールを持っていないということになる。この見解に従うと、以下の(48)、(49)の「生木」、「根菜類」は内在的コントロールを持っておらず、(50)、(51)の「アイスクリーム」、「山頂の雪」は内在的コントロールを持っていることになる。(三木が「づらい」が結合しない非対格動詞の例として挙げている(46)でも「燃える」、「煮える」が含まれている)

(48) ??生木が[勝手に/自然に]燃える。

(49) ??根菜類が[勝手に/自然に]煮える。

(50) アイスクリームが[勝手に/自然に]いたむ。

(51) 山頂の雪が[勝手に/自然に]溶ける。

内在的コントロールの有無という観点から見ると、(48)、(49)の動詞「燃える」、「煮える」は「づらい」と結合せず、(50)、(51)の動詞「いたむ」、「溶ける」は「づらい」と結合しないことを予測するが、以下の(52)～(55)の例文は予測と逆の結果を示している。(52)、(53)は、非対格動詞の主語名詞句が内在的コントロールを持っていないにもかかわらず、「づらい」と自然に結合できる例であり、(54)、(55)は内在的コントロールを持っていると考えられるのに「づらい」と結合しにくい例である。

(52) 生木は燃えづらいので薪には使えない。

(53) 根菜類は煮えづらいので先に火を通しておく必要がある。

(54) ??アイスクリームはいたみづらい。

(55) ??山頂の雪は溶けづらい。

さらに、三木 (2004)で「づらい」が不適合となる例として挙げられている(46)の他の非対格動詞、「乾く」、「沈む」、「切れる」についても、それほど違和感なく用いられている実例 ((56)～(58)) がインターネット上で見つかる⁴。

(56) 洗濯物は湿気があると乾きづらいですか？

—乾きづらいですね。私は密閉部屋をつくりそこに除湿器を置いて乾かしています。

(Yahoo 知恵袋 http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11116491416)

(57) ユナイテッド・ステーツは 1950 年~1952 年にかけて、ノースロップ・グラマン・ニューポート・ニューズの乾ドックで建造された。有事の際には軍艦として徴用される計画があったため、ユナイテッド・ステーツは攻撃を受けても沈みづらい海軍仕様で建造された。

(Wikipedia の「ユナイテッド・ステーツ」という客船についての記事

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A6%E3%83%8A%E3%82%A4%E3%83%86%E3%83%83%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%BC%E3%83%84_\(%E5%AE%A2%E8%88%B9\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A6%E3%83%8A%E3%82%A4%E3%83%86%E3%83%83%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%BC%E3%83%84_(%E5%AE%A2%E8%88%B9)))

(58) イカの足 (腕なんでしょうけど・・・) を食べる時、長い 2 本の触腕にだけ、真ん中に直径 1mm 程度の太さの白くて長くて切れづらいヒモみたいなが入っていると思うんですけど、あれは何ですか？

⁴ そもそも「(布が) 乾く」については、筆者の内省では「布が[勝手に/自然に]乾く」が自然に成立するため、内在的コントロールを持っている例であるように思われる。

(OK Wave <http://okwave.jp/qa/q7423879.html>)

このように、内在的コントロールの有無と「づらい」を用いた文の容認度が連動しない以上、内在的コントロールの有無では「づらい」の成立条件を説明するのは難しい。

以上見てきたように、「づらい」の使用については困難さをもたらす要因や動詞の統語的・語彙的特徴だけでは説明できない例があることがわかる。以下では無意志動詞と結合する「づらい」(傾向を表す「づらい」)が成立する環境について、本論文の分析を示す。

5.2.2. 「づらい」の拡張的用法について

近藤(2004)、三木(2004)の指摘にもあるように無意志動詞(非対格動詞)との結合に関して「にくい」と「づらい」は大きな違いが見られる。すなわち、「にくい」は意志動詞、無意志動詞ともに問題なく結合可能であるが、「づらい」は無意志動詞と結合すると、多くの場合不自然となる((59)、(60))。言い換えると、「にくい」は難易と傾向ともに表せるが、「づらい」は、傾向は基本的には表せないということである。

(59) 赤ん坊は男より女の方が比較的病気にかかり[にくい/??づらい]。

(60) この家は耐火建築で燃え[にくく/??づらく]、安全性が高い。

ただし、意志性を欠き、通常ならば「づらい」が不自然となる場合でも「望ましき」という話し手の述べ方に関わる要因と「抵抗力の存在」という事態の力関係に関わる要因が関与する文環境においては「づらい」が容認可能となる。以下、順に「づらい」が拡張的に傾向を表す際の条件について詳しく見ていく。

「づらい」には可能表現と同様に、事態が望ましい場合には文の容認度が上がるという現象が見られる。(61)は動詞(「売れる」)が意志性を欠き、高級車の性質を静的に述べる文であるため、「づらい」が不自然となっているが、(62)のように車の販売員の発話として捉えることで、「高級車が売れる」という事態実現を望んでいる話し手の存在が明確になるため自然な表現になっている。

(61) 不景気に高級車は売れ[にくい/??づらい]。

(62) (車の販売員の発話として)

「不景気に高級車は売れ[にくい/づらい]から軽自動車の販売に重点を置きましょう。」

(63)も同様に「薪が燃える」ことを望む話し手の存在が容易に読み取れるため「づらい」は使用可能である。

(63) この薪はしめっていて燃えづらい。

(62)、(63)で「づらい」の容認度が上がるのは単に具体的な文脈を設定したことによるものではなく、「望ましさ」という条件によるものであるということは、事態実現（「高級車が売れる」こと、「木材が燃える」こと）を望まない話し手の存在が容易に読み取れる(64)のような文脈ではいかに状況を特定のしようとも「づらい」の容認度が相変わらず低いことからわかる。

(64) a. 不景気に高級車は売れ[にくい/??づらい]から、低価格車を専門に販売している我々にとってはとても助かる。

b. この木材は燃え[にくい/??づらい]ので、様々な建築物に使われている。このような「づらい」の使用は新聞の用例にも見られる。(65)、(66)の「正社員として採用される」、「出火した場所が人目につく」という事態は社会通念として望ましいことであると考えられるし、(67)では「山本選手」にとって出遅れを挽回するには自分と他の選手の「点差が開くこと」が望ましいことがわかる。

(65) いったんフリーターや無業者になると正社員として採用されづらい傾向があるのではないか。 (朝日 2006.1.12)

(66) 出火した場所は人目につきづらく、当時従業員はいなかった。

(朝日 2007.5.15)

(67) アテネ五輪銀メダリストで44歳の山本博は首位に33点差の7位と大きく出遅れた。(…)50メートルと30メートルで行われる後半戦に可能性を残した。距離が短いほど点差が開きづらいが(…) (朝日 2007.5.31)

以上のように、当該事態が話し手(を代表する社会一般)にとって望ましい事態で、その望ましい事態が実現することの困難さに対するもどかしさや残念な気持ちといった評価が感じられる場合には「づらい」が使用可能となる。この「事態の望ましさ」という要因は近藤(2004)が動詞の「好ましさ」として指摘していた要因とほぼ重なるものであり、先行研究でもすでに認識されていたものであるが、なぜ「望ましさ」という要因が「づらい」の容認度を上げるのかという理由までについては先行研究で十分に述べられていない。本論文ではこれは、「行為主体の働きかけの過程において事態実現を阻む抵抗力に関わる知覚情報を得る」という<難易>の基盤事態に近づいているからである、と考える。無意志的な事態が述べられているこれらの文では、「働きかけ、知覚情報を得る行為主体」の存在は認められない。しかし、話し手が当該事態を

望ましいものと捉えることで、事態実現に働きかけ、知覚情報を得る行為主体に近い存在になるのである。ここで注意したいのは、＜可能＞の基盤事態とは異なり、＜難易＞の基盤事態の「行為主体」とは、必ず話し手（概念化主体）であるということである。＜可能＞の基盤事態を考えてみると、「私が泳ごうと働きかけた結果、事態が実現した」ゆえに「私は泳げる」という場合であれば、行為主体は話し手自身であるが、必ずしも行為主体は話し手である必要はなく、「太郎が泳ごうと働きかけた結果、事態が実現した」ゆえに「太郎は泳げる」ということもあり得る。この場合の行為主体は「太郎」という他者である。このように＜可能＞において行為主体と話し手が必ずしも一致しないのは、＜可能＞が実現段階における事態実現の有無の情報を基にした認知から見出されるものだからである。一方、＜難易＞の基盤事態を考えた場合、例えば「この水を飲むという過程で困難さを感じなかった」ゆえに「この水は飲みやすい」といった認知が考えられるが、この場合の水を飲む行為主体は話し手（概念化主体）でしかありえない。「太郎」という他者が水を飲んでも、話し手は＜難易＞の認知の基になる知覚情報を得られないからである。これは、＜難易＞の認知が過程段階における知覚情報に基づく認知であることに由来する。このような（＜可能＞とは異なる）＜難易＞の認知過程の特徴から、話し手が当該事態を望ましいものと捉えることによって、話し手自身が事態実現に働きかけ知覚情報を得る行為主体に近い存在になり得るのだと考えられる。

「望ましさ」が＜難易＞の基盤事態への近づけに最も有効な要因であるが、本論文では、「望ましさ」という話し手の述べ方に関わる要因が満たされていなくても、事態の力関係のあり方に関わる要因を満たすことによって「づらい」の容認度が上がる現象があることを指摘したい。(68)と(69)がそれを示す例文である。(68)と(69)はともに「転倒する」という望ましくない事態に「づらい」が結合しているため、両者の容認度の違いは「望ましさ」では説明できない。

(68) 平坦な道は転倒し[にくい/??づらい]。

(69) 凍結した道でも慎重に歩けば転倒し[にくい/づらい]。

(68)が単に「平坦な道で転倒するという事態が実現することがあまりない」という「平坦な道」についての性質を述べる文になっているのに対して、(69)は、「通常であれば凍結した道では転倒するという事態がよく起こるが、「慎重に歩けば」という条件の下では、転倒することがあまりなくなる」ということを表しているという違いがここでは重要になる。これは言い換えると、(69)は、「通常であれば「転倒する」という事態

が実現することを阻む抵抗力が小さいが、一定の条件下ではそれを阻む抵抗力が大きい」ということを表しているということである。以下の(70)、(71)の例も「づらい」の容認度に差が生じる例である。

(70) a.??山頂の雪は溶けづらい。

b.??アイスクリームはいたみづらいので長期間保存できる。

(71) a. 不純物の少ない水でつくった氷は比較的溶けづらい。

b. 加熱した肉は生肉に比べるといたみづらい。

(70)は「山頂の雪が溶ける」という事態、「アイスクリームがいたむ」という事態において抵抗力が大きいということをそのまま述べる文になっている。一方、(71)は「通常、氷は容易に溶ける(=抵抗力が小さい)が、不純物が少ない水で作られているという条件下の氷は、(相対的に)あまり溶けない(=抵抗力が大きい)」、「肉は通常すぐにいたんでしまうものである(=抵抗力が小さい)が、生肉と比べた場合、加熱した肉は容易にはいたまない(=抵抗力が大きい)」ということを表している。

すなわち、(69)、(71)はいずれも、「通常は抵抗力が小さいが、一定の条件下では抵抗力が大きい」ということを表す文になっており、「抵抗力の存在」がより際立つ文において「づらい」の拡張が認められるのだと考えられる。この、「抵抗力の存在」を読み込むことで「づらい」の容認度が上がるという事実は、「ことができる」(第4章4.1.2.2節)と“能”(第4章4.2.5節、4.2.6節)の拡張的用法の成立に見られた原理と同じ原理が働いていることを示している。「行為主体の働きかけの過程において事態実現を阻む抵抗力に関わる知覚情報を得る」という<難易>の基盤事態における、「事態実現を阻む抵抗力」の存在を読み込み、<難易>の基盤事態に近づけることで「づらい」の容認度が上がっているのである。

ただし、(69)、(71)の「づらい」については、日本語母語話者の中でも容認度のゆれが大きく、「づらい」の用法の中でもまだ十分に定着していない用法である。近年「づらい」の勢力が拡大しており本来ならば「にくい」が使用されるような場合にも「づらい」が用いられるようになってきているということが舘谷(2000)、近藤(2004, 2013)で指摘されており、この「づらい」の拡張的用法はまさにその過渡期の現象であると位置づけられるかもしれない。完全に定着した用法ではないとはいえ、(72)~(74)のように新聞という推敲された文章の中でもこの「づらい」の用法が見られ、全く容認できない表現ではないということも事実である。

(72) 宇宙空間で集めた太陽光を、大気に吸収されづらいレーザー光に変えて地上に送り、発電などに利用する。(朝日 2007.9.4)

(73) デザイン面も、持ちやすく、倒れづらく、滑りづらい機能を重視した。腕には最大幅1センチのつばを付け、湯飲みは円筒形に近い形にしてその台をなくした。(朝日 2007.4.6)

(74) 「晴るる」は、味がよく、丈が短いため倒れづらく、台風などの被害に強いのが特徴という。(朝日 1998.5.20)

(72)~(74)の例もすべて先に述べたような、「通常は抵抗力が小さいが、一定の条件下で抵抗力が大きくなっている」ということを表す文脈になっている。(72)は「通常はすぐに大気に吸収される太陽光を、容易には吸収されないようなレーザー光に変える」ということを述べている。(73)は手が不自由な人たちにも使いやすいような「バリアフリー漆器」についての記事の文章であるが、手が不自由な人がお椀や湯飲みを使用する場合、「誤って倒してしまったり、滑らせてしまったりすることが多いが、そのような事態がなるべく起こらないように工夫した漆器」について述べている。(74)は「晴るる」というイネの品種の特徴について述べている文章で、「台風などのときにはイネは通常倒れるものであるが、この品種は容易には倒れない」ということを表している。いずれも、通常はその事態の実現を阻む抵抗力が小さい(「吸収される」、「倒れる」、「滑る」などの事態が容易に起こる/頻繁に起こる)事物や環境について、一定の工夫をした結果、その抵抗力が大きくなっている(「吸収される」、「倒れる」、「滑る」などの事態が容易には起こらない/あまり起こらない)ことを述べた文になっている。

5.2.3. 「にくい」と「づらい」のまとめ

「にくい」と「づらい」はともに、事態の実現において抵抗力が大きいことを表すものであるが、「にくい」は難易から傾向までを広く表すことができるのに対して、「づらい」は意志的な行為の関わる難易を表すのが基本で、意志性が関わらない傾向を表すには一定の制約がある。「づらい」が傾向まで拡張するのは、当該の事態が望ましい事態である場合か、あるいは「通常抵抗力が小さいが、一定の条件下では抵抗力が大きい」という文脈において「抵抗力の存在」が際立っている場合である。前者は話し手の述べ方に関わる要因で、後者は事態の力関係に関わる要因である。拡張的用法にこの2つの要因が関わるという事実は日本語の可能形式「ことができる」と中国語の可能形式“能”にも見られた特徴であり、基盤事態への近づけという操作が難易表現にも関わっているということの意味する。

【「にくい」と「づらい」の特徴】

「にくい」： 難易から傾向までを制限なく表すことができる。

「づらい」： 基本的には難易までしか表せず、傾向を表すことはできない。ただし、「行為主体の働きかけの過程において事態実現を阻む抵抗力に関わる知覚情報を得る」という<難易>の基盤事態に近づけることで、「づらい」も傾向を表せるようになる。これには「望ましさ」という話し手の述べ方に関わる要因と、「事態実現を阻む抵抗力」の存在という事態の力関係のあり方に関わる要因が関与する。

事態のあり方が形式の使用に関わらない「にくい」に対して、「づらい」は基本的に行為主体が存在する事態についての難易しか表せず、さらに、<難易>の基盤事態に近づけることで拡張的用法が成立するという基盤事態のあり方との関係性が強い。これは可能形式の分析で見られた「基盤事態活性型の形式」という概念が難易表現にも有効であることを意味する。「づらい」は基盤事態活性型の形式であると位置づけることができる。

5.3. 中国語の“容易”と“好”について

つづいて中国語の“容易”と“好”という容易さを表す類義形式の比較を行う。【表5】からわかるように、中国語の“容易”、“好”も「にくい」、「づらい」と同じように、基本的には“容易”が表す意味範囲が“好”の意味範囲をカバーするという包含関係になっている。

【表 5 日本語と中国語の難易形式の意味分布】

	難易		傾向	
	感覚難易	属性難易	進展傾向	頻度傾向
「やすい」	○	○	○	○
「にくい」	○	○	○	○
「づらい」	○	○	△	△
“容易”	×	○	○	○
“好”	×	○	△	△
“难”	×	○	△	△

ただし、中国語の“容易”と“好”は「にくい」、「づらい」よりも明確な意味の棲み分けがなされている面がある。例えば、両形式は基本的に属性難易を表せるが、(75)では“容易”が、(76)では“好”が、何らかの条件によって不自然になっている。この節では、“容易”と“好”の間に見られる意味の棲み分けを明らかにすることを目的とするが、ここでも<難易>の基盤事態のあり方が関わっているということを主張する。

(75) 这支圆珠笔很 [??容易/好] 使。

これ CL ボールペン とても RONGYI/HAO 使う

「このボールペンは使いやすい。」

(76) 英语很 [容易/*好] 学会。

英語 とても RONGYI/HAO 学ぶ-身に付く

「英語は学んで身につけやすい。」

5.3.1. “容易”と“好”についての先行研究の記述

中国語の“容易”、“好”がともに後ろに動詞を伴うことによって助動詞のような働きをし、<難易>を表すという事実は、呂叔湘 (1980, 1999)、朱德熙 (1982)に指摘がある。呂叔湘 (1980, 1999)の“容易”と“好”の助動詞用法について記述している箇所を以下に引用する (ただし、例文の示し方などは適宜本論文の体裁に合わせて変更している)。

【好】

5. 容易。用在动词前面，“好”的作用类似助动词。(容易。動詞の前で用いられたとき、“好”は助動詞のように働く。)

(77) a. 这条 路 还算 好 走。

これ CL 道 まあ HAO 歩く

「この道はまあ歩きやすい方だ。」

b. 那 篇 文章 好 懂。

それ CL 文章 HAO わかる

「その文章はわかりやすい。」

c. 这 问题 好 解决。

これ 問題 HAO 解決する

「この問題は解決しやすい。」

(吕叔湘 1999:257)

【容易】

做起来不费事。跟“难”相对。(ことを行うのに労力がいない。“难”の反対。)

- b) 容易+动。“容易”的作用类似助动词。(容易+動詞。“容易”の働きは助動詞に近い。)

(78) a. 汽油 容易 挥发。

ガソリン RONGYI 揮発する

「ガソリンは揮発しやすい。」

b. 象棋 比较 容易 学。

中国将棋 比較的 RONGYI 学ぶ

「中国将棋は比較的学びやすい。」

c. 这句话 不 容易 懂。

これ CL 話 NEG RONGYI わかる

「この話はわかりやすい。」

d. 青年人 容易 接受 新 事物。

若者 RONGYI 受け入れる 新しい 事物

「若者は新しいものを受け入れやすい。」

(吕叔湘 1999:467)

“好”と“容易”のいずれも助動詞に似た働きをするという文法的な側面について言及した上で、“好”の項で意味を“容易”と記述し、“容易”の項で「ことを行うのに労力がいない」という記述をしているので、呂叔湘(1980, 1999)は“容易”と“好”を、容易に行為を行えるという意味を表す類義形式と捉えていると推察される。さらに、対義的な意味を表す“难”の項で以下の様な記述と例文((79))を示している。

跟上面的“难”相对的，可以是“容易”，也可以是“好”，但有的例子只能用其中之一。(上記の“难”(注：助動詞用法“难”のことを指す)の反対は、“容易”でもよいし“好”でもよいが、一方しか用いることができない例もある。)

(79) a. 法语 难学。 (＝不好学，不容易学)

フランス語 NAN 学ぶ

「フランス語は学びにくい。」

b. 这道题不难做。 (＝好做，容易做)

これ CL 問題 NEG NAN する

「この問題はやりやすい。」

c. 那条路不难走。 (＝好走，×容易走)

あれ CL 道 NEG NAN 歩く

「あの道は歩きやすい。」

d. 他的心情不难想像。 (＝容易想像，×好想像)

彼の気持ち NEG NAN 想像する

「彼の気持ちは想像しやすい(想像に難くない)。」

(呂叔湘 1999:406)

“容易”と“好”が多くの場合において交替可能な類義関係にあること、ある場合には一方の形式しか用いることができないことが指摘されているが、両者の違いがどのような点にあるのかについては、呂叔湘(1980, 1999)にはこれ以上の言及はない。

“容易”と“好”の違いについてさらに詳細に論じた研究に奥田寛(2000)がある。奥田寛(2000)は助動詞の“容易”と“好”の違いについて、“好”の方が“容易”よりも口語的な色彩が強い、という文体的違いにとどまらず、意味上、文法上にも重要な違いがあることを指摘している。その中でまず“容易”に3つの意味、“好”に2つの意味を立て、その上で後ろにどのような統語的な組み合わせや動詞がくるか、その可否を示している。以下、奥田寛(2000)による“容易”と“好”の意味分類を示し

た後、“容易”、“好”と文法構造との関係を示した表（【表 11】と、“容易”、“好”と動詞との関係をまとめた表（【表 12】）を示す（以下、奥田寛（2000）の原文を本論文筆者が日本語訳したものを記載）。表中の構文については、引用のあと、奥田寛（2000）の研究を検討する中で説明する。

容易₁ 時間、労力をかけずに何らかの行為を実行することを表す。

(80) 这个 电脑 容易 掌握。

これ CL パソコン RONGYI マスターする

「このパソコンは使いこなしやすい。」

(81) 象棋 容易 学。

中国将棋 RONGYI 学ぶ

「中国将棋は学びやすい。」

容易₂ 行為を行ない、望ましい結果を容易に得ることを表す。

(82) 象棋 容易 学好。

中国将棋 RONGYI 学ぶ-良い

「中国将棋は学びやすい。」

(83) 单独 说 一个 自由字， 比 单独 念 一个 粘附字

单独 言う 一 CL 独立形態素 ～より 单独 読む 一 CL 拘束形態素

容易 听得懂 一些。

RONGYI 聞く-DE-わかる 少し

「独立して使う語だけを言う方が、他の語にくっついて使う語だけを言うよりもいづらか聞いてわかりやすい。」

容易₃ 望ましくない状況が出現する可能性が大きいことを表す。

(84) 现在 夏天 食物 容易 变质。

今 夏 食べ物 RONGYI 変質する

「夏場の今は食べ物が変質しやすい。」

(85) 容易 感冒 的人 应当 注意 天气 变化。

RONGYI 風邪をひくの 人 ～べき 注意する 天気 変化

「風邪をひきやすい人は天気の変化に注意すべきだ。」

好₁ 時間、労力をかけずに何らかの行為を実行することを表す。

(86) 这个 道理 好 理解。

これ CL 理屈 HAO 理解する

「この理屈は理解しやすい。」

(87) 尼龙 衣服 很 好 洗。

ナイロン 服 とても HAO 洗う

「ナイロンの服は洗しやすい。」

好₂ 事物が人を満足させる性質を備えていることを表す。

(88) 这 辆 自行车 好 骑。

これ CL 自転車 HAO 乗る

「この自転車は乗り心地がよい。」

(89) 这 杯 乌龙茶 很 好 喝。

これ CL ウーロン茶とても HAO 飲む

「このウーロン茶はおいしい。」

【表 11 “容易”と“好”の文法構造に対する選択】

		V	V+O	V+R	“被”構文 (=受動文)	兼語文	“把”構文
容易	容易 ₁	+	+	-	-	+	-
	容易 ₂	+*	+	+	-	+	+
	容易 ₃	+	+	+	+	+	+
好	好 ₁	+	-	-	-	-	-
	好 ₂	+	-	-	-	-	-

* 結果性を有する動詞に限る

【表 12 “容易”と“好”の動詞に対する選択】

		容易			好			
		容易 ₁	容易 ₂	容易 ₃	好 ₁	好 ₂		
（Ⅱ意志動詞）	自主動詞	“結果性”あり		—	+	—	—	—
		“結果性”なし	単音節	+	+(1)	+(2)	+	+(3)
			二音節	+	+(1)	+(2)	+	—
（Ⅱ無意志動詞）	非自主動詞	“褒義” (望ましい事態を表す動詞)	単音節	+	—	—	+	—
			二音節	+	—	—	—	—
		“貶義” (望ましくない事態を表す動詞)	—	—	+	—	—	

(1) 後ろに補語が必要

(2) 後ろに望ましくない意の補語もしくは目的語が必要

(3) 数は限られる

以下では適宜、奥田寛 (2000)の考察からは漏れてしまっている事実を補いながら、本論文の関心に沿って、奥田寛 (2000)の分類、考察のポイントを整理していく。まず、奥田寛 (2000)の“好”の分類のうち、“好₂”は、“好騎”（乗り心地がいい）、“好喝”（飲み物がおいしい）のほか、“好吃”（食べ物がおいしい）、“好玩儿”（おもしろい）、“好过”（快適だ）、“好看”（かっこいい）など、この形で一語の形容詞とみなされ辞書に登録されているような語群を指しており、語彙化がかなり進んでいるものである。この“好”は、本論文が考察対象とする生産的に難易述語をつくる難易形式とは性質を異にするため (cf. 古川 2003)、本論文では分析の範囲からは外す。

つづいて“容易”の分類についてであるが、“容易₃”は本論文で「傾向」と呼んでいる用法にあたり、“容易₁”と“容易₂”は「難易」にあたる。ただし、“容易₃”については「望ましくない状況」の傾向に限定しているが、実際は、(90)の例のように望ましくないとは必ずしも言えない傾向を表すことも可能であり、そういう場合の“容易”は奥田寛 (2000)の分類ではどれにも属さないことになってしまう。“容易”は望ましさにかかわらず、広く傾向を表し得ると見ておいて方がよいと思われる⁵。

⁵ 一方で、傾向を表す文は「望ましくない事態」に偏るということは事実としてあるよう

(90) 汽油 很 容易 挥发。

ガソリン とても RONGYI 揮発する

「ガソリンは揮発しやすい。」

さらに、難易を表す“容易₁”と“容易₂”を、奥田寛(2000)は行為そのものの難易か結果を得ることの難易かで区別しているが、奥田寛(2000)が指摘するこの“容易”の区別は“容易”そのものの性質の違いではなく、“容易”が現れる文環境によって分けられているものであるため、本論文では(属性)難易を表すものとして区別せずに扱うことにする。奥田寛(2000)の“容易₁”と“容易₂”の区別が、“容易”が現れる文環境によって分けられていることを以下で簡単に見ておく。【表11】の“容易₁”と“容易₂”が共起しうる文法構造の違いを見ると、「V+R」の構文(「動詞+結果補語」の構造をとる構文。以下、「動詞+結果補語」構文と呼ぶ)と“把”構文に違いが見られることがわかるが、いずれも、結果性を伴う構文である。まず、「動詞+結果補語」構文との共起関係について見る。(91)は単独の動詞が現れている例、(92)は“办好”(する+良い)という「動詞+結果補語」構文が現れている例である。

(91) 这件事 容易 办。

これ CL 事 RONGYI する

「この事はやりやすい。」

(92) 这件事 并不 复杂, 容易 办好。

これ CL 事 決して NEG 複雑 RONGYI する-良い

「この事は決して複雑ではなく、よい結果を得やすい。」

(奥田寛 2000:248)

奥田は(91)、(92)の例について、(91)の“容易”を“容易₁”とし、(92)の“容易”を“容易₂”としており、(92)の“容易”は“容易₁”ではないとしている。それは、(91)の“容易”が単独の動詞と共起し「時間、労力をかけずに何らかの行為を実行すること」を表しているのに対して、(92)の“容易”が「動詞+結果補語」構文を伴い「行為を行ない、望ましい結果を容易に得ること」を表しているからであるという説明をしている。“容易₁”が「動詞+結果補語」構文と結合できないのは結果補語を伴うと“容易₂”となり、「行為を行ない、望ましい結果を容易に得ること」を表すことにな

で、日本語の難易文を分析している渡邊(2007)でも「やすい」が傾向解釈になるときは望ましくない事態を指すことが多いということが指摘されている。「望ましさ」に関する偏りは、“容易”という形式の問題というよりは、「傾向を述べる」ということ自体に関わる問題であると考えられる。

るからだとして述べており、“容易”が共起する文法構造によって結果的に生じる意味を分けていることがわかる。本論文の枠組みから捉えた場合、(91)、(92)はともに「属性難易」に相当する。

“把”構文についても確認しておく。“把”構文とは、“把”という介詞（前置詞）を用いて、目的語を動詞に前置し、目的語に対する「処置」を表す構文である。例えば、(93)の例がそれにあたるが、“意思”（意味）という目的語を“把”が導き、これに対して“说清楚”（はっきり言う）という処置をすることを表している。

(93) 这样 写 容易 把 意思 说清楚。

このよう 書く RONGYI ~を 意味 言う-はっきり

「このように書くと意味をはっきり伝えることができる。」

（奥田寛 2000:250）

奥田寛（2000）が論文中でも指摘しているように、この構文を用いるには何らかの「結果性」を伴う文でなければならないという制約があり、(93)でも“说+清楚”という「動詞+結果補語」構文が用いられている。ここでも、構文の特徴として結果性を有する構文であるため、(93)を“容易₂”とみなしており、議論としては「動詞+結果補語」構文の場合と同じである。この(93)の例も「属性難易」に相当し、“容易”が表す意味としては(91)（および(92)）と同じであり、本論文の議論において両者を積極的に区別する必要はないと考える。

語彙化が進んでいる“好₂”を考察対象から除外し、“容易₁”と“容易₂”をまとめて（属性）難易を表している用法と見ると、奥田寛（2000）が指摘する“容易”と“好”の意味的・文法的特徴は以下のように整理し直される。まず、“好”については難易の用法のみがあり、“容易”については難易と傾向の用法がある。さらに、【表 11】において“好”が「動詞+結果補語」構文、“把”構文に現れないこと、【表 12】において“好”が「結果性を有する」自主動詞（意志動詞）と共起しない、という指摘は“好”が結果性を伴う表現と共起しないという指摘としてまとめられる。また、【表 11】において“好”が「被」構文（受動文）に現れないこと、【表 12】において非自主動詞（無意志動詞）と共起しないという指摘は“好”が無意志的な事態を表す表現に現れない、という指摘としてまとめられる⁶。“好”と結果性を伴う表現に関する観察は

⁶ “好₁”については【表 12】で望ましいことを表す単音節の無意志動詞とは共起できるとしているが、そこで挙げられている動詞は“懂”と“生”だけであり、例文もあがっていない。“懂”は「わかる」という意味であるが、“生”は「生まれる・育つ・発生する・生きる」などの意味を持つ多義語であり、どの意味を指しているかは不明である。もし“生”が「生きる」としての意味であるとするならば、“懂”（わかる）とともに、いずれも主体

その通りであると考えられるが、なぜ“好”が結果性を伴う表現と共起しないのかということについてまでは奥田寛 (2000)では議論されていない。また、“好”と無意志的な事態を表す表現に関する観察については、見落とされている事実がある。それは(94)、(95)のような例である。これらは、いずれも「服が乾く」、「宝くじが当たる」という無意志的な事態を表しているが、“好”が用いられている。つまり、“好”も一定の条件下では傾向を表せるが、この“好”の用法を奥田寛 (2000)の分類では扱えないことになる。

(94) 夏天 衣服 很 [容易/好] 干。

夏 服 とても RONGYI/HAO 乾く

「夏は衣服が乾きやすい。」

(95) 这里 的 彩票 很 [容易/好] 中。

ここ の 宝くじ とても RONGYI/HAO あたる

「ここの宝くじは当たりやすい。」

さらに、奥田寛 (2000)の分析では“容易”が“好”の意味範囲をカバーするという関係になっているが、呂叔湘 (1980, 1991)が指摘するような“好”しか使えない(96)のような例があり、これも奥田寛 (2000)の観点に基づく分類では漏れてしまう例である。

(96) 那 条 路 很 [??容易/好] 走。

あれ CL 道 とても RONGYI/HAO 歩く

「あの道は歩きやすい。」

先行研究をまとめると、“容易”と“好”の意味的な異同を明らかにする上で、以下の3つの課題が残っている。

- ① “好”は基本的に無意志動詞と共起しないが、一定の環境では無意志的な事態についての傾向を表せる。“好”はどのような場合に、無意志的な事態についての傾向を表せるのか。
- ② “容易”は(96)のような例では不自然になる(呂叔湘 1980, 1999)⁷。これは、どのような要因によるものなのか。“容易”の意味特徴から説明できる事実なのか。

は人間(有情物)をとる動詞であり、完全に無意志的な事態を表しているわけではない。
⁷ 呂叔湘 (1980, 1999)では、“他的心情不难想像。”(彼の気持ちは想像しやすい。)という文が“容易”では置き換えられるが“好”では置き換えられないという事実も指摘されているが((79d)、筆者が数人の中国語母語話者に確認したところ、“容易”でも置き換えにくいという回答を得た。呂叔湘 (1980, 1999)がどのような意図でこの例文を示してい

- ③ “好”は結果性を伴う表現と共起しない（奥田寛 2000）。なぜ“好”は結果性を伴う表現と共起しないのか。“好”の意味特徴とどのように関係するのか。

次節では以上の3点を解き明かしながら、“容易”と“好”の意味的な違いを明らかにしていく。

5.3.2. “容易”と“好”の異同

まず意志性の制約について見ていくが、これについては、中国語の“容易”と“好”は日本語の「にくい」と「づらい」の関係にほぼ平行的である。日本語では「づらい」だけに意志性の制約があり無意志的な事態についての傾向を基本的には表せなかったのと同じように、中国語では“好”だけに意志性の制約が存在する。(97)～(102)の例が示すように、意志性を欠く無意志動詞は“好”と共起できない。

- (97) 汽油 很 [容易/*好] 挥发。
ガソリン とても RONGYI/HAO 揮発する
「ガソリンは揮発しやすい。」
- (98) 冬天 皮肤 很 [容易/*好] 干。
冬 皮膚 とても RONGYI/HAO 乾く
「冬になると皮膚が乾燥しやすい。」
- (99) 生的 食物 在 夏天 很 [容易/*好] 坏。
生の食品 ～に夏 とても RONGYI/HAO 腐る
「生鮮食品は夏場は腐りやすい。」
- (100) 领子 很 [容易/*好] 脏。
襟 とても RONGYI/HAO 汚れる
「襟は汚れやすい。」
- (101) 浴室 潮湿 很 [容易/*好] 生 杂菌。
浴室 湿度が高いとても RONGYI/HAO 発生する 雑菌
「浴室は湿気が多いので雑菌が繁殖しやすい」
- (102) 我 很 [容易/*好] 晕 车, 所以 吃 防晕药。
私 とても RONGYI/HAO 酔う車 だから 飲む 酔い止め薬

のかを本論文では特定できなかったため、この問題は扱わない。

「私は車酔いしやすいので、酔い止めの薬を飲む。」

しかし、“好”も一定の条件下では無意志的な事態の傾向を表すことができる。それは、日本語の「づらい」と同じように、望ましい事態についての傾向を表す場合である。(103)の「衣服が乾く」、(104)の「宝くじが当たる」という事態は話し手が望ましいと捉えていると解釈しやすい事態であり、いずれも“好”でその変化の進展が速い、あるいはその事態実現の頻度が多いという傾向を表すことができている。

(103) 夏天 衣服 很 [容易/好] 干。

夏 服 とても RONGYI/HAO 乾く

「夏は衣服が乾きやすい。」

(104) 这里 的 彩票 很 [容易/好] 中。

ここ の 宝くじ とても RONGYI/HAO 当たる

「この宝くじは当たりやすい。」

5.2 節の日本語の難易形式に関する議論と合わせてこの事実を見ると、以下のことが指摘できる。日本語の「にくい」、「づらい」は困難さを表す難易形式、中国語の“容易”、“好”は容易さを表す難易形式で、意味的には対義関係にある。しかし、「話し手にとって望ましい事態がなかなか実現しなくて/実現することが少なくてもどかしい、辛い」(日本語)あるいは「望ましい事態が容易に実現して/実現することが多くて喜ばしい、うれしい」(中国語)といった話し手の擬似的な働きかけと知覚情報の獲得を読み込める文脈にし、<難易>の基盤事態に近づけることで、通常は無意志的な事態についての傾向が表せない形式(「づらい」、「好’)が拡張するという共通の現象が見られるのである。

なお、日本語の「づらい」は「事態の望ましさ」以外にも、(105)のように「通常は抵抗力が小さいが、一定の条件下においては抵抗力が大きい」という抵抗力の存在を際立たせるような文脈にすると「づらい」の容認度が上がるという現象が見られたが、中国語にはそのような現象は見られないようである。

(105) 加熱した肉は生肉に比べるといたみづらい。

(105)に倣って、中国語で同じような例文を作ってみると、(106)のように「ミネラルウォーターという通常はいたむことがあまりないものでも、夏場という条件下では比較的容易にいたむ」という文になる。これは「通常は抵抗力が大きい、一定の条件下ではその抵抗力が小さい」という、「づらい」の場合とは逆の文脈になる。このような文脈にしても、“好”の容認度は上がらない。

(106) *连 矿泉水 在 夏天 都 很 好 坏

「ミネラルウォーターでも夏場はいたみやすい。」

ただし、これは日本語と中国語の差というよりは日本語の「づらい」が困難さを表す形式であるの対して、中国語の“好”が容易さを表す形式であるということの差から生じている可能性が高い。これについて考えられる理由として2つある。1つは、(105)に倣って(106)のような文をつくっても、「抵抗力」を際立たせることにつながらないということである。日本語の「づらい」で見られたように、「通常は抵抗力が小さいが、一定の条件下では抵抗力が大きい」ということを表す文脈は、「抵抗力の存在」を際立たせることになるが、逆に「通常は抵抗力が大きい、一定の条件下では抵抗力が小さい」ということを表す文脈は、「抵抗力がない」ことを強調することになるので、「抵抗力の存在」を際立たせることにつながらないのだと考えられる⁸。もう1つは、望ましさに関する問題が関わっている可能性がある。日本語の場合、「いたむ」ということは望ましくない事態であるが、「いたみづらい」という事態は結果として望ましい事態になっており、文全体のレベルでは「望ましさ」が満たされている。すなわち、日本語では、「動詞」のレベルか「動詞+づらい」のレベルのどちらかで、話し手が事態を望ましく思っているという評価が入る余地がある。しかし、中国語の場合、“坏”（いたむ）という事態は望ましくない事態であり、かつ“好坏”（いたみやすい）という事態も結果として望ましくない事態を表すことになっており、「動詞」のレベルでも「好+動詞」のレベルでも、望ましい事態と捉えることができないのである。中国語の場合、「抵抗力の存在」の要因と「望ましさ」の要因が連動しているため、(106)の不自然さに影響しているのがどちらの要因かを特定することはできないが、いずれにしても困難さを表す形式か容易さを表す形式かという違いが影響している可能性が高い。

⁸ 「容易さ」の方が「困難さ」よりも抵抗力の存在が際立ちにくいというのは以下の対比からも示される。困難さは、行為主体自身はその抵抗力の存在を感じたり、外からその抵抗力の存在を観察したりすることができるが、容易さについては抵抗力がない（小さい）ことを表すので、その存在を感じたり外から観察するのが難しいのだと考えられる。

- (i) a. この肉は食べ[にくく感じる/づらく感じる]。
b. 食べ[にくがっている/づらがっている]。
c. 食べ[にくそうだ/づらそうだ]。
- (ii) a. ?この肉は食べやすく感じる。
b. ?食べやすがっている。
c. ?食べやすそうにしている。

つづいて、呂叔湘 (1980, 1999)で挙げられていた(107)の例において、なぜ“容易”が不自然になっているのかについて考える。(107)は「あの道を歩く」という行為に関する(属性)難易を表しており、“容易”の表す基本的な意味範囲に含まれる用法である。この事実は難易の中でもある種の難易を“容易”が表せないことを示している。

(107) 那条路很 [??容易/好] 走。

あれ CL 道 とても RONGYI/HAO 歩く

「あの道は歩きやすい。」

(107)のように“容易”の方だけが不自然になる類例を探すと、(108)、(109)のような例がある。

(108) 这张椅子很 [??容易/好] 坐。

これ CL 椅子 とても RONGYI/HAO 座る

「この椅子は座りやすい。」

(109) 这支圆珠笔很 [??容易/好] 使。

これ CL ボールペン とても RONGYI/HAO 使う

「このボールペンは使いやすい。」

(107)~(109)は「道を歩く」、「椅子に座る」、「ボールペンを使う」という行為に関わる難易を表しているが、“容易”を使用すると不自然になる。これらの文に共通することは、いずれも「道を歩く」、「椅子に座る」、「ボールペンを使う」という単純で具体的な身体的行為を表しており、その具体的な身体的行為に伴う知覚を想起しやすくなっている(「道の凸凹感」や「椅子の座り心地」、「ボールペンの書き味」など)。これらの表現をパラフレーズした場合、「あの道を歩くことは容易だ」、「この椅子に座ることは容易だ」、「このボールペンを使うことは容易だ」というような事態実現の容易さを表した表現よりむしろ、「あの道は歩いていて心地よい」、「この椅子は座り心地がよい」、「このボールペンは書き心地がいい」というように、行為に伴う「快・不快」を表した表現に近い。この場合、“容易”を用いると不自然な表現になる。

このことは、“容易”が自然に成立する文と対比させるとわかりやすい。(110)、(111)は「理解する」、「答える」という思考や発話に関わる行為であり、身体に基づく知覚は存在しない。

(110) 他的说明很 [容易/好] 理解。

彼の説明 とても RONGYI/HAO 理解する

「彼の説明は理解しやすい。」

(111) 这个问题很 [容易/好] 回答。

これ CL 問題 とても RONGYI/HAO 答える

「この問題は答えやすい。」

(112)、(113)の「病気を治す」、「宿題をする」という行為を実現するためには現実的には身体を動かすことが必須であり、その過程で例えば「検査のため患者の胸に聴診器をあてる」、「手術の際にメスを入れる」といった行為や「鉛筆でノートに文字を書く」、「ページをめくる」といった行為など、何らかの身体を介した知覚を伴う行為が存在すると考えられるが、言語表現としてはそれらの一連の行為をまとめて抽象的な行為として表しており、具体的な身体行為を表していないという点では(110)、(111)と同じである。

(112) 这 种 病 很 [容易/好] 治。

これ CL 病気 とても RONGYI/HAO 治す

「この病気は治しやすい。」

(113) 这 个 作业 很 [容易/好] 做。

これ CL 宿題 とても RONGYI/HAO する

「この宿題はやりやすい。」

ここで論じている「身体的行為に伴う知覚の有無」は動詞が持つ語彙的な意味では決まらない。例えば、主語が特定の「個体」を指していた(107)～(109)では“容易”が不自然となっていたが、(114)、(115)のように主語を「類」にし、総称文にすると“容易”も使用できるようになる。

(114) 水 泥 路 很 [容易/好] 走。

セメント 道 とても RONGYI/HAO 歩く

「コンクリートの道は歩きやすい。」

(115) 新 的 椅子 很 [容易/好] 坐。

新しい の 椅子 とても RONGYI/HAO 座る

「新しい椅子は座りやすい。」

また、(116)、(117)のように「道」を「進路」、「椅子」を「ポスト」の比喻として解釈することで、主語名詞句の事物を抽象物として解釈した文にすると、“容易”が使用可能となる。(114)～(117)はいずれも、身体を介した知覚を伴う具体的な行為の存在が希薄となったことで、“容易”の容認度が上がっているのだと考えられる。

(116) 这 条 路 很 [容易/好] 走。

これ CL 道 とても RONGYI/HAO 歩く

「この進路はやっていきやすい。」

(117) 这种椅子很 [容易/好] 坐。

これ CL ポスト とても RONGYI/HAO 座る

「このポストにはつきやすい。」

最後に、“好”と結果性を伴う表現との関係について見る。奥田寛(2000)は“好”が結果性を伴う表現と共起しないことを指摘していた。例えば、(118)～(120)が示すように、“学”(学ぶ)、“洗”(洗う)、“做”(する)という単独の動詞であれば“好”とも共起するが、“学会”(学んで身に付ける)、“洗干净”(洗ってきれいにする)、“做完”(し終える・仕上げる)のように結果性を伴う「動詞+結果補語」構文になると“好”のみが使えなくなる。

(118) a. 英语很 [容易/好] 学。

英語 とても RONGYI/HAO 学ぶ

「英語は学びやすい。」

b. 英语很 [容易/*好] 学会。

英語 とても RONGYI/HAO 学ぶ-身に付く

「英語は学んで身につけやすい。」

(119) a. 日本生产的衬衫很 [容易/好] 洗。

日本 生産する の ワイシャツとても RONGYI/HAO 洗う

「日本製のワイシャツは洗いやすい。」

b. 日本生产的衬衫很 [容易/*好] 洗干净。

日本 生産する の ワイシャツとても RONGYI/HAO 洗う-きれい

「日本製のワイシャツは洗ってきれいにしやすい。」

(120) a. 这件工作很 [容易/好] 做。

これ CL 仕事 とても RONGYI/HAO する

「この仕事はやりやすい。」

b. 这件工作很 [容易/*好] 做完。

これ CL 仕事 とても RONGYI/HAO する-終わる

「この仕事は仕上げやすい。」

本論文ではこれらの現象は奥田寛(2000)が言うような「結果性」がある場合に“好”が用いられないという制約ではなく、むしろ「過程性」を有さない表現と“好”が共起しないという制約として捉えるべきであると考え。ここで注意したいのは、中国語の「動詞+結果補語」構文は継続相(durative)を持たず、瞬間相(punctual)

のみを有するということである (Tai 1984、石村 2011)。(121)と(122)のそれぞれにおいて、単独の動詞は動作の進行を表す“在”(～ている)と共起するが、「動詞+結果補語」構文だとこれを許さないことがこのことを示している。

(121) a. 我 在 学 中文。

私 PROG 学ぶ 中国語

「私は中国語を学んでいる。」

b. *我 在 学会 中文。

私 PROG 学ぶ-身につく 中国語

「私は中国語を学んで身につけているところだ。」

(122) a. 我 在 杀 张三。

私 PROG 殺す 张三

「私は张三を殺している。」

b. *我 在 杀死 张三。

私 PROG 殺す-死ぬ 张三

「私は张三を殺している。」

(Tai 1984:292)

奥田寛 (2000)において「動詞+結果補語」構文と同じように「結果性を伴う構文」として挙げられていた“把”構文も、(123)、(124)が示すように進行相をとることができないことから、“把”構文も継続相を持っていないと考えられる。

(123) *他 在 把 窗子 打破。

彼 PROG ~を 窓 殴る-割れる

「彼は窓を割っている。」

(124) *我 在 把 这件 衣服 洗干净。

私 PROG ~を 这件 CL 服 洗う-きれい

「私はこの服をきれいに洗っている。」

このような事実から奥田寛 (2000)の指摘した事実を捉え直すと、“好”は「過程性」のない事態の難易を表すことができないと言うことができる。

5.3.3. “容易”と“好”についてのまとめ

ここまで得られた考察の結果をまとめる。

【“容易”と“好”の意味特徴】

- a. “容易”は難易から傾向までを広く表せる。
- b. “容易”は身体を介した知覚を伴う難易を表すことができない。
- c. “好”は難易は表せるが、傾向を表しにくい。ただし、望ましいと捉えられる事態に対して、話し手がその事態が容易に実現すること、実現する頻度が多いことを喜ばしく思うという文脈であれば傾向を表すことができる。
- d. “好”は過程性を持たない事態の難易を表すことができない。

上記の“容易”と“好”の違いは可能形式の分析で導入した「基盤事態活性型の形式/基盤事態非活性型の形式」という類型を用いるとうまく捉えられる。すなわち、“好”が基盤事態活性型の形式であり、“容易”が基盤事態非活性型の形式と考えるとよい。“好”は基盤事態活性型の形式であるため、「行為主体の働きかけの過程において事態実現を阻む抵抗力に関わる知覚情報を得る」という<難易>の基盤事態からは遠い、無意志的な事態の傾向をそもそも表しにくい。ただし、「望ましき」の要因によって<難易>の基盤事態に近づけることで、傾向を表すことができる(=c)。これは、日本語の「づらい」で見られた現象と同じである。“好”が過程性を持たない事態の難易を表すことができないという事実(=d)も、<難易>が過程段階における認知に基づく概念であることに由来し、この制約も“好”が基盤事態活性型の形式であることの反映であると考えられる。一方、“容易”は基盤事態非活性型の形式であるため、事態のあり方に関わらず広く難易から傾向を表すことができる(=a)。ただし、難易の中でも身体的行為を介した知覚に基づく難易は表すことができない(=b)。これも“容易”が基盤事態非活性型の形式であることの反映であると考えられる。身体的行為を介した知覚に基づく難易とは、知覚情報を基にした<難易>概念の中でも最も原初的な難易であり、その基盤事態との近さゆえ基盤事態のあり方が活性化されるため、基盤事態非活性型の形式である“容易”が不自然になるのである。

以上、この 5.3 節では、まず、先行研究で認識されていなかった“好”の拡張的用法を指摘し、“容易”が不自然になるのは、身体的行為を介した知覚を伴う難易を表す場合であると特定した。これに、“好”が過程性を持たない事態の難易を表さないという先行研究で指摘されていた事実をあわせ、これらの事実が、基盤事態活性型の形式と基盤事態非活性型の形式という対立概念を導入することで、統一的に説明できることを示した。

5.4. 難易表現に見られる日本語と中国語の異同

5.2 節と 5.3 節では日本語の「づらい」と中国語の“好”がともに基盤事態活性型の形式であるということ述べた。この特徴が、それぞれの類義形式（「にくい」と“容易”）との対立において類似のニュアンスの差を生んでいることをまず指摘したい。森田（1977）、飛田・浅田（1991）ですでに指摘されているように、「にくい」と「づらい」では困難さの原因を何に求めるかの解釈の優先度が異なる。そのことを示すのが(125)と(126)の例文である。

(125) a. 今日は仕事に行きづらい。

[バスが運行休止中だから]<[息子が寝込んでいるから]

b. 今日は仕事に行きにくい。

[バスが運行休止中だから]>[息子が寝込んでいるから]

(126) a. 花子と連絡がとりづらい。

[花子が海外にいるから]<[昨日喧嘩したから]

b. 花子と連絡がとりにくい。

[花子が海外にいるから]>[昨日喧嘩したから]

(125)、(126)はそれぞれ「づらい」、「にくい」の部分以外は全く同じ表現であるが、「づらい」を用いた文では「寝込む息子を置いて家を離れる心苦しき」や「喧嘩翌日の気まずさ」などの心理的な要因から困難が生じているという解釈が優先的に想起されるのに対して、「にくい」を用いた文では「普段使用しているバスの運行状況」や「花子との地理的な距離」といった外的な要因から困難が生じているという解釈が優先的に想起される。このような「にくい」と「づらい」のニュアンスの差は、本論文の観点に基づくと、基盤事態活性型の形式「づらい」の方がより基盤事態のあり方に近い、身体的で感覚的な<難易>を表しやすいということの反映であると考えられる。

中国語にも日本語と同様に“好”と“容易”で解釈の優先度に差が出ることがある。(127)は“好”も“容易”も使用可能だが、基盤事態活性型の形式である“好”を用いた場合、「彼のなまりの強いしゃべり方」、「兄の汚い字」を話し手が快く思っておらず、それを非難的に表現しているというニュアンスが感じられる。この“好”のニュアンスは、<難易>の身体的・感覚的な側面が活性化されていることの表れと考えること

ができる。一方、基盤事態非活性型の形式“容易”を用いた表現は、単に「彼の話し方」や「兄の字」の性質を述べる中立的な文として感じられるようである。

(127) a. 他 说话 口音 很 重, 不 [容易/好] 懂。

彼 話 なまり とても 強い NEG RONGYI/HAO わかる

「彼のしゃべり方はなまりが強くて聞きとりにくい。」

b. 哥哥 的 字 不 [容易/好] 辨认。

兄 の 字 NEG RONGYI/HAO 判別する

「兄の字は判別しにくい（読みにくい）。」

以上は、日中の共通点であるが、相違点もある。その最も顕著な違いは、日本語では感覚難易が表せるのに対して、中国語ではそれが表せないという違いである（【表5】、例文(128)～(131)）。

【表5 日本語と中国語の難易形式の意味分布】

	難易		傾向	
	感覚難易	属性難易	進展傾向	頻度傾向
「やすい」	○	○	○	○
「にくい」	○	○	○	○
「づらい」	○	○	△	△
“容易”	×	○	○	○
“好”	×	○	△	△
“难”	×	○	△	△

(128) a. 教室にいる人が少ないので、(私は) 勉強しやすい。

b. 彼はとてもゆっくり話してくれたので、(私は) わかりやすかった。

(129) a. 教室にいる人が多いので、(私は) 勉強し[にくい/づらい]。

b. 彼はとても速くしゃべるので、(私は) わかり[にくかった/づらかった]。

(130) a. *教室里 人 很 少, 我 很 [容易/好] 学习。

教室の中 人 とても 少ない 私 とても RONGYI/HAO 勉強する

「教室にいる人が少ないので、(私は) 勉強しやすい。」

b. *他 说 得很慢, 我 很 [容易/好] 懂。

彼 話す とてもゆっくりと 私 とても RONGYI/HAO わかる

「彼はとてもゆっくりと話してくれたので、(私は)わかりやすかった。」

(131) a. *教室里 人 很 多, 我 很 难 学习。

教室の中 人 とても 多い 私 とても NAN 勉強する

「教室にいる人が多いので、(私は)勉強しにくい。」

b. *他 说 得很快, 我 很 难 懂。

彼 話す とても速く 私 とても NAN わかる

「彼はとても速くしゃべるので、私はわかりにくかった。」

このような難易形式の日中の違いを捉えるには、可能形式における日中の違いを捉えるために導入した「事態起点型の実現性表現/見込み起点型の実現性表現」という対立概念が有効である。＜可能＞の場合と同じように、日本語の難易形式は事態起点型の実現性表現であり、中国語の難易形式は見込み起点型の実現性表現であると考えられる。感覚難易は、他の意味とは異なり「見込み」の表現ではなく、感覚が現実世界に出現・存在するという事態を述べた表現である。事態起点型の実現性表現である日本語の難易形式は事態を起点とするため、この意味を表すことができるが、中国語の難易形式は事態よりも高次の見込みのレベルを起点とするため、この感覚難易の意味が表せないのだと考えられる。第4章 4.3.1 節において、日本語の可能表現では事態と実現性が明確に区別されておらず、両者が未分化な状態であると述べたが、それは日本語の難易表現にもあてはまる。日本語の難易表現も、経験者を潜在化させ、事物の属性を述べるという構文（典型的には＜難易＞の帰属先となる事物を表す名詞句が主題に立ち、述語が非過去形となる）をとることではじめて実現性の表現であるということが保証されるのである。

第6章 おわりに

この第6章では、本論文の成果をまとめ、今後の課題と展望について述べる。まず、6.1節で、第1章で設定した課題に応える形で本論文の考察の結果をまとめる。つづいて、6.2節で「事態から実現性を見出す認知過程」という認知論的観点から分析したことで得られた成果、6.3節で語用論的観点から分析したことで得られた成果、それぞれの総括を行う。最後に6.4節で、本論文を対照言語学的・類型論的研究として発展させていくための課題と展望を述べる。

6.1. 本論文の考察のまとめ

まず、本論文の第1章で設定した3つの研究課題に対する本論文の考察の結果を示す。

- I. ともにものごとの実現性を表す<可能>と<難易>はどのような点で共通し、どのような点で異なるのか。(〈可能〉と〈難易〉の異同)
- II. 言語によってもものごとの実現性を概念化するあり方は異なるのか。異なるとしたらどのような違いがあるのか。(言語間の異同)
- III. 複数の類義の可能・難易形式があった場合に、それらの類義形式はどのような観点によって意味の棲み分けがなされているのか。(類義形式間の異同)

課題Iに対する考察の結果

- I - a. <可能>と<難易>はともに事態から見出される実現性(事態が現実世界に出現・存在する見込み)を表し、さらにその認知基盤事態が「行為主体の働きかけ」と「事態実現を阻む抵抗力」との力関係で捉えられるという点で共通する。
- I - b. <可能>と<難易>は上述の共通点を有しながらも、全く異なる認知過程に支えられている(①)。①の認知過程の違いは、「二値的把握とスケール把握」、「人称制限」、「働きかけの直接性の制約」、「叙述対象の制限」、「副詞句との共起制限」という現象に反映される。さらに、①の認知過程の違いから、②のようなく可能>と<難易>の意味概念上の違いが生じる。

【①<可能>と<難易>の認知過程】

<可能>： 行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服した結果、事態が実現した（抵抗力に屈した結果事態が実現しなかった）という事態実現の有無の情報を基にした認知過程を反映。

<難易>： 行為主体の働きかけの過程において得られた事態実現を阻む抵抗力に関わる知覚情報を基にした認知過程を反映。

【②<可能>と<難易>の意味概念の規定】

<可能>： ある事態が実現するか否かを表す概念。

<難易>： ある事態の実現に至るまでの過程における抵抗力の大小を表す概念。

I - c. <可能>と<難易>はともに、1つの形式が多義性を有するという共通点を持つが、その意味拡張のあり方において、異なった動機づけが働いている(③)。

③における<難易>の意味拡張の動機づけを明らかにしたことで、「難易形式は認識的意味を表さない」、「容易さを表す形式と困難さを表す形式の間で頻度傾向の意味の定着に差がある」という難易の意味拡張に関わる現象を統一的に説明できるようになった。

【③<可能>と<難易>の意味拡張のあり方】

<可能>： 能力可能・状況可能から認識可能への意味拡張は社会・物理領域から認識領域へのメタファー写像に動機づけられている。

<難易>： 難易から進展傾向、頻度傾向への意味拡張は同一事態フレームを基にしたメトニミーによって動機づけられている。

課題Ⅱに対する考察の結果

Ⅱ - a. まず、日本語と中国語で<可能>、<難易>の意味分布が大きく異なることを示した(④、⑤)。日本語と中国語の言語差として最も注目される点として、日本語の可能形式は許可可能、認識可能を表せず、中国語では可能形式は実現可能、難易形式では感覚可能を表せない(表しにくい)という大きな特徴があることを指摘した。

【④表 3 日本語と中国語の可能形式の意味分布】

	非モダリティ	動的モダリティ			
	実現可能	能力可能	状況可能		
			条件的 状況可能	受動的 状況可能	自発的 状況可能
「られる」	○	○	○	○	×
「ことができる」	○	○	○	○	△
“能”	△	○	○	○	△
“会”	×	○	×	×	○
“可以”	×	○	○	○	×

束縛的モダリティ	認識的 モダリティ
許可可能	認識可能
×	×
×	×
○	△
×	○
○	×

【⑤表 5 日本語と中国語の難易形式の意味分布】

	難易		傾向	
	感覚難易	属性難易	進展傾向	頻度傾向
「やすい」	○	○	○	○
「にくい」	○	○	○	○
「づらい」	○	○	△	△
“容易”	×	○	○	○
“好”	×	○	△	△
“难”	×	○	△	△

II -b. II-a に示される日本語と中国語の違いは「事態起点型の実現性表現」と「見込み起点型の実現性表現」という実現性表現の2つの類型(⑥)を仮定することで説明されることを示した。日本語の可能・難易形式は事態起点型の実現性表現であり、中国語の可能・難易形式は見込み起点型の実現性表現である。

【⑥事態起点型の実現性表現と見込み起点型の実現性表現】

「事態起点型の実現性表現」： 事態を述べることを基本とし、二次的意味として実現性を表す表現。

「見込み起点型の実現性表現」： 話し手の見込みである実現性を述べることを基本とする表現。

課題Ⅲに対する考察の結果

本論文では、具体的に以下の類義形式の対照を行った。

<日本語>

- a. 「られる」と「ことができる」 (可能形式)
- b. 「にくい」と「づらい」 (難易形式)

<中国語>

- c. “能”と“会”と“可以” (可能形式)
- d. “容易”と“好” (難易形式)

III -a. 日本語の「られる」、「ことができる」は意味分布の上で、「ことができる」が表す意味範囲が「られる」の表す意味範囲を包含するという関係になっている。両形式の違いは自発的状況可能を表せるか否かという点において最も端的に表れる。「られる」は動詞の語彙的な性質としての意志性によってその使用可否が決まるため、自発的状況可能は全く表せない。「ことができる」も基本的には自発的状況可能を表すことはできないが、事態の「望ましさ」がマイナスではなく、「主語名詞の主体性」と「事態実現を阻む抵抗力」という要因が文脈から読み込める場合に拡張的に「ことができる」が自発的状況可能を表すことができる。

III -b. 日本語の「にくい」と「づらい」は意味分布の上で、「にくい」が表す意味範囲が「づらい」の表す意味範囲を包含するという関係になっている。両形式の違いは傾向(進展傾向・頻度傾向)が表せるか否かという点において最も

端的に表れる。「にくい」が何の制約もなく傾向を表せるのに対して、「づらい」は基本的に傾向を表せない。ただし、事態の「望ましさ」がプラスである場合、あるいは「事態実現を阻む抵抗力」が文脈から読み込める場合には拡張的に「づらい」が傾向を表すことができる。

- III -c. 中国語の“能”、“会”、“可以”は、それぞれの形式で細かい意味の棲み分けがなされており、その違いは<可能>を見出す認知過程において何に注目するかの違いという観点から記述できる(⑦)。まず“能”と“可以”が、基盤事態の力関係において相補的な関係にあり、それぞれ主体の働きかけと働きかけに対する抵抗力に注目しているという点で対立する。さらにこれら基盤事態の力関係に注目した形式に対して、主体・環境の属性の側面に注目したのが“会”である。

【⑦ “能”、“会”、“可以”の可能の認知過程】

“能”：「行為主体が働きかけ、事態実現を阻む抵抗力を克服することで事態が実現する」という主体の働きかけのあり方に注目して<可能>を捉えた形式。

“可以”：「行為主体の働きかけに対して事態実現を阻む抵抗力がない(小さい)ために事態が実現する」という抵抗力のあり方に注目して<可能>を捉えた形式。

“会”：<可能>の基盤事態の力関係を捨象して、「主体・環境がある属性を持っているため事態が実現する」という主体・環境の属性主体のあり方に注目して<可能>を捉えた形式。

- III -d. 中国語の“容易”と“好”も、日本語の「にくい」と「づらい」よりも形式間の意味の棲み分けがはっきりしている。難易については、“容易”、“好”ともに基本的に表すことができるが、“容易”は身体を介した知覚を伴う難易を表すことができず、“好”は過程性を有さない動詞と結合して難易を表すことができない。傾向の方は、“容易”は問題なく表せるのに対して、“好”は基本的に傾向を表せない。ただし、事態の「望ましさ」がプラスの場合には、“好”も拡張的に傾向を表すことができる。

- III -e. 日本語の「られる」、「ことができる」および「づらい」と中国語の“能”、“可以”および“好”は、<可能>・<難易>の基盤事態のあり方が強くその形式の使用に影響する形式である。このような特徴を持つ形式を本論文では「基盤

事態活性型の形式」とした。一方、中国語の“会”と“容易”は基盤事態のあり方が形式の使用に影響せず、逆に基盤事態のあり方に近い事態を拒む現象が観察される。このような形式を「基盤事態非活性型の形式」としてまとめた。それぞれの形式の定義は⑧に示される。このような類型を立てることで、日本語と中国語、および可能表現と難易表現にまたがってみられる共通の特徴を捉えることができるようになった。

【⑧基盤事態活性型の形式と基盤事態非活性型の形式】

基盤事態活性型の形式： 当該形式の使用に基盤事態のあり方が強く関わり、基盤事態のあり方が活性化された場合に当該形式の使用が容認されやすくなるもの。

基盤事態非活性型の形式： 当該形式の使用に基盤事態のあり方があまり関与せず、逆に基盤事態のあり方が活性化された場合に当該形式の使用が容認されにくくなるもの。

6.2. 事態から実現性を見出す認知過程という認知論的観点からの示唆

本論文は、日本語と中国語の可能・難易表現に見られる様々な言語的なふるまいに対して、できるだけ統一的な観点から記述し、その仕組みを理解できるような枠組みを提案することを目指した。その観点が、「事態から実現性を見出す認知過程」という認知論的な観点であり、この観点から日本語と中国語の可能・難易表現を観察すると、基盤事態のあり方が形式の使用に関与するかしないかという対立（基盤事態活性型の形式/基盤事態非活性型の形式）と、事態を表すことが基本になるか見込みを表すことが基本になるかという対立（事態起点型の実現性表現/見込み起点型の実現性表現）という2つの対立が各形式間の異同および言語間の異同を捉える際に有効な指標になることがわかった。このように事態から実現性を見出す認知過程という観点から現象を観察し、形式間の異同、言語間の異同を記述する指標を提示したことは、特に以下の2点において重要であると考えられる。

1 つは、日本語と中国語の言語間の差異を統一的に捉えることができるようになったという点である。日本語の可能・難易表現は、事態起点型の実現性表現であり、基盤事態活性型の形式はあっても、基盤事態非活性型の形式はない。それに対して、中国語の可能・難易表現は、見込み起点型の実現性表現であり、基盤事態活性型の形式だけでなく、基盤事態非活性型の形式も存在する。このような日本語と中国語の違い

をさらに一般化して述べると、日本語は実現性という現実の事態からは離れた概念を表す場合でも、事態のあり方が重要視される言語であり、逆に中国語は、実現性という概念を、具体的な事態のあり方からは離れて表すことがしやすい言語であるということである。日本語の可能形式が認識可能あるいは許可可能を表せない(表しにくい)こと、また中国語の可能形式が実現可能を表せない(表しにくい)ことなどは先行研究において早くから指摘されていたことであるが、本論文では可能表現に関するそのような事実に加え、難易表現において日本語では感覚難易が表せるが中国語では表せないという事実を指摘した。可能表現と難易表現に見られる日本語と中国語の差異は、上述の日本語と中国語の言語的特徴から生じるものと考えることができ、可能・難易表現にまたがって見られる日中の差異が統一的な視点から捉えられるようになった。この事実は、可能表現と難易表現を統括して扱い、日本語と中国語を対照させて観察したことによってはじめて明らかになった事実である。

もう1つは、拡張的な用法が成立する環境を従来の研究よりも広範に捉えることができるようになり、かつその成立環境に同じ原理が働いていることを明らかにした点である。まず、日中の難易形式において、無意志的な事態と共起しにくい一群の形式があることを確認した(「られる」、「ことができる」、「づらい」、「能」、「可以」、「好」)。そして、日本語の「ことができる」が、拡張的に自発的状況可能を表せる条件については、「特性記述」(「本来的性質」)という条件に関わることが先行研究で指摘されていたが、本論文では、この「ことができる」の拡張用法をより詳細に観察すると、「特性記述」を支える要因として、「主語の主体性」と「事態実現を阻む抵抗力」の存在という要因が特に重要であることを明らかにした。さらに「づらい」についても、「事態実現を阻む抵抗力」の存在によっても拡張的に傾向を表せるという事実があることを指摘した。同様に、中国語の“能”が拡張的に自発的状況可能、および認識可能を表す場合にも「事態実現を阻む抵抗力」の要因が関わっていることを明らかにした。上記の形式はすべて本論文の枠組みでは基盤事態活性型の形式としてまとめられるものであり、これらの形式が基本的な意味範囲を超えて拡張的に使用される際の条件には、「基盤事態への近づけ」という共通した要因が関わっている。従来の研究でなされてきた各形式の表す基本的な意味の記述や当該形式が現れ得る環境の詳細な記述からさらに一步踏み込んで、認知過程と関連させた記述を行うことで、基本的な意味範囲から拡張的に用いられ、さらにその拡張には共通した原理が働いているという事実が明らかになった。この事実も、可能表現と難易表現を統括して扱い、日本語と中国語を対照させたことによってはじめて明らかになった事実である。

6.3. 語用論的観点からの示唆

本論文が採用した分析の観点として、認知論的な観点と並んで重要であったと考えるのが語用論的な観点である。本論文では、可能・難易表現の容認度を判定する際に随所で語用論的な要因が関わる現象を指摘した。例えば、第3章3.3節で<可能>と<難易>の対照を行った際に、(1)と(2)の対比、(3)と(4)の対比を示し、可能表現や難易表現には、話し手が類似の経験をしているということがどれだけ想定できるか、当該の行為をどれだけひとまとまりの行為としてみなせるかという、言語外知識に文の容認度が大きく影響する現象を見た。

- (1) a. ??飛びやすかったです。
b. ??漉きやすかったです。
- (2) a. ハングライダーはパラグライダーよりも飛びやすかったです。
b. 1回目よりも2回目の方が漉きやすかったです。
- (3) a. この洋服は (?素早く) たたみやすい。 (様態)
b. このカボチャは (?片手で) 切りやすい。 (手段)
c. この時計は (?5分で) 分解しやすい。 (期限)
d. その食品は (?ベッドの上で) 食べやすい。 (場所)
- (4) a. この洋服ならきっと 素早くたたみやすいよ。 (様態)
b. こっちの小さめのカボチャなら 片手で切りやすい。 (手段)
c. このタイプの時計が一番 5分で分解しやすい。 (期限)
d. 箸を使わないこの食品なら ベッドの上で食べやすい。 (場所)

そして、可能表現と難易表現、日本語と中国語にまたがって関わる語用論的な要因として「望ましさ」という概念があることを指摘した。「ことができる」が自発的状況可能を拡張的に表す場合、“能”が自発的状況可能および認識可能を拡張的に表す場合、「づらい」と“好”が拡張的に傾向を表す場合にいずれも、望ましさの要因が関わることを、各章を通して示した。ある事態が望ましいものであるかどうかは、客観的意味として固定したものではなく、状況や話し手によって大いに変わりうるものである。したがって、(5)、(6)のように一般的には望ましい事態としては捉えられないために認識可能の“能”が成立しにくい場合でも、「新しい服が欲しくてわざと破ろうとしている」とか「農作物の生長のために雨が降ってほしい」といった臨時的、個別的な望ましさを想定することで“能”の容認度が上がるのである。

(5) 这样 用力 洗, 衣服 就 [(*)能/会] 洗破 了。

このよう 力を入れて洗う 服 ~すると NENG/HUI 洗う-破れる SFP (変化)

「そんなに力を入れて洗うと、服が破れてしまう。」

(6) 明天 [(*)能/会] 下 雨 吗?

明日 NENG/HUI 降る 雨 SFP (疑問)

「明日は雨が降るだろうか。」

(宮本 1997:50 一部改変)

「類似経験」や「望ましさ」という概念の内実については、考察が十分に至っていないところが多い。例えば、どこまでが「類似経験」としてみなされるのか、類似経験としてみなされるための条件は何か、「望ましさ」という概念は、本論文で示したような「望ましい/ニュートラル/望ましくない」というように分けられる概念なのか、それとも程度性を有し、「望ましさ」の度合いによって各形式の容認度が変わるような概念なのか、といった概念の内実の規定や各形式の使用との関係については十分な考察が行えていない。ただし本論文の考察によって、少なくとも可能・難易表現の以下の側面は示すことができたと考える。可能・難易形式の統語的な性質や基本的な意味範囲の記述だけでなく、各形式がどのような場合に使用できるのかという現実の言語態を記述しようとする、上述のような語用論的な要因が大きく関わっており、それが認知論的な観点と密接に結びついている。特に「望ましさ」については、可能表現と難易表現、および日本語と中国語にまたがって関わる重要な要因である。

最後に、本論文で示した語用論要因が、言語外の事実だけでなく、「発話意図」にも関わる可能性があることを指摘し、本論文の語用論的分析の展望について述べる。第5章 5.1 節において、(7)と(8)の対比を示し、話し手にとっての当該事態の「身近さ」という語用論的な要因が「がちだ」を用いた文の容認度に関わることを指摘した。これについては、どのような話し手を想定するかによって、容認度が変動し、通常は不自然である(8)の「がちだ」も猟師や隕石に関する専門家の発話として捉えれば容認度が上がるということを併せて指摘した。

(7) a. 昼食の後は睡魔に襲われ[がちだ/やすい]。

b. 夏場は食欲が落ち[がちだ/やすい]。

(8) a. 山の奥地ではクマに襲われ[?がちだ/やすい]。

b. 隕石は南極や北極などの地球の極点に落ち[?がちだ/やすい]。

この問題を突き詰めて考えると、話し手がどのような者としてふるまい、発話するのか、という問題と関わってくる。(9)と(10)の「がちだ」の容認度の差は、(7)と(8)の対

比で見られたことと基本的には同じ原理が働いている。(9)の話し手は当該事態の専門家であり、発話内容が指す事態を身近に捉えられうる人間なので「がちだ」が自然であるが、(10)は発話時点においてその事態に関する事実をはじめて知った人間の発話であるため、「がちだ」が不自然になっているのだと考えられる。

- (9) (交通事故に関する講習の中で交差点の事故発生件数に関するデータを1年かけて調べ上げた専門家が話す場面で)

「この交差点は特に早朝に事故が起こり [がちな/やすい]んです。」

- (10) (交通事故に関する講習で受講者が専門家に事故件数のデータを渡され、事故発生の時間帯に関して何か特徴はないかと聞かれ、答える場面で)

「えーと、特に早朝に事故が起こり [??がち/やすい]ですね。」

それでは、以下の(11)の「がちだ」の容認度はどうであろうか。

- (11) (交通事故に関する講習の中で急遽交差点の事故発生件数がまとめられたデータを渡された講師が話す場面で)

「えーと、ちょっとお待ちください。手元のデータによりますと…この交差点は特に早朝に事故が起こり [(?)がちな/やすい]んです。」

交通事故発生件数がまとめられたデータを直前に渡された後の発話であるという点では(10)と同じであり、実質的な事態の身近さは(10)と変わらない。したがって、(11)の「がちだ」は(10)と同じくらい不自然になることを予測する。実際、そのように判断する日本語母語話者もいるが、一方で、(11)の話し手は、事実・知識を教授することが求められるような立場であり、「講師」としてのあるべきふるまいを、(11)の話し手が行おうとしているという読み込みをすれば、比較的「がちだ」の容認度も高くなる。つまり、話し手にとっての「身近さ」という現実世界に存在する事実だけでなく、「話し手が当該事態をよく知っている者として発話しようとする」といった発話意図を考慮しなければ、(11)の「がちだ」の容認度、使用可否は決まらないということである。本論文では、事態をいかに認知するか、その認知に言語外の実事が大きく関わっているさまを記述することを焦点にして分析を行ったが、以上のような事実は、会話場において話し手が自身をどのような者として位置づけ、ふるまい、発話をするのか、という発話意図との関係を考慮に入れた分析の可能性を示唆している。

6.4. 対照言語学的・類型論的研究への課題と展望

本論文では、日本語と中国語の可能・難易形式を統括し考察したことで、以下のことが明らかになった。日本語の可能・難易表現は事態起点型の実現性表現であり、基盤事態活性型の形式はあっても基盤事態非活性型の形式はない。中国語の可能・難易表現は見込み起点型の実現性表現であり、基盤事態活性型の形式と基盤事態非活性型の形式の両方がある。この主張は、日本語と中国語の言語的特徴を記述するための1つの見方を提示したことになる。対照言語学的観点、さらには類型論的な観点からの議論に耐えうるような研究として本論文の記述をさらに発展させていくためには、考察範囲を広げると同時に各概念の精緻化が必要になってくるだろう。考察範囲の広がりという観点から、中国語の可能補語と英語の可能形式について課題と展望を述べる。

本論文では中国語の可能形式については助動詞型のものを中心にとりあげ、日本語の可能表現に一部対応する、中国語の可能補語、結果補語については詳しく議論しなかった。中国語の可能補語の意味分布を見た場合、「能力可能」((12))、「条件的状況可能」((13))、「受動的状況可能」((14))は問題なく表せるのに対して、「許可」((15))や「認識可能」((16))は表せないという事実が観察され、その分布は日本語の可能形式に近いことがわかる。このような可能補語の存在を加味すると、日本語と中国語の対立についてもより詳細な議論が必要になり、日本語と中国語のそれぞれの言語の特徴の記述も本論文の記述とは異なった形があり得るかもしれない。

(12) 我 看不懂 英文。

私 読む-NEG-わかる 英語

「私は英語が読めない。」

(13) 他 今天 来不了。

彼 今日 来る-NEG-LIAO

「彼は今日来られない。」

(14) 这 个 蛋糕 吃不了。

これ CL ケーキ 食べる-NEG-LIAO

「このケーキは食べられない。」

(15) #你 吃不了 这 个 蛋糕。

あなた 食べる-NEG-LIAO これ CL ケーキ

「(あなたは) このケーキを食べてはいけない。」

(16) #他 明天 来不了。

彼 明日 来る-NEG-LIAO

「彼は明日来ないだろう。」

また、考察対象を他言語に広げ、英語の可能形式 *can* の分布を考えると、*can* は(17)のような能力可能のほか、(18)のような条件的状況可能、(19)のような許可可能が問題なく表せる。この基本的分布は中国語の“能”と“可以”に近い。

(17) He can swim.

(18) From the top you can see the whole of the city.

(19) Can I leave now?

(Li, Renzhi 2004:56)

認識可能について見ると、*can* が認識可能を表すのは(20)のような疑問文、否定文のときであり、肯定平叙文で現れる *can* が認識的な意味で使用されることはほとんどない。

(Sweetser 1990、Li, Renzhi 2004)。これは、第3章 3.1.4 節で指摘した“能”が認識可能を表すときの典型的環境と一致するものであり、*can* は“能”と近いふるまいを見せることがわかる。

(20) a. Can they be serious?

b. It can't be true.

さらに興味深いのは、実現可能の用法である。(21)が示すように *can* は基本的に1回の事象の実現を表す実現可能を表せない。ただし、(22)のように否定的な文脈、あるいは(23)のように通常とは異なる状況で事象は実現した、という限定的な条件下での事象実現は *can* で表せるようである (Palmer 1980)。実現可能の可否が否定と関わっているという点は、“能”と共通し、また限定的な条件下での事象実現であれば容認されるという現象は、本論文が考察対象としたさまざまな形式で「事象実現を阻む抵抗力」の存在によって拡張的用法が許される現象と近い。

(21) *I ran fast, and could catch the bus.

(22) a. I could scarcely get a word out.

b. I could nearly reach the branch.

(23) a. I could reach the branch because it was loaded down.

b. I could get in, because the door was open.

Palmer (1980:94-95)

英語にこのような事実が認められるということは、本論文の分析の観点が日本語、中国語の一部の形式にのみあてはまるものではなく、考察範囲の言語を広げた場合にも有効である可能性を示している。本節で示した現象の詳しい分析については、本論文を対照言語学的研究・類型論的研究として発展させていくための今後の課題としたい。

用例出典

朝 日 : 『朝日新聞』(電子コーパス「聞蔵Ⅱビジュアル」)

BCCWJ : 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(検索ツール「中納言」使用)

引用文献

相原茂 (1991) 「能・会・可以」『中国語』1月号, pp.30-33.

相原茂 (1997) 『謎解き中国語文法』講談社現代新書.

相原茂・木村英樹・杉村博文・中川正之 (1987) 『中国語入門 Q&A』大修館書店.

青木ひろみ (1997) 「自動詞における《可能》の表現形式と意味—コントロールの概念と主体の意志性—」『日本語教育』93, pp.97-107.

青木怜子 (1980) 「可能表現」国語学会編『国語学大辞典』pp.169-171.東京堂出版.

荒川清秀 (1986) 「文における主体的な要素—能願動詞」『中国語』3月号, pp.4-6.

井島正博 (1991) 「可能文の多層的分析」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』pp.149-189. くろしお出版.

石村広 (2011) 『中国語結果構文の研究—動詞連続構造の観点から—』白帝社.

市川保子 (1991) 「可能動詞の助詞に関する一考察」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』6, pp.1-17.

伊藤さとみ (2003) 「中国語の補語」『日本東洋文化論集』9, pp.1-16.

井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (下)』大修館書店.

井上和子 (2005) 「日本語の難易文をめぐる」鎌田修ほか編『言語教育の新展開: 牧野成一教授古稀記念論集』pp.77-92. ひつじ書房.

井上次夫 (1997) 「容易性・傾向を表す「～やすい」の分析」『Studium』24, pp.98-113.

井上次夫 (1998) 「傾向を表す表現について—～がちだ・～ぎみだ・～やすい—」『国文 研究と教育』21, pp.61-74.

大河内康憲 (1980) 「中国語の可能表現」『日本語教育』41, pp.61-73.

大崎志保 (2005) 「日本語の自動詞による可能表現—動詞制約を中心に—」『日本語文法』5(1), pp.196-211.

奥田靖雄 (1986) 「現実・可能・必然 (上)」言語学研究会編『ことばの科学 1』pp.181-212. むぎ書房.

尾上圭介 (1998) 「文法を考える 6 出来文(2)」『日本語学』17(10), pp.90-97.

影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版.

- 勝川裕子 (2011) 「可能の助動詞“会”の属性描写機能」『日中言語対照研究論集』13, pp.163-177.
- 加藤紀子 (2001) 「日本語の可能・自発と難易文」中右実教授還暦記念論文集編集委員会編『意味と形のインターフェイス上巻』 pp.293-303. くろしお出版.
- 金子尚一 (1980) 「可能表現の形式と意味 (I) — “ちからの可能” と “認識の可能” について—」『共立女子短期大学紀要』23, pp.62-74.
- 金子尚一 (1981) 「能力可能と認識可能をめぐって—非情物主語ということ—」『教育国語』65, pp.103-112.
- 神田寿美子 (1961) 「現代東京語の可能表現について」『東京女子大学日本文学』16, pp.70-84.
- 草山学・一戸克夫 (2005) 「日本語と英語の結果構文再考: Cause-Effect か行為の目的か」『日本認知言語学会論文集』5, pp.175-185.
- 工藤真由美 (2002) 「現象と本質—方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法』2(2), pp.46-61.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店.
- 熊代敏行 (2002) 「日本語の「にーが」構文と分裂主語文」西村義樹 (編) 『シリーズ言語科学 2 認知言語学 I : 事象構造』 pp.243-260. 東京大学出版会.
- 黒滝真理子 (2005) 『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性—モダリティの日英語対照研究—』くろしお出版.
- 黄麗華 (1995) 「中国語の可能表現「能」「会」「可以」」『日本語研究』15, pp.78-87.
- 小矢野哲夫 (1979) 「現代日本語可能表現の意味と用法 (I)」『大阪外国語大学学報』45, pp.83-98.
- 小矢野哲夫 (1980) 「現代日本語可能表現の意味と用法 (II)」『大阪外国語大学学報』48, pp.19-33.
- 小矢野哲夫 (1981) 「現代日本語可能表現の意味と用法 (III)」『大阪外国語大学学報』54, pp.21-34.
- 近藤明 (2004) 「「～ニクシ/ニクイ」の語史への一視点—現代語「～ヅライ」との対照から—」『金沢大学教育学部紀要人文・社会科学編』53, pp.100-108.
- 近藤明 (2005) 「「～ニクシ」の意味・用法の時代的变化—院政・鎌倉期まで—」『金沢大学語学・文学研究』33, pp.1-10.

- 近藤明 (2013) 「形容詞系難易表現の史的変遷をめぐって」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』 5, pp.96-86.
- 坂本真樹 (2002) 「英語の Tough 構文への生態心理学的アプローチ」『日本認知言語学会論文集』 2, pp.12-22.
- 坂本真樹 (2004) 「生態学的知覚論、心の理論、属性描写文の認知意味論」山梨正明他編『認知言語学論考 No.2』 pp.157-197. ひつじ書房.
- 定延利之 (2001) 「探索と日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』 1(1), pp.112-136.
- 佐藤ちる子 (1989) 「難易文の派生について」『文経論叢 人文学科篇』 9, pp.69-88.
- 讚井唯允 (1996) 「助動詞 (能・会・可以)」『中国語』 10 月号, pp.56-59.
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版.
- 篠原俊吾 (1993) 「形容詞と前提行為 : Tough 構文とその周辺」『実践英文学』 43, pp.87-100.
- 篠原俊吾 (2002) 「「悲しさ」「さびしさ」はどこにあるのか—形容詞文の事態把握とその中核をめぐって—」西村義樹編『認知言語学 I : 事象構造』 pp.261-284. 東京大学出版.
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』 33(1), pp.1-262.
- 渋谷勝己 (1995) 「可能動詞とスルコトガデキル—可能の表現—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』 pp.111-120.くろしお出版.
- 渋谷勝己 (1998) 「中間言語における可能表現の諸相」『阪大日本語研究』 10, pp.67-81.
- 渋谷勝己 (2005) 「日本語の可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』 1(3), pp.32-46.
- 渋谷勝己 (2006) 「自発・可能」小林隆編『シリーズ方言学 2 方言の文法』 pp.47-92. 岩波書店
- 島岡紀子 (1998) 「難易文と「-がちだ」文」『筑波大学応用言語学研究』 5, pp.15-28.
- 嶋村誠 (1980) 「難易文管見」『神戸学院大学紀要』 10, pp.101-118.
- 清水孝司 (2002) 「「～に (は) ～が可能形」」『日本語・日本文化研究』 12, pp.127-138.
- 朱継征 (1995) 「中国語の「助動詞+動詞」と否定—「不」と「没」の文法的使い分けと意味的分析を中心に—」『中国語学』 242, pp.32-37.
- 鈴木基伸 (2013) 「ヤスイ・ニクイの意味決定に関与する性質の帰属先」『日本言語学会第 146 回大会予稿集』 pp.114-119.

- 館谷笑子 (2000) 「複合形容詞『一ガタシ』『一ニクシ』」 国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』19, pp.179-202. 和泉書院.
- 玉地瑞穂 (2005) 「日本語と中国語のモダリティ対照研究—言語類型論の観点から—」 『高松大学紀要』44, pp.17-54.
- 張威 (1998) 『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』くろしお出版.
- 張素娟 (2012) 「中国語の“能”と“会”の意味特性と使用条件の相違—数量表現との共起可能性から—」 『日本中国語学会第62回全国大会予稿集』 pp.102-105.
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例—』スリーエーネットワーク.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 中村裕昭 (2000) 「可能構文における格交替現象について」 『日本語科学』7, pp.133-144.
- 仲本康一郎 (1998) 「攻撃力と抵抗力を表す形容詞—主体性という概念をめぐる—」 『言語科学論集』4, pp.69-81.
- 仲本康一郎 (2000) 「アフォーダンスに基づく発話解釈：行為の難易度を表わす形容詞文」 『語用論研究』2, pp.50-64.
- 仲本康一郎 (2006) 「属性の意味論と活動の文脈：椅子が荷物になるとき」 『日本語・日本文化』32, pp.39-61.
- ナロック・ハイコ (2002) 「意味論的カテゴリーとしてのモダリティ」 大堀壽夫編『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』 pp.217-251. 東京大学出版会.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版社.
- 仁田義雄 (2001) 「命題の意味的類型についての覚え書」 『日本語文法』1(1), pp.5-23.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法2』くろしお出版.
- 沼田善子 (1992) 「とりたて詞と視点」 『日本語学』11(9), pp.35-43.
- 野村剛史 (2003) 「モダリティ形式の分類」 『国語学』54(1), pp.17-31.
- 飛田良文・浅田秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版.
- 藤井正 (1971) 「可能」 松村明編『日本文法大辞典』 pp.124-125. 明治書院.
- 藤家智子 (1998) 「難易文に関する一考察：「-やすい/にくい」の意味・用法をめぐる」 『日本語・日本文化研究』6, pp.28-42.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版.

- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』 中文館書店. (1977年に勉誠社より復刊)
- 眞野美穂 (2010) 「与格主語構文の広がりとは動性」 岸本秀樹 (編) 『ことばの対照』 pp.81-95. くろしお出版.
- 三木望 (1998) 「難易構文の「やすい」の解釈について」 『京都精華大学紀要』 15, pp.181-193.
- 三木望 (2001) 「難易構文」 影山太郎編 『日英対照 動詞の意味と構文』 pp.212-239. くろしお出版.
- 三木望 (2004) 「「～づらい」について—自発と否定、可能の連続性—」 影山太郎・岸本秀樹編 『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集』 pp.127-146. くろしお出版.
- 南佑亮 (2006) 「形容詞属性叙述文にみられる属性判断の階層性について」 『日本認知言語学会論文集』 6, pp.106-116.
- 南佑亮 (2007) 「難易形容詞の意味構造と拡張用法について」 『待兼山論叢』 41, pp.47-62.
- 宮本厚子 (1997) 「現代中国語の助動詞「能」」 『中国言語文化論叢』 1, pp.45-59.
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語 1』 角川書店.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院.
- 八尾由子 (2006) 「傾向を表す接辞 ガチ、ギミ、ヤスイ」 『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』 21, pp.127-139.
- 安本真弓 (2009) 『現代中国語における可能表現の意味分析—可能補語を中心に』 白帝社.
- 山口佳也 (2002) 「可能表現」 山口明穂・秋本守英編 『日本語文法大辞典』 pp.62-65. 明治書院.
- 姚艷玲 (2008) 「<不可能>の言語化に関する日中両語の対照研究」 日中対照言語学会 『日本語と中国語の可能表現』 pp.88-110 白帝社.
- 呂雷寧 (2006) 「使用範囲から見た日中両言語の可能表現」 『ことばの科学』 19, pp.53-66.
- 呂雷寧 (2008) 「無意志自動詞の可能表現に関わる要因の分析—意志性・主体性・事態の性質を中心に—」 『言葉と文化』 9, pp.271-286.

- 呂雷寧 (2011)「日本語における非情物の可能表現について—自動詞を中心に—」
『Journal of School of Foreign Languages, Nagoya University of Foreign Studies』
41, pp.201-212.
- 渡邊績央 (2007)「日本語の難易文」『東京大学言語学論集』26, pp.185-228.
- 奥田寛 (2000)〈作为助动词的“容易”和“好”〉中国杂志社编《语法研究和探索(十二)》pp.243-256. 商务印书馆.
- 渡边丽玲 (1999)〈助動詞“可以”与“能”的用法比較分析〉《プール学院大学研究紀要》39, pp.221-229.
- 渡边丽玲 (2000)〈助动词“能”与“会”的句法语义分析〉陆险明主编《面临新世纪挑战的现代汉语语法研究》pp.476-486. 山东教育出版社.
- 傅书灵·祝建军 (2004)〈助动词“会”的起源新探〉《烟台大学学报(哲学社会科学版)》17(3), pp.357-360.
- 傅雨贤·周小兵 (1991)〈口语中的助动词〉中国语文杂志社编《语法研究和探索(四)》pp.184-193. 好文出版社.
- 侯瑞芬 (2009)〈从力量与障碍看现代汉语情态动词“可以”“能”“会”〉《语言学论丛》第四十辑, pp.270-298.
- 古川裕 (2003)〈词法与句法之间的互动及其接口—以“可怕/怕人”和“好吃/难吃”等句法词为例—〉《现代中国语研究》第5期, pp.90-100.
- 蒋绍愚 (2007)〈从助动词“解”“会”“识”的形成看语义的演变〉《汉语学报》第1期, pp.2-10.
- 柯理思(Lamarre, Christine) (2007)〈汉语里标注惯常动作的形式〉张静编《日本现代汉语语法研究论文选》pp.101-124. 北京语言大学出版社.
- 李晋霞 (2005)〈好+动〉中国语文杂志社编《语法研究和探索(四)》pp.44-49, 96. 好文出版社.
- 刘勋宁 (1988)〈现代汉语词尾“了”的语法意义〉《中国语文》第五期, pp.321-330.
- 刘月华 (1980)〈可能补语的用法的研究〉《中国语文》第四期 pp.246-257.
- 刘月华·潘文娉·故韡 (1983)《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社.
- 刘月华·潘文娉·故韡 (2001)《实用现代汉语语法 增订版》外语教学与研究出版社.
- 陆庆和 (2006)《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社.
- 鲁晓琨 (2004)《现代汉语基本助动词研究》中国社会科学出版社.

- 吕叔湘 (1980)《现代汉语八百词》商务印书馆。(牛島徳治監訳 (1992)『中国語用例辞典』東方書店.)
- 吕叔湘 (1999)《现代汉语八百词增订版》商务印书馆.
- 彭利贞 (2007)《现代汉语情态研究》中国社会科学出版社.
- 王鹏·马贝加 (2011)〈助动词“会”的情态发展〉《现代语言(语言研究)》4, pp.63-65.
- 熊文 (1996)〈汉语“能”类助动词和英语 can 类情态动词的对比〉中国对外汉语教学学会编《中国对外汉语教学学会第五次学术讨论会论文集》pp.288-309.北京语言学院出版社.
- 许和平 (1993)〈试论“会”的语义与句法特征—兼论与“能”的异同〉邢公畹主编《汉语研究(三)》pp.81-96.南开大学出版社.
- 张定·丁海燕 (2009)〈助动词“好”的语法化及相关词汇化现象〉《语言教学与研究》第5期, pp.31-38.
- 郑怀德 (1998)〈“好”的语法化与主观性〉《世界汉语教学》第1期, pp.218-227.
- 郑天刚 (2002)〈“会”与“能”的差异〉郭继懋·郑天刚主编《似同实异—汉语近义表达方式的认知语用分析》pp.137-148.中国社会科学出版社.
- 朱德熙 (1982)《语法讲义》商务印书馆。(杉村博文·木村英樹訳 (1995)『文法講義』白帝社.)
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Endo, Tomoko. (2005) What Enables 'Ability' to Develop? : The Semantic Network of Mandarin HUI. 『言語情報科学』3, pp.27-40.
- Guo, Jiansheng. (1995) The Interactional Basis of the Mandarin Modal Neng 'Can'. In Joan Bybee and Suzanne Fleischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*, pp.207-238. Amsterdam: John Benjamins.
- Heine, Bernard and Tania Kuteva. (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Inoue, Kazuko. (1978) 'Tough Sentence' in Japanese. In John Hinds and Irwin Howard (eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, pp.122-154. Tokyo: Kaitakusya.

- Kövecses, Zoltán and Günter, Radden. (1998) Metonymy: Developing a Cognitive Linguistics View, *Cognitive Linguistics* 9(1), pp.37-77.
- Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about Mind*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作ほか訳 (1993) 『認知意味論』 紀伊国屋書店.)
- Lakoff, George and Mark Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店.)
- Langacker, Ronald. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 1, Theoretical Prerequisites*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2, Descriptive Application*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (山梨正明監訳 (2011) 『認知文法論序説』 研究社.)
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.
- Li, Renzhi. (2004) *Modality in English and Chinese: A Typological Perspective*. Frolida, USA: Dissertation.com.
- Matsumoto, Yo. (1996) Subjective-Change Expressions in Japanese and Their Cognitive and Linguistics Bases. In Eve Sweetser & Gilles Fauconnier (Eds.), *Spaces, Worlds, and Grammar*, pp. 124-156. Chicago: The University of Chicago Press.
- Narrog, Heiko. (2009) *Modality in Japanese: The Layered Structure of the Clause and Hierarchies of Functional Categories*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Palmer, Flank. R. (1980) Can, Will, and Actuality. In Greenbaum, S, G, Leech and J. Svartvik (eds.), *Studies in English Linguistics*, pp. 91-99. London: Longman.
- Palmer, Flank. R. (2001) *Mood and Modality, 2nd ed.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press. (澤田治美訳 (2000) 『認知意味論の展開—語源学から語用論まで—』 研究社.)

- Tai, James H-Y. (1984) Verbs and Times in Chinese: Vendler's Four Categories. *Papers from the Parasession on Lexical Semantics*. pp.289-296.
- Takezawa, Koichi. (1987) *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Talmy, Leonard. (1988) Force Dynamics in Language and Cognition. *Cognitive Science* 2, pp.49-100.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization 3rd edition*. Oxford: Oxford University Press. (辻幸夫・鍋島弘治朗・篠原俊吾・菅井三実訳 (2008) 『認知言語学のための14章 第三版』紀伊国屋書店.)
- Tsang, Chuilim. (1981) *A Semantic Study of Modal Auxiliary Verbs in Chinese*. Doctoral dissertation. Stanford University.
- van der Auwera, Johan and Vladimir A. Plungian. (1998) Modality's Semantic Map. *Linguistic Typology* 2(1), pp.79-124.

各章と既発表論文および口頭発表との関係

第1章 序論

新規執筆

第2章 先行研究と本論文の立場

新規執筆

第3章 可能表現と難易表現の対照

大江元貴 (2011) 「日本語の可能表現と難易表現に関する認知論的考察」 2011 年日本語教育国際研究大会(International Conference on Japanese Language Education 2011 in China).

大江元貴 (2013) 「属性の認知過程から見た日本語の可能・難易表現」 第11回中国人民大学・北京大学・筑波大学合同フォーラム.

第4章 日本語と中国語の可能表現

大江元貴 (2010) 「日本語における無意志可能の成立条件について—「られる可能」「できる可能」「無標識可能」の比較—」 第7回筑波大学応用言語学研究会.

大江元貴 (2011) 「中国語の“能”と“会”—「働きかけ」と「事態生起」に注目した分析—」 日本中国語学会第60回全国大会.

大江元貴 (2012) 「日本語と中国語の「能力主体指向の可能表現」—「ニ」標示可能文と“会”可能文—」 日本言語学会第144回大会.

第5章 日本語と中国語の難易表現

大江元貴 (2010) 「日中の難易表現における事態認識のあり方について—「にくい/づらい」と「容易/好」をとりあげて—」 『KLS』 30, pp.25-36.

大江元貴 (2013) 「「-がちだ」の認知論的・語用論的分析：「-やすい」との比較から」 『KLS』 33, pp.25-36.

第6章 おわりに

新規執筆